

京都府遺跡調査概報

第 69 冊

1. 竹野遺跡第 9 次
2. 長岡京跡左京第353次(7ANFIR-2・FDN)
3. 名神高速道路関係遺跡
 - (1) 長岡京跡左京第336次(7ANVKN-4)
 - (2) 長岡京跡左京第329次(7ANVKN-3)
 - (3) 長岡京跡左京第330次(7ANVST-3)
 - (4) 長岡京跡左京第337次(7ANVKN-5)
 - (5) 長岡京跡左京第334次(7ANVKN-2)
 - (6) 長岡京跡左京第333次(7ANVST-5)
 - (7) 長岡京跡左京第331次(7ANVST-4)
 - (8) 長岡京跡左京第332次(7ANEKZ-8)
 - (9) 長岡京跡右京第466次(7ANTTD-5)
4. 長岡京跡右京第511次(7ANGKN)

1 9 9 6



序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、通常発掘調査成果を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成6・7年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、日本道路公団大阪建設局、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて行った、竹野遺跡第9次、長岡京跡左京第353次、名神高速道路関係遺跡、長岡京跡右京第511次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、丹後町教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 竹野遺跡第9次 2. 長岡京跡左京第353次 3. 名神高速道路関係遺跡
4. 長岡京跡右京第511次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 竹野遺跡第9次	竹野郡丹後町竹野古場々他	平7.7.17～ 10.13	京都府土木建 築部	村田 和弘
2. 長岡京跡左京第353次	向日市上植野町池ノ尻・大門	平6.11.7～ 平7.2.27 平7.4.24～ 5.19	京都府土木建 築部	小池 寛
3. 名神高速道路関係遺跡			日本道路公団 大阪建設局	
(1)長岡京跡左京第336次	京都市南区久世東土川町金井 田	平6.11.8～ 平7.2.27		岩松 保 森島 康雄
(2)長岡京跡左京第329次	京都市南区久世東土川町金井 田	平6.4.11～ 10.13		石尾 政信
(3)長岡京跡左京第330次	京都市南区久世東土川町正登	平6.4.11～ 10.13		岩松 保
(4)長岡京跡左京第337次	京都市南区久世東土川町金井 田	平6.10.27～ 平7.2.27		竹井 治雄 石尾 政信
(5)長岡京跡左京第334次	京都市南区久世東土川町金井 田・正登	平6.8.8～ 平7.2.16		戸原 和人 岸岡 貴英
(6)長岡京跡左京第333次	京都市南区久世東土川町正登	平6.6.21～ 平7.1.20		中川 和哉
(7)長岡京跡左京第331次	京都市南区久世東土川町正登	平6.5.12～ 9.14		竹井 治雄
(8)長岡京跡左京第332次	向日市鶏冠井町清水	平6.4.11～ 平7.6.16		中川 和哉
(9)長岡京跡右京第466次	乙訓郡大山崎町下植野寺門	平6.7.4～ 10.5		戸原 和人
4. 長岡京跡右京第511次	長岡京市井ノ内地内	平7.10.20～ 平8.2.28	京都府乙訓土 木事務所	石尾 政信

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 竹野遺跡第9次発掘調査概要-----	1
2. 長岡京跡左京第353次発掘調査概要-----	11
3. 名神高速道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要-----	53
(1) 長岡京跡左京第336次 PA工区A-1地区-----	56
(2) 長岡京跡左京第329次 PA工区A-2地区-----	66
(3) 長岡京跡左京第330次 PA工区A-3地区-----	71
(4) 長岡京跡左京第337次 PA工区B-5地区-----	78
(5) 長岡京跡左京第334次 PA工区B-3地区-----	84
(6) 長岡京跡左京第333次 PA工区B-4地区-----	98
(7) 長岡京跡左京第331次 PA工区B-2b・D-2b地区-----	103
(8) 長岡京跡左京第332次 向日工区B-1a地区-----	106
(9) 長岡京跡右京第466次 下植野工区C-6地区-----	108
4. 長岡京跡右京第511次発掘調査概要-----	115

挿 図 目 次

1. 竹野遺跡第9次

第1図	調査地周辺の遺跡	2
第2図	トレンチ配置図	3
第3図	基本土層柱状模式図	4
第4図	第1・第2トレンチ遺構図	5
第5図	包含層出土遺物実測図(1)	6
第6図	包含層出土遺物実測図(2)	7
第7図	包含層出土遺物実測図(3)	8
第8図	第2トレンチ土坑S K04出土遺物実測図	9

2. 長岡京跡左京第353次

第9図	調査地位置図	12
第10図	土層断面実測図	14
第11図	検出遺構図	15
第12図	遺構平面実測図	16
第13図	土坑S K35312実測図	17
第14図	出土遺物実測図(1)	19
第15図	出土遺物実測図(2)	20
第16図	出土遺物実測図(3)	21
第17図	出土遺物実測図(4)	22
第18図	出土遺物実測図(5)	23
第19図	出土遺物実測図(6)	24
第20図	出土遺物実測図(7)	26
第21図	出土遺物実測図(8)	27
第22図	出土遺物実測図(9)	28
第23図	出土遺物実測図(10)	29
第24図	出土遺物実測図(11)	31
第25図	出土遺物実測図(12)	32
第26図	出土遺物実測図(13)	33
第27図	出土遺物実測図(14)	34
第28図	出土遺物実測図(15)	35

第29図	出土瓦埴類拓影(1)	-----	36
第30図	出土瓦埴類拓影(2)	-----	37
第31図	出土瓦埴類拓影(3)	-----	38
第32図	当該調査地及び周辺調査地における検出遺構位置図	-----	42

3. 名神高速道路関係遺跡

第33図	調査地区位置図	-----	55
------	---------	-------	----

(1)長岡京跡左京第336次 PA工区A-1地区

第34図	PA工区調査トレンチ配置図	-----	56
第35図	PA工区长岡京期主要遺構平面図	-----	57
第36図	PA工区A-1地区遺構平面図(1)	-----	58
第37図	PA工区A-1地区遺構平面図(2)	-----	59
第38図	PA工区A-1地区出土遺物実測図(1)	-----	61
第39図	PA工区A-1地区出土遺物実測図(2)	-----	61
第40図	PA工区A-1地区遺構平面図(3)	-----	62
第41図	PA工区A-1地区出土遺物実測図(3)	-----	64

(2)長岡京跡左京第329次 PA工区A-2地区

第42図	PA工区A-2地区遺構平面図	-----	67
第43図	PA工区A-2地区出土遺物実測図	-----	69

(3)長岡京跡左京第330次 PA工区A-3地区

第44図	PA工区A-3地区遺構平面図	-----	72
第45図	PA工区A-3地区出土遺物実測図(1)	-----	75
第46図	PA工区A-3地区出土遺物実測図(2)	-----	76

(4)長岡京跡左京第337次 PA工区B-5地区

第47図	PA工区B-5地区遺構平面図(1)	-----	78
第48図	PA工区B-5地区遺構平面図(2)	-----	79
第49図	PA工区B-5地区遺構平面図(3)	-----	80
第50図	PA工区B-5地区出土遺物実測図・拓影	-----	81
第51図	PA工区B-5地区出土遺物実測図	-----	83

(5)長岡京跡左京第334次 PA工区B-3地区

第52図	PA工区B-3地区土層断面柱状図	-----	84
第53図	PA工区B-3地区遺構平面図	-----	86
第54図	PA工区B-3地区遺構断面図(1)	-----	87
第55図	PA工区B-3地区遺構断面図(2)	-----	88
第56図	PA工区B-3地区中央主要遺構平面図	-----	89
第57図	PA工区B-3地区遺構断面図(3)	-----	90

第58図	井戸 S E 33407 実測図	-----91
第59図	P A 工区 B - 3 地区出土遺物実測図(1)	-----94
第60図	P A 工区 B - 3 地区出土遺物実測図(2)	-----95
第61図	P A 工区 B - 3 地区出土遺物実測図(3)	-----95
第62図	P A 工区 B - 3 地区出土遺物実測図(4)	-----96
第63図	P A 工区 B - 3 地区出土遺物実測図(5)	-----97
(6)長岡京跡左京第333次 P A 工区 B - 4 地区		
第64図	P A 工区 B - 4 地区遺構平面図(1)	-----99
第65図	P A 工区 B - 4 地区遺構平面図(2)	-----100
第66図	P A 工区 B - 4 地区出土遺物実測図(1)	-----101
第67図	P A 工区 B - 4 地区出土遺物実測図(2)	-----102
(7)長岡京跡左京第331次 P A 工区 B - 2 b ・ D - 2 b 地区		
第68図	P A 工区 B - 2 b ・ D - 2 b 地区遺構平面図	-----104
第69図	P A 工区 B - 2 b 地区出土遺物実測図	-----105
(8)長岡京跡左京第332次 向日工区 B - 1 a 地区		
第70図	向日工区 B - 1 a 地区遺構平面図	-----106
第71図	向日工区 B - 1 a 地区出土遺物実測図	-----107
(9)長岡京跡右京第466次 下植野工区 C - 6 地区		
第72図	下植野工区調査トレンチ配置図	-----108
第73図	下植野工区 C - 6 地区遺構平面図	-----109
第74図	下植野工区 C - 3 ~ 6 地区主要遺構図	-----110
4. 長岡京跡右京第511次		
第75図	調査地及び周辺遺跡分布図	-----116
第76図	調査地位置図	-----117
第77図	遺構平面図	-----119
第78図	杭列(S X 51106)実測図	-----120
第79図	出土銭貨拓影	-----121

付 表 目 次

2. 長岡京跡左京第353次	
付表1	S X 35317出土土器破片計数表-----40
付表2	花粉分析一覧表-----45
付表3	出土遺物観察表-----46
3. 名神高速道路関係遺跡	
付表4	調査地一覧表-----54

図 版 目 次

1. 竹野遺跡第9次	
図版第1	(1)調査地遠景(南西から) (2)作業風景(西から)
図版第2	(1)第1トレンチ完掘状況(西から) (2)第2トレンチ完掘状況(西から)
図版第3	(1)第5トレンチ完掘状況(西から) (2)遺物出土状況(西から)
図版第4	竹野遺跡出土遺物
2. 長岡京跡左京第353次	
図版第5	(1)調査前風景(南西から) (2)トレンチ空中写真(下方が北)
図版第6	(1)池沼S X 35306完掘状況(南西から) (2)X = -118, 625~-118, 635m間の自然堤防状地形(北東から) (3)池沼S X 35306最深部土層堆積状況(南東から)
図版第7	(1)東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝検出状況(南から) (2)東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝完掘状況(南から)
図版第8	(1)東一坊坊間東小路両側溝完掘状況(南から) (2)東一坊坊間東小路西側溝S D 35313、C地点断面(南から) (3)S D 35313・S D 35318交差部分断面(南から) (4)四条条間小路南側溝S D 35318、H地点断面(西から)
図版第9	(1)S D 35314及びピット群検出状況(南西から)

- (2)掘立柱建物跡 1 検出状況(南東から)
- 図版第10 (1)土坑 S K35312検出状況(北から)
(2)落ち込み S X35317杭検出状況(南から)
- 図版第11 出土遺物(1)
- 図版第12 出土遺物(2)
- 図版第13 出土遺物(3)
- 図版第14 出土遺物(4)
- 図版第15 出土遺物(5)
- 図版第16 出土遺物(6)
- 図版第17 出土遺物(7)
- 図版第18 出土遺物(8)
- 図版第19 検出花粉・寄生虫卵・孢子遺体 I
- 図版第20 検出花粉・寄生虫卵・孢子遺体 II

3. 名神高速道路関係遺跡

(1)長岡京跡左京第336次 PA工区A-1地区

- 図版第21 (1)A-1地区調査地全景(西から)
(2)A-1地区調査地全景(上が北)
- 図版第22 (1)A-1地区建物跡 S B33605(北から)
(2)A-1地区建物跡 S B33603・33604・32905(北から)
- 図版第23 (1)A-1地区東半部(南から) (2)A-1地区東半部(南西から)
- 図版第24 (1)A-1地区調査地全景(下層遺構面、南西から)
(2)A-1地区溝 S D32909(北西から)
- 図版第25 (1)A-1地区土坑 S K33611・溝 S D33612(西から)
(2)A-1地区方形周溝墓 S X33614(南東から)
- 図版第26 A-1地区出土遺物(1)
- 図版第27 A-1地区出土遺物(2)

(2)長岡京跡左京第329次 PA工区A-2地区

- 図版第28 (1)A-2地区調査地全景(北東から)
(2)A-2地区調査地全景(南西から)
- 図版第29 (1)A-2地区東三坊大路東側溝 S D32901(北から)
(2)A-2地区掘立柱建物跡 S B32902(北から)
- 図版第30 (1)A-2地区掘立柱建物跡 S B32904・32905(南から)
(2)A-2地区流路跡 S D32909(南西から)
- 図版第31 (1)A-2地区流路跡 S D32908(北から)
(2)A-2地区流路跡 S D32910(北から)

(3)長岡京跡左京第330次 P A工区A-3地区

- 図版第32 (1) A-3地区調査地全景(北東から)
(2) A-3地区調査地全景(南西から)
- 図版第33 (1) A-3地区東三坊大路西側溝 S D33005(南から)
(2) A-3地区町内溝 S D33010(北から)
- 図版第34 (1) A-3地区畝状遺構 S X33009(南から)
(2) A-3地区土坑 S K33018土器出土状況(北西から)
- 図版第35 A-3地区出土遺物

(4)長岡京跡左京第337次 P A工区B-5地区

- 図版第36 (1) B-5地区調査地全景(北東から)
(2) B-5地区中央部(中・近世遺構面、北西から)
- 図版第37 (1) B-5地区建物跡 S B33702(北東から)
(2) B-5地区木製品出土状況、流路303016(上が東)
- 図版第38 B-5地区出土遺物
- 図版第39 B-5地区流路 S R303016出土遺物

(5)長岡京跡左京第334次 P A工区B-3地区

- 図版第40 (1) B-3地区調査地全景(北から) (2) B-3地区南一条大路(北から)
(3) B-3地区流路 S R33419(南西から)
- 図版第41 (1) B-3地区堰 S X33428(南から)
(2) B-3地区不明遺構 S X33441(東から)
- 図版第42 (1) B-3地区井戸 S E33407(上が南)
(2) B-3地区下層遺構(北から)
(3) B-3地区調査地中央部下層遺構(上が南)
- 図版第43 B-3地区出土遺物(1)
- 図版第44 B-3地区出土遺物(2)
- 図版第45 B-3地区出土遺物(3)

(6)長岡京跡左京第333次 P A工区B-4地区

- 図版第46 (1) B-4地区調査地東部(上が東) (2) B-4地区調査地東部(東から)
- 図版第47 (1) B-4地区建物跡 S B33303(北から)
(2) B-4地区溝 S D33305(西から)
- 図版第48 (1) B-4地区溝 S D315003・建物跡 S B33301(西から)
(2) B-4地区井戸 S E33302(北から)
- 図版第49 (1) B-4地区溝 S D33307(西から)
(2) B-4地区土坑 S K33306(北から)
- 図版第50 B-4地区出土遺物

(7)長岡京跡左京第331次 PA工区B-2b・D-2b地区

- 図版第51 (1)B-2b地区調査地全景(北東から)
(2)D-2b地区調査地全景(南西から)
(3)D-2b地区二条第一小路北側溝SD33103(南から)

図版第52 B-2b地区出土遺物

(8)長岡京跡左京第332次 向日工区B-1a地区

- 図版第53 (1)B-1a地区全景(西北から)
(2)B-1a地区溝SD33201・33202・33203・33204(南から)

(9)長岡京跡右京第466次 下植野工区C-6地区

- 図版第54 (1)C-6地区調査地全景(南西から)
(2)C-6地区調査地全景(北東から)

4. 長岡京跡右京第511次

- 図版第55 (1)調査前全景(南から) (2)調査地全景(左が北)
- 図版第56 (1)溝跡SD51102(北から) (2)溝跡SD51103(南から)
- 図版第57 (1)溝跡SD51105(南から) (2)溝跡SD51105南壁断面
- 図版第58 (1)杭列SX51106(北から) (2)溝跡SD51110(西方から)
- 図版第59 (1)溝跡SD51109(西方から) (2)溝跡SD51109木製品・槽出土状況
- 図版第60 (1)自然流路SR51107斎串出土状況 (2)出土遺物(錢貨)

1. 竹野遺跡第9次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、国道178号線丹後リゾート等関連道路改良事業に伴う発掘調査で、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

竹野遺跡は、竹野川河口右岸に位置する砂丘上に営まれた遺跡である。現在の行政区画では、竹野郡丹後町大字竹野小字古場々、田中上、上場々、野尻、野間上、福蓮寺にまたがっている。遺跡の広がり、東西約600m・南北約250mで、標高3～5mに立地している。遺跡は、周辺の地形よりも約1～2m高くなっており、砂丘上のほぼ全域に広がると思われる。

竹野遺跡では、縄文時代～鎌倉時代の遺物が出土しており、丹後地域では有数の複合遺跡として知られている。竹野遺跡が認識されるようになったのは、昭和40年に織物工場建設に伴って多量の弥生土器が出土し、翌41年に当時の高校生が建設地で遠賀川系土器片を採集したことに始まる。それ以後、8度にわたって調査が行われた。昭和42年・44年・45年に府立峰山高等学校史学部が分布調査を実施し、昭和57年には丹後町営ほ場整備に係わる試掘調査を京都府教育委員会の指導で丹後町教育委員会が実施した。その後、昭和61年には農協関連施設の建設に係わる事前調査を丹後町教育委員会が実施し、さらに、平成6・7年に丹後町教育委員会が『道の駅』などの建設に伴い、竹野遺跡の中心部と思われる地区の調査を実施した。そして、平成6年度に当調査研究センターが、国道178号線丹後リゾート等関連道路改良事業に伴い今回の調査地の北東側で発掘調査を実施した^(注1)。

今回の調査は、昨年の調査対象地の南西側で道路幅拡張部分である対象面積約1,000㎡のうち、約530㎡を実施した。調査は平成7年7月17日に開始し、同年9月28日に関係者説明会を実施し、同年10月13日に終了した。現地調査は、当調査研究センター調査第1係長伊野近富と同係調査員村田和弘が担当した。概要報告は、村田が執筆した。調査期間中は、京都府教育委員会・丹後町教育委員会をはじめとして、地元有志の方々や学生諸氏のお世話になった。記して感謝する^(注2)。

なお、調査に係わる費用は、全額京都府土木建築部が負担した。

2. 周辺遺跡(第1図)

竹野遺跡周辺の現在水田などになっている沖積地は、古代は潟湖であったといわれており、日本海側から直接丹後地域の内陸部に入り込むことができたと考えられる。それを示すかのように、竹野川流域の丘陵には、遺跡が密集している。縄文時代には平遺跡、弥生時代には竹野遺跡、古墳時代には丹後地域最大級の前方後円墳である神明山古墳が所在し、さらに竹野川兩岸の丘陵には、産土山古墳、片山古墳群、大成古墳群、上野古墳群などの多くの古墳が存在している。また、



第1図 調査地周辺の遺跡(1/25,000)

- | | | | | | |
|---------|-----------|----------|-----------|----------|----------|
| 1. 竹野遺跡 | 2. 福蓮寺跡 | 3. 大成古墳群 | 4. 産土山古墳 | 5. 片山古墳群 | 6. 神明山古墳 |
| 7. 丸山古墳 | 8. 願興寺古墳群 | 9. 願興寺跡 | 10. 鼻下り古墳 | | |

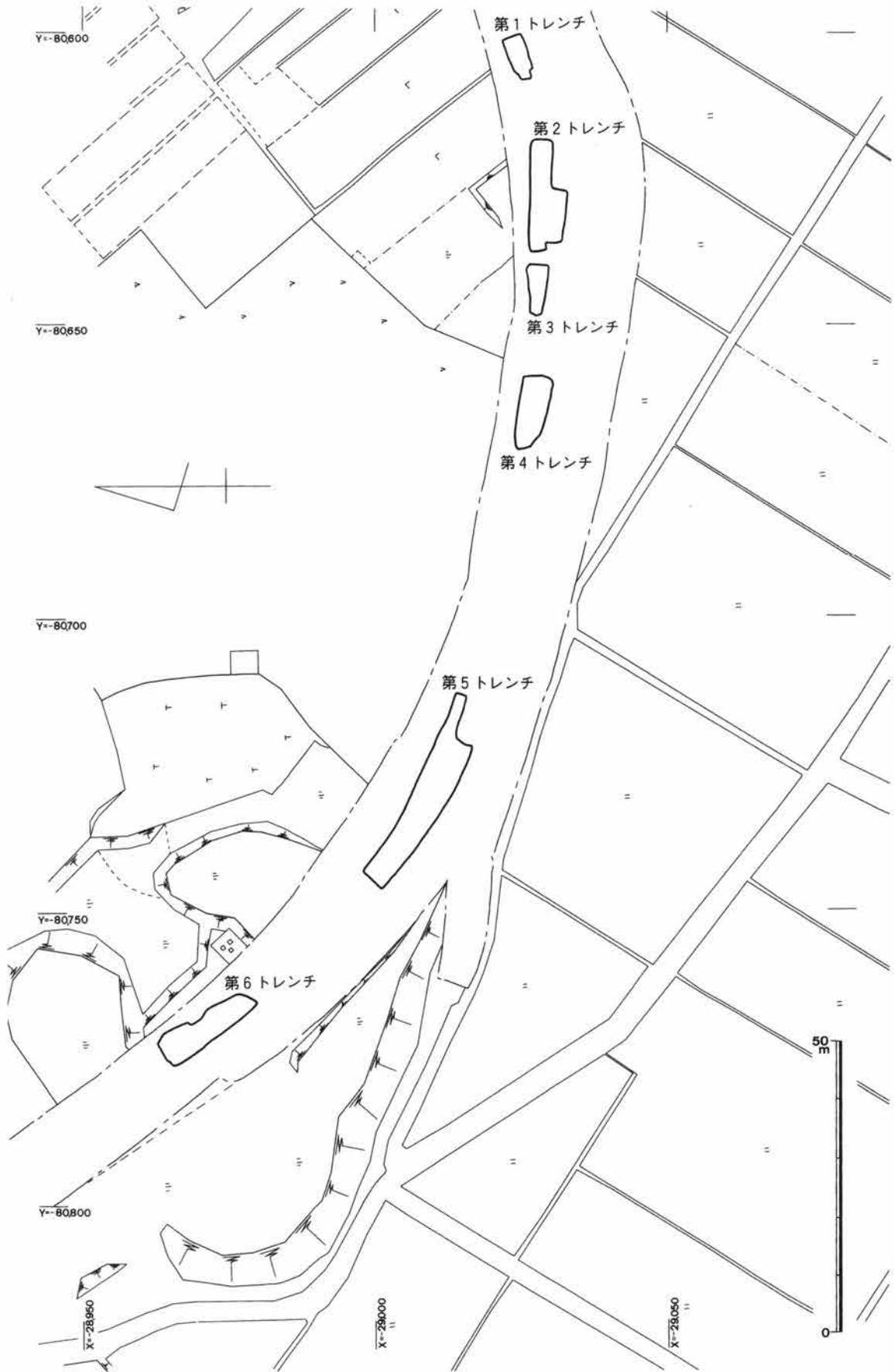
中世においても、伝承ではあるが、砂丘地に福蓮寺という寺院が存在したとされており、各時代の遺跡が密集する竹野川河口部周辺地域は、他地域と丹後地方の文化交流の中心地の一つとして機能していたと考えられる。

3. 調査概要(第2図)

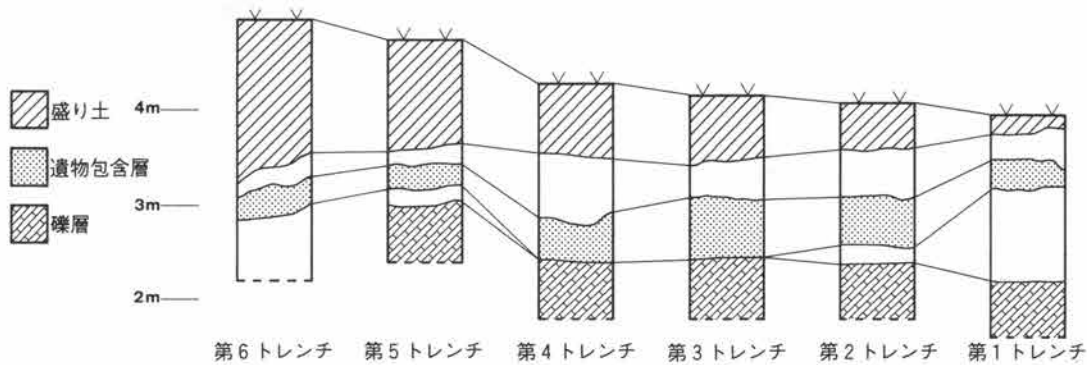
調査は、国道178号線の道路幅拡張部分である調査対象面積約1,000m²内に、当初計14か所で3m×4mの試掘グリッドを設定し、遺構・遺物の有無の確認を行った。そのうち、6か所で遺構や遺物包含層を確認し、トレンチとして再設定し面的な調査に入った。また、遺構・遺物が確認できなかったグリッドについては、安全のため埋め戻した。試掘調査の結果、第1トレンチより北東側の調査対象地内については、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。調査地は、砂丘上に立地し、西側から東側に向かって傾斜している。

各トレンチの基本的な層序は、現代の盛り土または耕作土、黒褐色砂質土、黄灰色砂、礫堆積層となっており、黒褐色砂質土は遺物包含層で、弥生時代・古墳時代・鎌倉時代の遺物が含まれている。遺構検出面は、黄灰色砂の地山面(砂丘面)である(第3図)。

第1トレンチでは、現地表から約0.5mの深さで厚さ約0.3mの遺物包含層に達し、その直下の



第2図 トレンチ配置図



第3図 基本土層柱状模式図(1/40)

地山面上で、小溝・土坑・小穴などの弥生時代の遺構を検出した。遺構のないところを約1m×2mの範囲で下層確認のため掘り下げたところ、遺構検出面から約0.9mの深さで、拳大以下の礫を多量に含んだ明黄褐色砂層を確認した。

第2トレンチでは、現地表面から約1mの深さで、厚さ約0.5mの遺物包含層があり、その直下の地山面で、弥生時代の遺構面を検出した。検出遺構は、大溝、土坑、小穴などである。遺構検出面(砂丘面)は、北から南に向かって傾斜しており、トレンチの北端と南端では約0.2mの高低差がある。そして、大溝の底部とトレンチの南側で拳大～人頭大の礫堆積を確認した。また、南側については、遺構検出面である黄灰色砂層内にも、礫が少量含まれていた。

第3・第4トレンチでは、現地表面から約1mの深さで厚さ約0.4mの遺物包含層に達し、その直下は地山面ではなく、拳大～人頭大の厚さ約0.3mの礫堆積層を確認し、その下で地山面を検出した。礫の堆積状況は、第2トレンチ南側の礫の堆積や大きさと酷似している。

第5トレンチでは、現地表面から約1.3mの深さで、厚さ約0.4mの遺物包含層に達し、その下層に約0.1mの淡褐色粘質土層があり、さらに下層で拳大の礫堆積層を確認した。第5トレンチは、第3・第4トレンチとは異なり、礫の堆積が1.5m以上あることを確認した。第6トレンチでは、現地表面から約1mのところまで近年までの墓地利用面を確認し、その下層で厚さ約0.3mの遺物包含層、その下層で地山面を確認した。ここでは礫の堆積層は確認できなかった。

以上、6か所のトレンチのうち、遺構を検出したのは第1・第2トレンチのみで、第2～第5トレンチでは礫の堆積層を確認した。

4. 検出遺構

ここでは、第1・第2トレンチで検出した遺構の概要を述べる(第4図)。

第1トレンチ

土坑SK01 隅丸方形を呈し、長辺約1.8m・短辺約1.5m・深さは約0.4mを測る。土坑の埋土からは、弥生時代前期に属する土器片が数点出土した。

土坑SK02 楕円形で長辺約1.6m・短辺約1m・深さ約0.3mを測る。ここからは弥生土器の小片が出土したが、時期を決める遺物は出土しなかった。

小溝 S D 03 幅0.2m・深さ約0.1mで、S K 01と S K 02に重なる形で検出した。遺物は出土しなかった。

第2トレンチ

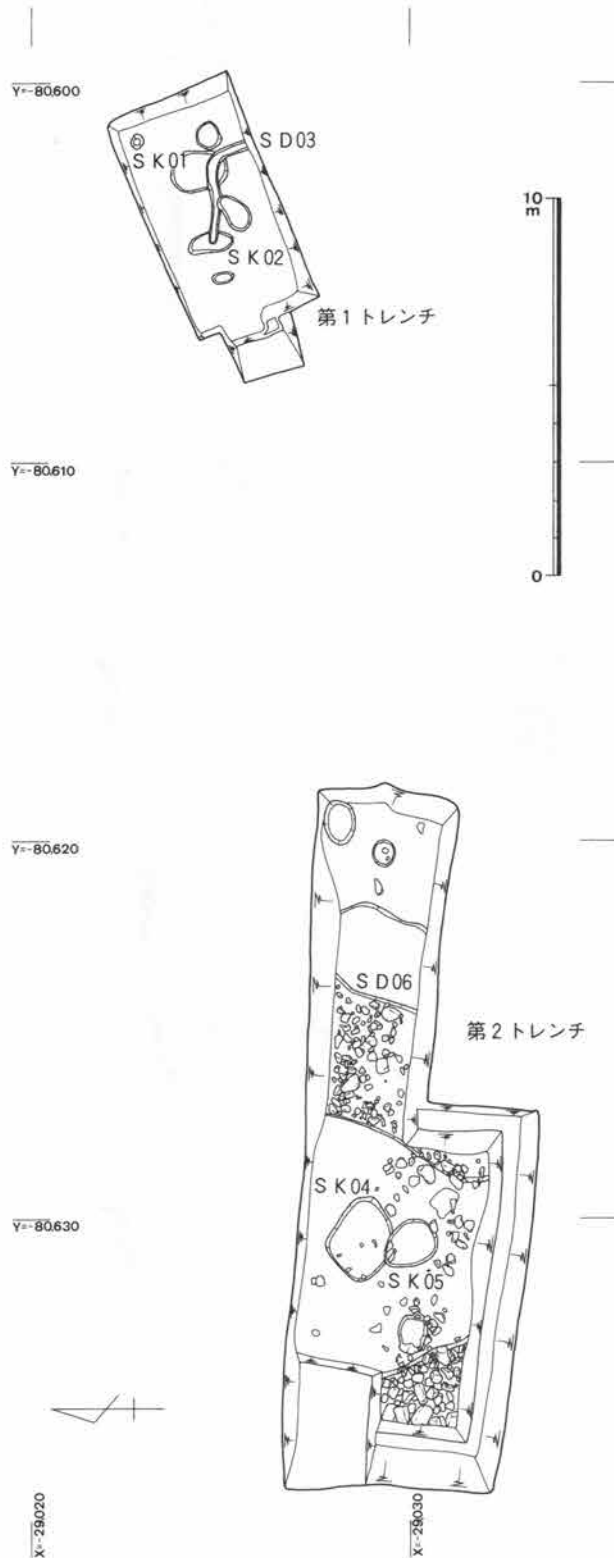
土坑 S K 04 楕円形を呈し、長辺約2.6m・短辺約2.3m・深さ約0.4mを測る。埋土から、弥生時代前期に属する遺物がまとめて出土した。その中で特徴的な点は、遠賀川系の壺(第8図33)と注ぎ口のある鉢(第8図31)が完形品で出土したことである。

土坑 S K 05 近接する土坑 S K 04に一部重なる形で検出した。この土坑は楕円形を呈し、長辺約1.6m・短辺約1.4m・深さ約0.3mを測る。時期を推定できる遺物は出土せず、時期は不明であるが、土坑 S K 04よりは新しい遺構であろう。

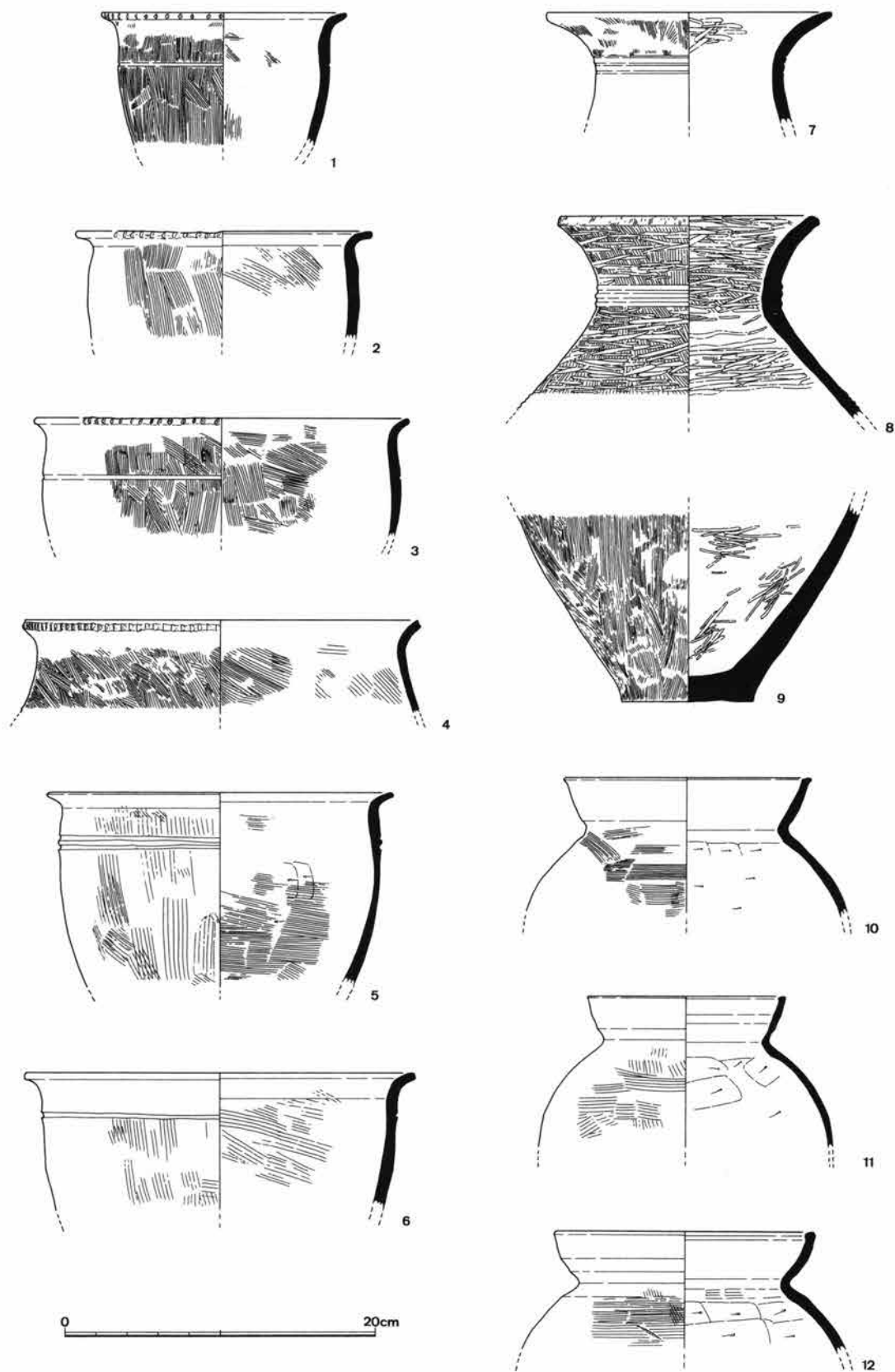
大溝 S D 06 南北方向を向いており、最大幅6.5mで、深さは約0.3mを測るが、この大溝の時期については遺物が出土しておらず不明である。大溝の底部分には、人頭大～拳大の礫が堆積している。

5. 出土遺物(第5～8図)

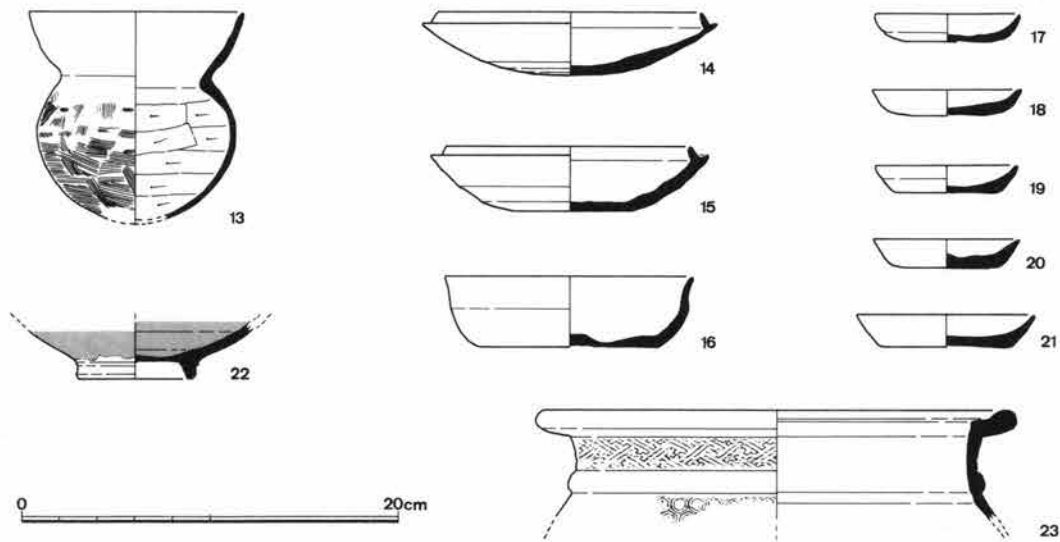
出土遺物には、土器としては弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦質土器、青磁器などが出土し、そのほかに、石鏃、石斧、石錘、擦石、砥石などの石製品や黒耀石が出土した。ほとんどの遺物は、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の遺物が混入した遺物包含層から出土し、その中でも、弥生時代の遺物が大半を占める。また、第1・第2トレンチで検出した遺構からの出土



第4図 第1・第2トレンチ遺構図



第5図 包含層出土遺物実測図(1) (1/4)

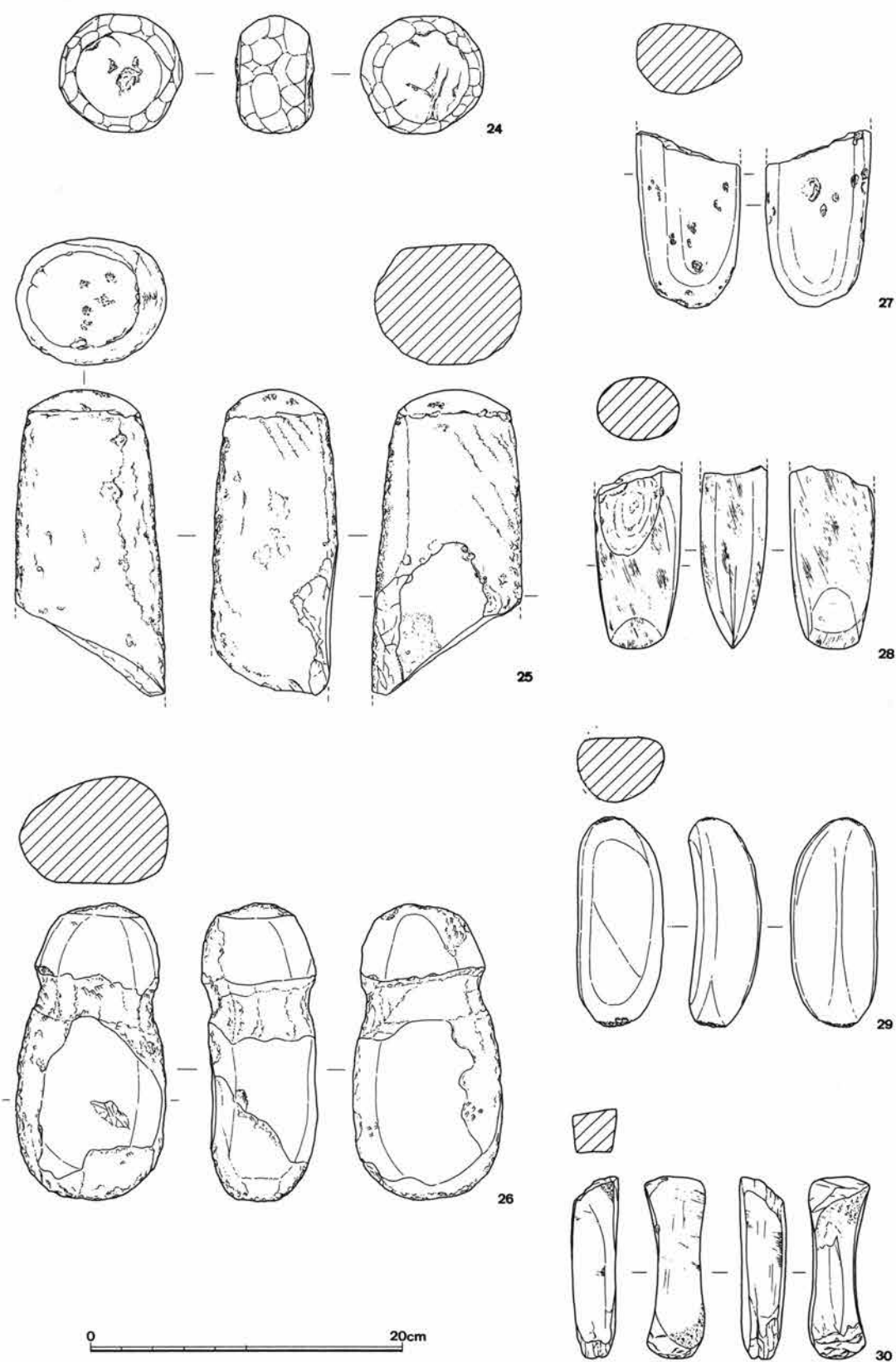


第6図 包含層出土遺物実測図(2) (1/4)

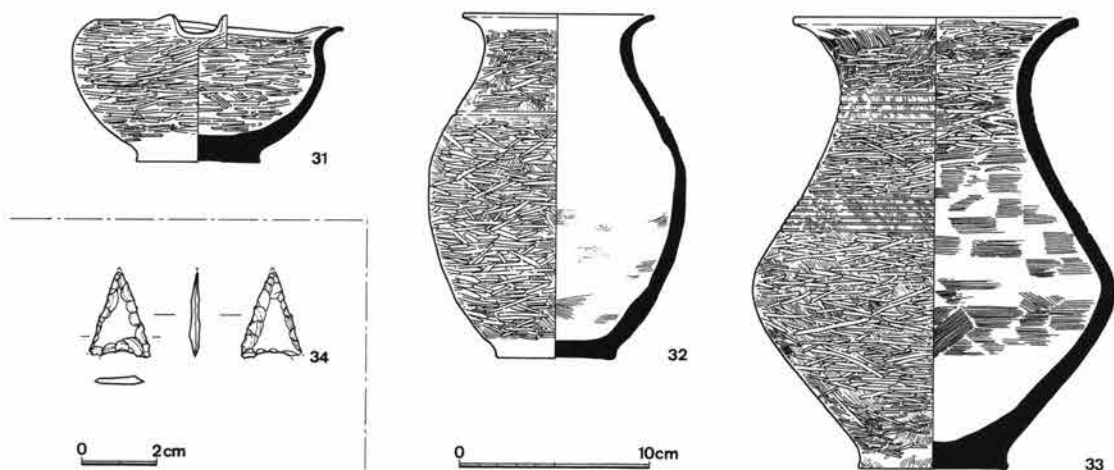
遺物は、弥生時代前期に属する。ここでは、遺物包含層と遺構出土の遺物について報告する。

まずは、包含層出土の土器であるが、全体の8割は弥生時代前期のもので、そのほかに古墳時代の土器、鎌倉時代以降の土器などが出土した(第5・6図)。

1～6は、弥生時代前期の甕である。1～6の調整は、胴部の内外面にはハケメ、口縁部はナデが施されており、1・3・4・6の胴上半部には、ハケメの後に1本の沈線、5には2本の沈線文がみられる。1～4の口縁端部には、縦方向の刻み目がある。7・8・9は、弥生時代前期の壺である。7・8は、口縁部から頸部にかけての部分で、9は胴下半部から底部である。7の調整は、磨滅によって外面の状態が悪くハケメのみ、内面はミガキを確認した。頸部には3本の沈線文がある。8は、内外面ともにハケメの後粗いミガキが施されている。そして、頸部に削り出し凸帯が3条、胴上半部では4条まで確認できた。9は、外面にハケメ、内面に粗いミガキがある。10～12は、布留式土器の甕の口縁部から胴上半部である。調整として、胴部外面には横方向のハケメ、内面には横方向のケズリがみられ、口縁部にはナデがみられる。10～12は、布留式2様式に属すると思われる。13は、土師器の小形丸底壺で、調整は胴部外面がハケメ、内面はケズリ、口縁部はナデが施されている。胴上半部には、ほぼ等間隔の刺突文がみられる。残存率が5割であるが、推定12か所に刺突文があると思われる。14・15は、須恵器の杯身で、7世紀前半期(TK209)に属する。16は、須恵器の杯であるが、色調は還元されておらず、淡茶褐色である。時期は7世紀後半に属すると思われる。17～21は、土師器の小皿である。この小皿には2つのタイプがあり、17・18は、円盤状の粘土からつくられ、調整にはナデと指頭圧痕がみられる。19～21は、内外面にロクロ回転ナデが施され、底部は糸切りによって切り放されている。17・18は12世紀後半～13世紀で、19～21は17～18世紀に属する。19～22は、第6トレンチの墓地使用面に伴う土器であろう。22は、青磁器の椀で高台部分を除く内外面に緑色系の釉がかけられている。23は、瓦質の香炉と思われる。頸部には卍を模した連続の押型文様があり、その下には亀甲の押型文様がある。



第7図 包含層出土遺物実測図(3) (1/4)



第8図 第2トレンチ土坑S K04出土遺物実測図(1/4)

次に石製品類であるが、24～30は遺構には伴わず、遺物包含層内から出土した(第7図)。

24は、擦石で、両面に擦痕とタタキ痕がみられる。側面は丸くなるように整形されている。25は、石棒らしき不明石製品である。26は石錘、27は打製石斧、28は磨製石斧である。29は、磨石で表面に研磨痕跡があり、先端部にはタタキ痕がみられる。30は、砥石であり、使用面は3面ある。

遺構からの出土遺物でまとまった資料は、第2トレンチの土坑S K04から出土した遺物のみである(第8図)。

31～33は、弥生時代前期に属する土器である。31は、鉢であるが、特殊な器形であり、内向する口縁部に注ぎ口がある。注ぎ口は、取り付けではなく、造形の際に口縁部の粘土から作り出されている。内外面の調整は、ナデの後にミガキが施されている。32は、壺であるが、胴部があまり張っていない。調整は、外面はハケメの後ミガキ、内面はハケメがみられる。そして、胴上半部に1本の沈線文がある。33の壺は、32に比べると胴部が張った壺である。調整としては、外面にはハケメの後ミガキ、内面には口縁部から頸部までハケメの後ミガキ、胴部にはハケメがそれぞれみられる。そして、頸部に4本の沈線文、胴上半部に6本の沈線文がある。34は、同じ土坑から出土したサヌカイト製の鏃で、凹基無茎式である。

6. まとめ

今回の調査では、6か所にトレンチを設定し、面的な調査を行った結果、第1・第2トレンチで弥生時代前期に属する遺構を検出した。第2～第5トレンチでは、礫の堆積層を確認した。また、各トレンチで遺物包含層を確認したが、弥生時代・古墳時代・鎌倉時代の遺物が混在する層であった。今回の調査地が、竹野遺跡の中心部の南側に位置し、砂丘の南縁辺部であることから、竹野遺跡の集落の南側の状況が確認できると予想された。発掘調査の結果、第2トレンチの遺構検出面、すなわち当時の生活面が北側から南側に向かって傾斜していることや、第2トレンチ内の南側で、竹野川の氾濫などによって運ばれた礫の堆積層を確認したこと、また、遺構が希薄なことを含めて考えると、一部分ではあるが、砂丘上に営まれた竹野遺跡の南端を確認したといえ

る。また、第1トレンチで遺構検出面から約0.9mで礫を多量に含んだ層を確認したこと、第3・第4トレンチの礫堆積が約0.3mの堆積であるが、第5トレンチでは1.5m以上の堆積と厚さが異なることから、砂丘の縁辺は多少入り組んでいたと考えられる。そして、砂丘がいつ形成され、いつ南側が潟湖となり、また、沖積地となったのか、それぞれの時期は不明であるが、弥生時代前期には、すでにこの砂丘地が生活場であったと考えられる。

出土遺物の大半は遺物包含層から出土しており、その中でも弥生時代の遺物が8割を占める。遺構からの出土遺物のうち、第2トレンチの土坑SK04から出土した弥生時代前期の遠賀川系の壺(第8図33)と注ぎ口のある鉢(第8図31)は完形品で出土した。この遺跡で完形品が出土することは稀で、丹後地域の弥生時代を考える上で貴重な資料が得られた。

(村田和弘)

注1 a 坪倉利正『竹野遺跡発掘調査報告書』 京都府立峰山高等学校史学部 1968

b 平良泰久「丹後竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第2集 丹後町教育委員会) 1983

c 奥村清一郎「竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告』第3集 丹後町教育委員会) 1987

d 坪倉利正ほか『竹野弥生遺跡』 丹後古文化研究会 1992

e 柴 暁彦「竹野遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 主な調査参加者(敬称略)

井田 望、江野道和、大江千晴、角江強司、片西 弘、加藤朝子、川戸 武、久保田敦子、小西偉之、平良友秀、島本正三、寺井朝美、中道幸子、野木 章、増田 修、山崎頼人、吉田正治郎

2. 長岡京跡左京第353次発掘調査概要

(7ANFIR-2・FDN地区)

1. はじめに

長岡京跡左京第353次発掘調査は、府営上植野団地(仮称)建設に伴う事前調査であり、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、京都府向日市上植野町池ノ尻・大門に所在し、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町(旧左京三条一坊十二町・十三町、左京四条一坊九町・十六町)の推定地にあたる。また、トレンチ内には、東一坊坊間東小路(旧東一坊第二小路)と四条条間小路(旧三条大路)の交差点部分の所在が推定されているところでもある。

発掘調査は、平成6年11月7日から平成7年2月27日の期間に、先に述べた交差点以外のトレンチ調査を実施し、交差点部分の調査は、平成7年4月24日から同年5月19日の期間に行った。

なお、交差点部分で検出した東一坊坊間東小路(以下、旧条坊名は略)の東西両側溝と四条条間小路(以下、旧条坊名は略)の南北両側溝は、平成6年度調査で検出した側溝の続きであることから、左京第353次調査として遺構番号の登録及び遺物取り上げを行った。平成7年2月24日には、関係者説明会を開催し、調査成果の公表を行うとともに、当調査研究センター発刊の『京都府埋蔵文化財情報』第57号に調査の略報を掲載した。調査面積は、約1,980m²である。

これらの現地調査で実測した平面図及び断面図などの整理と出土遺物の洗浄、出土地注記、接合、実測、トレースなどの整理作業は、平成6・7年に実施した。

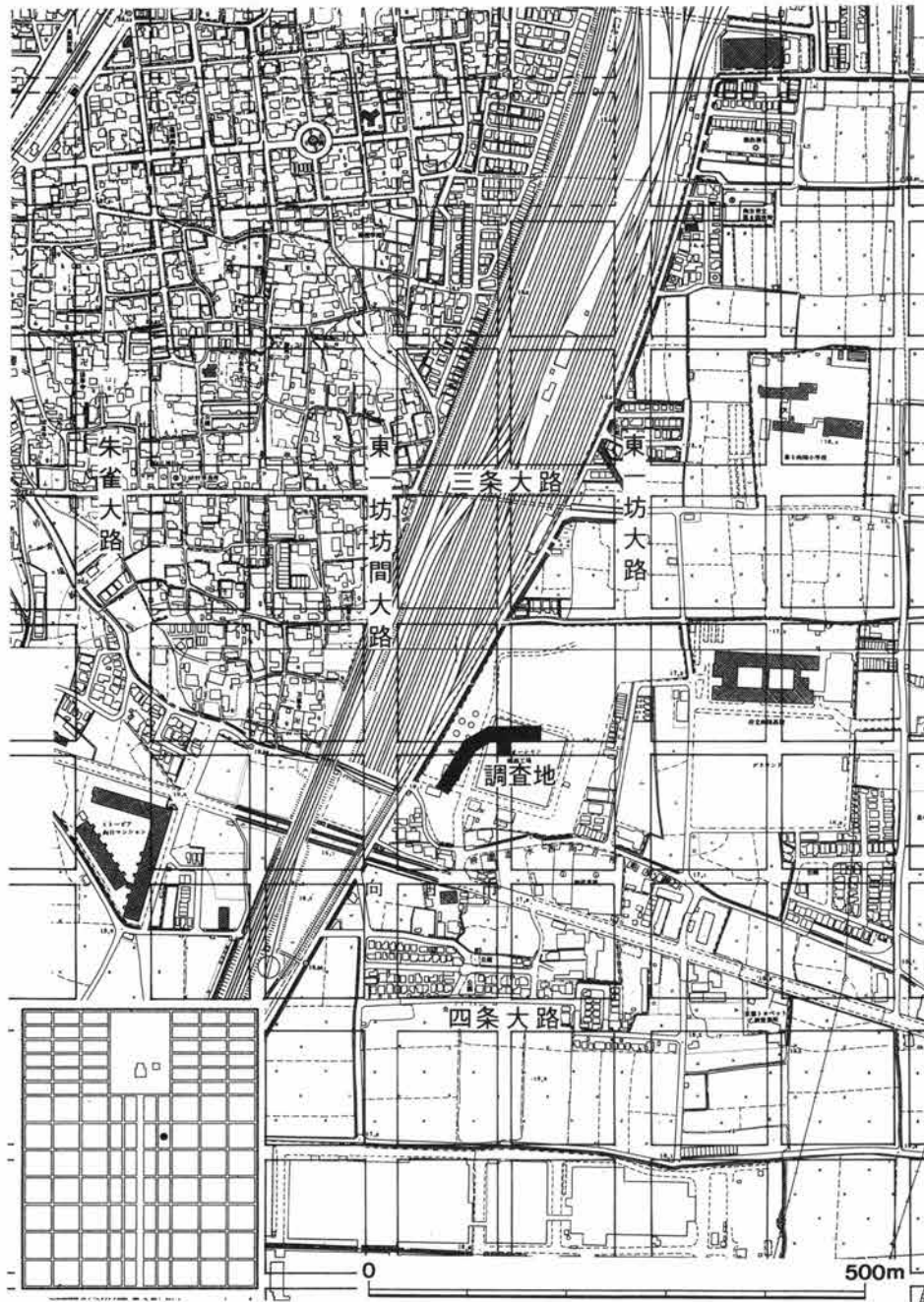
発掘調査は、調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当し、交差点部分の調査には、同調査員竹下士郎が加わった。遺物実測及びトレースは、小滝初代・山中道代が担当し、遺物復原は、森川敦子が担当した。また、遺構図の調整などは伊達優子が担当し、これらを総括した上での本概要の執筆・編集は、小池が担当した^(注1)。

なお、遺物写真は、当調査研究センター調査員田中 彰が、遺構写真は小池が撮影した。また、当該遺跡の調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境(第9図)

調査地は、先述したように、長岡京跡左京四条一坊十町・十一町・十四町・十五町(旧左京三条一坊十二町・十三町、左京四条一坊九町・十六町)の推定地にあたる。特に、東一坊坊間東小路の東西両側溝は、当該地の北方約50mで実施された左京第226次調査(以下、L226と略記)^(注2)と、北方約40m地点の左京第252次調査(以下、L252と略記)^(注3)で検出されている。L226では、西側溝SD22619の中心座標がY=-26,452.3m、東側溝(SD22609)の中心座標がY=-26,443.7mであることを確認し、L252では、西側溝SD25251の中心座標がY=-26,452.26m、東側溝SD

25250の中心座標が $Y = -26,443.76\text{m}$ であることをそれぞれ確認している。当該地は、両調査地の南方に位置し、地形的にも同一平坦面上に位置していることから、両側溝の検出が予想されていた。また、それに直交する四条条間小路の北側溝は、左京第2次調査(以下、L2と略記)^(注4)では $X = -118,592.32\text{m}$ 、左京第9次調査(以下、L9と略記)^(注5)では $X = -118,593.38\text{m}$ 、左京第92次調査(以下、L92と略記)^(注6)では $X = -118,596.09\text{m}$ 、左京第119次調査(以下、L119と略記)^(注7)では $X = -118,594.3\text{m}$ であることを確認している。一方、同南側溝は、L2では $X = -118,607.72\text{m}$ 、L9では $X = -118,610.46\text{m}$ 、L92では $X = -118,605.19\text{m}$ であることを確認している。当該地とはやや距離が開いていることと、後述するように旧小畑川の氾濫などを考慮すれば、必ずしもそ



第9図 調査地位置図(新条坊名を記載)

の検出が確實視されるところではなかった。

当該地を含めたこの地域一帯は、平安時代から中世に存続した中福地遺跡の範疇に入る。L252においても、関連遺構の検出が確認されており、南方に隣接する当該トレンチでの検出が予想されていた。また、左京第322次調査概要報告では、上植野一帯の地形復原がなされているが、復原根拠が空白であった当該地の地形を把握する上で、重要な所見が得られる可能性が指摘されているところでもある(図版第5-(1))。

3. 調査概要

(1)基本層序(第10図、図版第6-(1)～(3))

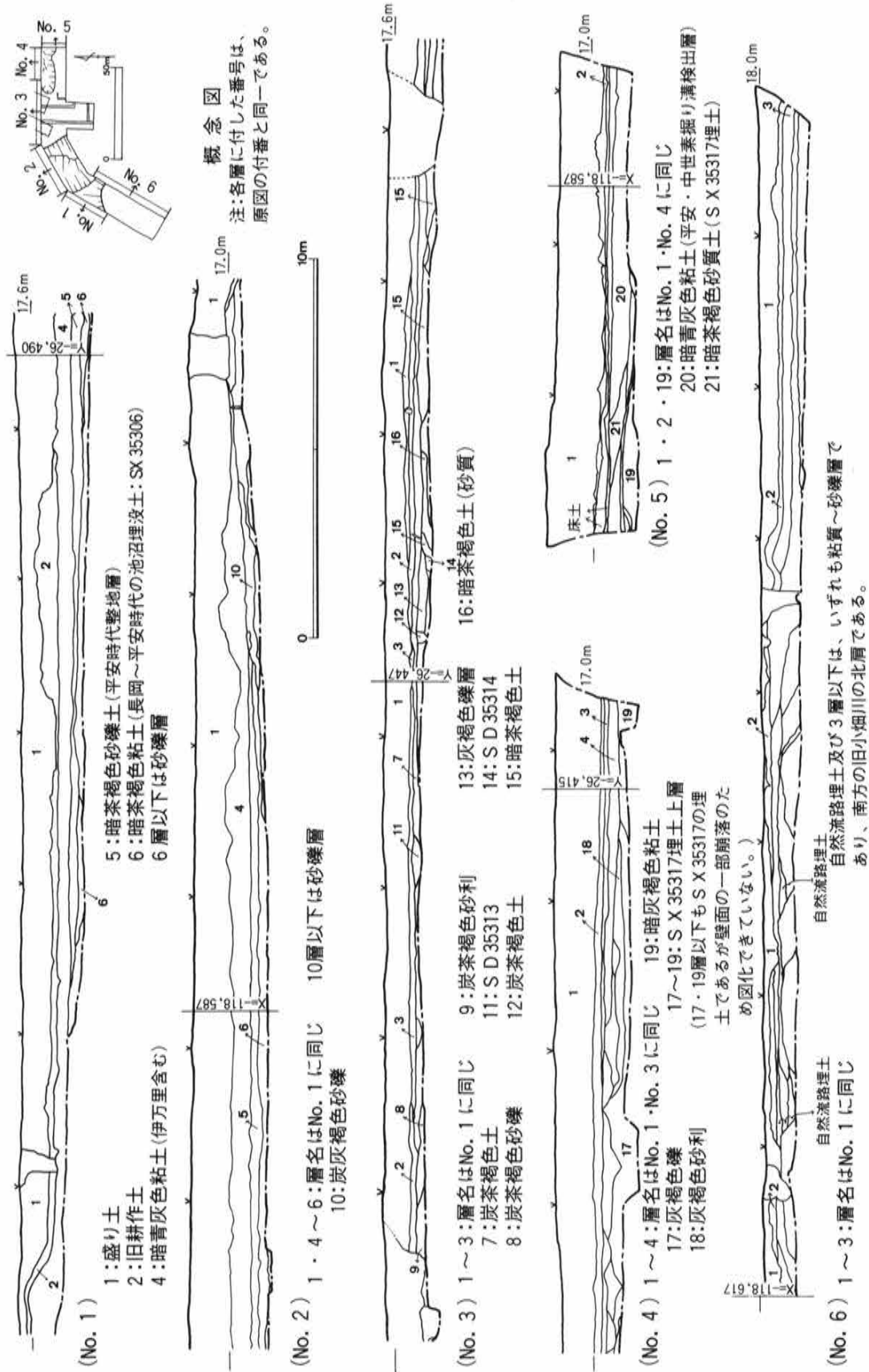
トレンチは、団地建設予定地の平面形態に規制されるため、 $Y=-26,460.00\text{m}$ 以東のトレンチ主軸ラインは、真北に対しほぼ直交しているものの、 $Y=-26,460.00\text{m}\sim-26,490.00\text{m}$ 間は、北から東へ 60° の角度をもち、また $Y=-26,490.00\text{m}$ 以西は、北から東へ 30° の角度をもっている。そのため、土層堆積状態の把握もそれぞれ、角度の異なる断面によって確認せざるを得なかった。

$Y=-26,490.00\text{m}$ 以西(第10図-NO.1・6)は、南方へ傾斜するように砂利層が堆積しており、旧小畑川の氾濫による堆積土の可能性が指摘できる。しかし、 $X=-118,625.00\text{m}\sim-118,635.00\text{m}$ では、長岡京期に比定できる堆積層を地表面下 0.3m で確認しており、自然堤防状の微高地が東西方向に残存している可能性が考えられる。一方、トレンチ屈曲部である $Y=-26,460.00\text{m}\sim-26,490.00\text{m}$ 間では、長岡京期以前から池沼であったと考えられるSX35306が位置している。その池沼の最下層は、暗茶褐色粘土(6層)が堆積しており、それをおおうように暗茶褐色砂礫土(5層)が堆積している。この5層は、拳大の礫を多く含んでおり、人為的に埋められた可能性が高く、出土土器から平安時代の整地層として認識できる。5層は、池沼SX35306(6層)を人為的に埋め戻した整地層であるため、上面は、垂平堆積ではなく、凹状を呈している。その5層の上層に堆積する暗青灰色粘土(4層)から、肥前磁器・中国製磁器が出土している。池ノ尻と大門の地境に、かつて小規模河川が流れていたことが知られており、河道自体は確認していないが、関連が想定できる。

一方、 $Y=-26,460.00\text{m}$ 以東の東一坊坊間東小路周辺には、淡茶褐色土層(7層)や淡茶褐色砂礫層(8層)などの整地層が見られる。特に、四条条間小路南側溝以南では、7・8層下で長岡京期の遺物包含層を検出している。また、 $Y=-26,437.5\text{m}$ 以東には、平安時代の遺物を含むSX35317が位置しており、堆積状況は複雑である。SX35317堆積状況については後述するが、最下層に堆積する砂利及び礫層には、杭が打ち込まれており、基本的に北方へかけて傾斜している。最後に、旧耕作土(2層)は、トレンチ屈曲部で検出した暗青灰色粘土の堆積範囲以外で検出しており、南方及び東方に傾斜して水田が営まれていたことがわかった。

(2)検出遺構(第11～13図、図版第5-(2))

a. 長岡京期 長岡京期に比定できる遺構としては、東一坊坊間東小路の両側溝及び四条条間



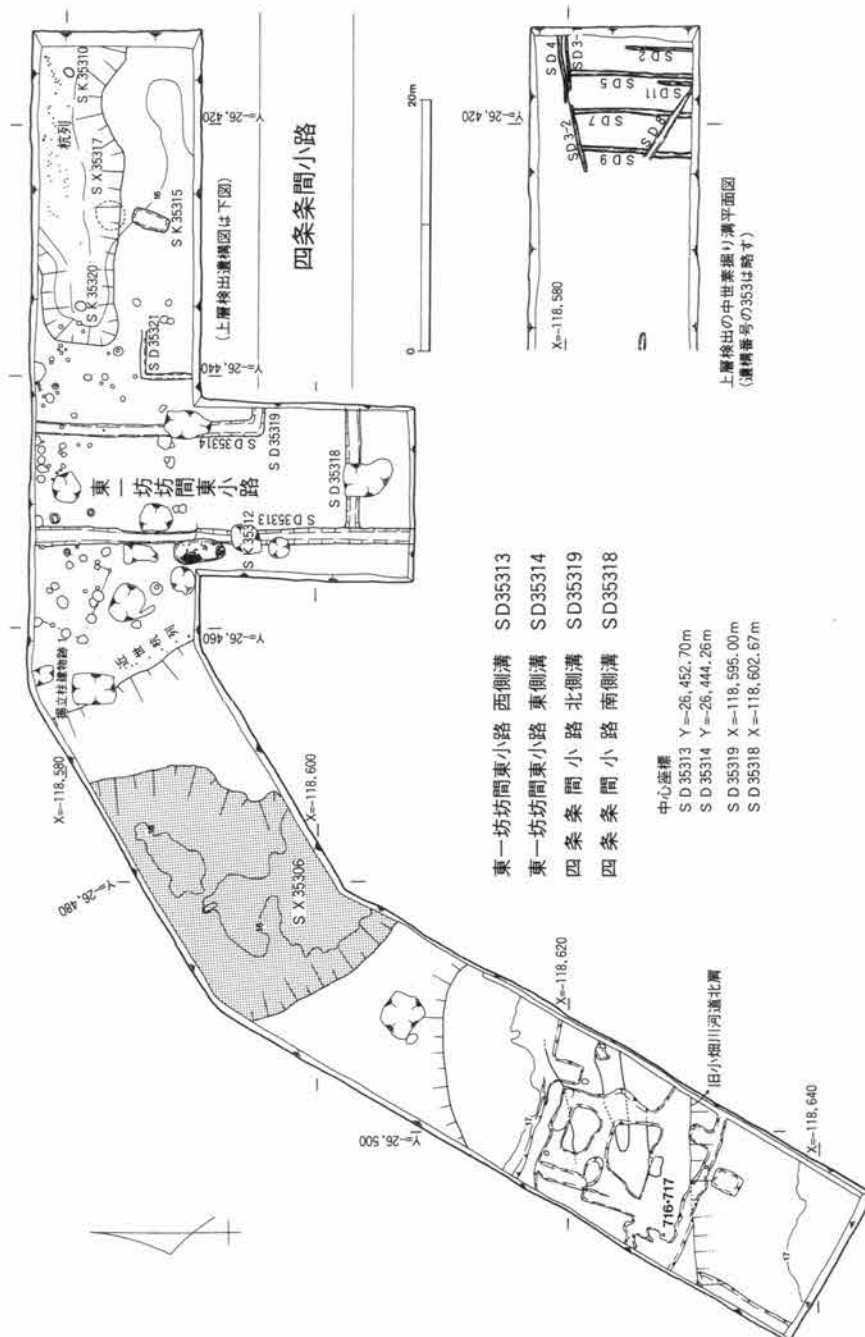
第10図 土層断面実測図

小路の両側溝、そして、池沼 S X 35306がある。

東一坊坊間東小路の西側溝 S D 35313 最大検出幅1.56m・最小検出幅1.03m・最深0.34mを測り、基本的な主軸は、Y=-26,452.70mを測る。堆積土は、残存状況が良好な北端で観察すれば、淡茶褐色土・濁暗黄茶褐色土・濁暗茶褐色土・黄褐色粘質土が上層から下層にかけて見られる。

同東側溝 S D 35314 最大検出幅1.32m・最小検出幅0.94m・最深0.2mを測り、基本的な主軸は、Y=-26,444.26mを測る。堆積土は、淡茶褐色土・濁暗黄茶褐色土の2層である。西側溝と比較すると溝の残存状況は著しく不良である(図版第7-(1)・(2)、図版第8-(1)~(4))。

四条条間小路の北側溝 S D 35319 先述した東側溝 S D 35314との接続部分で屈折し、東流する。検出幅は1.0m・最深0.16mを測る。検出長が短く不正確ではあるが、基本的な主軸は、X=-



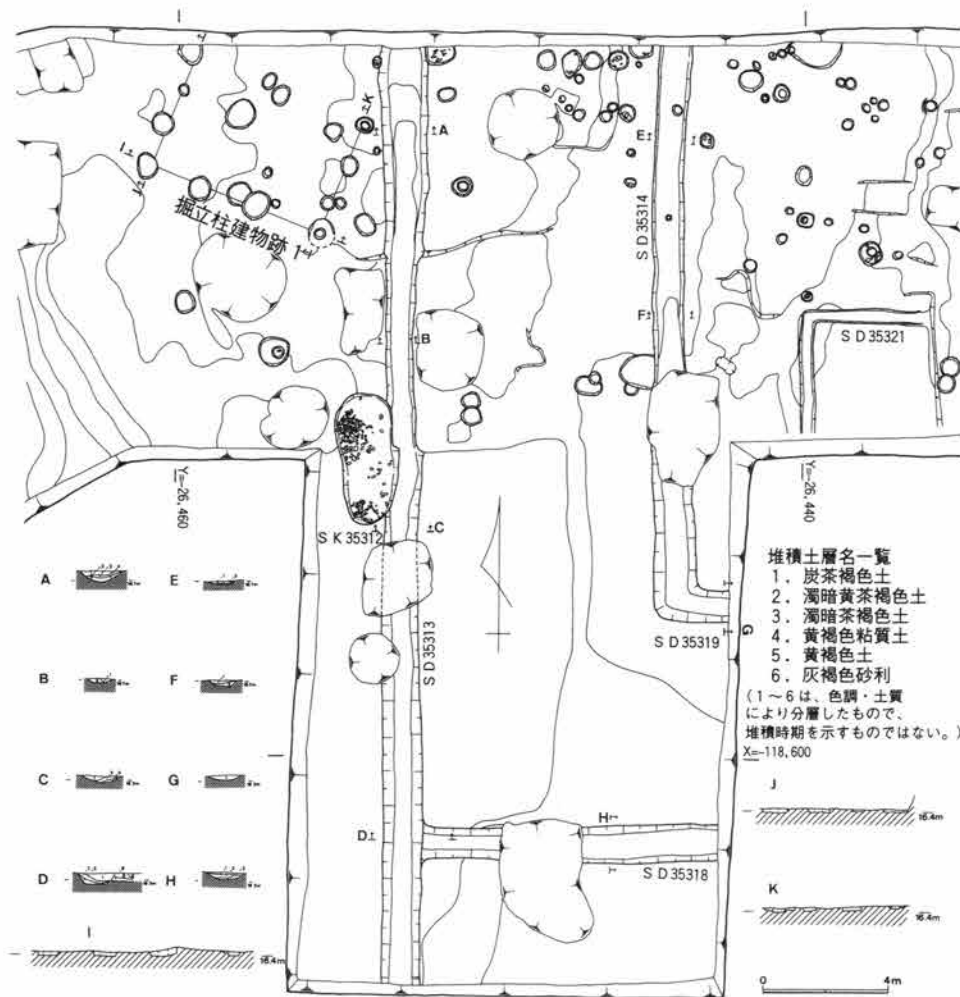
第11図 検出遺構図

118,595.00mである。埋土は、淡茶褐色土の一層である。

同南側溝 S D 35318 最大検出幅1.22m・最小検出幅0.95m・最深0.24mを測る。基本的な主軸は、X=-118,602.67mである。埋土の最下層に濁暗茶褐色土が堆積している。

先の東一坊坊間東小路の西側溝 S D 35313は、四条条間小路の南側溝 S D 35318が埋没した後、掘り直していることが、第12図Dラインの断面で検証できている。検出した溝幅も広く、深いことから、他の3条の溝の中で最後に埋没した溝が、西側溝 S D 35313であったと考えられる。

池沼 S X 35306 トレンチ屈曲部で検出した暗茶褐色粘土を埋土とする池及び沼状地形である。最大幅21.6mを測り、基本的な深さは30~40cm前後である。土層堆積状況を把握した断面観察では第6層に該当し、この6層の堆積範囲を S X 35306の範囲とした。6層には、木葉・木枝・自然木などを多量に含んでおり、土器片・土錘が出土している。地形が形成される時期は、長岡京期以前に比定して誤りないが、南端及び北端では平安時代の土器も出土しており、長岡京期から平安時代にかけて池沼として機能していたと考えられる。なお、後述するが、花粉分析で検出された花粉とともに、寄生虫卵のうち回虫卵が検出されている。直接、S X 35306とは関係はないが、Y=-26,500.00m付近で検出した自然堤防上面では、奈良時代の軒丸瓦(716)・軒平瓦(717)



第12図 遺構平面実測図

が出土している(第11図)。

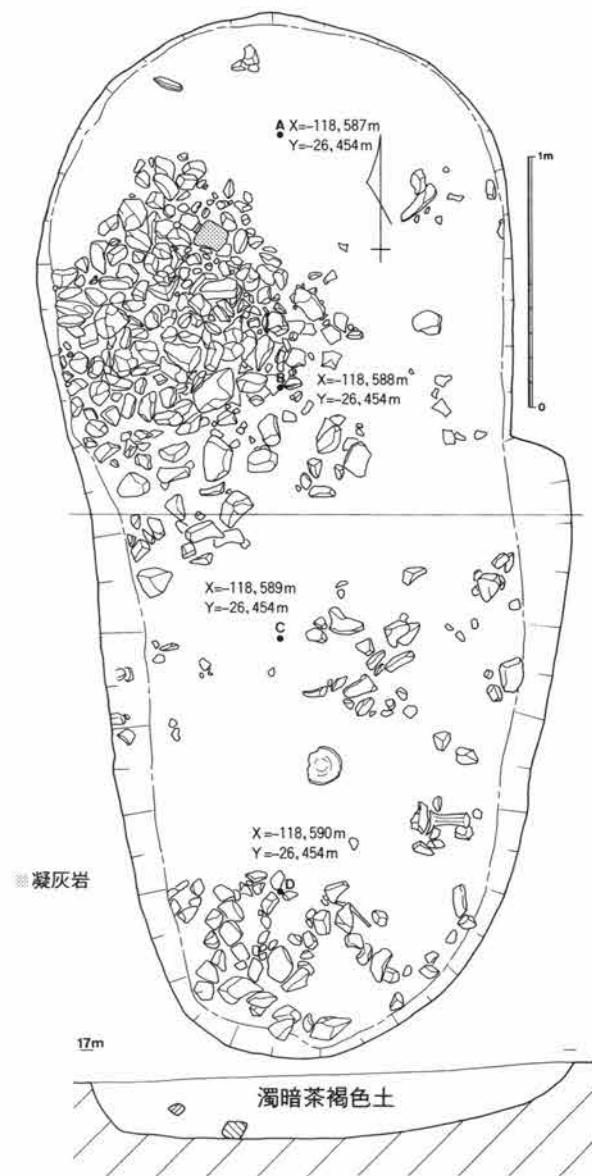
b. 平安時代 平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡・土坑・落ち込みなどがある。

掘立柱建物跡1(第12図) 主軸が北から東へ23°傾き、南辺3間(5.7m)・西辺3間以上・東辺3間以上を確認した。柱穴は極めて浅く、最下部に砂利を敷いた柱穴も見られる。これら以外にも、砂利を充填した柱穴を確認しているが、建物として認識できていない。当該トレンチの北に位置するL252調査では、主軸が北方を向く建物跡を検出しており、主軸の方向が異っていることが指摘できる。元来、東一坊坊間東小路の西側溝S D35313は、条坊の側溝として機能していたが、四条条間小路の南側溝S D35318埋没後に改修していることから、当該地以北に所在した平安時代の建物群に伴う排水溝としての機能が付加された可能性がある。この溝と掘立柱建物跡が近接していることと、建物跡の主軸が傾いていることから、平安時代でも、複数時期の設定が必要となってくる(図版第9-(1)・(2))。

土坑S K 35312(第13図) 長軸4.16m・短軸最大長1.9m、平面プランがほぼ楕円形の土坑である。埋土は、深さ約0.25mの濁暗茶褐色土であり、北西部に直径1mの範囲に拳大の礫を充填し、南半にも拳大の礫が散乱している。礫の中には拳大の凝灰岩も含まれており、土坑内から土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土している(図版第10-(1))。

土坑S K 35315(第11図) 後述する落ち込みS X35317の南辺で検出した方形土坑で、長辺3m・短辺1.3mを測る。深さは0.2m前後であり、土坑中央に凝灰岩(第28図708)を据えた状態で検出するとともに、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が出土した。

落ち込みS X35317(第10・11図) 西限はY=-26,437.80m、南限はX=-118,584.10mの範囲に多量の遺物を包含する落ち込みである。基本的には、北東方向へ傾斜しており、土層の堆積状況は、基盤層である礫層上に、暗灰褐色粘土(19層)、灰褐色礫(17層)、暗茶褐色砂質土(21層)が堆積している。出土遺物は、



第13図 土坑S K 35312実測図

17・19層からの出土遺物は少なく、21層からの出土が大半である。基本的に遺物を含む各層の掘り下げが完了した時点で基盤層に打ち込まれた杭列を6列検出した。その杭列の主軸は、北から東へ64°振っており、北東方向へ広がることを示唆している(図版第10-(2))。

土坑S K 35310(第10図) 落ち込みS X 35317の検出面で確認した直径0.85mの円形土坑である。上層に掘り込まれた中世素掘り溝群に一部、攪乱されているが、坑内から土師器・緑釉陶器(第14図57~60)が出土している。先に述べた落ち込みS X 35317の埋没時期を示す遺構である。

c. 中世 中世に比定できる遺構としては、Y=-26,420.00m以東で検出した耕作に伴う素掘り溝群がある。S D 35302・05・07・09・11は、基本的に南北方位をとるが、S D 35303・04・08は斜行しており、掘り込まれた時期が異なる可能性がある。瓦器細片がわずかに出土している。

(3)出土遺物(第14~31図)

出土遺物は、各土坑群と池沼S X 35306及び落ち込みS X 35317から大別できる。そのため、長岡京期の検出遺構として池沼S X 35306を取り上げたが、平安時代の遺物も含んでいる。ここでは、各遺構出土の遺物を概観しておきたい。なお、法量などは、巻末法量表に記載しているので参照していただきたい。また、遺物写真の図版番号と挿図番号は一致している。

a. 池沼S X 35306出土遺物(第14図1~56)

①土師器 杯・椀1~5は、外面をヘラ削りとオサエにより調整する個体に分類できる。皿6~8は、外面をヘラ削りで調整する。8の外面に墨書が観察できる。

②須恵器 杯蓋10~14は、口縁端部が肥厚し、内面が屈曲する。皿21は、底部に渦巻き状の墨書が見られる。杯17は、工具を螺旋状に押圧し、底部全面に墨が残存する転用硯である。鉢24は、外面に多条の線状の墨書が見られる。

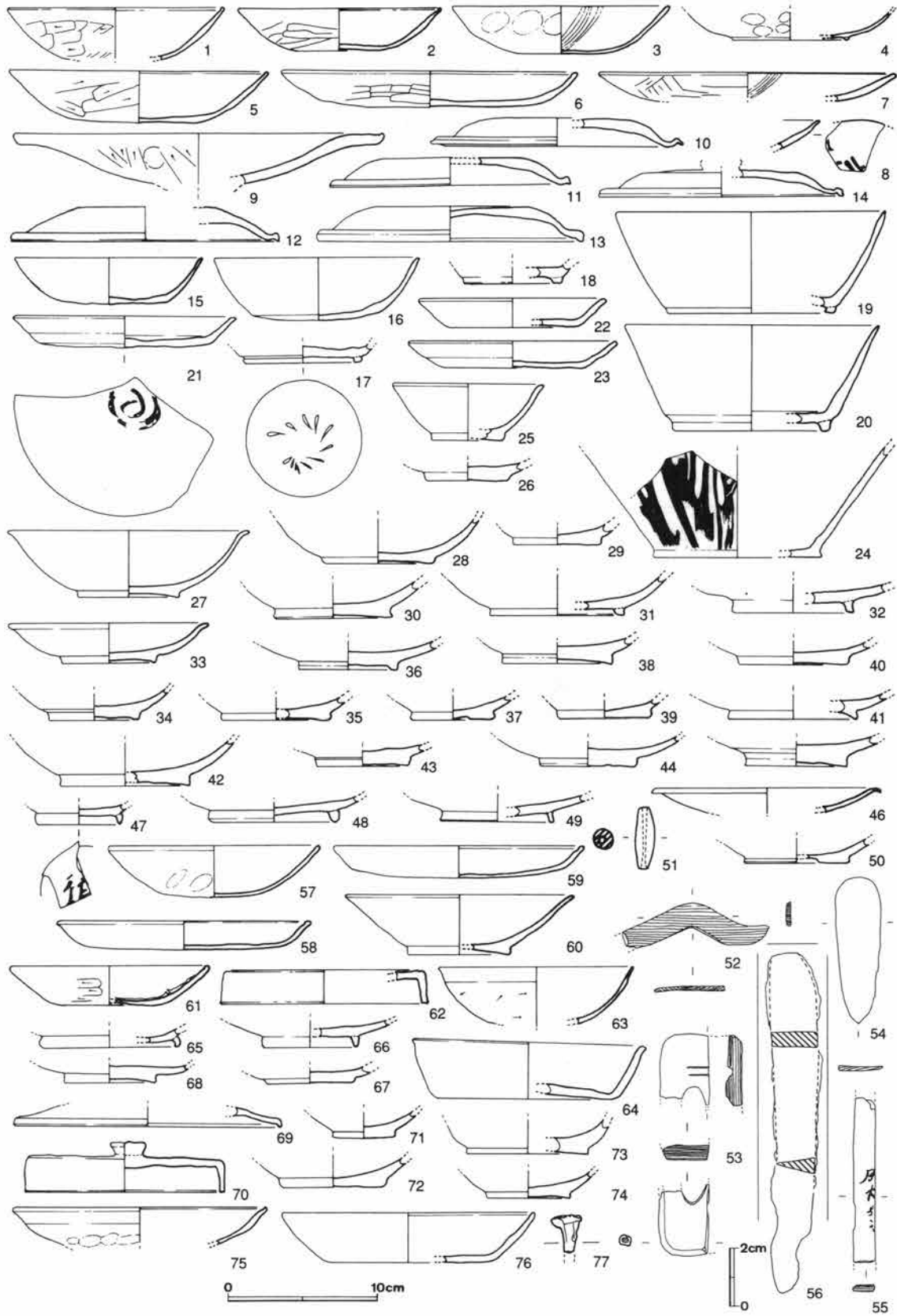
③陶磁器類 緑釉陶器の椀は、大半が底部ヘラ削り高台に代表される京都系であり、31・32・36は東海系である。33は、京都亀岡市篠古窯群跡産である。灰釉陶器の椀47の底部には、「作？」の墨書がある。中国青磁椀50は、越州窯産である。

④その他 土錘51は、全長4.3cmである。木製品52は、馬形または鳥形祭祀具で、残存長9.8cm・厚み0.4cmである。53は、黒漆をていねいに塗布した調度品の一部である。54は木葉形の用途不明木製品、55は判読できないが木簡である。56は、全長11.4cmの不明鉄製品である。

b. 土坑S K 35310出土遺物(第14図57~60) 図化した資料はわずかである。緑釉陶器の椀60は、削り出し高台ではあるが、釉調・器形から東海系である。

c. 落ち込みS X 35317(21層)出土遺物(第15~26図) 今回の調査で最も多くの土器が出土している。破片計数による各器種の比率は後述し、特徴的な遺物を概観しておきたい。

①土師器 杯及び椀は、外面をヘラ削りする個体が78・115・116・153・156・164~171・178のように全体の10%にすぎず、大半がオサエによる調整である。内面に斜め上方のナデ調整を施す94・95・101・124・140・159・166がわずかながら見られる。182は、外面をていねいなヘラ磨きにより調整しており、底部には、不整方向の線刻が見られる。186は、外方へ直線的にひらく



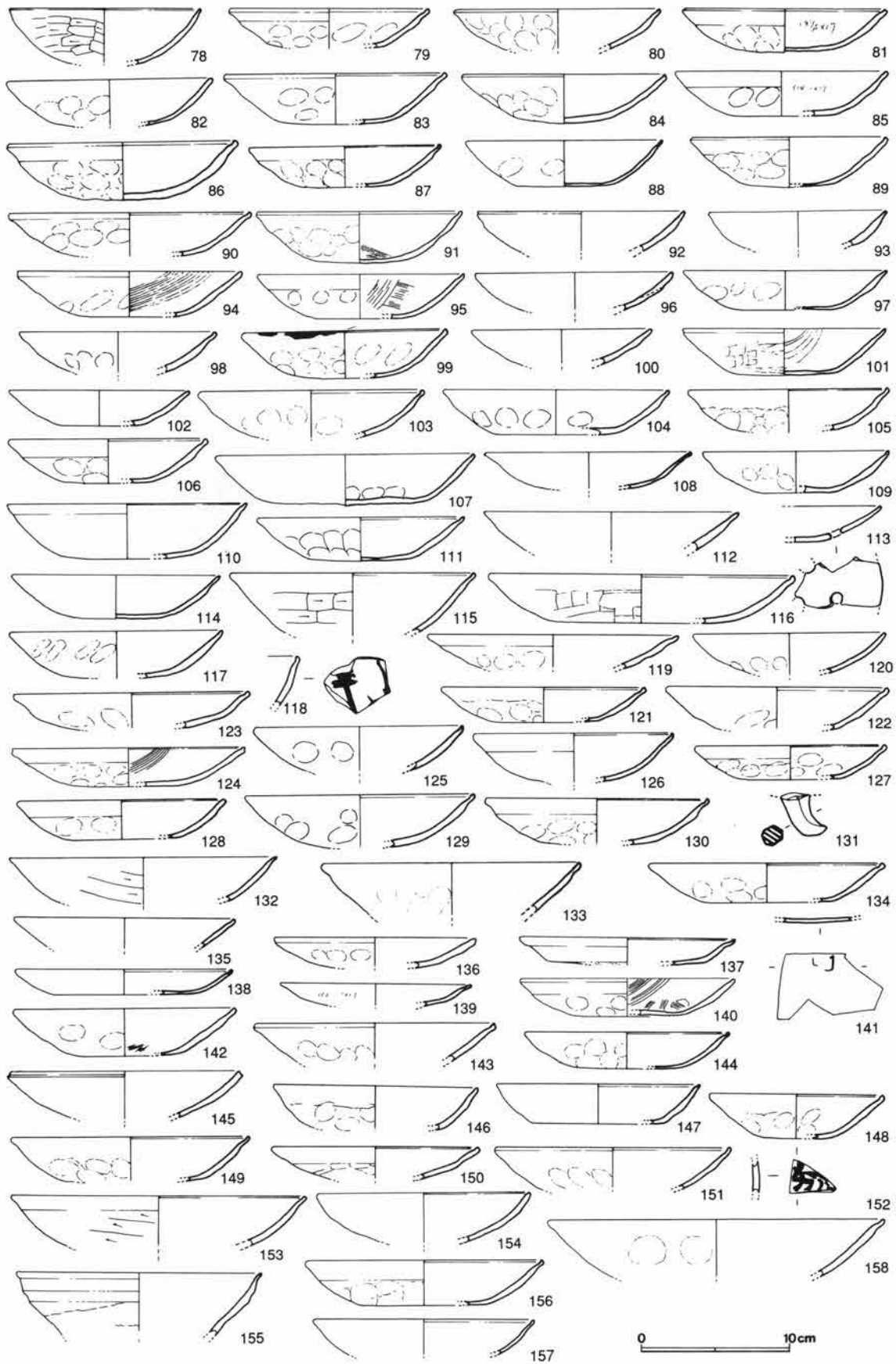
第14図 出土遺物実測図(1)

1~56. S X 35306
65~74. 包含層

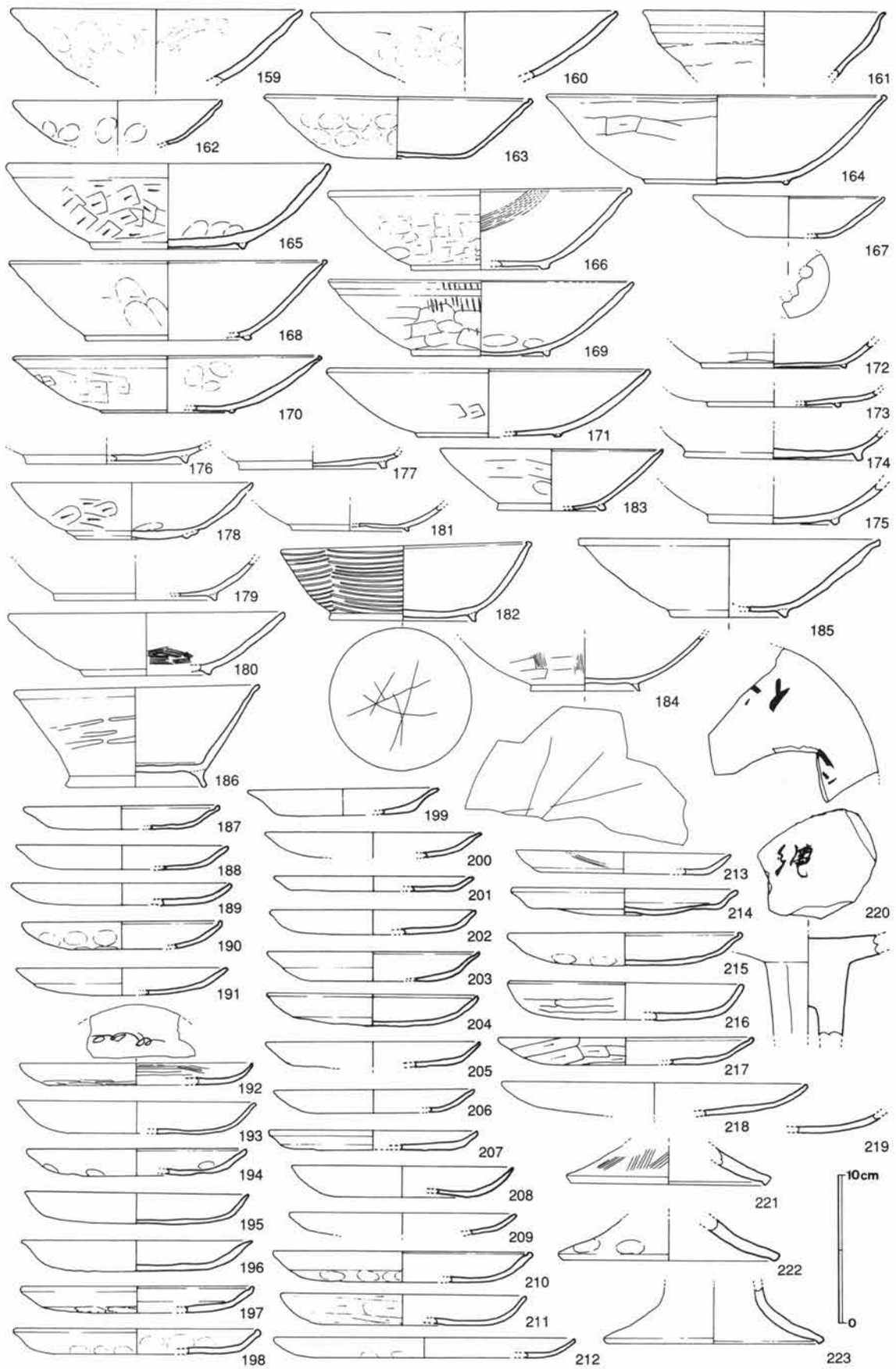
57~60. S K 35310
75~77. 中世素掘り溝混入

61・62. S D 35313

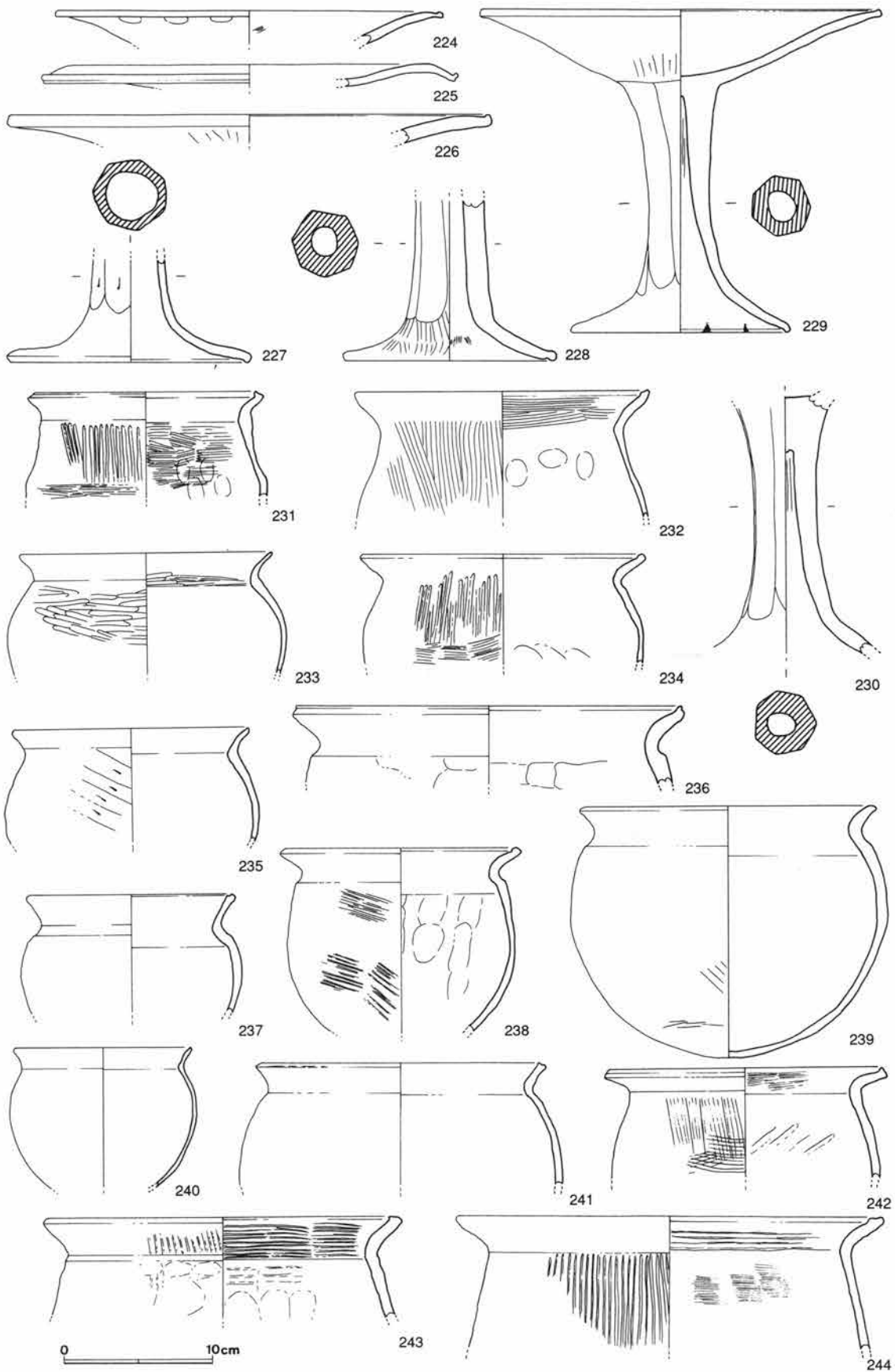
63・64. S D 35308



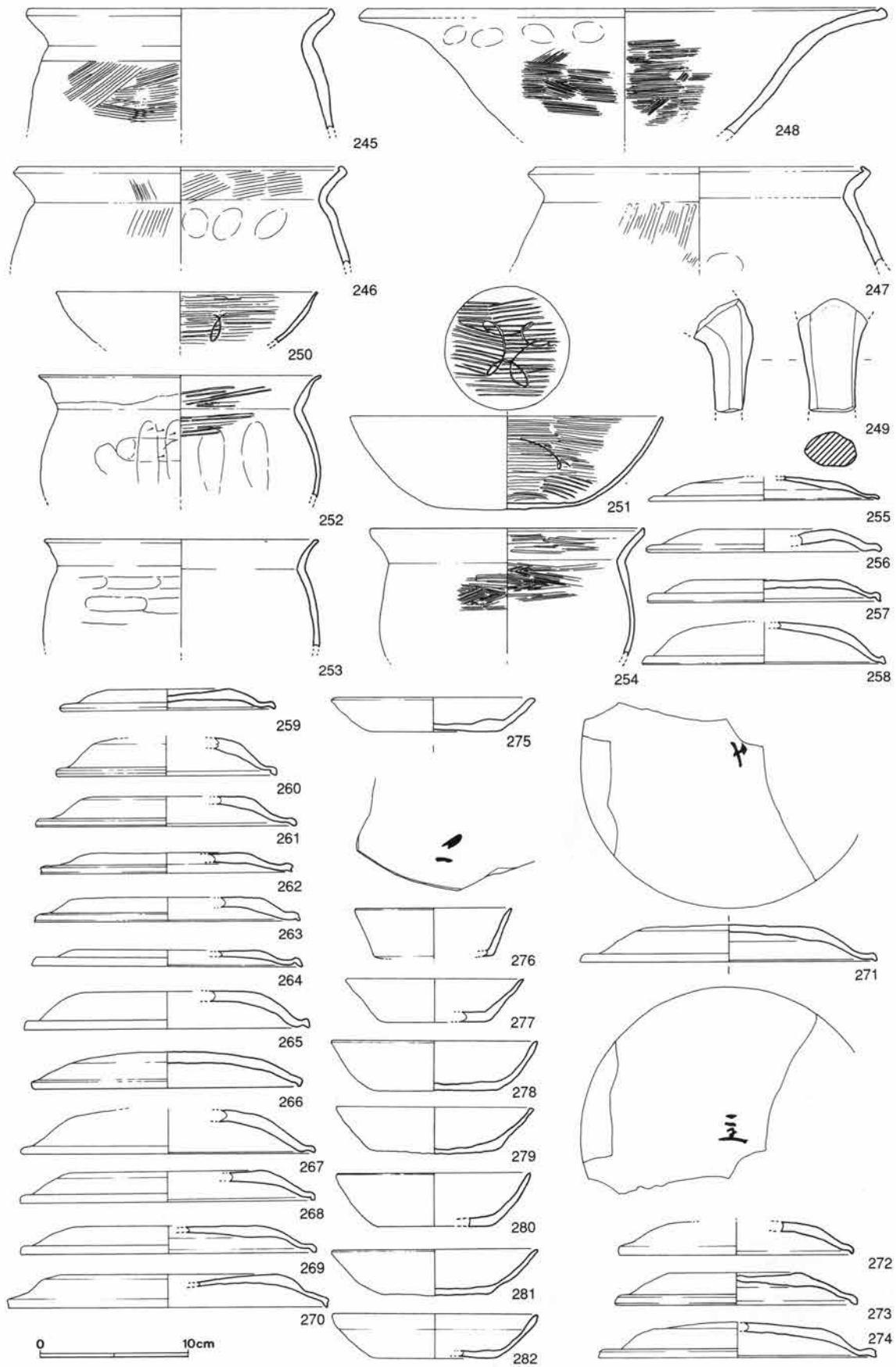
第15図 出土遺物実測図(2) S X35317(21層)



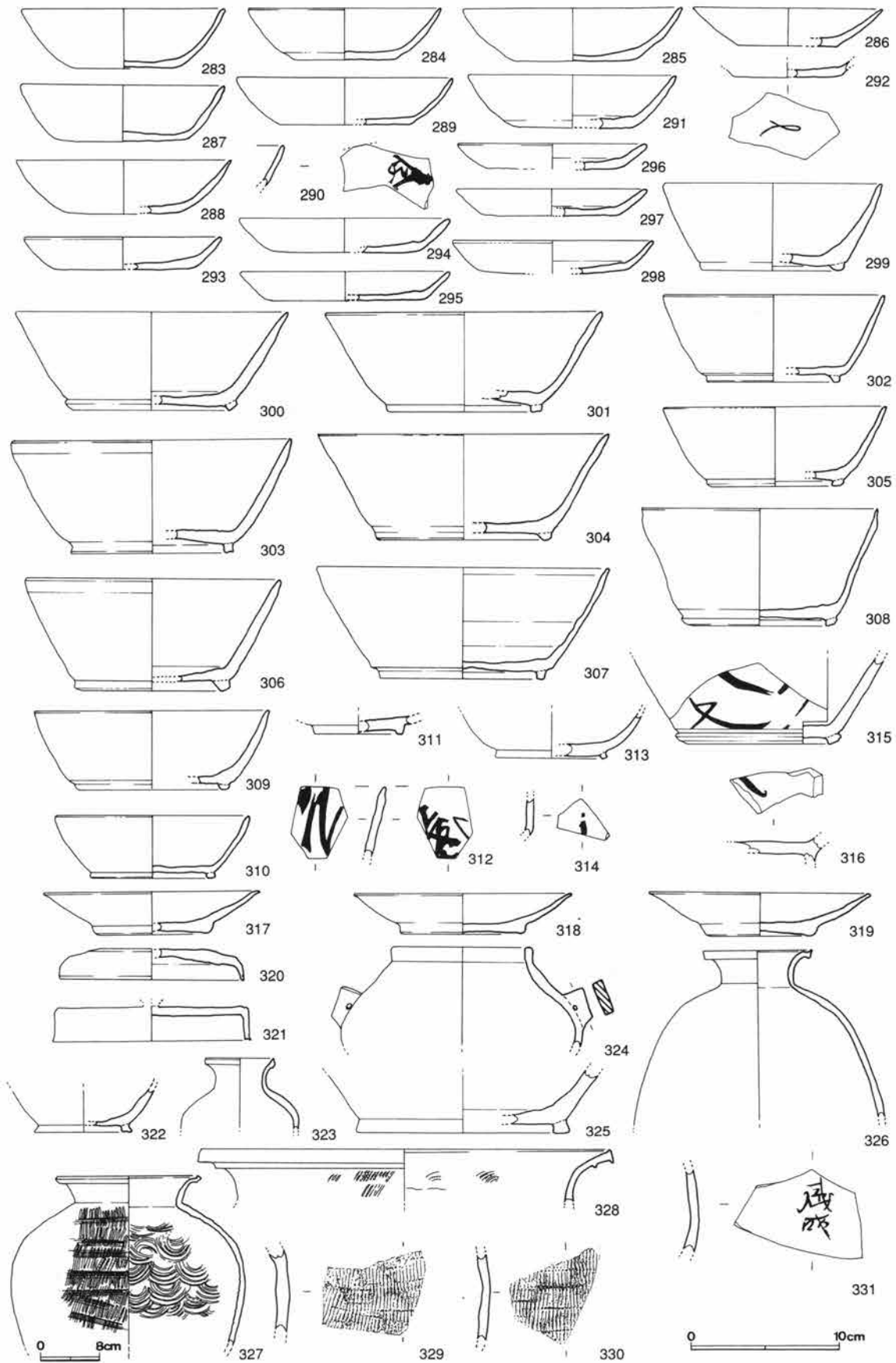
第16図 出土遺物実測図(3) S X35317(21層)



第17図 出土遺物実測図(4) S X 35317(21層)



第18図 出土遺物実測図(5) S X35317(21層)



第19図 出土遺物実測図(6) S X 35317(21層)

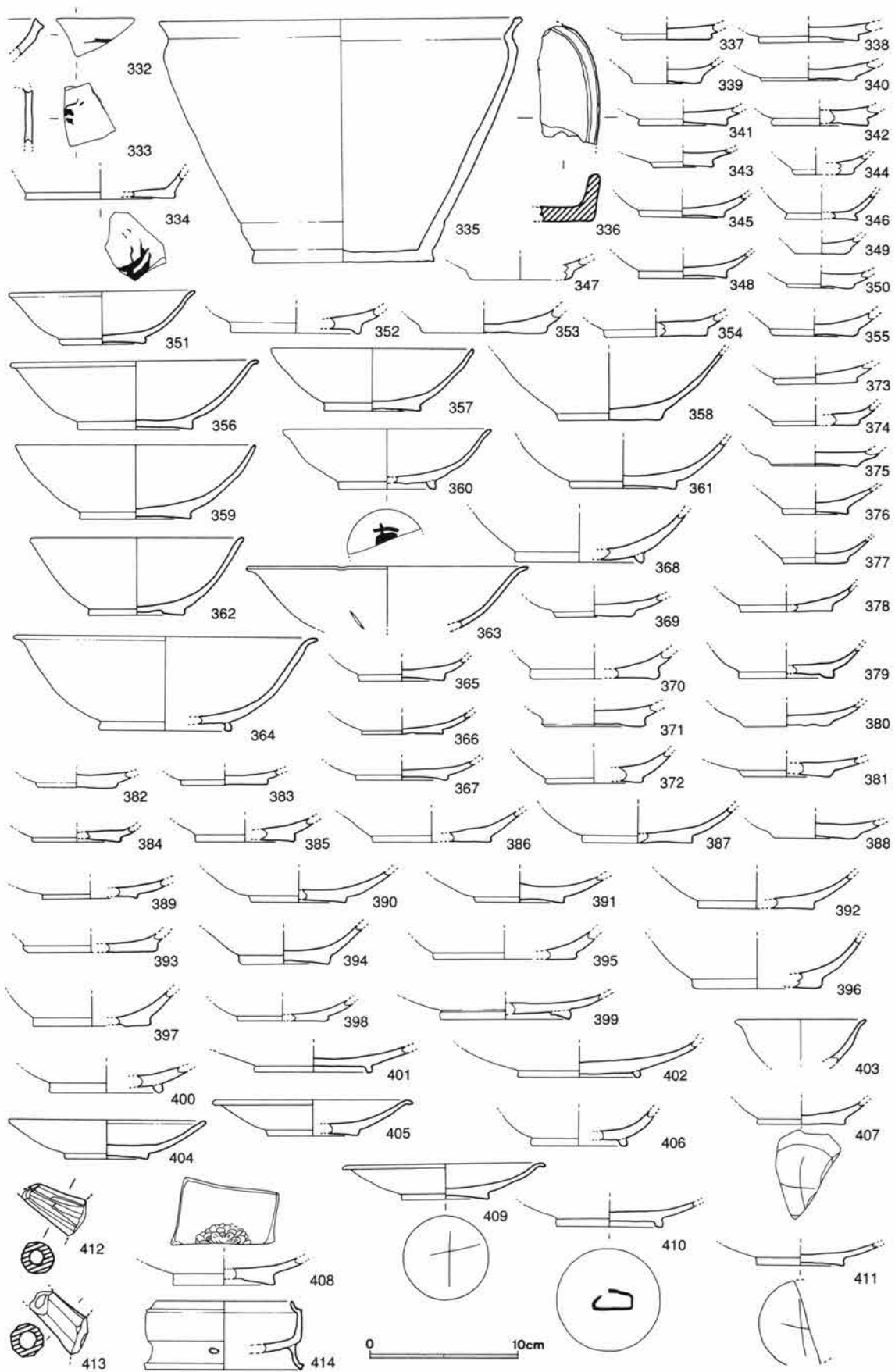
杯部と平らな底部からなり、1 cm前後の断面「八」字状の高台が付く。胎土と器形から地域は限定できないものの搬入品の可能性がある。なお、99の口縁端部には、複数か所に煤が付着しており、118・141・152には、判読不明の墨書、185には人偏の文字の墨書が見られる。113・167は、直径0.7cmの複数穿孔が見られる。皿は、外面をヘラ削りで調整する192・211・216・217がわずかに見られる。高杯は、杯部と脚部の接合個体はほとんど見られないが、229は、残存率70%で杯部と脚部の接合ができた。特に、脚端部に煤付着か所が3か所確認でき、使用時に杯部と脚部を反転して燈明として転用したことが想定できる。なお、220の杯内面には「繩」の墨書が見られる。甕231～247は、口縁部の形態、頸部の屈曲度などから少なくとも4型式には分類ができる。特に、外面に縦方向のタタキ目を残す244は、口縁部内面を肥厚させるなどの特徴をもっている。鍋248は、内外面ともハケにより調整している。

②黒色土器 椀は、いずれも内黒で、250・251とも輪花文の暗文が観察できる。甕は、頸部で屈曲し、全体的にシャープな焼成である。252は、外面をヘラ削りし、内面をヘラ磨きしている。

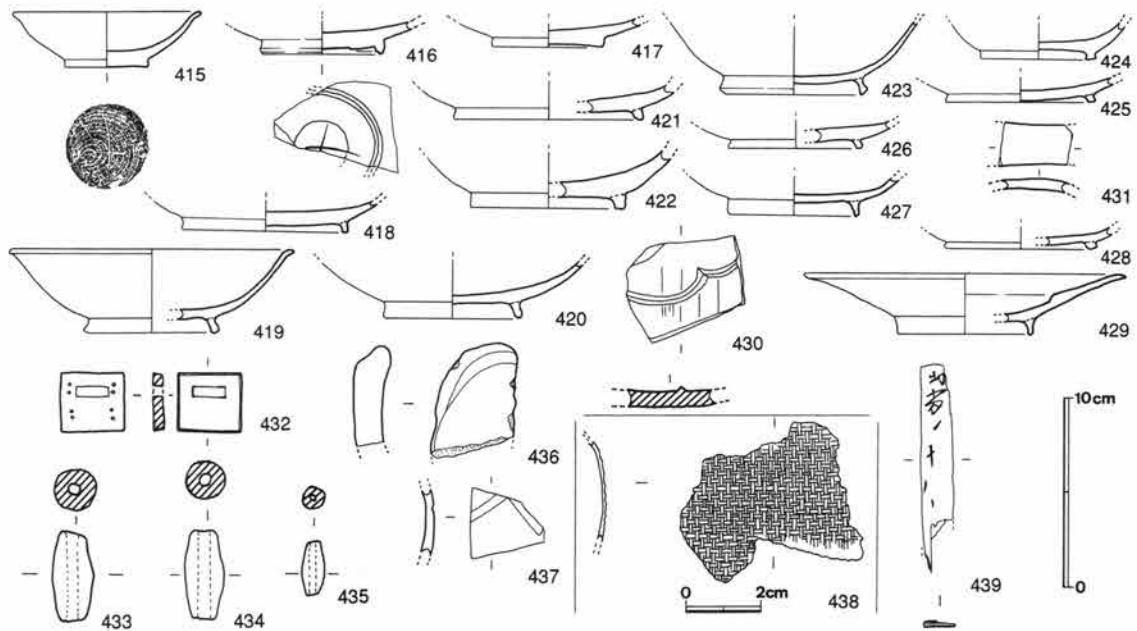
③須恵器 杯蓋255～274は、天井部の残存率が不良で、つまみの有無については、不明な点が多い。口径に違いはあるが、基本的な形態は類似している。なお、271の内面中央には「主」の墨書が見られ、天井部中央にも、同一の文字と判読できる墨書が見られる。杯A283～291は、杯部がやや内湾する共通の特徴が見られ、杯B299～310・312～316は、底部と杯部の屈曲部外面に高台を貼り付けている。器高から5 cm以下の個体とそれ以上の個体に分類できる。なお、290には「秦」、315には複数の文字が見られる。312は判読できないが、墨書が見られる。皿317～319は、平らな底部と器高が3 cm前後を測る共通性が見られる。320・321は、杯以外の壺などの大型製品の蓋である。324は、耳付の壺Bであるが、耳数は不明である。326は、なだらかな肩部を有し、口縁端部が直立する壺で、第25図628にも類例が見られる。焼成・胎土から東海系である。甕327～330のうち、329・330は、通有に見られる平行タタキ目に、タタキ目と直交する長さ2 cmの線刻を施した特殊なタタキ目をもち、第22図464にも類似資料が見られる。そのタタキから、生産地が限定できる可能性がある。331は、「盛所」と判読できる墨書をもつ。336は、風字硯の海部に近い破片である。

④緑釉陶器 椀は、高台の形態から産地ごとに区別できるが、352・360・363・364・368・399～402・406・410が東海系である。この遺構での京都系と東海系の比率は、東海系がわずかに14%を占めるにすぎない。360は、底部外面に「車」あるいは「東」の墨書が見られる。363は、釉薬の銀化が見られ、口縁部と体部にしのが見られる。408は、京都系の椀で、内面に陰刻花文が見られる。407・409・411には、「十」字形の線刻が見られる。水注412・413は、注口のみが残存であるが、面取りが見られる。414は、残存率30%の香炉である。脚部に一对の透し孔を穿っており、釉調から東海系である。

⑤無釉陶器 415は、底部に糸切り痕をもつ椀である。416は、削り出しによって高台を成形しており、底部中央を直径2.8cmの蛇目状に削り込み、「十」字形のヘラ記号をもつ椀である。417は、平滑に器表面を磨く椀である。



第20図 出土遺物実測図(7) S X 35317(21層)



第21図 出土遺物実測図(8) S X35317(21層)

⑥灰釉陶器 碗420～428は、いずれも貼り付け高台であり、高台の断面形態から黒笹14号窯(K14)から同90号窯(K90)の特徴が認められる。429は、段皿である。430は、背面に釉がかかる硯である。431は、提瓶の把手である。

⑦石・土製品 432は、3.4cm×3.0cm・厚み0.6cmの蛇紋岩製の巡方である。436は、砂岩の製品であり、凹面に墨痕が認められる。433は全長4.6cm・最大径2.1cm、434は全長4.4cm・最大径2.1cm、435は全長2.8cm・最大径1.2cmを測る土錘である。

⑧その他 437は、中国製青磁であるが、龍泉窯系であることから、S X35317検出面に掘り込まれた中世素掘り溝に伴う可能性がある。438は、一方に、暗茶褐色の漆膜が認められ、他方には、その漆で固められた布が認められる。形状も一定しておらず、用途については不明である。439は、「山□□□」の墨書がある木簡である。

d. 落ち込みS X35317礫層(17層)出土遺物(第22図440～470)

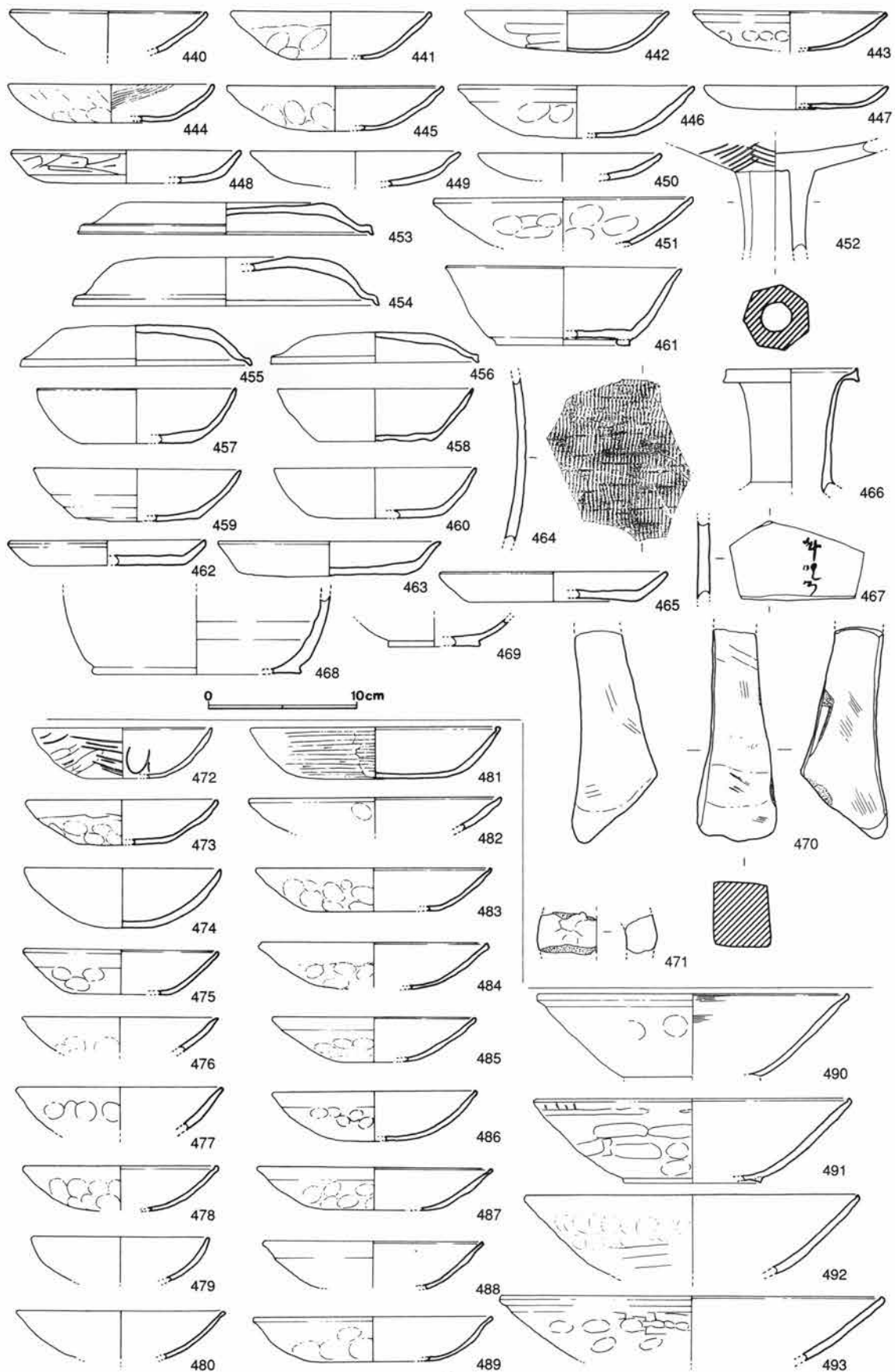
①土師器 杯・碗440～446・451では、442以外に外面ヘラ削りは認められない。448は、外面をヘラ削りで調整する皿である。

②須恵器 杯蓋は、口径20cm前後を測る453・454の群と、口径15cm前後を測る455・456の群に分類できる。杯A・Bの基本的な形態は、先述したS X35317出土土器と共通している。甕464は、第19図329・330と同じタタキ目の破片である。467は、須恵器片であるが、「料理所?」と判読できる墨書の可能性がある。

③その他 470は砥石、471は鞆の羽口である。468は、底部の一部のみの残存であるが、緑釉陶器の壺である。

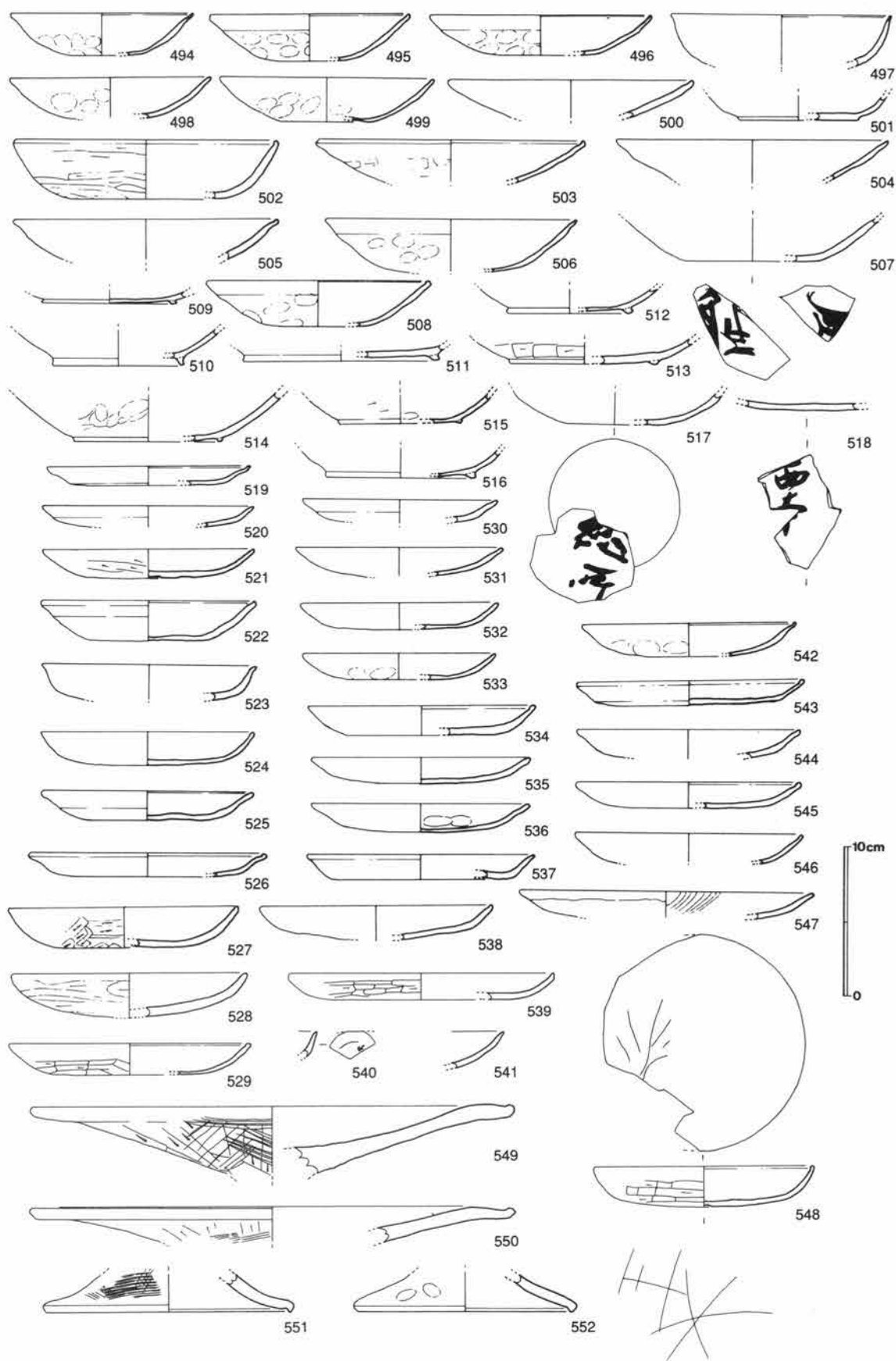
e 落ち込みS X35317(21層)出土遺物(第22図472～第26図)

①土師器 杯・碗472～516・548のうち、472は、外面に粗いヘラ削りが観察できる。また、



第22図 出土遺物実測図(9)

440~471. S X 35317 礫層(17層) 472~493. 同粘土層(19層)



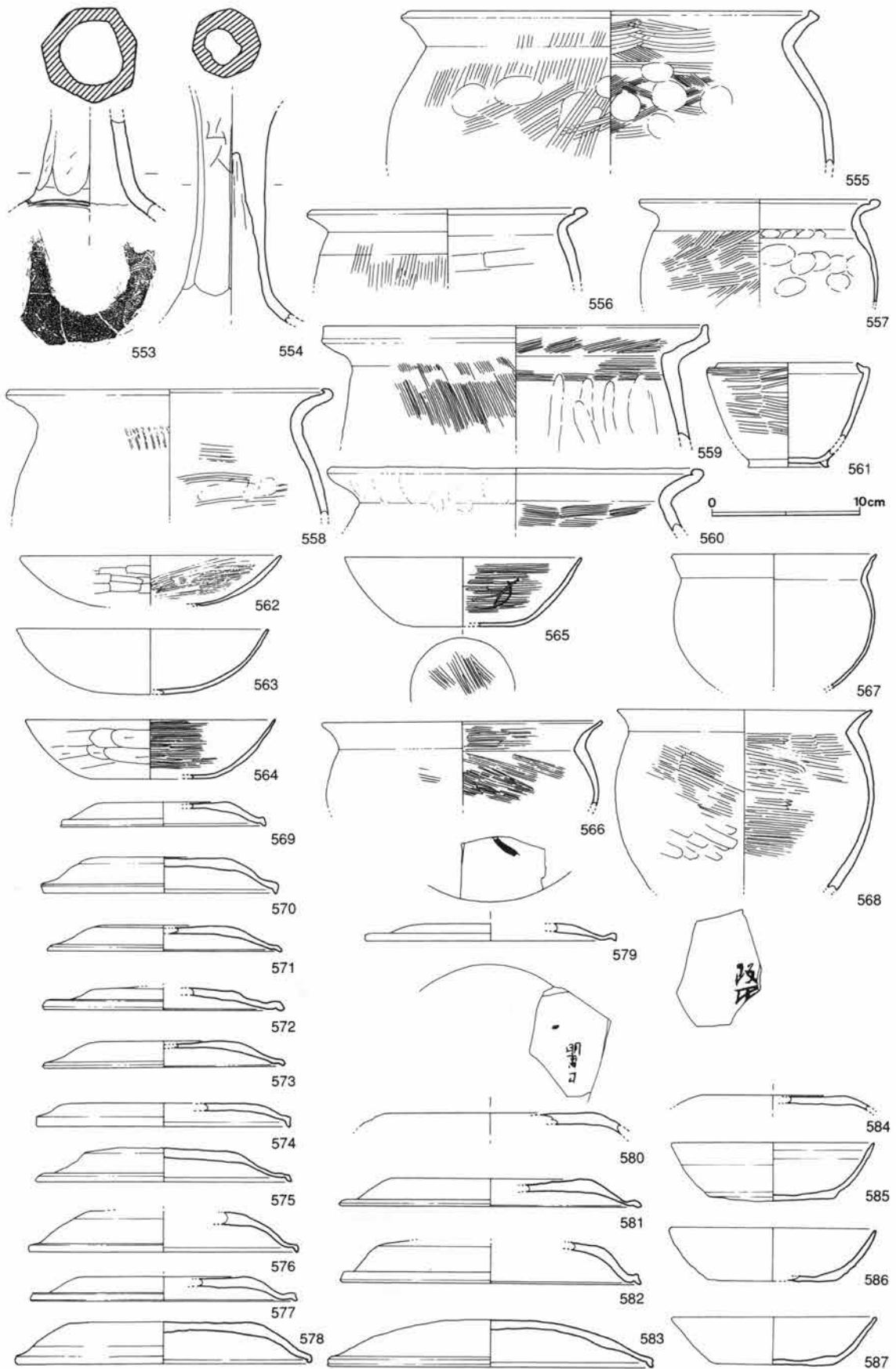
第23図 出土遺物実測図(10) S X 35317粘土層(19層)

481の外表面には、ていねいなヘラ削りが見られる。特に、口縁部内面が肥厚する481の形態的特徴から、472・481・502は、奈良時代～長岡京期に比定できる。杯Bは、杯Aと比較すれば、口径が大きい特徴があげられる。なお、507の底部には、「盛」、517の底部には、「□継所」、518には「西□」の墨書が見られる。皿519～521・523～547のうち、外面をヘラ削りする個体には、521・527～529・539がある。形態的には、口縁端部内面を肥厚させる個体と、丸く仕上げる個体に分けることができる。540には墨書が認められる。高杯549～554のうち、549は、外面にていねいなヘラ磨きが認められ、焼成も堅緻である。553は、通有に見られる脚部であるが、脚柱部と脚端部の屈曲部下方内面に細かい布目圧痕が観察できる。布目圧痕は、規則的ではなく、少なくとも4か所において、各々の布目の方向が異っている。なお、脚柱部内には布目圧痕は観察できない。これらのことから、脚部を製作する際、平瓦の桶巻き作りのように模骨状の台に据えたか、あるいは、成形時の指頭に布を巻き、圧痕が付いたことが想定できる。554は、高杯の脚柱部であるが、面取りした外面に「山人」の線刻文字が判読できる。甕555～560は、基本的には口縁部内面が肥厚し、外面をタテハケにより調整する。特に、559は、頸部で屈曲し、外反する口縁部と直立する口縁端部からなる。体部外面は、タテハケ、口縁部頭部にかけての内面は、ヨコハケで調整している。胎土は粗く、焼成は堅緻で、色調は明るいチョコレートブラウンを呈している。561は、いわゆる壺Eであるが、出土点数はわずかである。

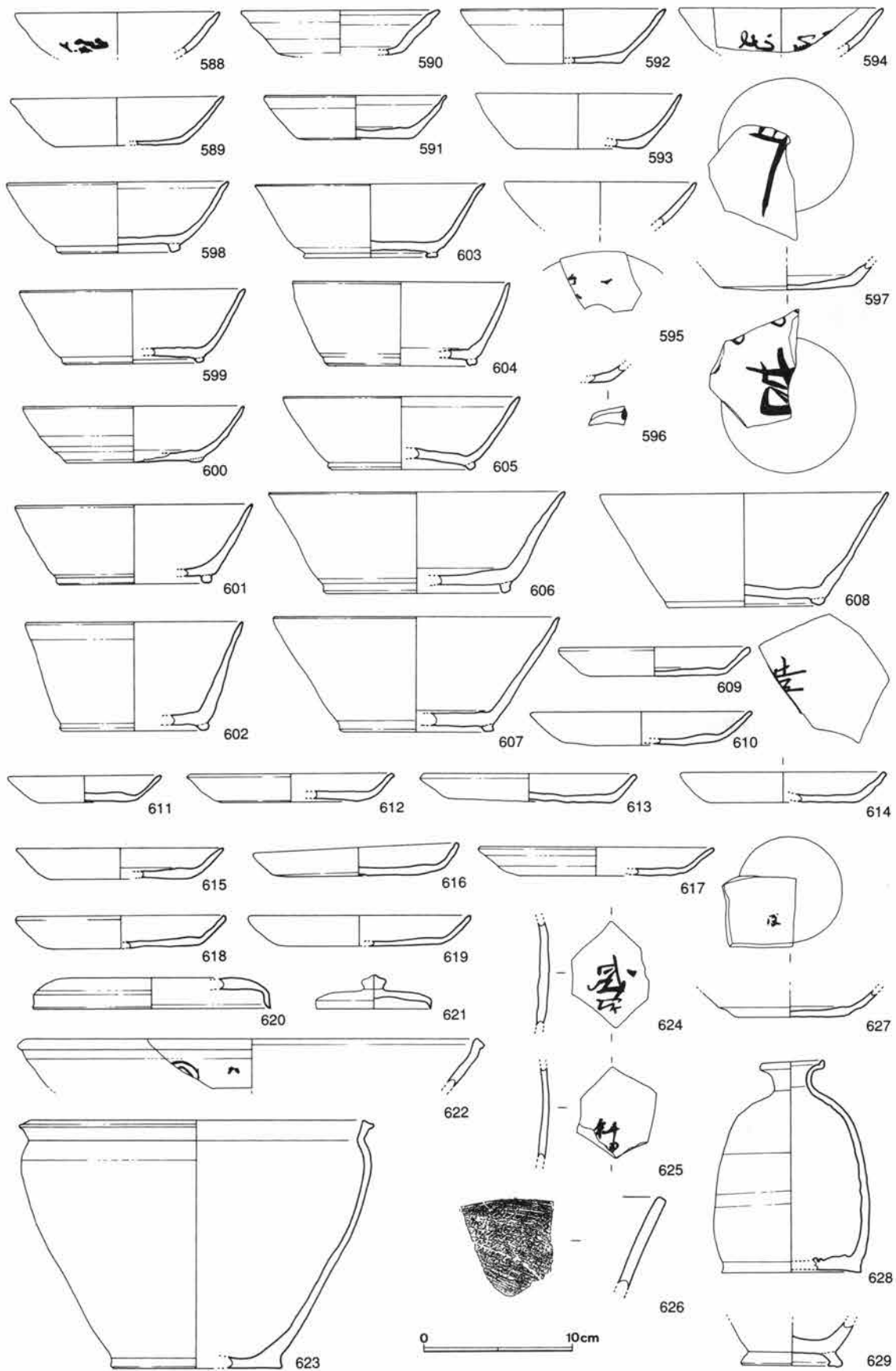
②**黒色土器** 碗564・565は、いわゆる内黒であり、内面をていねいなヘラミガキで調整する。565には、輪花文が観察できる。甕は、頸部で著しく屈曲し、口縁端部を丸くおさめる共通性がある。焼成は堅緻である。

③**須恵器** 杯蓋569～584は、口径13.8～21.6cmの法量であるが、16cm前後の群と20cm前後の群に分けることができる。580には「明□□」、584には「政所」の墨書が判読できる。杯Aは、平らな底部から内湾気味に斜め外方にのびる585～587・593・594のタイプと平らな底部から直線的に外方へのびる588～592・589のタイプに分類できる。前者は、全体的に焼成が不良なものが多い。特に594は、口縁端部が黒色化している。588には「…召…」、594には、「…□川支」の墨書が見られ、597には、判読できないが墨書が見られる。杯Bは、口径が15cm前後の598～605と、20cm前後の606～608に分類できる。また、平らな底部から外反気味に斜め外方へのびる603・606～608のタイプも見られる。皿609～619は、基本的な口径の平均値が4cm前後であり、611は10.3cmと小さい。620・621は、壺の蓋である。626は、内面に斜格子状の線刻が見られ、墨が全面に観察できる。628は、先述した326と同タイプの壺で、東海系である。なお、614には「造」、624には、「盛所」、625には「料理?」、627には「波」の墨書が判読できる。630は、双耳壺であるが、内面に墨痕が見られる。

④**施釉陶磁器類** 緑釉陶器の碗は、633・634が東海系であるが、他はすべて京都系である。基本的に東海系の占める割合は、10%未満である。657は緑釉陶器の壺、658は灰釉陶器の碗、659は灰釉陶器段の皿である。特に、659は、器壁が厚く、高台もいびつで厚みがあることから、猿投に代表される東海地域産ではなく、その周辺地域産である可能性が高い。



第24図 出土遺物実測図(11) S X 35317粘土層(19層)



第25図 出土遺物実測図(12) S X35317粘土層(19層)

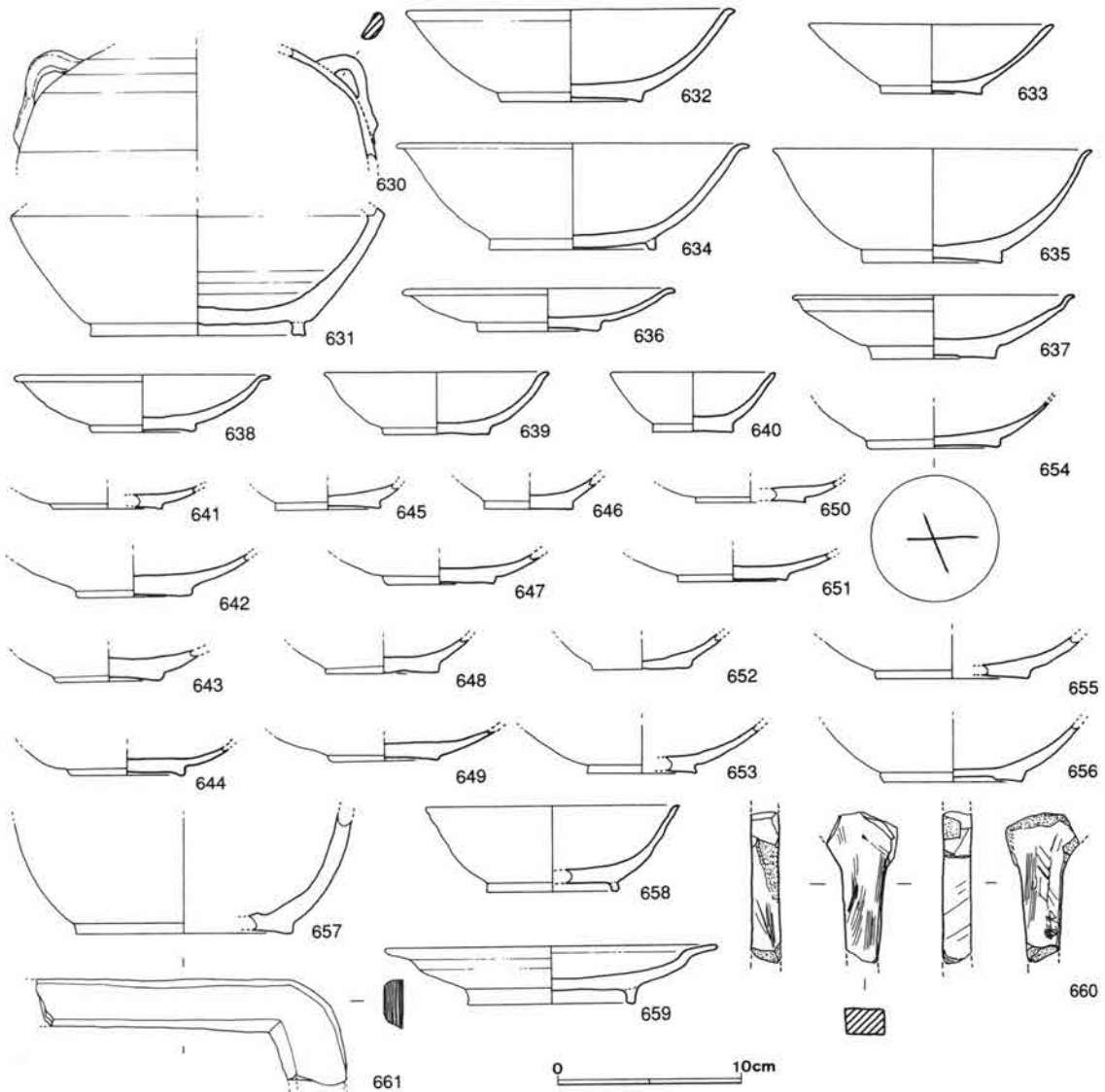
⑤その他 660は四面に擦痕が残存する砥石、661は屈曲部をもつ額縁状木製品である。

f. 5層出土遺物(第27図662~677) 5層は、下層に堆積する6層を整地する目的で搬入された、いわゆる整地層であるため、遺物の残存状況は不良であり、図化できた土器はわずかである。基本的には、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器を含んでいる。674の灰釉陶器の皿は東海系であり、平安京編年に対応させれば、Ⅱ期古段階を中心とする時期に比定できよう。

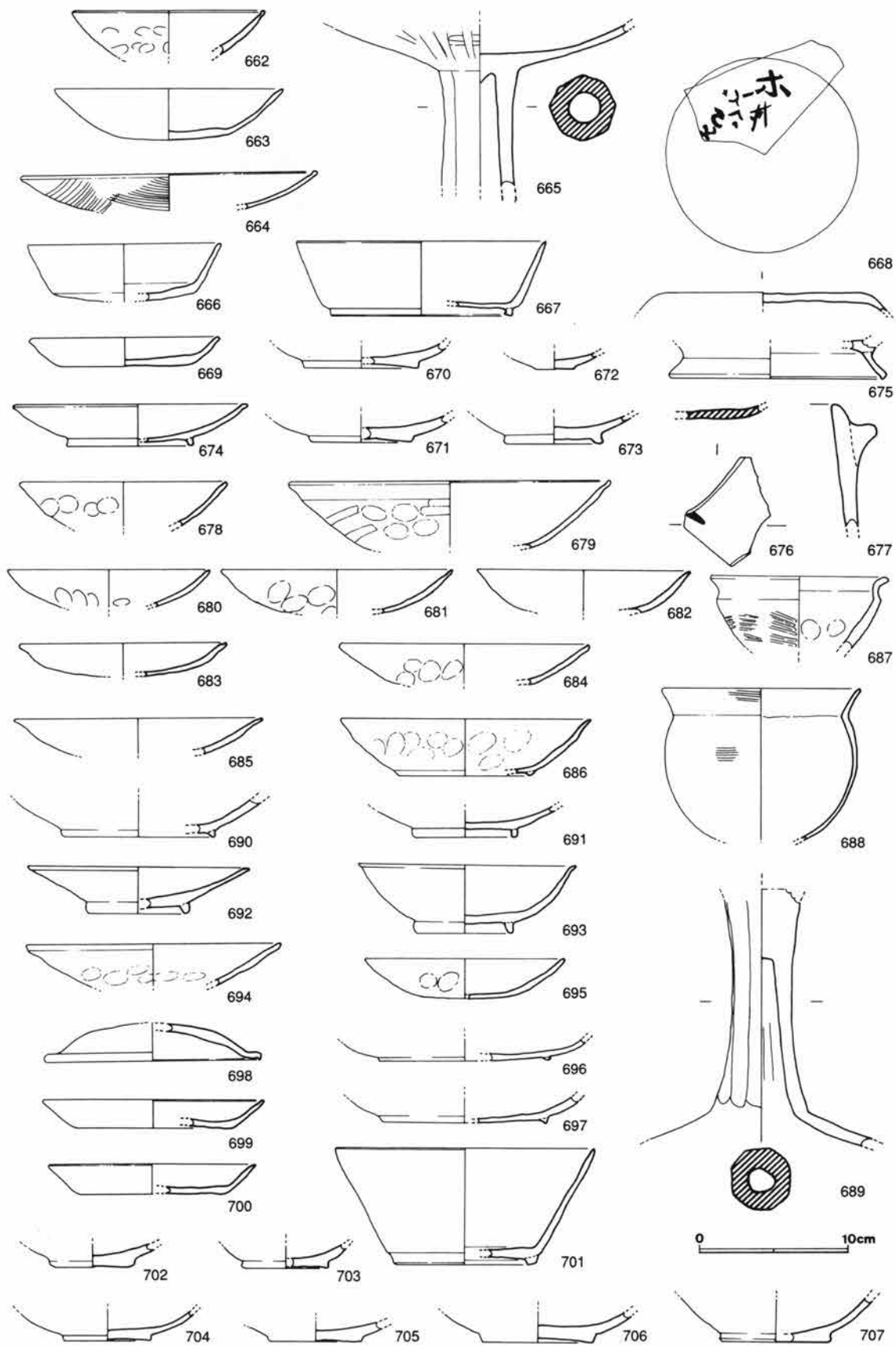
g. 土坑S K 35312(第27図678~689) 基本的には土師器が多いが、灰釉陶器の皿692、同碗693の諸特徴から勘案すれば、平安京Ⅲ期新段階を前後する時期に比定できる。

h. 土坑S K 35315(第27図694~707、第28図708) 土師器・須恵器・緑釉陶器が少量出土している。須恵器の杯B 701は、S K 35317出土例に近似している。特に、708の凝灰岩には、直径12cmの円形削り出し部が見られ、建造物の礎石として使用されていたことが推定される。

i. 4層出土遺物(第28図712~715) 基本的には、中世以後の堆積であり、平安時代の遺物は、混入である。712は白磁碗、713は、内面に劃花文を施す中国龍泉窯系の青磁碗である。714・715

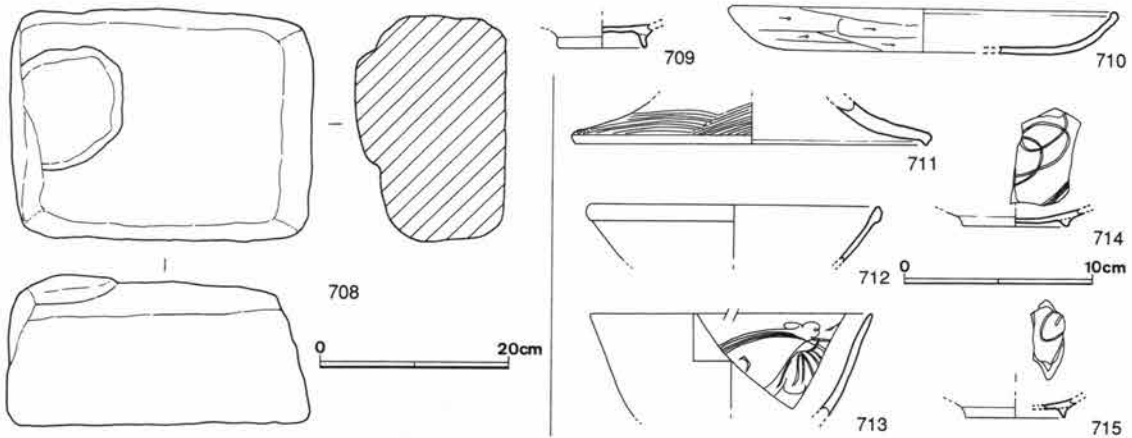


第26図 出土遺物実測図(13) S X 35317粘土層(19層)



第27図 出土遺物実測図(14)

662~677. S X 35306直上堆積層(5層) 678~689. S K 35312 694~707. S K 35315



第28図 出土遺物実測図(15)

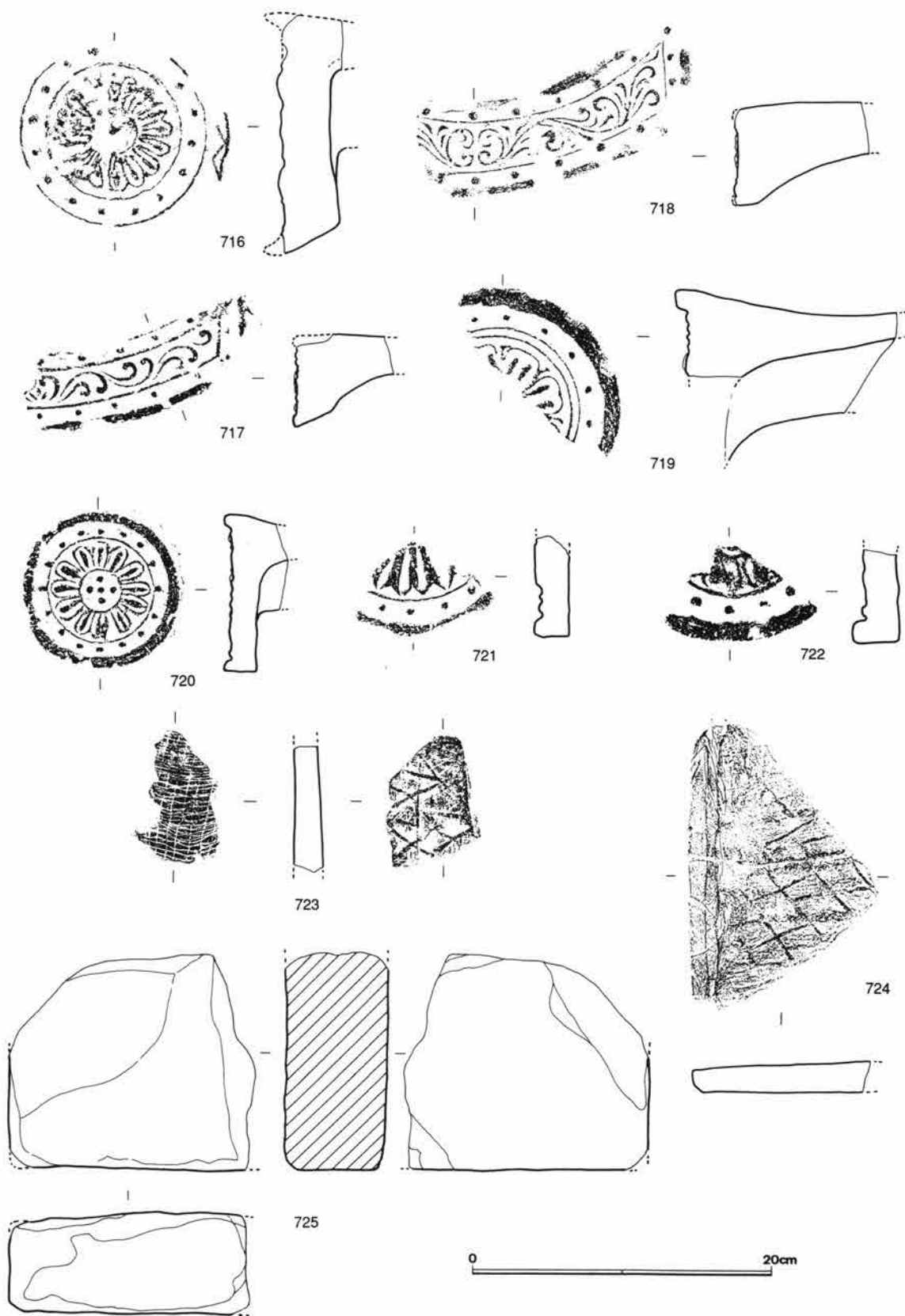
708. S K35315 709~711. 交差点周辺 712~715. S X35306及び5層直上の4層

は、高台の断面形態が逆三角形を呈し、見込みに輪花文の暗文が観察できる瓦器椀である。

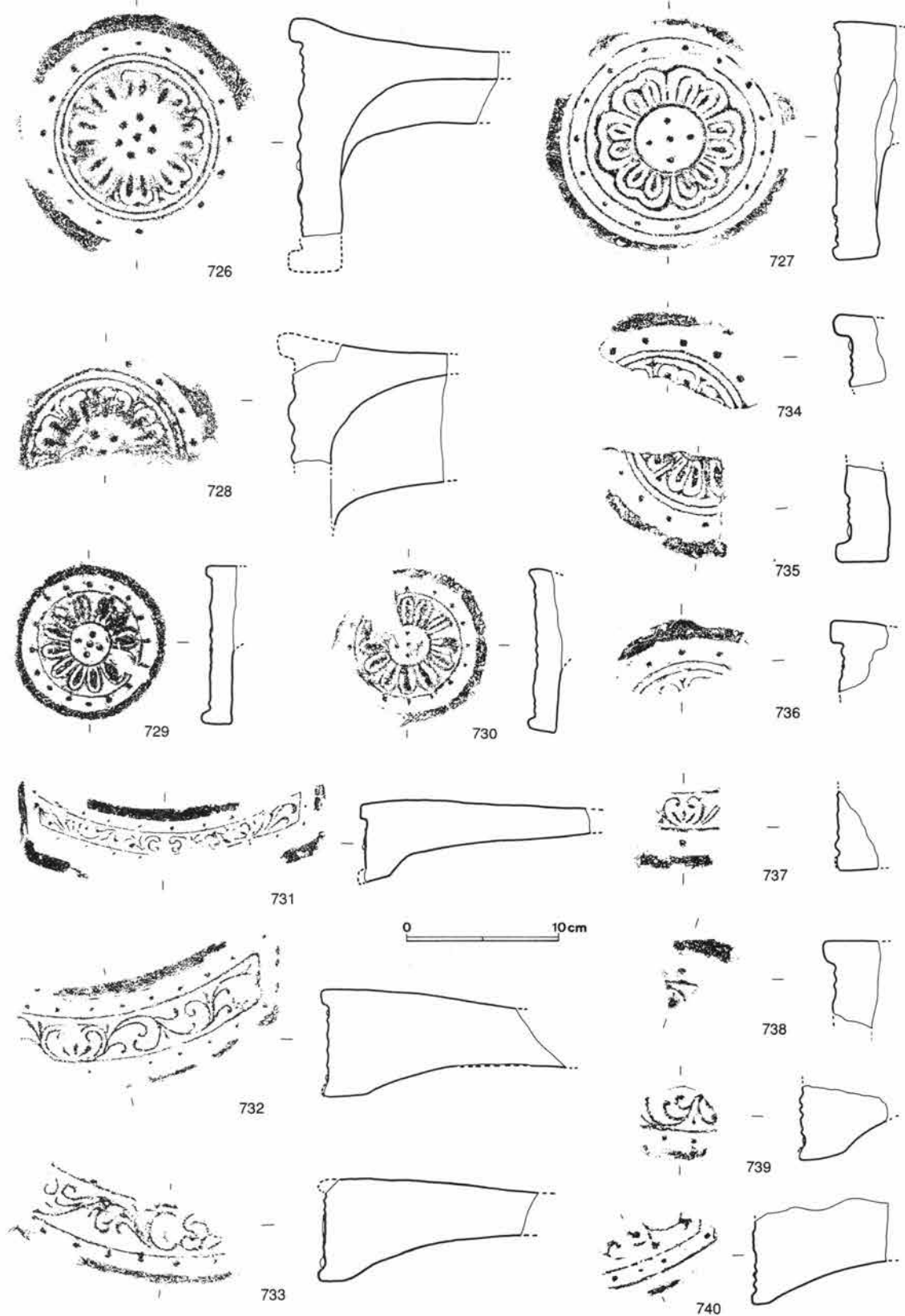
j. 瓦塼類(第29~31図) 716は、復原直径16cm前後を測る。中房は磨滅及び欠損が著しく、正確に蓮子数は把握できないが1+2以上である。弁は、部分的に単弁、複弁が見られ、単弁と複弁が接続した部分も見られる。全体的に稚拙である。外区内縁の珠文は、16であり、外区外縁には鋸歯文が入る。平城宮式6296Aに近似しているが、当該資料の弁は非常に肉厚であり、明らかな違いがある。寺院系瓦である可能性も視野に入れなければならない。

717は、中心飾りは三葉形で、唐草は二葉形で左右に3転半している。上外区及び下外区の珠文は9で、脇区の珠文は3である。当該資料は、長岡宮式7757Abと認定できる。同一型式として743がある。718は、中心飾りが対向C字形を呈し、上部先端は複線化し巻き込んでいる。唐草は、三転し、端部の巻き込みが著しい。上外区及び下外区の珠文は9で、脇区は珠文4である。全体的な色調は、淡黒褐色を呈しており、大阪吉志部瓦窯産である。

719は、内区と外区を区画する圏線が2本で、ここで提示した資料では、726・728・734~736と同型である。後出する同型の軒丸瓦も含め、残存状況の良好な726で特徴を記述する。瓦当の直径は16cmを測り、内側の圏線の直径は9.8cm、外側の圏線の直径は10.7cmを測る。中房と蓮弁を区画する圏線はなく、蓮子は1+6で、蓮弁は複弁八葉である。外区には、16の珠文をもち、胎土は粗く、色調は淡黒褐色を呈している。諸特徴から大阪吉志部瓦窯産である。720は、瓦当の直径が10.2cmを測る小型軒瓦である。中房の直径は2.7cmで、蓮子は1+4である。弁は単弁で、12葉を数える。内区と外区を区画する圏線の直径は6.8cmを測る。外区の珠文は、16である。外縁厚は1.9cm、内区厚は1.4cmである。729・730はこの資料と同型である。色調は719と酷似しており、小型軒瓦であることから大阪吉志部瓦窯産である。721は、中房部を欠いているため蓮子数は不明である。葉研状の弁を有しており、珠文の配置は、蓮弁に対応しない。破片ではあるが、長岡宮式7171に認定できる。722は、かろうじて内区及び外区の一部が残存するにすぎず、型式認定ができない。723及び724は、外面に斜格子タタキ目、内面には布目を残す平瓦である。725は、三方の角を欠損しており一辺の長さは不明であるが、厚み6.6cmを測る塼である。表面の



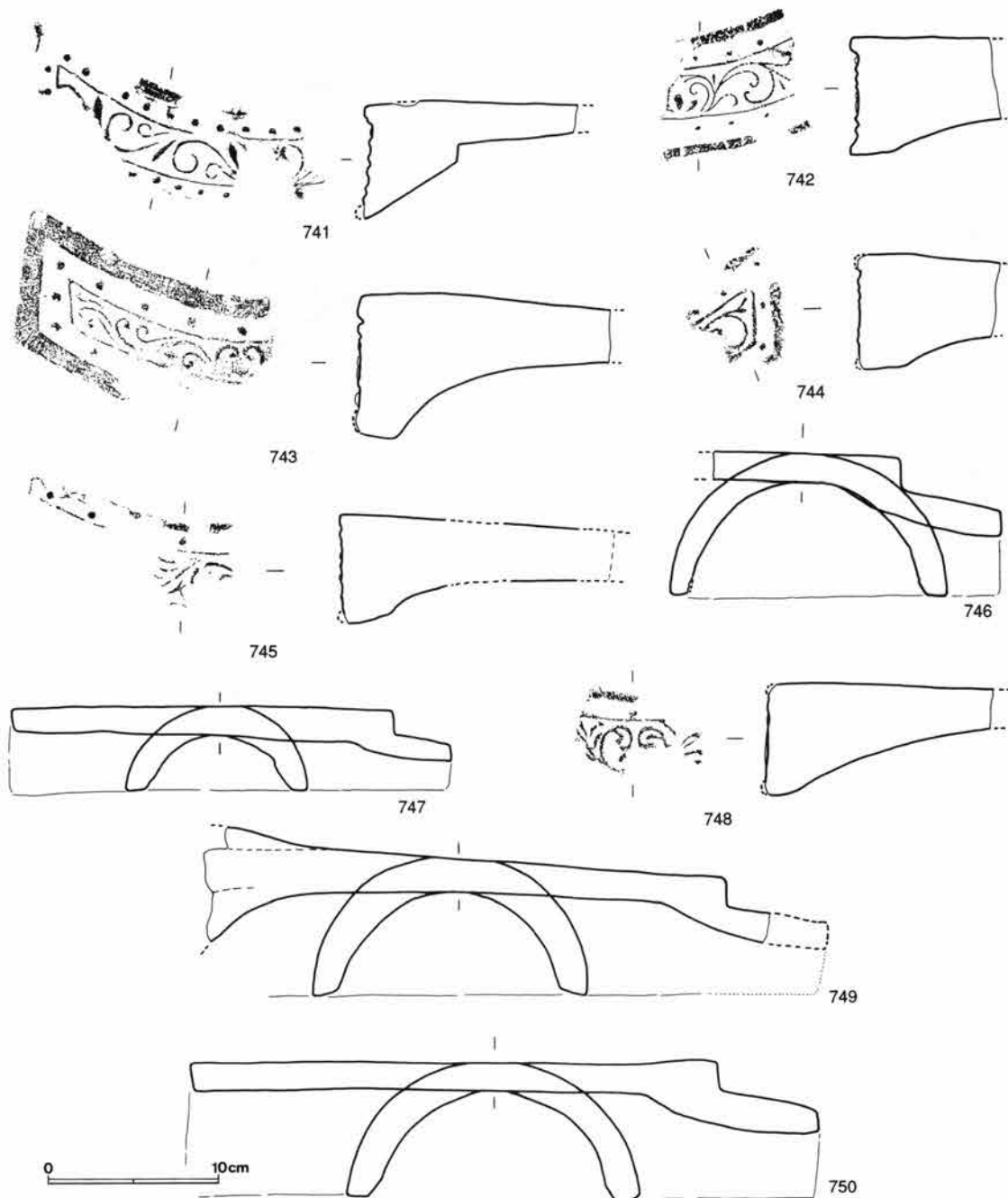
第29図 出土瓦塼類拓影(1)
 716・717. 第11図に記載 721. S D35318 他. S X35306



第30図 出土瓦磚類拓影(2)

726・727・729・732・733・735~740. S X35317 728・730・731・734. 同粘土層(19層)

色調は淡黒褐色で、胎土は粗い。727は、複弁蓮花文軒丸瓦であり、中房は圏線で区画し、蓮子は1+4である。弁形は、2葉一対の子葉の外側に、相似形をなす界線をめぐらせている。外区内縁には、15の珠文を配する。長岡京市に所在する鞆岡廃寺の例では、報告によれば5葉複弁の類例が見られる。鞆岡廃寺の資料は、弁数を5葉に復原しているが、推定中房中心点から子葉の外側にめぐる界線の交点を主軸とし、1子葉分の占める角度を測角すれば、ほぼ60°となる。このことから、鞆岡廃寺の資料は6葉に復原できよう。この復原が正しいとすれば、鞆岡廃寺資料と727は、同型と認定することも可能である。



第31図 出土瓦埴類拓影(3)

741・742・745～747・750. S X 35317粘土層(19層) 743・744・749. S X 35317 748. 同礫層(17層)

731は、全長20cmを測る小型瓦である。中心飾りが対向C字形を呈し、上部先端は、複線化し巻き込んでいる。唐草は3転し、端部の巻き込みは著しい。上外区及び下外区の珠文は9で、脇区の珠文は4である。焼成は堅緻で、全体的な色調は、暗青灰色を呈している。文様構成から先述した718に酷似しており、大阪吉志部瓦窯で焼成されたと考えられる。また、729などの小型軒瓦とセット関係を想定できる。

732は、中心飾りは三葉形であり、唐草は三葉形で左右に3転半展開する。上外区及び下外区の珠文は12である。平安京大極殿跡などで出土例が確認されている大阪吉志部瓦窯系の軒平瓦である。なお、742・744・745についても同型と認定できる。

739は、残存する文様から西賀茂角社瓦窯産と考えられる。741は、中心飾りは不明であるが、三葉形の均整唐草を3転している。上外区及び下外区の珠文は17を数え、脇区の珠文は3と推定できる。唐草文も深く、段顎であることから平城宮式6689Bに認定できる。747は、瓦当はないが、小型の丸瓦である。749は、瓦当が剥離しているが、焼成、色調から吉志部瓦窯産である。また、750は、瓦当はないが、同じく吉志部瓦窯産である。

4. 花粉分析結果の概略と史的評価(付表2、図版第19・20)

調査地周辺は、『類聚三代格』延暦14年1月29日付け太政官符に、長岡京左京三条一坊八・九・十五・十六町、二坊三・四・六町を勅旨所の藍畑、三条一坊十町を近衛府の蓮池にするようにとの記載から、その関連が考慮されてきたところでもある。この調査では、トレンチ屈曲部で暗茶褐色粘土を埋土とする池沼S X 35306を検出し、また、東方では、北東へ傾斜する落ち込みS X 35317を検出した。特に、S X 35306は、先の藍・蓮の栽培には適した環境と考えられたために、2種類の花粉検出とその分析結果から栽培を確認する目的で(株)古環境研究所へ業務委託を行った。なお、試料の物理化学処理過程については、紙面の関係で割愛し、また、分析によって検出できた花粉は、ダイヤグラムの記載と顕微鏡写真の掲載にゆずり、概観しておきたい。

池沼S X 35306は、草本花粉より樹木花粉が占める割合が高い。特に、マツ属複雑管束亜属の樹木花粉が多く、周辺に二次林化したアカマツあるいはクロマツに代表されるニヨウマツ林の成立が考えられる。また、カシ類とスギも混雑していたと考えられる。一方、草本花粉には、イネ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、イボクサ、タデ属サナエタデ節、コウホネ属、ヒシ属、アサザ属の水湿地ないし池沼の草本類が見られる。また、栽培植物にはソバ属もあり、ソバ属に代表される畑作の可能性が指摘されている。なお、蓮は、花粉自体の検出がなく、藍は、タデ属サナエタデ節に含まれるが、種類も多く、藍のみを同定することは形態的に困難である。

分析の結果、副次的に回虫卵と鞭虫卵(S K 35320)が検出され、「人がやや密度高く生活する生活域周辺の汚染」が指摘されている。

以上のように、S X 35306が池沼を呈していたことが判明したが、藍の栽培については可能性の指摘があったが、蓮については、未栽培が傍証できた意義は大きい。なお、本分析調査報告書は、当調査研究センターで保管しており、詳細は照会していただきたい。

付表1 S X 35317出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)	全体比率 (%)	土師器以外比率 (%)
土師器	杯・碗・皿	22,567	88.0	76.5	
	高杯・盤・鉢	831	3.2		
	甕・釜・鍋	2,244	8.7		
	その他	8	0.0		
	不明	19	0.1		
	小計	25,669	100.0		
黒色土器	杯・碗・皿	470	61.1	1.9	9.2
	甕	297	38.6		
	その他	2	0.3		
	不明	0	0.0		
	小計	769	100.0		
須恵器	杯・碗・皿	4,274	62.7	20.4	81.4
	壺・瓶	308	4.5		
	鉢	1,164	17.1		
	甕・大型壺	1,058	15.5		
	その他	2	0.0		
	不明	10	0.2		
	小計	6,816	100.0		
緑釉陶器	杯・碗・皿	605	98.2	0.8	7.4
	壺・瓶	10	1.6		
	その他	1	0.2		
	不明	0	0.0		
	小計	616	100.0		
無釉陶器	杯・碗・皿	25	100.0	0.1	0.3
	高杯	0	0.0		
	盤	0	0.0		
	その他	0	0.0		
	不明	0	0.0		
	小計	25	100.0		
灰釉陶器	杯・碗・皿	91	61.5	0.3	1.7
	壺・瓶	55	37.2		
	その他	2	1.3		
	不明	0	0.0		
	小計	148	100.0		
総数		34,043			

5. 出土土器破片計数結果について

平安時代に使用された器には、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・木製容器がその中核をなし、外国から輸入された陶磁器類やいわゆる無釉陶器などが、わずかではあるが加わっている。近年の発掘調査では、それぞれ器種ごとの点数を数え、百分率を算出する方法が定着しつつある。また、各器種においても、器形ごとの点数を数え、器形ごとに百分率を算出する作業も、同時進行している。しかし、数万点の破片を数えるには、基本的な個体識別を行う必要があり、また、作業空間の確保、作業時間の配分など、実作業に伴うさまざまな問題点が指摘されている。しかし、口縁端部や底部以外の資料化できない破片については、土器の破片計測が出土資料すべてを数量として資料化できるため、極めて有効的な方法であることも認識されている。詳細な計測値は、付表1に譲るが、その傾向について概観しておきたい。

今回、計測の対象としたのは、落ち込み S X 35317 出土土器群である。この遺構は、基本的に礫層(17層)と粘土層(19層)及び21層に分けられる。その中で、21層からの出土資料が全体の70%を占め、19層が23%を占めている。また、図

化は、各層ごとに行ったが、各層出土土器の型式差はほとんどなく、作表については、各層出土資料の総計で算出した。土器は、34,043点で、他に製塩土器の64点と鞆の羽口5点は、総計値に入れていない。また、土師器の高杯のうち、杯部は、他の器と混同してしまう可能性があるため、面取りをした脚部片を数えたが、その点数は127点になる。瓦塼類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦を含め1,137点出土している。以上が付表1のデータには出ない各遺物の計測値である。

付表1のデータのうち、土師器・黒色土器・須恵器の占める割合は、97.7%を占め、無釉陶器を占めた施釉陶器は、2.3%を占めるにすぎない。近年、土師器の計測値が全体の計測値に与え

る影響を考慮して、土師器の計算値を除外して、比率を算出し、モデルパターン化する研究が飛躍的に進展している。^(注10)この遺跡のデータをその方法により算出すれば、黒色土器、須恵器の合計は、90.6%を占め、緑釉陶器・灰釉陶器の合計が9.1%を占める。すでに公表されたモデルパターンに当てはめて見ると、平安京Ⅰ期新段階のパターンに近似しているが、出土土器の全体的な型式から見ると、Ⅱ期古段階が中心時期となる。

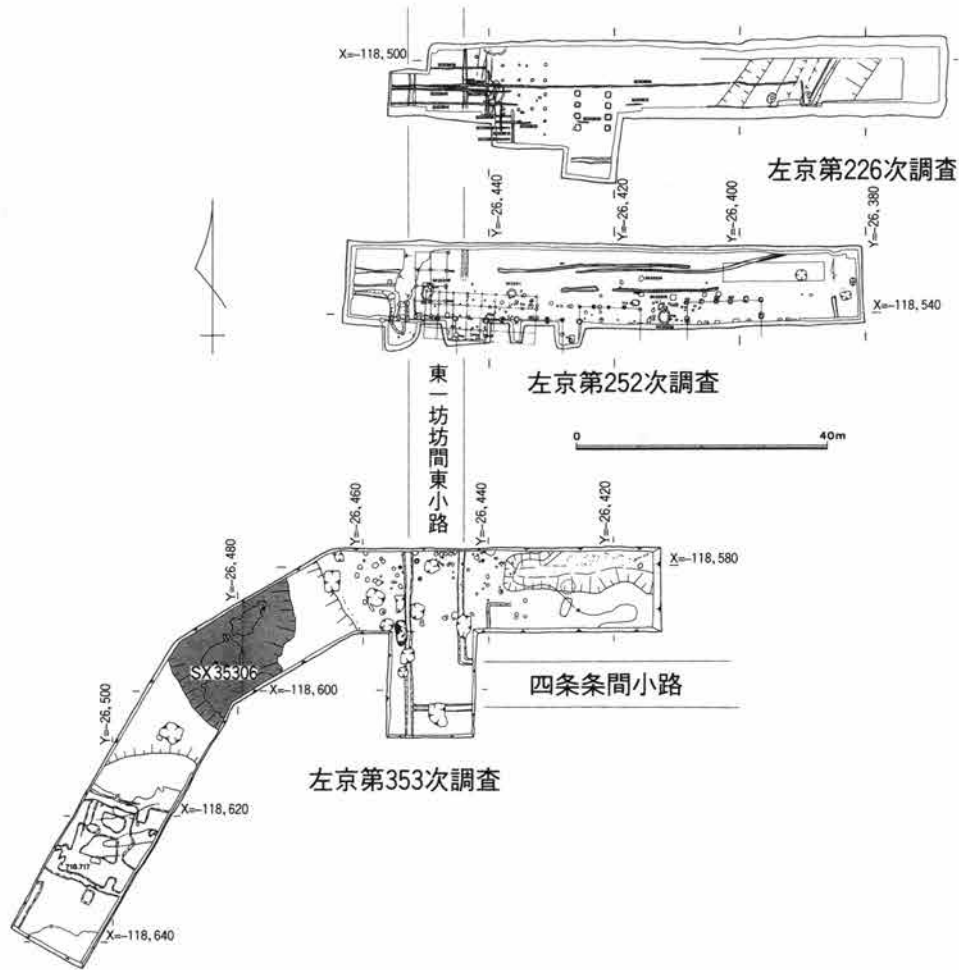
今回、計測値を提示した遺構は、落ち込みであり、厳密な一括性に多少なりとも問題が生じてくる。しかし、粘土や礫から遺物が出土する状況については、差異はなく、9世紀第2四半世紀から同第4四半世紀の中でも中葉にピークをもつ時期に埋没したことが想定できる。提示したデータのみでこの遺跡の性格についてまで言及できないが、長岡京廢都後のまとまった資料群をデータ化できたことは、この遺跡の性格を考える上で重要であるばかりでなく、今後の研究を進める上で新データの提示ができたことの意義は大きい。また、平安京城から離れた地点でのデータとしても貴重である。

6. 小 結

今回の調査地は、東一坊坊間東小路と四条条間小路の交差点にあたる。東一坊坊間東小路は、L226・L252調査でも確認されており、この調査地でも両側溝を検出することができた。これによって、調査地以北については、小路の施工が確認できたことになる。しかし、以南には、旧小畑川の氾濫源が想定されており、今後の調査に期待したい。一方、四条条間小路は、東一坊坊間東小路の西側溝S D35313以西では検出していない。その最大の要因は、トレンチ屈曲部で検出した池沼S X35306の存在であり、池沼内で脚橋などを確認していないことを含めると、四条条間小路は、少なくともトレンチ内において施工されなかった可能性を示唆している。

基本的に両小路の両側溝の検出は、長岡京期の条坊施工の一側面を明らかにできたと考えられるが、東一坊坊間東小路の西側溝S D35313は、他の側溝に比べ、溝幅も広く、検出した深さも深い。また、明らかに四条条間小路の南側溝S D35318を切り込んで穿たれていることから、条坊の側溝が埋没した後にさらに、掘り込まれていることが推定できる。一方、S D35313が埋没した後に切り込んで掘られた土坑S K35312から出土した遺物から、9世紀末～10世紀初頭にはすでに埋没していたと考えられる。条坊の側溝が埋没した時期を特定できないが、いずれにしても平安時代前期には改修されたことを示唆する状況である。調査地以北のL226及びL252調査では、平安時代前期の掘立柱建物跡が検出されており、S D35313は、それらの建物跡群に伴う生活排水溝として、長岡京期の側溝を再利用したと想定できる。なお、長岡京期の西側溝S D35313が、四条条間小路の南側溝S D35318以南に掘られていたかは不明であるが、東一坊坊間東小路の東側溝S D35314が四条条間小路の北側溝S D35319と接続して、東方へ屈折している点を考えれば、この溝も南側溝S D35318と接続し、東方へ屈曲した可能性が残る。

一方、平安時代として、池沼S X35306を埋め戻して整地した整地層を検出した。おそらく、環境整備を含めて居住空間の拡張を意図していると想定できるが、5層上面では、平安時代の遺



第32図 当該調査地及び周辺調査地における検出遺構位置図

構を検出しておらず、他の目的での整地も考慮する必要がある。

調査地東方では、多量の遺物を含む落ち込みSX35317が位置している。乙訓地域では、比較的多量の施釉陶器が確認できた。中でも、陰刻花文を施した緑釉陶器の椀408、同香炉414、同注口瓶412・413などは、平安京や官衙などで多く見られる遺物である。また、緑釉陶器の90%は京都系であり、灰釉陶器には、少なからず猿投系以外の製品が含まれていることが指摘できる。

その中で、土師器椀186は、形態的特徴から、平安京・長岡京域及びその周辺地域では、見られない杯である。今後、産地を同定する作業を残しているが、東海地域産出の可能性もある。土師器高杯229は、通有に見られる高杯であるが、脚端部3か所に煤が付着している。残存率は100%ではないが、杯部口縁端部から脚部まで、ほぼ残存していることから、反転させて燈明(乗燭)道具に転用したことが想定できる。また、同553の脚内面には、布目圧痕が観察できることから、高杯の製作技法を考える上で、良好な資料を採集したと言える。しかし、出土した高杯脚内部をすべて通観したが、類似資料はなく、一般的な技法ではなかった可能性と、第一次成形に伴う圧痕である可能性を考慮する必要がある。今後の資料増加に期したい。

出土した唯一の漆製品である438は、漆を塗布した面と粗い編目の布からなる。用途は不明で

あるが、調度品的色彩の強い遺物である。最後に416は、無釉陶器であるが、高台は、削り出しており、高台端部内面を部分的に削り落としている。また、底部内面には、緑釉陶器・椀や皿など見られるように蛇目様の正円削り込み部分があることから、東海地方で盛行する輪高台を模倣する一方で、京都系で盛行する蛇目高台の製作技法を残す好例として重要である。

転用硯も現時点で128点を数え、その内、29点を図示した。他方、判読できない文字もあるが、判読できた墨書には、「作?」「縄」「又」「秦」「車?」「料理所?」「□継所」「西□」「明□□」「政所」「…召…」 「□川支」「波」「造」「料理」などがある。これらの墨書から、即座に当該地の性格を断定することはできないが、政所や盛所などの機関をあらわす文字が見えることから、大がかりな施設が所在し、その管轄下に政所や盛所が存在し、機能していたと考えられる。一方、土器以外としては、木簡や加工痕のある凝灰岩や磚が出土している。

瓦では、平城宮式や長岡宮式の軒瓦とともに、平安時代前期に比定できる大阪吉志部産軒丸・平瓦や小型軒丸・平瓦が出土している。長岡京跡内で吉志部産小型軒丸・平瓦が出土する地点は、当該地だけであり、小型瓦の搬入経路やその搬入の要因を考える必要がある。また、その用途も追求する作業が必要である。調査地では、瓦片が1,137点出土しており、瓦葺きの建物の存在を示唆している。他方、S X 35317の粘土層(19層)からは、檜が多く出土していることから、瓦葺き建物と檜皮葺き建物が混在して、一連の建物群を形成していたことが想定できる。

以上が今回の調査で判明した事実であるが、当該地の性格について最後に記述しておきたい。

794年に長岡京は廃都される。廃都後の長岡京については、発掘調査で除々に明らかにされているが、『日本後紀』の記述のごく一部を8年間に限って概観すると、

延暦十六年「長岡京地一町賜從四位下菅野朝臣眞道。」

延暦十六年「長岡京地二町賜諱。」

延暦十六年「長岡京地五町賜從四位下多治比真人邑刀白。同京地一町賜大田親王。」

延暦十八年「長岡京地一町賜從五位下藤原朝臣奈良子。」

延暦十八年「長岡京地一町賜民部少輔從五位下菅野朝臣池成。」

延暦廿三年「山城國乙訓郡白田六町賜甘南備内親王。」

延暦廿四年「山城國乙訓郡白田一町賜大判事從五位下讚岐公千繼。」

などの記事を目にすることができる。これらから平安貴族に旧長岡京が部分的に繰り返し下賜されていたことが理解できる。可能性としては、平安貴族に当該地周辺が下賜され、それを管理するために家司などの家政機関が設置されていたことが考えられる。他方、わずかな可能性であるが、延暦16年に山城国府を長岡京の南へ移動するとの記事があるが、^(注12) 廃都後の長岡京を指し示す際、「京」と「宮」が厳密に使用されたかの問題もあり、京と宮を読み替えることにより、当該地を第3次山城国府の候補地に消極的ではあるが推定できることも視野に入れておきたい。

今回の発掘調査では、平安京編年でのⅠ新・Ⅱ古にピークを有し、Ⅱ中で減少傾向にあり、Ⅱ新では激減する遺物群を検出できた。廃都後の長岡京を考える上でL252調査成果を含め、今後、多くの問題を提起できると確信している。また、今後の研究に役立つことを念頭におき、750点

の遺物を図示し、破片数計測値を提示できた。以上を概要報告としておきたい。

(小池 寛)

注1 調査参加者

豊岡みどり・川越祐子・澤村武大・小滝初代・山中道代・森川敦子・伊達優子・荻野富紗子・井上聡・藤井矢壽子

注2 三好博喜「長岡京跡左京第226次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注3 中川和哉「長岡京跡左京第252次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注4 徳丸始朗・百瀬正恒・高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』 京都府教育委員会) 1976

注5 中山修一・平尾政幸・梅川光隆「長岡京跡発掘調査報告」(『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第2冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1977

注6 各座標データについては、1995年5月24日に開催された平成7年度第2回長岡京連絡協議会、岩松保「長岡京の条坊復元の再考」発表資料によった。また、同氏から多くの御教示を得た。

注7 注6に同じ

注8 『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1991

注9 中塚 良「8. 長岡京跡左京第322次(7ANFKN-2地区)～左京四条一坊三・四町(四条一坊一・二町)、四条条間南小路(四条第一小路)、吉備寺遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第39集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1995

注10 1996年1月27日に当調査研究センターで開催した第66回古代の土器研究会において、平尾政幸氏が「左獄および淳和院出土土器の破片数データによる検討」の発表をされた。当日、配布された資料を参考にした。

注11 黒板勝美編『日本後紀』(新訂増補国史大系 吉川弘文館) 1980

注12 黒板勝美編『日本紀略』第二(新訂増補国史大系 吉川弘文館) 1980

謝辞 墨書の判読には、多忙の中、向日市教育委員会清水みき氏にその多くを御教示賜った。また、土器については、(財)京都市埋蔵文化財研究所、小森俊寛・平尾政幸・上村憲章諸氏、京都国立博物館、尾野善裕氏、国立歴史民俗博物館、高橋照彦氏に御教示を受けるとともに、長岡京連絡協議会及び第66回古代の土器研究会参加者の方々から御教示を得た。瓦については、当調査研究センター松井忠春主任調査員に御教示を得た。芳名を記し、感謝の意にかえたい。

山中 章、國下多美樹、松崎俊郎、中塚 良、中島信親、梅本康広、松田留美、小田桐淳、木村康彦、原 秀樹、中島皆夫、花村 潔、中尾秀正、古閑正浩、寺嶋千春、木下保明、百瀬正恒、相原喜之、巽淳一郎、八瀬正雄、吹田直子、池田裕美、小柴治子、小川真理子、岡本一秀、吉川義彦、細川富美子、三好美穂、水橋公恵、福田明美、中島和彦、秋山浩三、畑中英二

付表2 花粉分析一覧表

学名	分類群	和名	長岡京跡左京四条一坊	
			S X 35306	S K 35320
Arboreal pollen		樹木花粉		
Abies		モミ属	2	1
Tsuga		ツガ属	7	
Pinus subgen. Diploxylon		マツ属 複維管束亜属	181	19
Cryptomeria japonica		スギ	46	21
Sciadopitys verticillata		コウヤマキ	5	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	6	
Myrica		ヤマモモ属	1	
Alnus		ハンノキ属	1	
Betula		カバノキ属	9	5
Carpinus-Ostrya japonica		クマシデ属-アサダ	2	2
Castanea crenata-Castanopsis		クリ-シイ属	17	12
Fagus		ブナ属	5	
Quercus subgen. Lepidobalanus		コナラ属 コナラ亜属	6	13
Quercus subgen. Cyclobalanopsis		コナラ属 アカガシ亜属	55	36
Ulmus-Zelkova serrata		ニレ属-ケヤキ	2	1
Celtis-Aphananthe aspera		エノキ属-ムクノキ	8	1
Mallotus japonicus		アカメガシワ	1	1
Zanthoxylum		サンショウ属	3	
Acer		カエデ属		1
Cornus		ミズキ属	1	
Diospyros		カキノキ属	1	
Sambucus-Viburnum		ニワトコ属-ガマズミ属	4	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科		1
Rosaceae		バラ科	1	
Araliaceae		ウコギ科	2	
Nonarboreal pollen		草本花粉		
Gramineae		イネ科	29	128
Oryza type		イネ属型	10	30
Cyperaceae		カヤツリグサ科	7	8
Monochoria		ミズアオイ属	2	2
Aneilema keisak		イボクサ	2	1
Polygonum sect. Persicaria		タデ属 サナエタデ節	1	1
Fagopyrum		ソバ属	1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1	12
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1	1
Nuphar		コウホネ属	1	
Cruciferae		アブラナ科	1	1
Ampelopsis brevipedunculata		ノブドウ	1	
Viola		スミレ属	1	
Prapa		ヒシ属	1	
Oenotheraceae		アカバナ科	1	
Umbelliferae		セリ科	1	10
Nymphoides		アサザ属	5	
Solanaceae		ナス科	2	
Valerianaceae		オミナエシ科	1	
Lactuoidae		タンポポ亜科		3
Asteroidae		キク亜科	2	3
Xanthium		オナモミ属	1	
Artemisia		ヨモギ属	17	82
Fern spore		シダ植物胞子		
Monolate type spore		単条溝胞子	2	3
Trilate type spore		三条溝胞子	7	4
Arboreal pollen		樹木花粉	363	113
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	3	1
Nonarboreal pollen		草本花粉	89	282
Total pollen		花粉総数	455	396
Unknown pollen		未同定花粉	4	3
Fern spore		シダ植物胞子	9	7
Helminth eggs		寄生虫卵		
Ascaris		回虫	1	
Trichuris		鞭虫		1

付表3 出土遺物観察表

挿図 番号	器種	器形	口径	実測図 番号	写真 番号	備考	50	中国青磁			16		越州窯
							57	土師器	杯	14.0	625		
14-1	土師器	杯	14.2	684		ケズリ	58	土師器	皿	16.6	623		
2	土師器	杯	13.5	579		ケズリ	59	土師器	皿	16.6	624		
3	土師器	杯	14.4	553	47		60	緑釉陶器	椀	15.0	557	33	東海系
4	土師器	杯		502			61	土師器	杯	13.0	649		
5	土師器	椀	17.2	554	45	ケズリ	62	須恵器	壺蓋	13.7	592		
6	土師器	皿	19.4	632	49	ケズリ	63	土師器	杯	12.9	591		
7	土師器	皿	19.6	549		ケズリ	64	須恵器	杯	15.2	646	10	
8	土師器	皿		528		墨書	65	灰釉陶器			503		
9	土師器	高杯	24.8	580			66	灰釉陶器			604		
10	須恵器	杯蓋	17.0	21		転用硯	67	緑釉陶器			616		京都系
11	須恵器	杯蓋	16.0	26		転用硯	68	緑釉陶器			77		
12	須恵器	杯蓋	17.8	578		転用硯	69	須恵器	杯蓋	17.8	40		転用硯
13	須恵器	杯蓋	17.6	38		転用硯	70	須恵器	壺蓋	13.3	211	7	
14	須恵器	杯蓋	16.4	7		転用硯	71	緑釉陶器			471		京都系
15	須恵器	杯	12.4	576	16		72	緑釉陶器			469		京都系
16	須恵器	杯	13.6	501			73	緑釉陶器			470		京都系
17	須恵器	杯		15		転用硯	74	緑釉陶器			468		京都系
18	須恵器	杯		577			75	土師器	杯	14.8	629		
19	須恵器	杯	18.0	506			76	土師器	杯	16.8	614		
20	須恵器	杯	17.0	505			15-78	土師器	杯	12.8	627		
21	須恵器	皿	14.4	47	58	墨書	79	土師器	杯	13.3	245		
22	須恵器	皿	12.2	515		転用硯	80	土師器	杯	13.7	674		
23	須恵器	皿	13.6	516			81	土師器	杯	13.4	137		
24	須恵器			46		墨書	82	土師器	杯	13.6	306		
25	緑釉陶器	椀	10.0	529	35	京都系	83	土師器	杯	14.7	243		
26	緑釉陶器			531		京都系	84	土師器	杯	13.6	511		
27	緑釉陶器	椀	15.9	458	32	京都系	85	土師器	杯	14.2	514		
28	緑釉陶器			555		京都系	86	土師器	杯	11.4	138		
29	緑釉陶器			530		京都系	87	土師器	杯	12.8	332		
30	緑釉陶器			535		京都系	88	土師器	杯	13.2	274		
31	緑釉陶器			534		東海系	89	土師器	杯	13.0	262		
32	緑釉陶器			601		東海系	90	土師器	杯	16.4	265		
33	緑釉陶器	皿	13.0	14	39	篠?	91	土師器	杯	13.7	254		
34	緑釉陶器			5		京都系	92	土師器	杯	13.8	676		
35	緑釉陶器			551		京都系	93	土師器	杯	12.0	667		
36	緑釉陶器			6		東海系	94	土師器	杯	15.0	305		
37	緑釉陶器			550		京都系	95	土師器	杯	14.0	208		
38	緑釉陶器			4		京都系	96	土師器	杯	13.2	694		
39	緑釉陶器			533		京都系	97	土師器	杯	8.9	273		
40	緑釉陶器			708		京都系	98	土師器	杯	13.2	692		
41	緑釉陶器			537		京都系	99	土師器	杯	13.6	341		煤付着
42	無釉陶器			1			100	土師器	杯	12.1	704		
43	無釉陶器			3			101	土師器	杯	13.6	238		ケズリ
44	無釉陶器			18			102	土師器	杯	12.1	296		
45	無釉陶器			2			103	土師器	杯	15.0	714		
46	灰釉陶器	皿	15.0	686			104	土師器	杯	15.2	196		
47	灰釉陶器			94			105	土師器	杯	13.4	309		
48	灰釉陶器			66		転用硯	106	土師器	杯	13.3	327		
49	灰釉陶器			536			107	土師器	杯	17.4	194		

108	土師器	杯	13.8	659			160	土師器	杯	20.6	657		
109	土師器	杯	12.4	192			161	土師器	椀	12.3	270		
110	土師器	杯	16.0	319			162	土師器	椀	14.0	691		
111	土師器	杯	13.8	267			163	土師器	杯	17.8	237	44	
112	土師器	杯	16.2	690			164	土師器	杯	22.8	269		
113	土師器	杯		207		穿孔	165	土師器	杯	21.6	176	41	ケズリ
114	土師器	杯	14.0	175			166	土師器	杯	20.2	263		ケズリ
115	土師器	杯	16.4	654		ケズリ	167	土師器	杯	12.8	446		穿孔
116	土師器	杯	20.2	275		ケズリ	168	土師器	杯	21.4	258		
117	土師器	杯	14.2	191			169	土師器	杯	20.4	203	42	ケズリ
118	土師器	杯		75		墨書	170	土師器	杯	20.6	256		ケズリ
119	土師器	杯	16.9	695			171	土師器	杯	21.6	507		
120	土師器	杯	12.8	696			172	土師器			436		
121	土師器	杯	13.6	314			173	土師器			438		
122	土師器	杯	14.8	307			174	土師器			611		
123	土師器	杯	15.8	311			175	土師器			431		
124	土師器	杯	15.6	326			176	土師器			435		
125	土師器	杯	14.0	661			177	土師器			437		
126	土師器	杯	13.4	177			178	土師器	杯	16.3	178		
127	土師器	杯	14.6	343			179	土師器			432		
128	土師器	杯	13.7	318			180	土師器	杯	18.6	197		
129	土師器	杯	15.4	297			181	土師器			430		
130	土師器	杯	14.8	320			182	土師器	杯	16.9	259	43	ミガキ
131	土師器			568			183	土師器	杯	15.0	434		
132	黒色土器	杯	18.0	653		ケズリ	184	土師器			445		
133	土師器	杯	17.2	656			185	土師器	杯	20.5	127	68	墨書
134	土師器	杯	15.6	312			186	土師器	椀	16.5	257	46	他地域
135	土師器	杯	14.8	699			187	土師器	皿	13.0	280		
136	土師器	皿	13.5	700			188	土師器	皿	14.3	294		
137	土師器	皿	14.4	240			189	土師器	皿	14.7	671		
138	土師器	皿	14.6	285			190	土師器	皿	13.3	355		
139	土師器	皿	12.8	302			191	土師器	皿	14.0	278		
140	土師器	杯	14.4	182			192	黒色土器	皿	15.6	665		暗文
141	土師器			448		墨書	193	土師器	皿	16.0	173		
142	土師器	杯	15.0	277			194	土師器	皿	14.8	286		
143	土師器	杯	16.2	705			195	土師器	皿	15.0	359		
144	土師器	杯	13.7	334			196	土師器	皿	15.8	184		
145	土師器	杯	15.4	180			197	土師器	皿	15.6	183		
146	土師器	杯	13.6	308			198	土師器	皿	16.3	672		
147	土師器	杯	13.8	447			199	土師器	皿	12.8	279		
148	土師器	杯	11.6	339			200	土師器	皿	14.6	289		
149	土師器	杯	16.0	261			201	土師器	皿	13.5	361		
150	土師器	杯	14.0	356			202	土師器	皿	13.8	322		
151	土師器	杯	15.6	626			203	土師器	皿	14.4	284		
152	土師器			76		墨書	204	土師器	皿	14.2	136	51	
153	土師器	杯	19.8	675			205	土師器	皿	14.4	673		
154	須恵器	杯	14.4	719			206	土師器	皿	13.6	303		
155	土師器	椀	16.4	244			207	土師器	皿	14.0	139		
156	土師器	杯	15.9	317			208	土師器	皿	15.0	669		
157	土師器	杯	14.8	698			209	土師器	皿	15.2	689		
158	土師器	杯	22.6	716			210	土師器	皿	17.4	325		
16-159	土師器	杯	19.6	655			211	土師器	皿	16.5	613		

212	土師器	皿	20.3	712			264	須恵器	杯蓋	19.1	679		
213	土師器	皿	14.6	281		線刻	265	須恵器	杯蓋	19.3	493		
214	土師器	皿	15.0	241			266	須恵器	杯蓋	18.0	219		
215	土師器	皿	15.6	323			267	須恵器	杯蓋	20.0	492		
216	土師器	皿	15.7	610			268	須恵器	杯蓋	19.8	27		転用硯
217	土師器	皿	17.2	282			269	須恵器	杯蓋	19.8	678		
218	土師器	皿	20.4	612			270	須恵器	杯蓋	21.4	680		
219	土師器	皿		650		漆	271	須恵器	杯蓋	20.2	92		墨書
220	土師器	高杯		128	72	墨書	272	須恵器	杯蓋	15.7	146		
221	土師器	高杯		328			273	須恵器	杯蓋	16.4	217	6	
222	土師器	高杯		205			274	須恵器	杯蓋	18.8	24		転用硯
223	土師器	高杯		206			275	須恵器	皿	13.0	42		転用硯
17-224	土師器	高杯	26.2	346			276	須恵器	杯	10.5	608		墨書
225	土師器	高杯	28.4	19			277	須恵器	杯	11.9	233		
226	土師器	高杯	32.6	345			278	須恵器	杯	13.8	250	13	
227	土師器	高杯		204			279	須恵器	杯	13.0	135		
228	土師器	高杯		331			280	須恵器	杯	13.0	220		
229	土師器	高杯	27.0	123	53		281	須恵器	杯	13.8	249	15	
230	土師器	高杯		315			282	須恵器	杯	13.8	229		
231	土師器	甕	15.0	132			19-283	須恵器	杯	13.6	231		
232	土師器	甕	20.0	351			284	須恵器	杯	13.0	130		
233	土師器	甕	17.0	226			285	須恵器	杯	14.7	272		
234	土師器	甕	18.7	133			286	須恵器	杯	12.7	222		
235	土師器	甕	15.9	124			287	須恵器	杯	13.7	134		
236	土師器	甕	25.8	181			288	須恵器	杯	14.4	232		
237	土師器	甕	13.7	609			289	須恵器	杯	14.5	230		
238	土師器	甕	15.6	202	55		290	須恵器	杯		79	66	
239	土師器	甕	20.0	352	56		291	須恵器	杯	13.9	125	12	
240	土師器	甕	11.8	227			292	須恵器	杯		93		
241	土師器	甕	18.4	225			293	須恵器	皿	13.2	494		
242	土師器	甕	18.2	209			294	須恵器	皿	16.2	168		
243	土師器	甕	23.3	142			295	須恵器	皿	14.0	647		
244	土師器	甕	29.0	143			296	須恵器	皿	12.6	129		
18-245	土師器	甕	20.4	687			297	須恵器	皿	12.8	167		
246	土師器	甕	21.6	638			298	須恵器	杯	13.5	247		
247	土師器	甕	22.6	349			299	須恵器	杯	14.6	126		
248	土師器	鍋	35.0	210			300	須恵器	杯	18.4	170		
249	土師器	脚		512			301	須恵器	杯	18.7	221		
250	黒色土器	杯	17.5	663		暗文	302	須恵器	杯	14.8	513		
251	黒色土器	杯	21.0	662		暗文	303	須恵器	杯	18.8	215		
252	黒色土器	甕	19.0	224			304	須恵器	杯	19.6	212		
253	土師器	甕	18.4	185			305	須恵器	杯	15.0	228		
254	黒色土器	甕	18.6	353			306	須恵器	杯	17.2	248		
255	須恵器	杯蓋	15.8	214			307	須恵器	杯	17.6	639		
256	須恵器	杯蓋	15.8	148			308	須恵器	杯	15.8	131		
257	須恵器	杯蓋	15.8	23		転用硯	309	須恵器	杯	15.8	149		
258	須恵器	杯蓋	16.4	31		転用硯	310	須恵器	杯	13.0	606		
259	須恵器	杯蓋	14.3	218			311	緑釉陶器	底		510		
260	須恵器	杯蓋	14.8	33		転用硯	312	須恵器	杯		72		
261	須恵器	杯蓋	17.4	28		転用硯	313	須恵器	底		424		
262	須恵器	杯蓋	17.0	169			314	須恵器	底		62		
263	須恵器	杯蓋	17.8	35		転用硯	315	須恵器	底		48	57	

316	須恵器	底		74			368	緑釉陶器			403		東海系
317	須恵器	皿	14.3	234			369	緑釉陶器			401		京都系
318	須恵器	皿	14.7	145			370	緑釉陶器			399		京都系
319	須恵器	皿	14.9	213	20		371	緑釉陶器			396		京都系
320	須恵器	杯蓋	12.3	147			372	緑釉陶器			523		京都系
321	須恵器	杯蓋	13.3	152			373	緑釉陶器			418		京都系
322	須恵器	底		544			374	緑釉陶器			497		京都系
323	須恵器	壺	4.5	115	26		375	緑釉陶器			373		京都系
324	須恵器	壺	9.4	566			376	緑釉陶器			466		京都系
325	須恵器	底		518			377	緑釉陶器			398		京都系
326	須恵器	壺	7.3	235		東海系	378	緑釉陶器			519		京都系
327	須恵器	壺	19.0	556			379	緑釉陶器			509		京都系
328	須恵器	甕	56.0	565			380	緑釉陶器			395		京都系
329	須恵器	甕		722			381	緑釉陶器			619		京都系
330	須恵器	甕		721			382	緑釉陶器			417		京都系
331	須恵器	甕		78	60		383	緑釉陶器			462		京都系
20-332	須恵器	甕		73		墨書	384	緑釉陶器			526		京都系
333	須恵器	甕		61		墨書	385	緑釉陶器			496		京都系
334	須恵器			467		墨書	386	緑釉陶器			410		京都系
335	須恵器	鉢	24.4	141			387	緑釉陶器			495		京都系
336	須恵器	硯		171		風字硯	388	緑釉陶器			412		京都系
337	緑釉陶器			538		京都系	389	緑釉陶器			426		京都系
338	緑釉陶器			397		京都系	390	緑釉陶器			451		京都系
339	緑釉陶器			463		京都系	391	灰釉陶器			392		京都系
340	緑釉陶器			524		京都系	392	緑釉陶器			465		京都系
341	緑釉陶器			541		京都系	393	緑釉陶器			617		京都系
342	緑釉陶器			521		京都系	394	緑釉陶器			371		京都系
343	緑釉陶器			472		京都系	395	緑釉陶器			413		京都系
344	緑釉陶器			419		京都系	396	緑釉陶器			402		京都系
345	緑釉陶器			387		京都系	397	緑釉陶器			411		京都系
346	緑釉陶器			543		京都系	398	緑釉陶器			416		京都系
347	緑釉陶器			420		京都系	399	緑釉陶器			12		東海系
348	緑釉陶器			450		京都系	400	緑釉陶器			414		東海系
349	緑釉陶器			415		京都系	401	緑釉陶器			522		東海系
350	緑釉陶器			525		京都系	402	緑釉陶器			455		東海系
351	緑釉陶器	椀	12.6	615		京都系	403	緑釉陶器	椀	8.6	508		京都系
352	緑釉陶器			539		東海系	404	緑釉陶器	皿	13.2	365		京都系
353	緑釉陶器			499		京都系	405	緑釉陶器	皿	13.0	378		京都系
354	緑釉陶器			498		京都系	406	緑釉陶器			641		東海系
355	緑釉陶器			464		京都系	407	緑釉陶器			618		京都系
356	緑釉陶器	椀	16.6	362	31	京都系	408	緑釉陶器			9	99	陰刻花
357	緑釉陶器	椀	13.4	380		京都系	409	緑釉陶器	皿	13.3	364	37	京都系
358	緑釉陶器	椀		370		京都系	410	緑釉陶器			454		東海系
359	緑釉陶器	椀		527		京都系	411	緑釉陶器			390		京都系
360	緑釉陶器	椀	14.0	11	23	東海系	412	緑釉陶器	注口		570	102	東海系
361	緑釉陶器	椀		369		京都系	413	緑釉陶器	注口		569	102	東海系
362	緑釉陶器	椀	14.2	363		京都系	414	緑釉陶器	香炉		13	40	東海系
363	緑釉陶器	椀	19.0	664		東海系	21-415	緑釉陶器	杯	9.9	384		糸切り
364	緑釉陶器	椀	20.0	479	27	東海系	416	無釉陶器			720	98	
365	緑釉陶器			386		京都系	417	無釉陶器			8		
366	緑釉陶器			520		京都系	418	緑釉陶器			540		東海系
367	緑釉陶器			461		京都系	419	灰釉陶器	椀	14.8	382		

420	灰釉陶器			385							
421	灰釉陶器			622							
422	灰釉陶器			504							
423	灰釉陶器			391							
424	灰釉陶器			422							
425	灰釉陶器			548							
426	灰釉陶器			427							
427	灰釉陶器			10							
428	灰釉陶器			428							
429	灰釉陶器	皿	16.6	383	25						
430	灰釉陶器	硯		648							
431	灰釉陶器	把手		567							
437	磁器	椀		545		中国製					
22-440	土師器	杯	13.0	688							
441	土師器	杯	13.3	333							
442	土師器	杯	13.6	179	48						
443	土師器	杯	13.0	159							
444	土師器	杯	13.8	239							
445	土師器	杯	14.4	310							
446	土師器	杯	16.0	158							
447	土師器	皿	12.4	301							
448	土師器	皿	15.2	489		ケズリ					
449	土師器	皿	14.0	298							
450	土師器	皿	13.2	300							
451	土師器	杯	17.5	163							
452	土師器	高杯		490							
453	須恵器	杯蓋	19.8	29		転用硯					
454	須恵器	杯蓋	20.6	157							
455	須恵器	杯蓋	15.5	22		転用硯					
456	須恵器	杯蓋	14.0	25		転用硯					
457	須恵器	杯	13.3	246							
458	須恵器	杯	13.2	153							
459	須恵器	杯	14.0	155							
460	須恵器	杯	13.6	154							
461	須恵器	杯	15.8	156							
462	須恵器	皿	13.2	216							
463	須恵器	皿	14.8	252	17						
464	須恵器	甕		725		叩き					
465	須恵器	皿	15.4	251							
466	須恵器	壺	8.9	488							
467	須恵器			96		墨書					
468	灰釉陶器	壺		682							
469	緑釉陶器			475		京都系					
472	土師器	椀	12.0	480		ケズリ					
473	土師器	杯	12.7	276							
474	土師器	椀	13.2	255							
475	土師器	杯	13.0	162							
476	土師器	杯	13.0	713							
477	土師器	杯	13.6	660							
478	土師器	杯	13.0	337							
479	土師器	杯	11.8	295							
480	土師器	杯	13.9	119							
481	土師器	杯	16.4	266							
482	土師器	杯	16.8	702							
483	土師器	杯	15.9	313							
484	土師器	杯	15.2	340							
485	土師器	杯	13.6	321							
486	土師器	椀	13.6	166							
487	土師器	杯	15.6	338							
488	土師器	杯	14.6	198							
489	土師器	杯	16.0	264							
490	土師器	杯	20.8	271							
491	土師器	杯	21.2	164							
492	土師器	杯	22.4	658							
493	土師器	杯	25.3	200							
23-494	土師器	杯	12.4	336							
495	土師器	椀	13.7	335							
496	土師器	杯	14.8	344							
497	土師器	椀	14.8	195							
498	土師器	杯	13.4	304							
499	土師器	椀	14.3	109							
500	土師器	杯	16.2	697							
501	土師器			442							
502	土師器	椀	17.6	107		ケズリ					
503	土師器	杯	17.9	260							
504	土師器	杯	18.3	703							
505	土師器	杯	17.6	693							
506	土師器	杯	16.8	106							
507	土師器			57	71						
508	土師器	杯	14.6	342							
509	土師器	杯	9.0	433							
510	土師器	杯		441							
511	土師器	杯		439							
512	土師器	杯		444							
513	土師器	杯		440		ケズリ					
514	土師器	杯		485							
515	土師器	杯		683							
516	土師器	杯		443							
517	土師器			54	69	墨書					
518	土師器	底		55	70	墨書					
519	土師器	皿	13.6	483							
520	土師器	皿	14.2	288							
521	土師器	皿	14.2	668		ケズリ					
522	土師器	杯	14.8	186							
523	土師器	皿	14.3	291							
524	土師器	皿	14.3	190	52						
525	土師器	皿	14.0	112							
526	土師器	皿	15.8	293							
527	土師器	皿	15.3	122		ケズリ					
528	土師器	皿	17.7	108		ケズリ					
529	土師器	皿	16.0	484		ケズリ					
530	土師器	皿	13.0	283							
531	土師器	皿	13.8	299							
532	土師器	皿	13.2	290							

533	土師器	皿	13.0	715			585	須恵器	杯蓋	13.6	87		
534	土師器	皿	15.2	670			586	土師器	杯	13.8	160		
535	土師器	皿	14.6	120			587	須恵器	杯	13.7	201	14	
536	土師器	皿	14.6	287			25-588	須恵器	杯	13.8	53	67	墨書
537	土師器	皿	15.2	292			589	須恵器	杯	14.3	188		
538	土師器	皿	15.6	193			590	須恵器	杯	13.2	113		
539	土師器	皿	17.6	481		ケズリ	591	須恵器	杯	12.2	88		
540	土師器	皿		95			592	須恵器	杯	13.7	84		
541	土師器	椀		651		漆	593	須恵器	杯	13.8	85		
542	土師器	皿	14.4	357			594	須恵器	杯	13.8	52	65	墨書
543	土師器	皿	15.2	199	50		595	須恵器	杯	13.0	58		
544	土師器	皿	14.0	189			596	須恵器	杯		97		墨書
545	土師器	皿	14.8	324			597	須恵器	杯		43		墨書
546	土師器	皿	15.2	701			598	須恵器	杯	14.8	69	11	
547	土師器	皿	19.6	360		暗文	599	須恵器	杯	15.0	82		
548	土師器	杯	14.8	268		線刻	600	須恵器	杯	14.8	86		
549	土師器	高杯	32.6	121			601	須恵器	杯	15.9	118		
550	土師器	高杯	33.0	348			602	須恵器	杯	14.6	83		
551	土師器	高杯	16.4	330			603	須恵器	杯	15.4	80		
552	土師器	高杯	14.2	329			604	須恵器	杯	14.6	150		
24-553	土師器	高杯		718		布圧痕	605	須恵器	杯	15.9	81		
554	土師器	高杯		316	101	文字	606	須恵器	杯	20.0	68	9	
555	土師器	甕	27.3	350			607	須恵器	杯	19.0	71		
556	土師器	甕	18.5	111			608	須恵器	杯	19.3	70		
557	土師器	壺	16.2	114			609	須恵器	皿	12.8	36		転用硯
558	土師器	甕	21.6	144			610	須恵器	皿	14.5	487		
559	土師器	甕	25.8	223			611	須恵器	皿	10.3	37		転用硯
560	土師器	甕	24.8	110			612	須恵器	皿	13.6	91		
561	土師器	壺	9.2	517		壺E	613	須恵器	皿	14.2	89	18	
562	黒色土器	椀	17.6	500			614	須恵器	皿	13.6	45	59	墨書
563	黒色土器	椀	16.0	491			615	須恵器	皿	13.8	151		
564	黒色土器	椀	16.9	366			616	須恵器	皿	13.6	486	19	
565	黒色土器	椀	16.0	367			617	須恵器	皿	15.8	90		
566	黒色土器	甕	18.8	354			618	須恵器	皿	13.8	161		
567	黒色土器	甕	13.8	236	54		619	須恵器	皿	14.8	449		
568	黒色土器	甕	17.2	165			620	須恵器	杯蓋	16.0	104		
569	須恵器	杯蓋	13.8	34		転用硯	621	須恵器	蓋	7.6	482	8	
570	須恵器	杯蓋	15.7	20		転用硯	622	須恵器	鉢	30.7	50		墨書
571	須恵器	杯蓋	17.8	103			623	須恵器	鉢	22.5	253		
572	須恵器	杯蓋	16.2	99			624	須恵器			60		墨書
573	須恵器	杯蓋	16.2	116			625	須恵器			59	63	墨書
574	須恵器	杯蓋	17.0	677			626	須恵器	鉢		726		線刻
575	須恵器	杯蓋	17.0	30		転用硯	627	須恵器	杯		49	64	墨書
576	須恵器	杯蓋	18.2	102			628	須恵器	壺	4.2	98	21	東海系
577	須恵器	杯蓋	17.8	32		転用硯	629	須恵器	底		41		転用硯
578	須恵器	杯蓋	19.8	187			26-630	須恵器	壺		67		耳付
579	須恵器	杯蓋	8.5	64		墨書	631	須恵器	壺		681		
580	須恵器	杯蓋		63	62	墨書	632	緑釉陶器	椀	17.4	379	30	京都系
581	須恵器	杯蓋	20.2	100			633	緑釉陶器	椀		393		東海系
582	須恵器	杯蓋	20.0	101			634	緑釉陶器	椀	18.6	456	28	東海系
583	須恵器	杯蓋	21.6	117			635	緑釉陶器	椀	17.2	457	29	緑彩
584	須恵器	杯蓋		44	61	転用硯	636	緑釉陶器	皿	13.2	376	38	京都系

637	緑釉陶器	皿	15.0	473			677	土師器	羽釜		645		
638	緑釉陶器	皿	13.4	105		京都系	678	土師器	杯	13.8	585		
639	緑釉陶器	杯	12.0	377	34	京都系	679	土師器	椀	21.4	630		
640	緑釉陶器	椀	8.8	478	36	京都系	680	土師器	杯	13.6	583		
641	緑釉陶器			453		京都系	681	土師器	椀	15.4	586		
642	緑釉陶器			389		京都系	682	土師器	椀	14.3	584		
643	緑釉陶器			394		京都系	683	土師器	皿	13.8	588		
644	緑釉陶器			374		京都系	684	土師器	杯	8.7	590		
645	緑釉陶器			421		京都系	685	土師器	杯	16.6	589		
646	緑釉陶器			542		京都系	686	土師器	杯	16.8	558		
647	緑釉陶器			372		京都系	687	土師器	甕	11.8	582		
648	緑釉陶器			388		京都系	688	黒色土器	甕	13.2	637		
649	緑釉陶器			368		京都系	689	土師器	高杯		575		
650	緑釉陶器			425		京都系	690	土師器	杯	10.0	587		
651	緑釉陶器			452		京都系	691	灰釉陶器			634		
652	緑釉陶器			400		京都系	692	灰釉陶器	皿	14.8	596		トチン
653	緑釉陶器			474		京都系	693	灰釉陶器	椀	14.4	574	22	
654	緑釉陶器			375		線刻	694	土師器	杯	17.2	628		
655	緑釉陶器			476		京都系	695	土師器	杯	13.4	593		
656	緑釉陶器			459		京都系	696	土師器	杯		595		
657	緑釉陶器	壺		460			697	土師器	杯		594		
658	灰釉陶器	杯	13.8	381			698	須恵器	杯蓋	14.4	561		
659	灰釉陶器	皿	18.0	477	24		699	須恵器	皿	14.8	560		転用硯
27-662	土師器	杯	12.8	685			700	須恵器	皿	13.8	563		
663	土師器	杯	15.2	633			701	須恵器	杯	17.4	564		
664	土師器	皿	19.9	631		ミガキ	702	緑釉陶器			644		京都系
665	土師器	高杯		666			703	緑釉陶器			600		京都系
666	須恵器	杯	13.0	17			704	灰釉陶器			607		京都系
667	須恵器	杯	16.8	605			705	緑釉陶器			599		京都系
668	須恵器	杯蓋		51		墨書	706	緑釉陶器			598		京都系
669	須恵器	皿	12.4	709			707	緑釉陶器			597		京都系
670	緑釉陶器			707		京都系	28-709	土師器			559		
671	緑釉陶器			620		京都系	710	土師器	皿	20.6	581		ケズリ
672	緑釉陶器			642			711	土師器	高杯		562		
673	緑釉陶器			621		東海系	712	白磁	椀	15.2	547		中国製
674	灰釉陶器	皿	14.6	706			713	青磁	椀	14.8	546		中国製
675	土師器	脚		711			714	瓦器			640		
676	須恵器	不明		603		墨書	715	瓦器			643		

凡例

- ・挿図番号と図版番号は一致している。
- ・実測図番号は、図化・拓影の資料化番号である。
- ・写真番号は、撮影時につけた番号で、「7G」は略している。

3. 名神高速道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要

はじめに

日本道路公団では、大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間の慢性的な交通渋滞解消のため、走行車線の拡張工事を計画された。本調査は、この名神高速道路拡幅工事に伴い影響を受ける遺跡(名神高速道路関係遺跡)の事前調査で、同公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。

調査は、昭和63(1988)年度から開始し、本年で7年目となる。調査対象地は、工事工区の区分に従い、天王山トンネルの東から大山崎工区、下植野工区、長岡京工区、向日工区、桂川PA工区、京都工区となり、長岡京の東京極をぬけ桂川、京都南インターへと続く。

調査を開始した昭和63年度は、長岡京工区で長岡京の六条～八条までの7地点で合計4,200m²の調査を行い、その一部で、下層の調査を次年度に繰り越している^(注1)。

平成元年度には、同工区の六条～四条までで15地点の3,350m²、向日工区で四条の2地点300m²、大山崎工区の試掘1,000m²を含め、合計4,650m²の調査を行った^(注2)。

平成2年度には、向日工区で三条～四条までの11地点で3,350m²、長岡京工区で1地点200m²、大山崎工区の百々遺跡を4地点4,050m²、さらに下植野工区では九条の7地点2,060m²の調査を新たに加え、合計9,730m²の調査を行った^(注3)。

平成3年度には、向日工区で二条～三条までの6地点で1,620m²、大山崎工区で4地点3,520m²、下植野工区5地点5,080m²の調査を加え、合計10,220m²の調査を行った^(注4)。

平成4年度には、京都工区で3地点1,887m²の上層遺構の調査、下植野工区で7地点8,250m²、大山崎工区で3地点1,970m²の合計12,107m²の調査を行った。大山崎工区での調査は、当該年度をもってすべて終了し、今後本整理・報告を残す^(注5)。

平成5年度には、京都工区では当初、7地点4,095m²の調査を予定したが、後半期に長岡京東京極についての調査がさらに必要になり、協議の結果、2地点700m²についての調査を追加することとなった。仮称桂川PA工区のうち、本線部分についての調査を先行することとなり、4地点で3,100m²を、下植野工区では、3地点の1,600m²を調査した^(注6)。

平成6年度は、当初、桂川PA工区で6地点9,250m²を予定したが、年度後半に工事工程による見直しがあり、2,000m²を追加調査した(第34図)。向日工区では、1地点300m²を、下植野工区では、1地点の690m²を調査した。今年度の調査対象地は、長岡京の条坊復原によると、左京では、PA工区で二条三坊十六町、同四坊一・八町、南一条三坊十三町、同四坊四・五町にあたり、向日工区で左京三条二坊十三町、右京では下植野工区で九条二坊三・四町が想定される地点である(第33図、付表4)。

検出した遺構の番号は、基本的に各地区ごとの連番としたが、広域に及ぶ条坊遺構については先行する調査成果をもとにした。調査地名及び面積、期間、長岡京調査回数については、別表に示した。条坊呼称は基本的に旧呼称で行い、適宜()内に新呼称を併記する^(注7)。

現地の発掘調査は、平成6年4月11日～平成7年2月27日を要し、調査面積は、延べ約12,240㎡となった。本調査にかかわる経費は、日本道路公団大阪建設局が負担された。

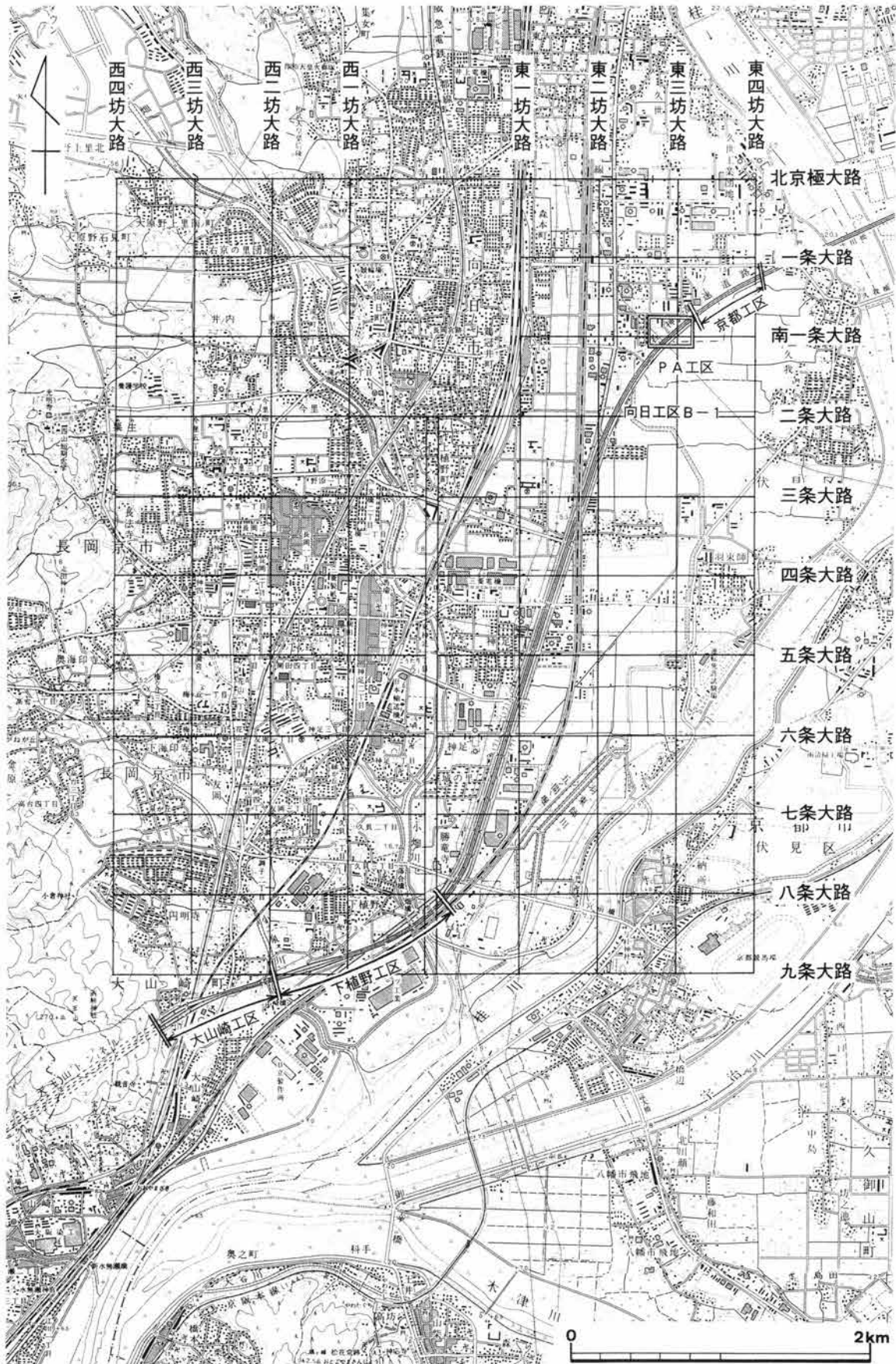
調査には、当調査研究センター調査第2課調査第4係長平良泰久、同主任調査員戸原和人、同調査員竹井治雄・石尾政信・岩松 保・中川和哉・岸岡貴英、後半期の調査で、調査第3係調査員森島康雄をあてた。本書の執筆については、PA工区を竹井・石尾・岩松・中川・森島・岸岡、向日工区を中川、下植野工区を戸原が担当した。

調査を行うにあたっては、日本道路公団、大山崎町教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センター、(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係各機関をはじめ、各大学の学生諸氏の協力を得た。紙面をかり、謝辞を述べたい^(注8)。

(戸原和人)

付表4 調査地一覧表

工区	地区	回数	調査記号	所在地 (字名)	推定遺構	調査面積	調査期間	担当者	
桂川	A-1	L336	7ANVKN-4	南区久世東土川町 (金井田)	左京南一条四坊四町 南一条第二小路	2,320	11/8～2/27	岩松・森島 中川	
	A-2	L329	7ANVKN-3	南区久世東土川町 (金井田)	左京一条四坊大路四町 東三坊大路東側溝	1,000	4/11～10/13	石尾	
	A-3	L330	7ANVST-3	南区久世東土川町 (正登)	東三坊大路西側溝 南一条大路	1,480	4/11～10/13	岩松	
	B-2b	L331	7ANVST-4	南区久世東土川町 (正登)	東三坊大路東側溝 二条第一小路	840	5/12～9/14	竹井	
	P	B-3	L334	7ANVKN-2	南区久世東土川町 (金井田・正登)	左京南一条四坊五町 南一条大路両側溝	1,500	8/8～2/16	岸岡・戸原
		B-4	L333	7ANVST-5	南区久世東土川町 (正登)	左京二条四坊一・八町 東三坊大路東側溝	1,850	6/21～1/20	中川
	A	B-5	L337	7ANVKN-5	南区久世東土川町 (金井田)	左京南一条四坊五町 東一坊第一小路	2,260	10/27～2/27	竹井・石尾
	小計					11,250 m ²			
向日	B-1a	L332	7ANEKZ-8	向日市鶏冠井町 (清水)	左京二坊十三町 二条大路	300	4/11～6/16	中川	
	小計					300 m ²			
下植野	C-6	R466	7ANTTD-5	大山崎町 (下植野寺門)	右京九条二坊三・四町 下植野南遺跡	690	7/4～10/5	戸原	
	小計					690 m ²			
	合計					12,240 m ²			



第33図 調査地区位置図(長岡京全体図)

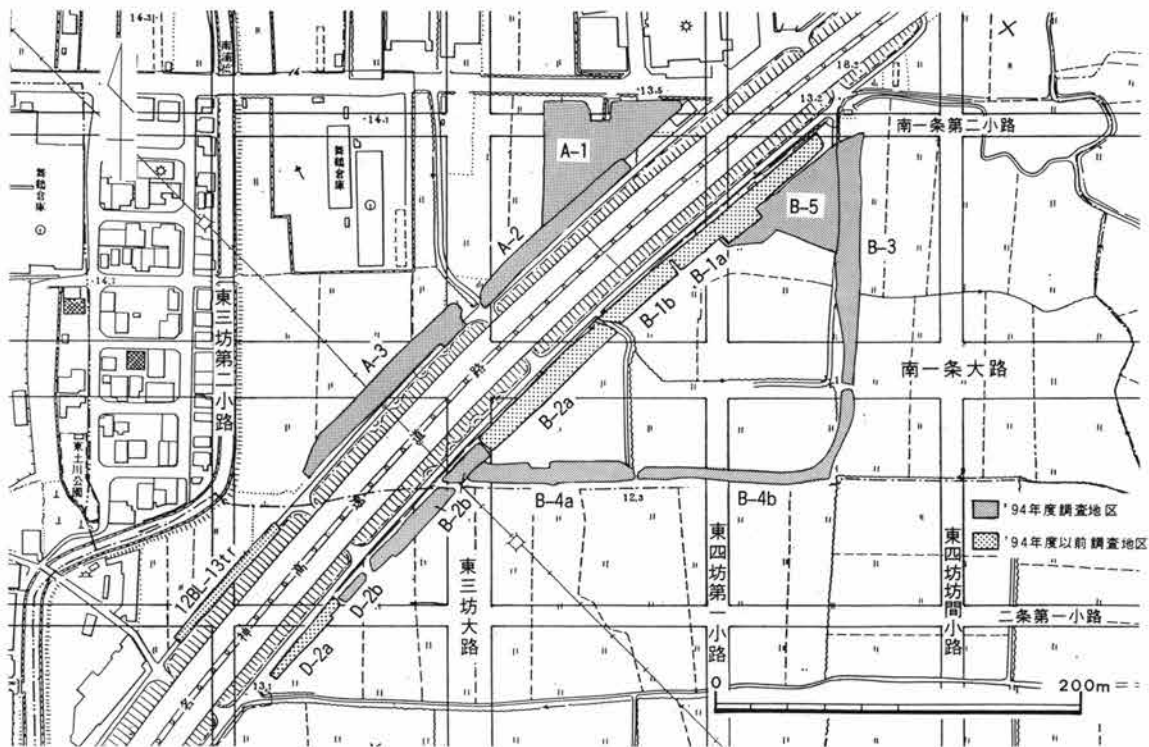
(1) 長岡京跡左京第336次 PA工区A-1地区
(7ANVKN-4)

1. はじめに

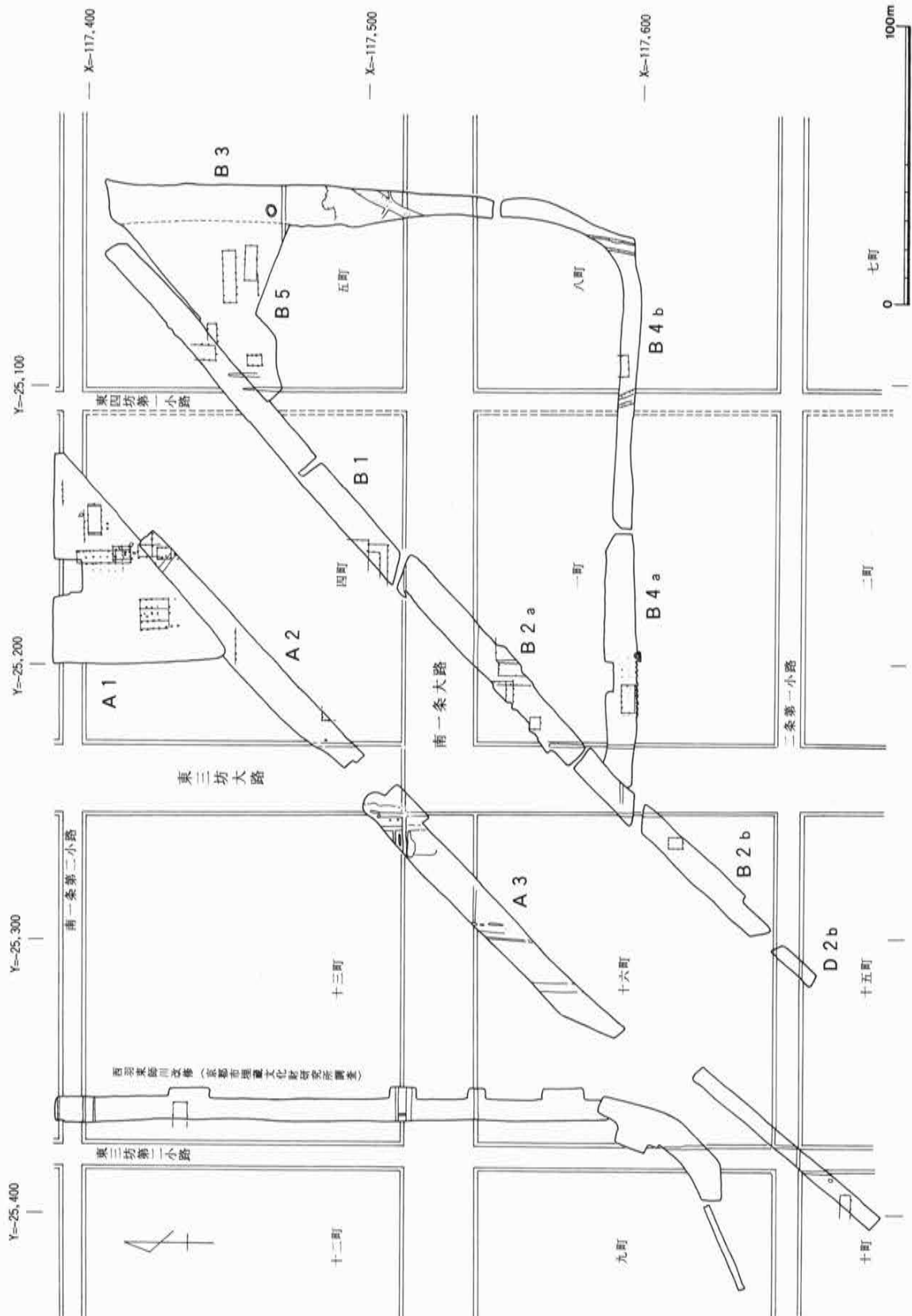
この調査地は、左京第329次(A-2地区)調査地に北接しており、左京南一条四坊四町(左京二条四坊二町)に位置している。この調査地では、町内の諸施設や南一条第二小路(二条条間北小路)の路面及び南・北側溝の検出が期待された。また、左京第329次調査地で検出された古墳時代の流路や溝、弥生時代方形周溝墓などの続きが検出できた。そのため、この調査地ではじめて検出した遺構については通常どおりに報告するが、両調査地にまたがって検出した遺構については、報告の煩雑さを避けるため、左京第329次調査報告の遺構番号を用い、各遺構の規模や形状などは両調査地を一続きに合わせた全体として報告することとする(第34・35図)。

2. 基本層序

この調査地の基本的な土層は、左京第329次調査地と同じく、現代盛り土(約1m)、旧水田耕作土(約20cm)、床土(約20cm)で、遺構面となる黄褐色土(地山)である。この地山面で、弥生～近世にいたるまでの遺構を検出しているが、西南部約1/4には床土下に平安時代を上限とする中世までの暗灰色粘質土が堆積している。この土層の上面には南北方向の中世素掘り溝があり、下面



第34図 PA工区調査トレンチ配置図



第35図 P.A.I区長岡京期主要遺構平面図

では東西方向の素掘り溝、古墳時代流路を検出している。

3. 検出遺構

中世の素掘り溝群、長岡京期(平安時代?)の掘立柱建物跡群・柵、古墳時代の土坑・流路、弥生時代の方形周溝墓を検出した。

①中世(第36図・図版第21)

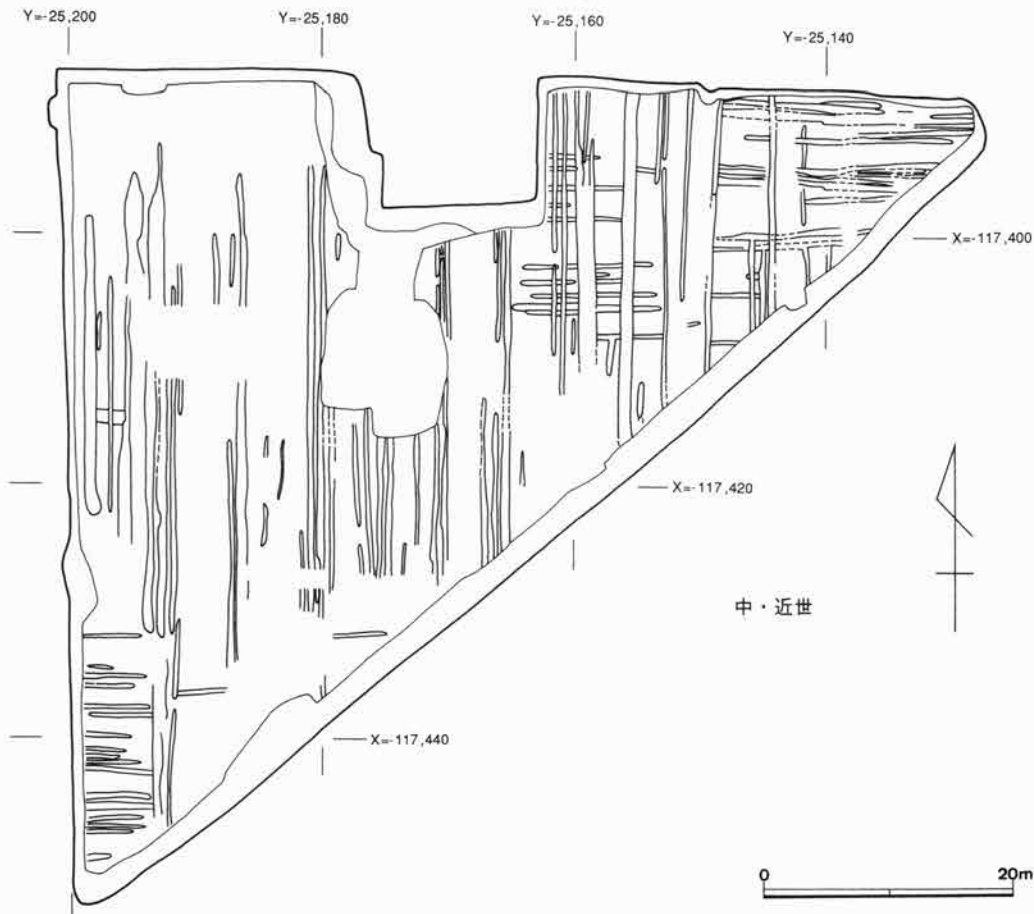
調査地の全域で素掘り溝群を検出した。基本的には南北方向の素掘り溝で、数条の溝が約1～2mの範囲に重複しており、それらが約5～6mの空閑地を有して分布している。この南北溝群は途切れることなく、最長40mにわたって続く。

部分的には東西方向の素掘り溝もあり、これは大きく二地区に分けられる。

a) 東半部(国土座標のほぼ $Y=-25,165.00$ より東側)

b) 西南部(国土座標の $Y=-25,190.00$ を中心に東西20m程度)

である。a)は、南北方向の素掘り溝と同一面(地山面)で検出しているが、すべて南北方向の溝に切り負けている。どの溝からもまとまった土器の出土はないが、わずかに出土した土器の細片を見る限り、南北・東西の溝はともに13～14世紀以降のものである。ある時期に東西→南北とその方向を一斉に変えたのであろう。それに対して、b)の溝群は、左京第329次調査地の中央部で検



第36図 PAI区A-1地区遺構平面図(1) 中・近世

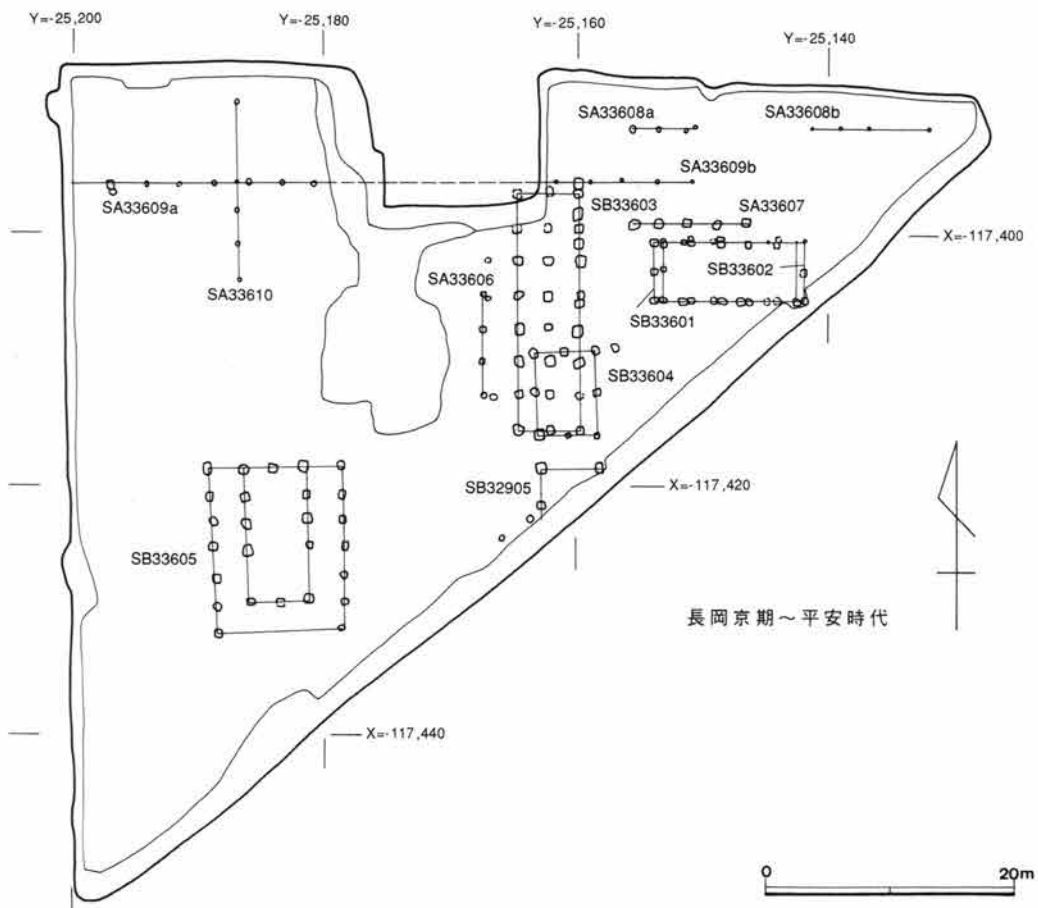
出された溝群の続きであるが、その分布の範囲が限定されている。左京第329次調査の報告にあるように、これらの素掘り溝群は平安時代のものである可能性がある。

②長岡京期・平安時代(第37図、図版第21～23)

この調査地では南一条第二小路の検出が期待されたが、その南側溝の推定位置には柵 S A 33609 a・b が検出され、道路側溝は確認できなかった。それに対して、掘立柱建物跡、柵などを調査地の全域で検出した。これらの遺構は、一応長岡京期と考えて報告するが、後述のように、南一条第二小路南側溝や路面の上で柵を検出したり、掘立柱建物跡が同路面に近接していることから、一部のは長岡京期ではなくて、平安時代にまで下る可能性がある。

掘立柱建物跡 S B 32905 左京第329次調査(A-2地区)で一部を検出した建物跡で、東西1間・南北2間の南北棟である。後述の S B 33604 と同じく 4° 前後西に振れており、それぞれの建物の柱筋が南北方向で揃う。柱間寸法は、南北が 2.55m、東西が 4.8m である。柱掘形は一辺約 0.8m の方形で、深さ約 0.4m を測る。西北隅の柱穴の中心座標は、X = -117,418.80、Y = -25,162.80 である。

掘立柱建物跡 S B 33601・33602 南北2間・東西5間の東西棟建物跡で、ほぼ同じ位置に約 0.6m 東西方向にずらして、同じ規模の建物が建て替えられている。柱穴の重複は全くないため、先後関係は不明である。柱間寸法は、S B 33601・33602 ともに、南北 2.4m・東西 2.25m である。



第37図 P A 工区 A - 1 地区遺構平面図(2) 長岡京期～平安時代

柱掘形は一辺50~60cmの方形で、深さ約20cmである。S B 33601の西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,400.70 \cdot Y=-25,153.70$ で、S B 33602の西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,400.70 \cdot Y=-25,153.10$ である。

掘立柱建物跡 S B 33603 南北7間・東西2間の総柱建物に復原しているが、北半の2または3間分では、東辺の柱列に南北の柵状の柱穴列が重複していることから、南と北で2棟の建物跡に分かれる可能性がある。柱間寸法は、南北が2.7m、東西が2.55mである。柱掘形は、一辺が0.6~0.8mの方形で、深さ約0.3mを測る。東西隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,396.80 \cdot Y=-25,159.80$ である。

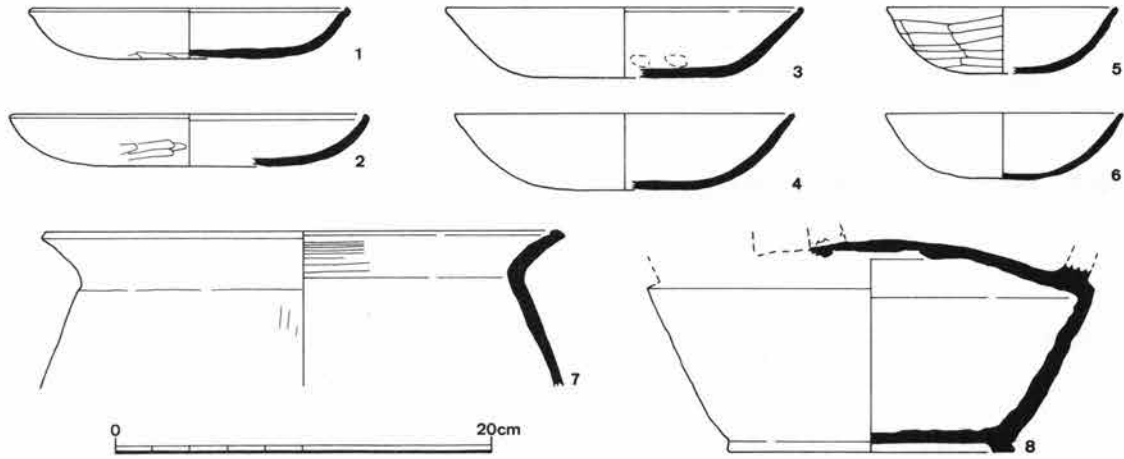
掘立柱建物跡 S B 33604 S B 32905の北側で検出した東西2間・南北2間の建物跡である。S B 32905の東辺・西辺の柱筋がそろそろ。建物方位は、北で4°前後西に振れる。柱間寸法は、南北3.3m・東西4.2mを測る。柱掘形は、一辺0.6~0.8mの方形である。西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,409.60 \cdot Y=-25,163.45$ である。

掘立柱建物跡 S B 33605 上述の建物跡は主として調査地の東半で検出したのに対して、S B 33605のみ西半で検出しており、東半の建物跡群とは約15mを隔てている。南廂の柱穴の一部が攪乱のため検出できなかったが、東西2間・南北5間の身舎の東・西・南に廂を有している。この建物跡の北辺は、S B 32905の北辺と揃えて建てられている。柱間寸法は、南北2.1m・東西2.4mで、廂の柱穴は身舎から南北が2.4m、東西が2.7mの位置にある。柱掘形は一辺0.7~0.85mの方形で、深さ0.3~0.4mを測る。廂の一部には1.0m×0.55~0.6mの長方形のものもある。西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,418.70 \cdot Y=-25,189.05$ である。

柵 S A 33606 S B 33603の西辺の一部を画する南北方向の柵である。この柵は、S B 33603の西辺の柱筋から2.85mを隔てている。柱間寸法は、2.7mである。柱掘形は一辺0.4~0.5mの方形で、深さ約0.2mである。西南隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,413.00 \cdot Y=-25,167.35$ である。

柵 S A 33607 S B 33602・03の北側で検出した東西方向の柵である。柱間寸法2.25mで、柱掘形は、一辺が0.65~0.9mの方形で、深さ約30cmを測る。西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,399.30 \cdot Y=-25,155.50$ で、南一条第二小路南側溝(左京第139次、 $X=-117,396.00 \cdot Y=-25,365.00$)^(注9)推定地の南約3mの位置にあたる。

柵 S A 33608 a・b 調査地の東北部で検出した東西方向の柵である。S A 33607とは南北方向に約7.7mを隔てている。西側のS A 33608 aは2間分を検出したが、その柱間は2.35~2.75mと不ぞろいである。東側のS A 33608 bは4間分を検出し、柱間は西の2間分が2.25m、東の2間分が1.95mである。S A 33608 a・bの間は、約10m(5間分)にわたって検出できなかったが、ともに東で北に1°程度の振れを有し、ほぼ一直線に復原できるので、同一の柵と判断した。柱掘形は一辺約0.15~0.2mの円形で、深さ約0.05mを測る。S A 33608 aの西隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,391.60 \cdot Y=-25,155.60$ 、S A 33608 bの西隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,391.70 \cdot Y=-25,141.35$ である。南一条第二小路北側溝の推定位置よりも南4.6mにあたり、路面上に位置する。^(注10)



第38図 P A工区A-1地区出土遺物実測図(1)

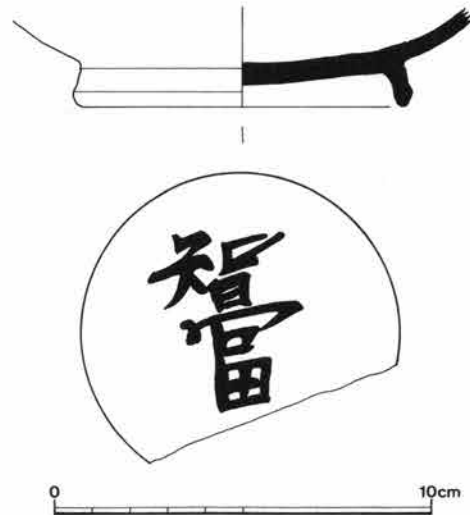
柵 S A 33609 a・b 調査地の北半部で検出した東西方向の柵で、中央部が約17.5mにわたって攪乱を受けているため検出できなかったが、総長46mにわたって、復原で17間分(実際には S A 33609 a が 6 間分、 S A 33609 b が 4 間分の10間分を確認)を検出した。南一条第二小路南側溝上に位置する。柱間寸法は、2.7mである。柱掘形は、一辺約0.6mの方形で、深さ約0.2mのものと、長径0.4m×短径0.3m程度の楕円形で、深さ約0.15~0.2mのものがある。西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,396.10 \cdot Y=-25,196.75$ である。

柵 S A 33610 調査地西北部で検出した南北方向の柵で、一部柱穴を検出できなかったが、復原で6間分を検出した。柱間は、南の2間分が2.85m、北の4間分(復原)が2.1mである。S A 33609 a と重複し、その北端は南一条第二小路路面推定地にまで及ぶ。南端の柱穴の中心座標は $X=-117,403.90 \cdot Y=-25,186.80$ である。

(岩松 保)

出土遺物(第38・39図、図版第26) 第38図は、建物跡 S B 33605の柱抜き取り穴から出土した

遺物である。1・2は、土師器皿である。1は、b手法による調整で、底部と口縁部の境がはっきりしているのに対して、2はc手法で、底部と口縁部の境が不明瞭である。3・4は、土師器杯である。3は、c手法による調整で、内面の底部と口縁部の境には指押さえの痕跡が認められる。口縁端部は内側に丸め込んでいる。4は、磨滅のため調整が観察できない。口縁端部はまっすぐに終わる。5・6は、土師器椀である。5は、c手法による調整であるが口縁端部外面はナデによってやや凹んでいるために、ケズリ調整が及んでいない。6は、e手法による調整である。外面には凹凸が目立つが、内面は平滑に仕上げている。7は、土師器甕である。口縁部



第39図 P A工区A-1地区出土遺物実測図(2)

内面にはヨコ方向のハケメ、胴部外面にはタテ方向のハケメが認められる。8は、須恵器平瓶である。内面には回転ナデによる凹凸が目立つが、外面は工具による回転ナデにより、比較的平滑に仕上げている。

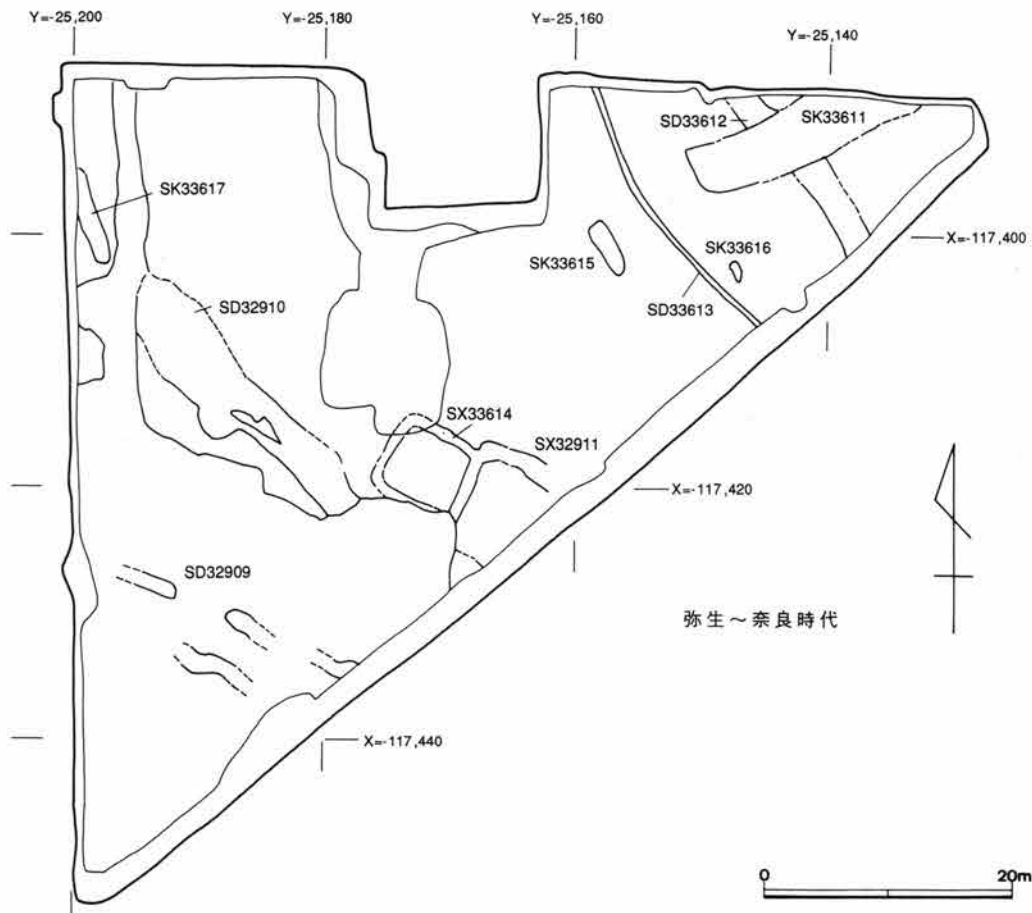
墨書土器(第39図) 灰釉陶器碗の底部外面に「智富」と墨書されている。包含層から出土した。9世紀末～10世紀初頭に位置づけられる。

(森島康雄)

③弥生～古墳時代(第40図・図版第24・25)

調査地の北東部で、古墳時代の土坑、弥生時代の溝を検出し、中央南部では左京第329次調査(A-2地区)で検出した方形周溝墓の続きを、西南部では古墳時代の流路を検出した。この地区及び周辺では、長岡京以前の自然地形は北西—南東に軸を持っているらしく、すべての遺構がその方向及びそれと直角の方向にそろっている。

流路 S D 32909 古墳時代後期の自然流路である。左京第329次調査では、幅12～14m以上を確認しているが、この調査地では流路の西側の肩部は不明瞭であった。南東から北西に向けて下る傾斜をもつ。北部では支流状の溝が幅1.6～2mで南北に直線的にのびるが、この溝は南から北に向けて下る傾斜である。深さは、最深部で約0.9mであった。長岡京の造営に伴って、人為的に埋められたものと考えられる。



第40図 PA工区A-1地区遺構平面図(3) 弥生～奈良時代

流路 S D 32910 流路 S D 32909 に切られる自然流路である。左京第329次調査地(A-2地区)で検出している。幅2~3.2m・深さ約0.25mを測る。S D 32909の北側にのびる支流状の溝によって大きくえぐられている。後述のS K 33617は、この流路の延長上に位置しているが、その残欠であるかどうか、不詳である。埋土は、ラミナ状の構造を持つ砂質土で、多くの土師器片を含んでいた。出土遺物から、古墳時代前期のものと考えられる。

土坑 S K 33611 調査地の東北部で検出した古墳時代の土坑で、幅2mで18.5mにわたって検出したが、北端は調査地外である。深さは最大で約0.2mである。南西端は急激に浅くなって終わるが、横断面はゆるやかな舟底状を呈する。北東部は浅くなりつつ、調査地外にのびる。弥生時代の溝 S D 33612 を横断しているため、内部からは多くの弥生土器が出土した。

溝 S D 33612 調査地の東北部で検出した断面「U」字形を呈する弥生時代中期の溝である。北西-南東に軸を有し、幅2.6m・深さ約0.5mで、15.2mにわたって検出した。埋土中には、多量の弥生土器・石器・炭化物・焼土を含んでいた。

溝 S D 33613 溝 S D 33612 の西側で検出した溝で、断面「コ」字形の溝である。出土遺物が少ないため詳細な時期は不明であるが、弥生時代と考えられる。北西-南東に軸を有し、幅0.4m・深さ約0.2mで、23mにわたって検出した。

方形周溝墓 S X 32911 左京第329次調査(A-2地区)で検出した方形周溝墓の続きで、北側にある方形周溝墓 S X 33614 に先行する。削平が著しく、主体部は検出できなかった。攪乱によって随所で破壊されているが、方台部は9.6m×6.5mで、溝幅は約1.2mである。陸橋状に四隅は浅くなっている。最深部は約0.3mである。

方形周溝墓 S X 33614 弥生時代中期の方形周溝墓で、5.8m×5.3mの方台部の四周に幅約1mの溝がめぐる。周溝の四隅は陸橋状に浅くなるが、最深部でも0.15m程度とかなり削平を受けていると思われる。北東辺の周溝内の中央部から、溝底に接して横転した状態で弥生土器壺形土器1個体(第41図1)が出土している。S X 32911とは周溝の切り合い関係を持たずに、南東溝をそのまま共有して、「コ」の字形に造っている。

土坑 S K 33615 S D 33613 の西で主軸が並行する。短軸1.6m×長軸4.6mの土坑である。

土坑 S K 32616 S D 33613 の東で主軸が並行する。内部から弥生土器片が出土した。

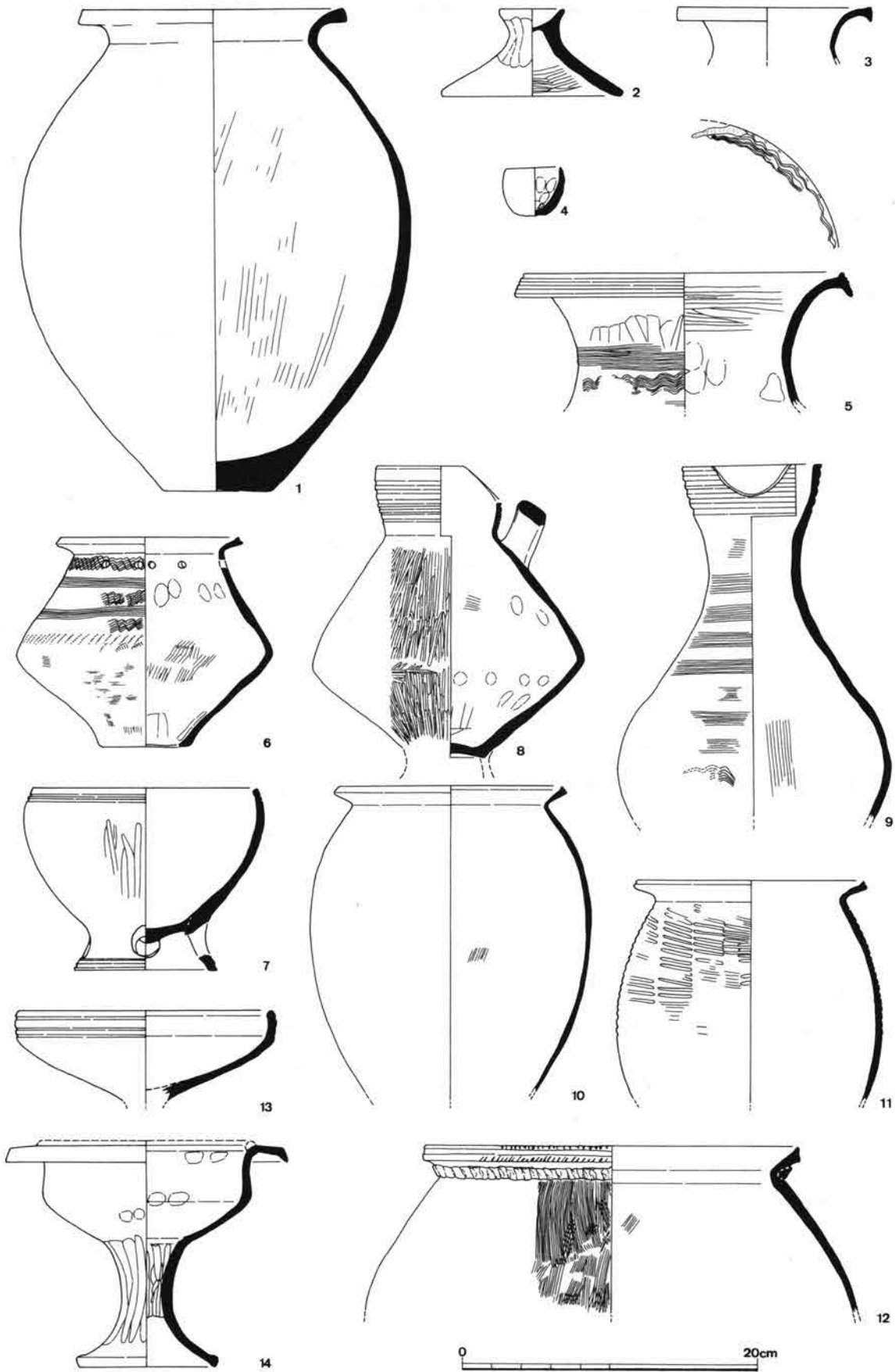
土坑 S K 33617 調査地の東西部で検出した。幅1.6m・長さ7m以上・深さ0.45mを測る。S D 32910の延長の可能性はある。

(岩松 保)

出土遺物(第41図、図版第27)

1は、方形周溝墓 S X 33614 の周溝部分から検出した壺形土器である。器壁外面は剝落し、不明であるが、内面はハケ調整が認められる。2~12は、S D 33612出土遺物である。6は、2か所に穿孔が認められる。7は、脚部に4か所の透かし孔がある。8は、底部付近の器壁外面に剝離痕があり、台付きの水差し形土器と想定できる。

(中川和哉)



第41図 PA工区A-1地区出土遺物実測図(3)

4. 小結

この調査地では、当初の予定どおり、左京南一条四坊四町(左京二条四坊二町)内の諸施設を明らかにできた。ところが、南一条第二小路については、(財)京都市埋蔵文化財研究所の西羽東師川改修工事に先立つ調査で、 $X=-117,396.00$ ($Y=-25,365.00$)の地点で南側溝を確認しているが、今回の調査では、その位置で東西方向の柵 S A 33609 a・b を検出し、条坊側溝は確認できなかった(第35図)。また、南一条第二小路の路面相当位置には柵 S A 33608 a・b が検出され、掘立柱建物跡 S B 33603 が路面推定位置に近接しすぎているため、条坊路とこれらの施設が同時に共存することは物理的に不可能である。これらについては、二通りの解釈が可能である。まず、一つは、今回の調査地と西羽東師川の調査地との間には、東三坊大路が通るため、大路より東側には南一条第二小路がなかった、すなわち最低でも四町の宅地が三町域にまで広がる考え(宅地説)である。二つは、掘立柱建物跡 S B 33603 や柵 S A 33608 a・b の時期が平安時代まで下り、長岡京とは直接には関係せずに、条坊側溝自体は大きく削平されてしまったという考え(削平説)である。宅地説を肯定する根拠は次のとおりである。

- ・この四町では昨年度の左京第336次(B-1 b 地区)を含めて掘立柱建物跡が多く見ついている。
 - ・路面相当位置に柵や掘立柱建物跡を検出している。
 - ・柵が平安時代とすると、側溝の推定位置に偶然に一致するとは考えにくい。
- 一方、削平説を肯定する理由は次のとおりである。
- ・左京第336次(A-1 地区)の北半部は、旧耕作土一床土の直下がいわゆる地山となっており、包含層がない。すなわち、後世に大きく削平されていることが推定される。
 - ・南一条第二小路南側溝と柵 S A 33609 a・b の位置が一致するのは、東三坊大路をはさんだ施工誤差と考えると解釈可能である。
 - ・柵 S A 32903 が一町を南北に二分割する位置にあるので、四町は1/2町の宅地であって、二町以上の宅地とは考えにくい。

次年度には、この調査地の西側を調査する予定であるので、ある程度の答えが出せるものと考えられる。

(岩松 保)

(2) 長岡京跡左京第329次 PA工区A-2地区
(7ANVKN-3)

1. はじめに

左京南一条四坊四町(左京二条四坊二町)に位置し、東三坊大路東側溝及び路面の検出が期待された。

2. 基本層序

基本的な土層は、現代盛り土(約100cm)―旧水田耕作土(約20cm)―床土(約10cm)―黄色混じり淡灰色土(20cm)で、遺構のベースとなる黄褐色土(地山)となる。基本的には黄色混じり淡灰色土上面で中世素掘り溝、地山直上で弥生～長岡京の遺構を検出しているが、調査地の中央部には、黄色混じり淡灰色土下に長岡京期を上限に中世までの暗灰色土(10～20cm)が堆積している。この土層の上面では東西方向の素掘り溝を検出している。東西方向の素掘り溝内とそのベースの暗灰色土からは遺物の出土が皆無で時期の決め手を欠くが、後述の左京第334・335(B-3・5)地区の調査成果から、平安時代の可能性がある。

3. 検出遺構

中世の素掘り溝群、長岡京期(平安時代?)の掘立柱建物跡群・柵、古墳時代の土坑・流路、弥生時代の方形周溝墓を検出した。以下、時代別に概略を述べる。

①中世(第42図、図版第28)

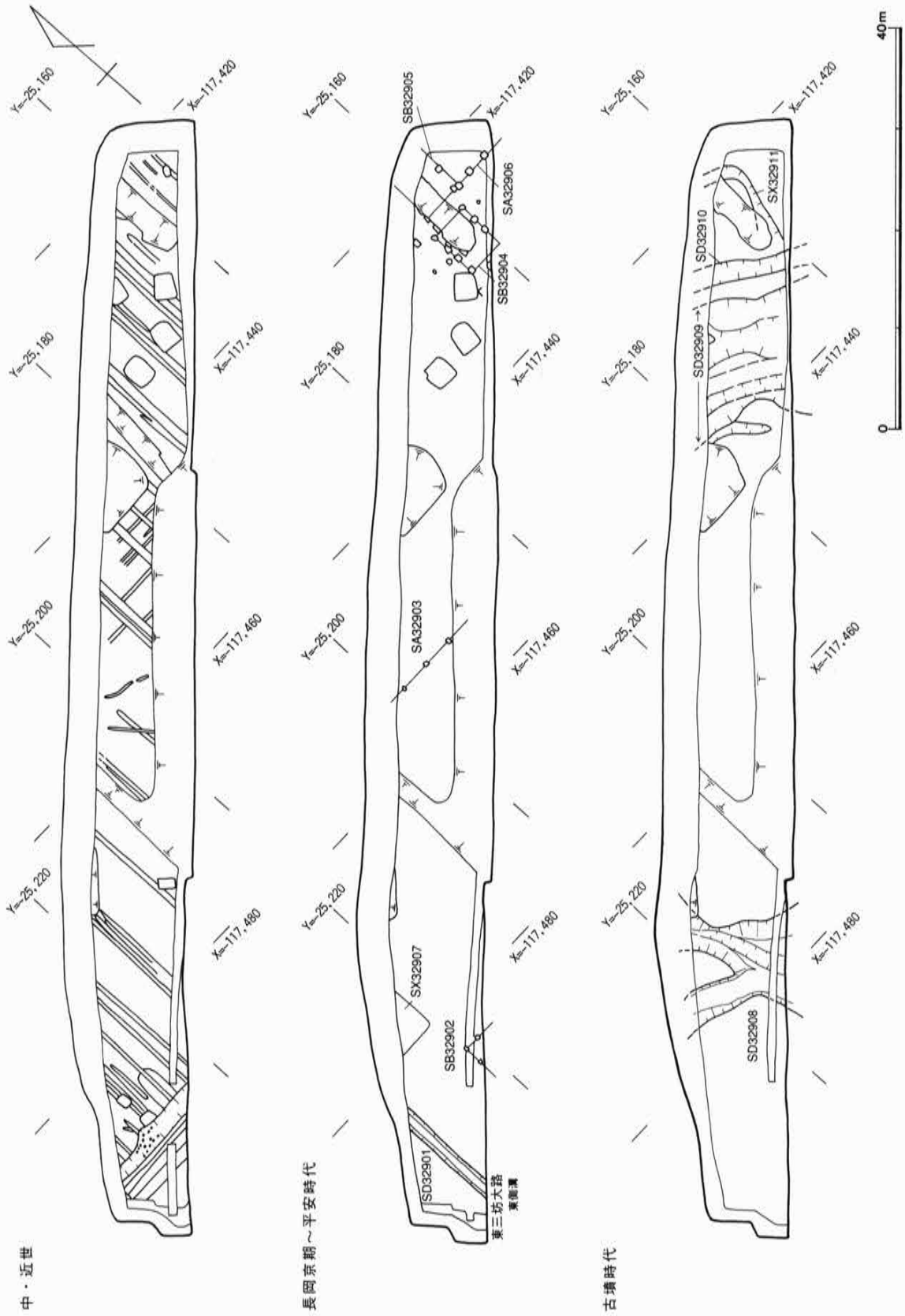
調査地の全域で素掘り溝群を検出した。大部分のものは南北方向であるが、西南端部と中央部分に東西方向のものがある。

南北方向の素掘り溝 幅0.5～0.6m・深さ0.2～0.35mで、4～5条の溝が重複したものが一群となって、4～5mごとに掘削されている。

溝SD01 幅2m・深さ最大0.55mの東西溝である。瓦器椀(第43図1)、須恵器(同図10)が出土した。

東西の素掘り溝群 溝SD01の南で検出した素掘り溝群である。

これらの遺構群は、出土遺物から13～14世紀の年代観が与えられること、SD01を境に方向が変わっていることから、このSD01は13～14世紀以降に地境溝として機能し続け、最終的に埋没したのが現代であったと推定される。A-3地区のSD01も同じ性格のものと考えられる。それに対して、調査地中央部の東西方向の素掘り溝については検討を要する。土層の説明でも述べたように、ここで検出した素掘り溝は、黄色混じり淡灰色土層を介してその検出面が上・下に分かれる。この黄色混じり淡灰色土層には瓦器片などが混じり、上面で検出される南北方向の素掘り



第42図 PA I I A - 2 地区遺構平面図

溝と時期的な差は認められず、13～14世紀の包含層であろう。下面(暗灰色土上面)では東西方向の素掘り溝のみが検出できるが、これらにはほとんど遺物が含まれず、しかも瓦器片を全く含まない。そして、調査地の全域に分布するのではなく、その検出される範囲が限られること、溝の幅が0.2m程度・深さ0.05m程度、検出長が最長でも5～6m程度と規模が小さいこと、溝と溝とが重複していないことなど、南北方向に穿たれた中世の素掘り溝群の検出状況とは明らかに異なる。そのため、これらの東西方向の小溝群は中世の素掘り溝とはその性格・時期が異なる可能性がある。B-3・5地区の調査でも同様の溝群が検出されており、その溝群と同じ性格のものだとすると、これらの溝群も平安時代にさかのぼる可能性がある。

②長岡京期(第42図、図版第29・30)

東三坊大路東側溝、掘立柱建物跡跡、柵跡などを検出した。

東三坊大路東側溝 S D 32901 調査地の西南端にある幅1.2～1.5m・深さ約0.4mの南北溝である。遺物はほとんど出土していない。溝の中心座標は、 $X=-117,486.00$ のとき $Y=-25,230.40$ である。

掘立柱建物跡 S B 32902 調査地の南寄りにある、東西・南北ともに1間以上の掘立柱建物跡である。大部分は調査地外である。柱間寸法は、南北・東西とも1.8mを測る。柱掘形は一辺約0.45mの方形で、深さ約0.2mである。西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,484.10$ ・ $Y=-25,221.50$ である。

掘立柱建物跡 S B 32904 梁間1間・桁行3間の南北棟建物跡である。北側の梁間の中央に大きな攪乱があって柱穴は確認できなかったが、西辺の桁行が3間分で終わり、南辺の対応する位置に柱穴を検出できなかったため、東西1間と考える。柱間寸法は、桁行が北から1.65、1.35、1.65mで、梁間が4.05mである。柱掘形は一辺0.6～0.7mの方形で、深さ約0.4mである。西北隅の柱穴の中心座標は、 $X=-117,425.90$ ・ $Y=-25,163.65$ である。柱穴内から土師器皿(第43図3)、ミニチュア竈(第43図9)が出土した。

掘立柱建物跡 S B 32905 S B 32904の北側にある東西1間(2間?)、南北2間以上の建物跡である。後述の左京第336次調査地にまたがり、A-1地区でその続きを確認した。建物跡の方位は $3^{\circ}50'$ ほど西に振る。柱間寸法は、南北2.55m・東西4.8mである。柱掘形は、一辺約0.65mの方形である。

柵 S A 32906 調査地の東北部にある東西方向の柵である。3間分を確認している。柱間寸法に異同があり、ほぼ2.4m前後に復原できる。この付近は大きく攪乱を受けており、掘立柱建物跡の北辺の可能性もある。東端の柱穴の座標が、 $X=-117,424.00$ ・ $Y=-25,153.65$ である。

柵 S A 32903 調査地のほぼ中央にある東西方向の柵である。3基の柱間寸法は3.3mである。柱掘形は一辺0.4～0.7mの方形で、深さ約0.4mを測る。四町内を南北方向に二分割する位置にあたる。西端の柱穴の中心座標は、 $X=-117,454.60$ ・ $Y=-25,199.10$ である。

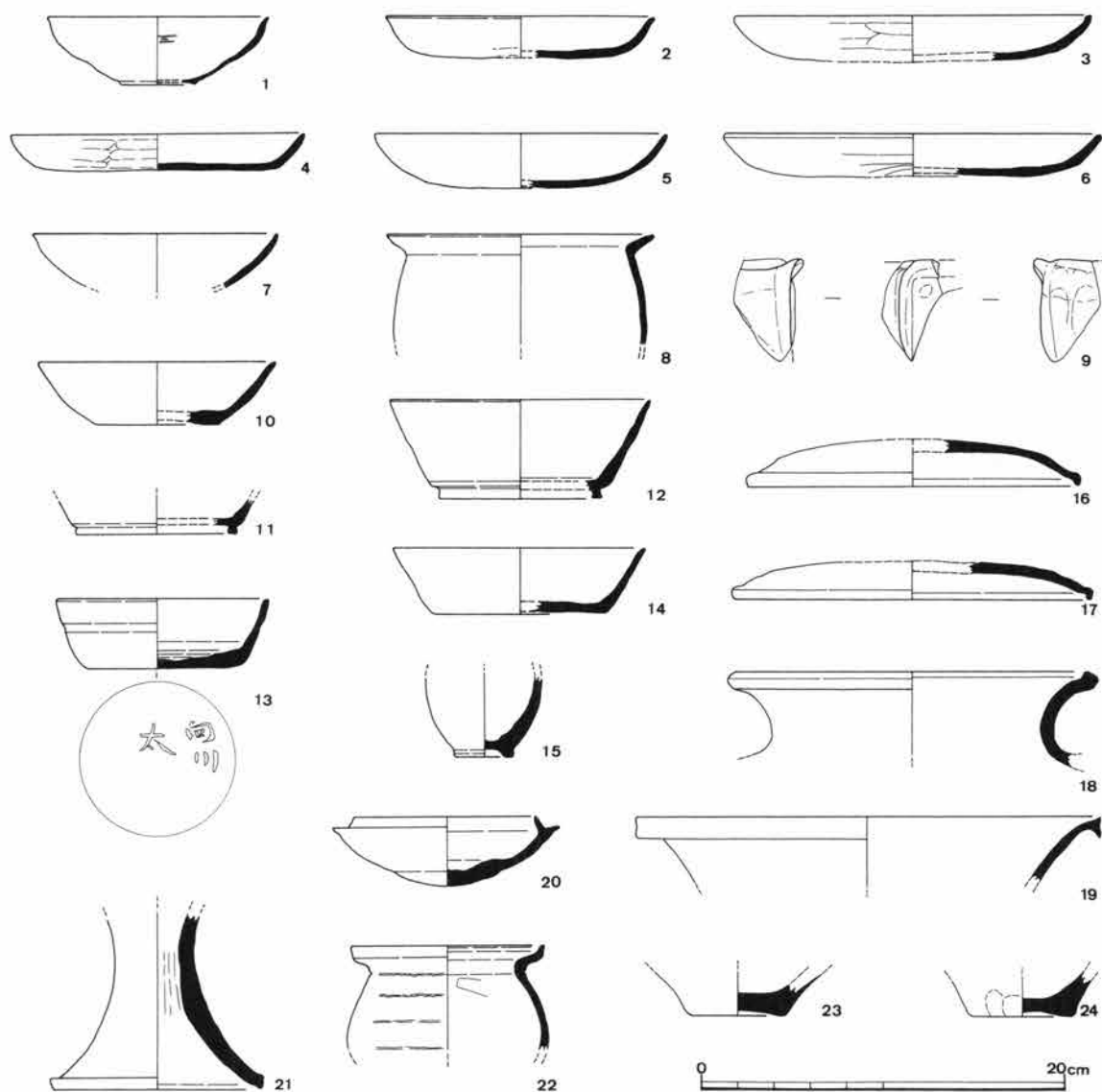
土坑 S X 32907 東三坊大路東側溝 S D 32901の東で検出した。南北5m以上・東西4.5m以上・深さ0.3～0.5mである。遺構内から須恵器杯(第43図11・14)などが出土した。

③弥生～古墳時代(第42図、図版第31)

調査地の北端で方形周溝墓、古墳時代の流路、西南部で古墳時代の流路を検出した。

流路 S D 32908 調査地の南部にある自然の流路である。幅8.5～10m、深さは最大で0.5m、北西から南東に下る傾斜を有している。埋土からは古墳時代後期の土器片がわずかに出土した。トレンチ北東では、二条の溝が合流しているようなプランを示している。平面での切り合い関係は認められず、埋土もよく似ているため、同一の溝に“中州”状のものが残っていたと考えられる。東側の流路は、底面が一段深くなっている。弥生土器底部(第43図24)などが出土した。

流路 S D 32909 古墳時代後期の自然流路である。幅12～14m以上、南東から北西に向けて下る傾斜をもつ。南側では底面に数条の溝が掘削されたような形状を示す。最終の埋土は長岡京期の土器を含み、下層では、古墳時代及び弥生時代の土器が出土した。上層の遺物としては、土師器皿(第43図2・4～6)・杯(同7)・甕(同8)、須恵器杯(同12・13)・杯蓋(同16・17)・甕(同18)があり、このうち13の須恵器杯A底部外面には、「向川」と「太」の墨書がある。下



第43図 P A工区A-2地区出土遺物実測図

層の遺物としては、古墳時代須恵器杯(同20)・甕(同19)、弥生土器高杯脚部(同21)・二重口縁の甕(同22)などがある。

流路 S D 32910 幅0.9mの自然流路である。南東から北西に下る傾斜を有している。溝内からは、須恵器壺(同15)が出土した。

方形周溝墓 S X 32911 調査地の北端部にある「L」字状に曲がる溝である。幅1.2~1.8m・深さ0.15m程度である。左京第336次調査地に続く。遺物には弥生土器があり、方形周溝墓の一部と考えられる。西辺は S D 32910によって破壊されている。溝内からは、弥生土器底部(同23)が出土した。

4. 小結

この調査地では、当初の予定通り東三坊大路東側溝を検出し、左京南一条四坊四町(左京二条四坊二町)内の諸施設を明らかにできた。今回検出した遺構と条坊との関係を見てもう一度。計算には以下のデータを用いた。

南一条大路北側溝 左京第315次調査(X=-117,513.80、Y=-25,170.00)^(注11)

東三坊大路東側溝 左京第329次調査(X=-117,486.00、Y=-25,230.40)(今回報告)

南一条第二小路南側溝 左京第139次調査(X=-117,396.00、Y=-25,365.00)^(注12)

柵 S A 32903は、南一条大路北側溝から59.2m(200尺)北、南一条第二小路から58.6m(198尺)南に位置し、四町の南北幅(117.8m;398尺)のほぼ中央に当たり、四町を南北に二分している。さらに、S B 32902の北西隅の柱穴をもとに計算すると、建物跡の西辺は東三坊大路東側溝から8.9m(30尺)東に位置する。S B 32902の北辺は、南一条大路北側溝から29.7m(100尺)であるので、柵 S A 32903と南一条大路北側溝の間、すなわち四町を南北に1/4に分割する位置にあたる。また、S B 32904の北辺は、南一条第二小路南側溝から29.9m(101尺)、南一条大路北側溝から87.9m(297尺)となり、ほぼ1/4町のラインにあたる。以上のように、S B 32902の北辺、S A 32903、S B 32904の北辺は四町を南北に四分割するラインにそれぞれ位置する^(注13)(第35図)。

(石尾政信)

(3) 長岡京跡左京第330次 PA工区A-3地区
(7ANVST-3)

1. はじめに

この調査地は、長岡京では東三坊大路(路面、西側溝)・南一条大路(路面、南・北側溝)及び左京二条三坊十六町が推定される場所に位置している。長岡京条坊の新呼称では、二条条間大路(路面、南・北側溝)及び左京二条三坊十四町になる。当初の調査区では、東三坊大路西側溝と南一条大路の合流地点が現代の道路側溝のために攪乱を受けて確認できなかつたので、一部拡張を行い両側溝の接続関係を確認した。

2. 基本層序

上層から耕作土(20~30cm)、明褐色土(床土;20~30cm)、淡灰色土(中世包含層;10~30cm)、灰色~淡灰色粘土(弥生・古墳?;10~40cm)、黄褐色土(地山)である。灰色~淡灰色粘土層は、調査地の中央部のみで見られた。そのため、この土層は、弥生時代から古墳時代にかけての浅い窪地に堆積した流路内の堆積土と考えられる。調査地の南端には暗灰褐色砂礫層が地山の黄褐色土層上に堆積していたが、一部断ち割りを行っても、この層からは遺物が出土しなかつたこと、弥生時代の土坑がこの上で検出されたことから、いわゆる地山の一種と判断した。この暗灰色砂礫層は、調査地の西隣りを流れる羽東師川による堆積層と考えられる。

今回の調査では、淡灰色土面で中・近世素掘り溝、灰色~淡灰色粘土面で長岡京の関連遺構を、黄褐色土面で弥生~古墳時代の遺構を確認した。

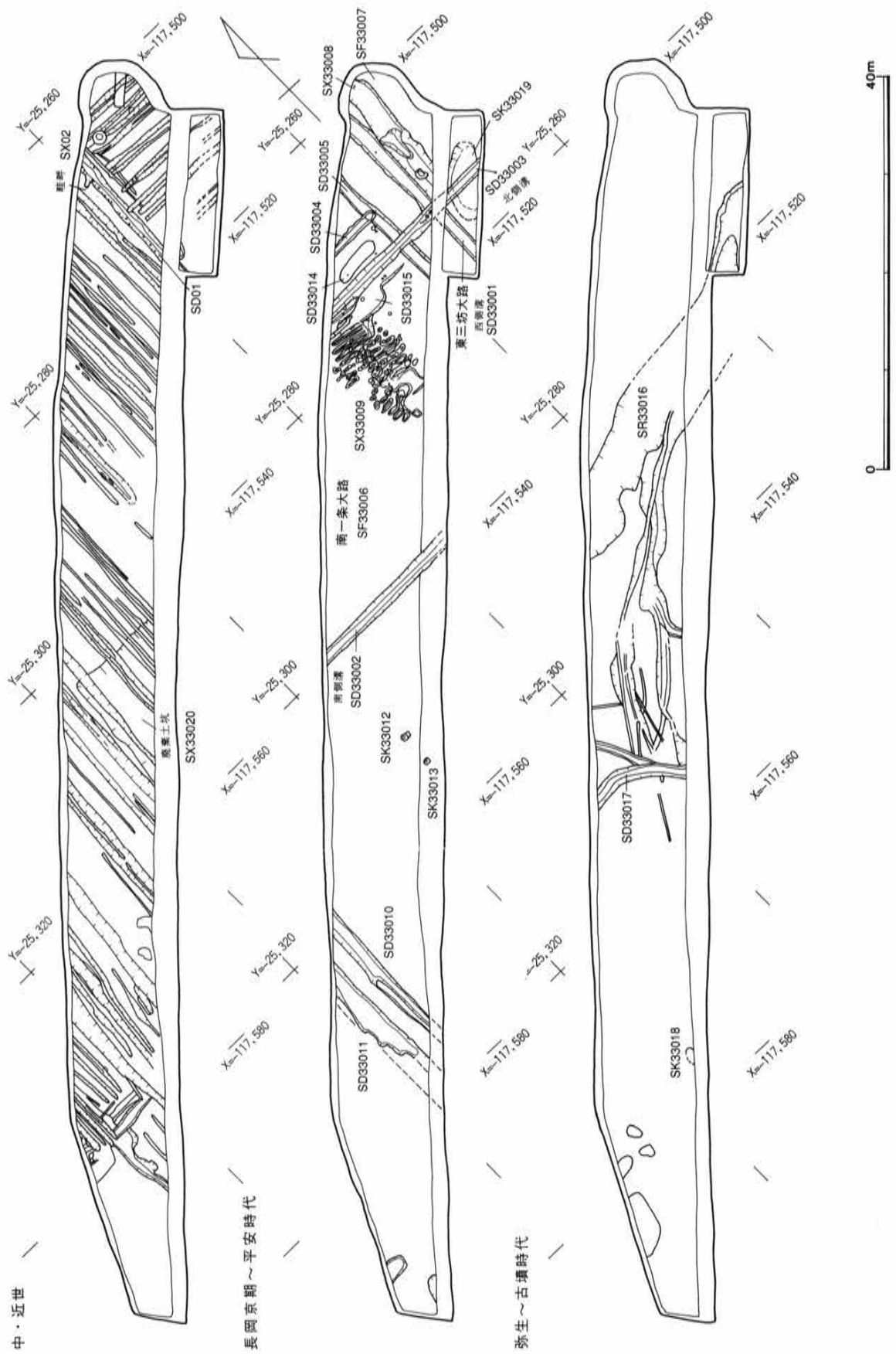
3. 検出遺構

①中・近世(第44図、図版第32)

東西・南北走する中世の素掘り溝を検出した。SD01は、幅1.3m・深さ最大0.35mで、他の溝(幅30~50cm・深さ15cm程度)と較べて規模が大きく、両岸に護岸のための竹が打ち込まれていた。埋土中に現代のゴミが廃棄されていたが、この溝の東・西で、中世素掘り溝の方向が東西→南北に変わっている。さらに、SD01の西側に沿って南北に畦状の高まり(SX02)が検出されたが、これは高さ約0.05m・幅1m程度である。この盛り土中から瓦器小片が出土し、しかもこの畦状遺構の直下でも南北方向の中世の溝が検出できた。これらの点から、SD01は、中世以来存続してきた「地境溝」と考えられ、やや位置を変えながらも現代まで存続していたと推測できる。

②長岡京期(第44図、図版第33・34)

土坑SK33019 中世素掘り溝に切られて検出した東西10.5m・南北12.5m・深さ10~20cmの土坑で、それぞれの辺がほぼ東西・南北に掘削されている。内部には多くの土器片と炭・焼土が



第44図 PAII区A-3地区遺構平面図

「投棄」されていた。これらの遺物は、長岡京期から平安時代前期の土器を主とする。

東三坊大路路面 S F 33007 東三坊大路西側溝(S D 33001)の東側で検出した路面で、左京第329次調査地(A-2地区)のS D 32901とは溝心々で24.65m(83.3尺)を測る。路面上で轍や足跡などは検出できなかった。

東三坊大路西側溝 S D 33001 幅1.3~1.8m・深さ0.1~0.25m、断面皿状の南北溝で、19.2mにわたって検出した。溝心の座標値は $Y=-25,255.05(X=-117,510.00)$ である。遺物には、土師器・須恵器の細片のほかに骨片がある。

南一条大路路面 S F 33006 南一条大路北側溝(S D 33003)と南側溝(S D 33002)に画された路面で、溝心々で25.1m(84.8尺)、道路幅23.3m(78.7尺)である。この路面上では、轍や足跡などは検出できなかった。

南一条大路南側溝 S D 33002 幅1.1~1.4m・深さ0.4~0.5mの東西溝で、16.5mにわたって検出した。土器はほとんど出土していない。溝心の座標値は $X=-117,539.60(Y=-25,290.00)$ である。

南一条大路北側溝 S D 33003 幅1.1~1.55m・深さ0.45mの東西溝である。東三坊大路西側溝(S D 33001)との合流地点では、S D 33003が約0.1m深く掘削されており、東西に5本の杭列の痕跡を認めた。また、土層観察によっても、東三坊大路西側溝から南一条大路北側溝に水が流れ込んでいたことが確認できた。溝心の座標値は $X=-117,514.40(Y=-25,270.00)$ である。東三坊大路西側溝と南一条大路北側溝は、ともに相手の溝を切り合う「+」字をなしていた。このことから、東三坊大路と南一条大路については、互いに優先関係がなかったと推測される。

溝 S D 33004 南一条大路北側溝(S D 33003)の北側で検出した幅0.95m・深さ0.2mの東西溝で、約6mにわたって検出した。南一条大路北側溝と溝心々間で4.3m、幅3.0mの平坦面を隔てて並行する。十三町の宅地の南側を限る築地の雨落ち溝と判断できる。溝の底部は凹凸になっており、出土遺物は全くなかった。東端部は、東三坊大路西側溝の西側3.7mを隔てて終わっている。溝心の座標値は $X=-117,510.20(Y=-25,260.00)$ である。

溝 S D 33005 東三坊大路西側溝の西側4.6~5.2m(溝心々)の位置に、平行して掘削された南北溝で、検出幅1.4~2m・深さ0.2mを測る。南一条大路北側溝(S D 33003)との切り合い関係は確認できなかったが、S D 33004には切り勝っていることが認められた。内部からは須恵器・土師器小片が少量出土しているが、細片であるために時期はよくわからない。長岡京期またはその直後と考えられる。位置的には東三坊大路の西側の築地堀の雨落ち溝とも考えられるが、その断面の形状が浅いこと、南一条大路の路面の上にも掘削されていること、北でやや西に振っていることから、否定的である。この溝の座標値は $Y=-25,255.90(X=-117,510.00)$ である。

不明土坑 S X 33008 東三坊大路路面(S F 33007)上で検出した南北方向の土坑で、最大幅約2.5m・最大深さ0.45mである。東三坊大路西側溝(S D 33001)に切られている。北端は、急激に浅くなって終わる。南端は、南一条大路路面にまでは到達していないので、南一条大路北側溝までで終わっていると推測される。内部からは、須恵器・土師器の小片や骨片が出土しているが、

詳細な時期を決定し得るものはない。しかし、ほぼ南北方向に掘削されており、弥生・古墳時代の遺構が北西-南東方向に分布するのとは違っていること、その南端が南一条大路北側溝で終わっていることから、長岡京の条坊との関連が強いと考えられる。その性格については、推測の域を出ないが、後述のS X 30009と同じく、路盤改良に伴う土坑と考えておきたい。左京第120次調査で検出した二条大路(旧呼称; 新呼称三条条間小路)路面上にも同様の土坑が穿たれている^(註14)。

畝状遺構群 S X 33009 南一条大路路面(S F 33006)上で、東三坊大路西側溝(S D 33001)と南一条大路北側溝との合流付近やや西側で検出した畝状の遺構で、約13m×8mの範囲で検出した。基本的には南一条大路路面内に収まっているが、一部分は南一条大路北側溝の埋土を除去した肩部で検出している。それぞれは、幅0.5~0.8m程度の畝状の溝であるが、径0.5m程度の土坑が「連なって」いる形状ともいえる。内部には淡灰白色砂が埋まっており、埋土を除去していくと、下位にいくにつれて徐々にベースの土も砂質が強くなって、埋土と同じようになってしまい、底面や側面の確認は困難であった。特に、底面は不明瞭である。遺物の出土は少ないが、須恵器蓋Aの口縁端部の破片が出土している。その他に、土坑中の“最下部”に木くずが出ている。検出した範囲の地形は、中央部が低く、東辺と西辺に向けて徐々に高くなっていくために、これらの畝状の溝群も消失している。この地形には、長岡京造営直前の地形を一部残しているものと考えられる。その性格はよくわからないが、畑作に関連したもの、もしくは路盤改良に関連した遺構と考える。

町内溝 S D 33010 調査地南半で検出した二条の南北溝のうち、東側の溝である。幅1.6~1.8m・深さ約0.3mで、南半では西側の肩が二段掘りになっている。内部には暗灰色土系の土が堆積し、四層に分けられる。最下層中には、他の層と比較して炭や土器の混入が顕著である。北半部では、東側から廃棄された状態で長岡京期の土器が出土している。調査地内での傾斜は、北に向かって下る。町内溝 S D 33011とともに、十六町内の町内道路側溝と推定され、十四町の東西幅のほぼ1/2に位置している。溝心の座標値はY=-25,313.80(X=-117,560.00)である。

町内溝 S D 33011 S D 33010の西側で検出した溝で、平坦面1.5mを隔て、側溝心々で4.2m西に位置する。溝幅は2.7m・深さ約0.2mである。南半部は削平を受けたためか、浅くなって不定形に消失している。北端部は上面で検出した中世溝のため、西肩は削平を受けている。調査地内での傾斜は北に下る。S D 33010との心々距離4.2m、溝間の平坦面の幅は1.5mである。座標値はY=-25,318.00(X=-117,570.00)である。そのほか、遺構内から遺物は出土していないが、長岡京期と推定されるものがある。

柱穴 S K 33012・13 柱穴残欠で、南北に二基を検出した。柱間寸法は2.4mを測る。S K 33012は、東西0.9m・南北0.5m・深さ0.3mの掘形に径0.15mの柱根が残る。柱穴の底に小石を敷いていた。S K 33013は、東西・南北ともに0.5m、深さ0.4mの掘形に径0.15mの柱根が残る。S K 33012の柱心の座標は、Y=-25,295.16・X=-117,554.40で、南一条大路南側溝から南に10.8m(36.5尺、溝心から; 以下同)、東三坊大路西側溝から40.26m(136尺)西に当たる。ちなみに、東三坊第二小路東側溝からは80.84m(273.11尺)東に当たる。

③弥生～古墳時代(第44図、図版第34)

流路 S R 33016 流路状遺構で、大きくは東から西に向けて下がっている。中央部で北東から南西に向かう支流が分岐している。幅約5mで、深さ0.25mで、総長41mにわたって検出した。土師器・須恵器の小片が出土、古墳時代と考えられる。

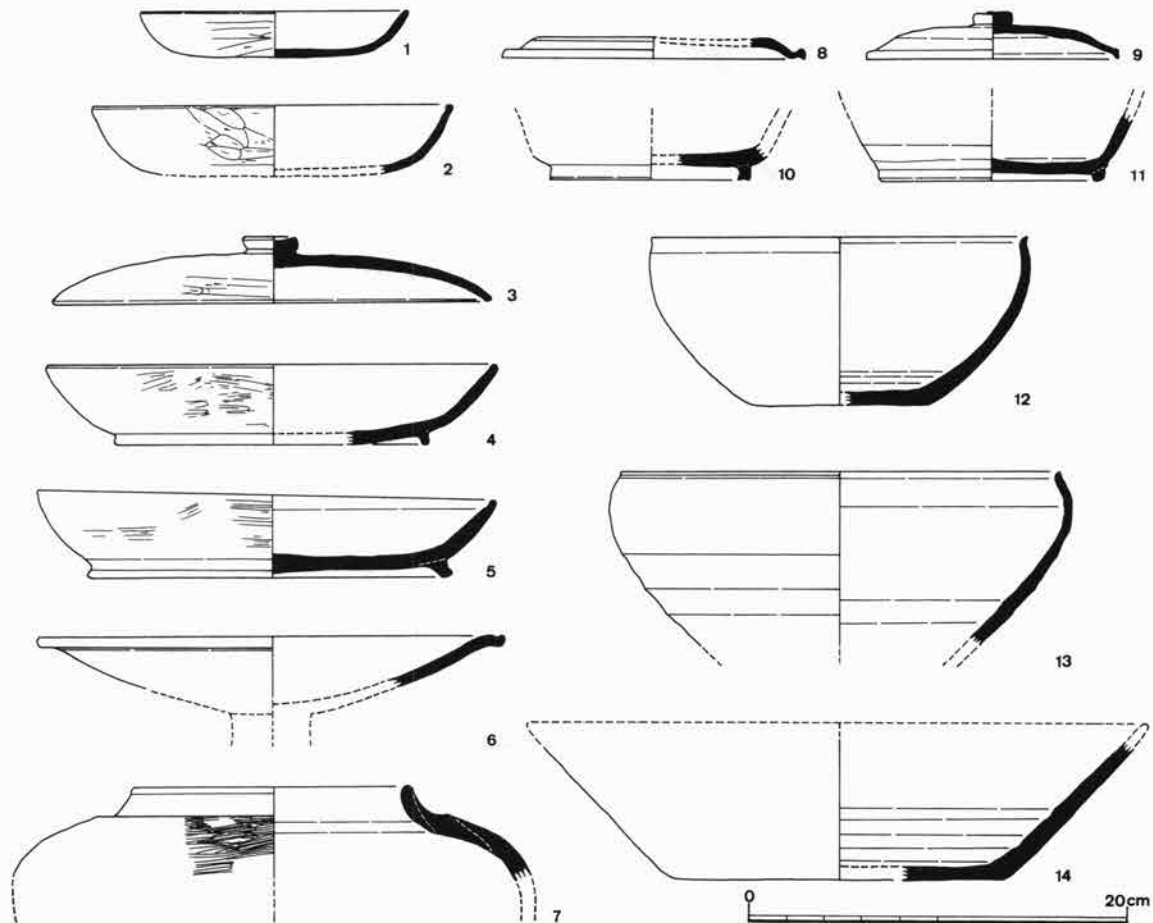
溝 S D 33017 トレンチ中央にある弧状の溝である。弥生土器小片が数点出土している。

土坑 S K 33018 トレンチ南半部で検出した径1m程度・深さ約0.2mの土坑である。内部からは、完形に近い弥生土器壺、鉢、水差し形土器などが破碎して出土している。町内溝 S D 33010の南端に重複しており、ほぼ1/2を確認した。そのほかに、南端部で、弥生土器らしき小片が出土した土坑を検出しているが、詳細はよくわからなかった。

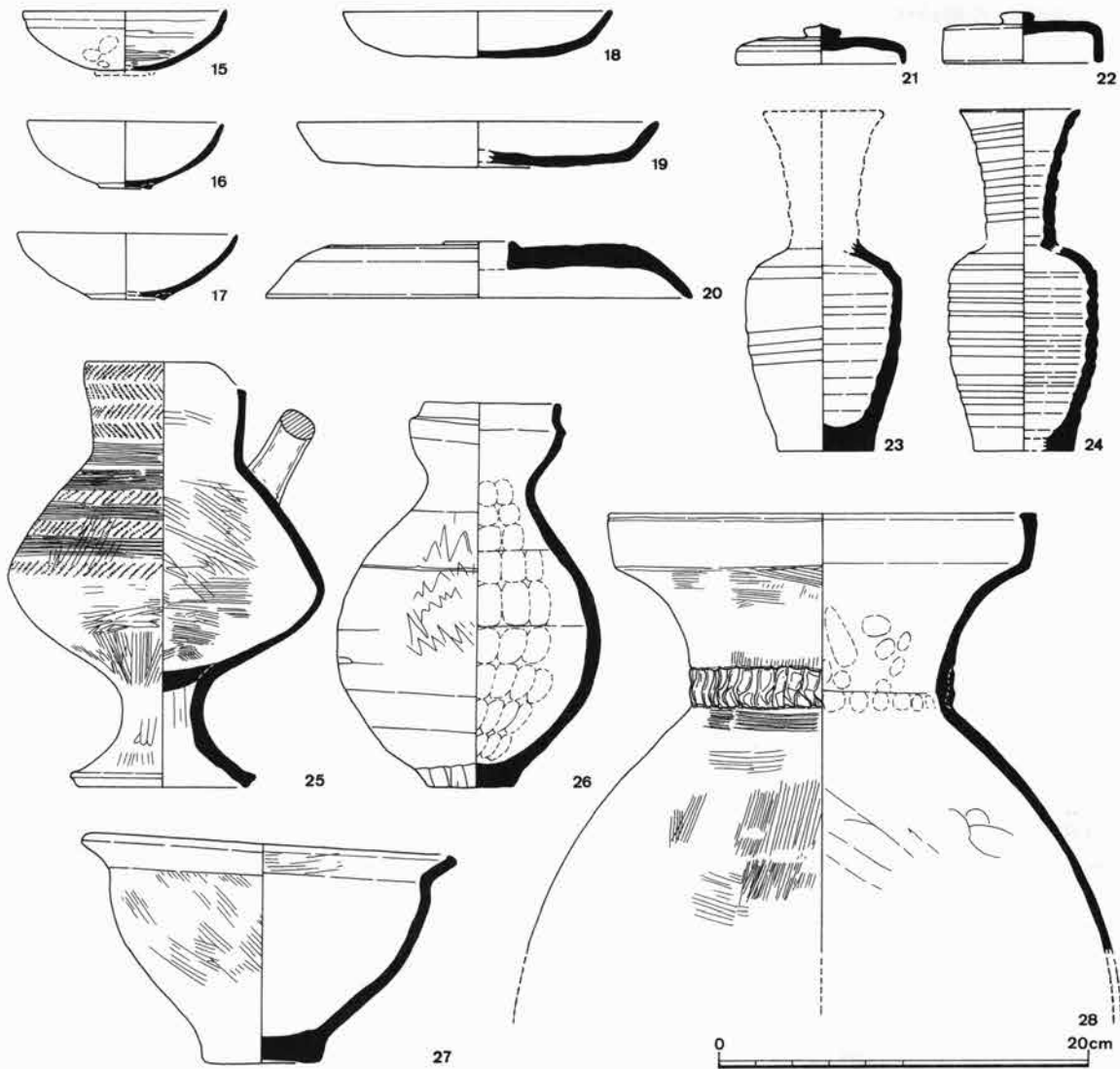
3. 出土遺物(第45・46図、図版第35)

この調査で出土した遺物の量は、整理用コンテナに約30箱分あるが、上層遺構面の S X 33019 から出土したものが大半を占める。そのほかに、長岡京期の S D 33010、弥生時代の S K 33018からは器形のわかるものがコンテナ1箱程度ではあるが、比較的まとまって出土している。

第45図は、長岡京期の遺構から出土した遺物で、1・3～5・7～9・13・14は町内溝 S D 33010から出土したもので、2・11・12は南一条大路南側溝 S D 33002から、6は南一条大路北側



第45図 PA工区A-3地区出土遺物実測図(1)



第46図 P A工区A-3 地区出土遺物実測図(2)

溝 S D 33003、10は町内溝 S D 33011から出土した。

第46図15～17は、中世の南北素掘り溝出土の瓦器碗である。18～24は、S X 33019から出土した。25～28は、S K 33018出土の弥生土器で、出土状況から一括性の高いものと判断される。

4. 小結

この調査地は、長岡京の南一条大路路面と左京二条三坊十六町の宅地の北半に相当するが、今回の調査では明確な建物跡や柵跡などは検出できなかった。この調査地の西側では、西羽束師川の改修に先だち、(財)京都市埋蔵文化財研究所によって発掘調査が実施され、弥生時代の方形周溝墓や条坊関連遺構が検出されているが、十六町内では長岡京の建物跡や井戸などは見つからない^(注15)。一方、名神高速道路拡幅工事に伴って、今年度を実施している左京第331次(B-2b地区)調査は、同じ町内の南半にあたり、掘立柱建物跡を確認している。今後の周辺の調査によって、十六町の宅地利用の実態が明らかになることが期待される(第35図)。

路盤改良遺構と報告した遺構について若干触れておく。東三坊大路の路面で検出した土坑(S K 33008)や南一条大路路面で検出した畝状遺構群 S X 33009は、出土遺物の年代や東西と南北を意識して掘削されていること、路面内で完結していることから、長岡京期または長岡京期に限りなく近い時期と考えられる。しかし、長岡京の条坊側溝に切られているので、長岡京が機能し始めたときには埋没していたと推定される。それぞれの遺構が条坊路面の上のみに設けられていることを重視し、路盤改良に関わるものと考えたい。先述のように、左京第120次調査では、土坑 S K 12027・30・85など9基の土坑が二条大路(旧呼称;新呼称では三条条間小路)路面上などで検出され、中からは土師器・須恵器のほかに、和同開珎・神功開寶や土馬・瓦などが出土しており、報告者は「土壙 S K 12085は二条大路北側溝 S D 12026に切られているため、これらの土壙の少なくとも一部は条坊側溝掘削前あるいは条坊造成時のものである可能性が強い」と記している^(注16)。S X 33009の不整形の浅い土坑群の連なりに関しては、最近、近江俊秀氏が「波板状凸凹面」と呼称してまとめているもの^(注17)に似ている。近江氏は波板状凸凹面を検討し、(1)木馬道、(2)道路の基礎、(3)足掛け、(4)自然発生的なもの、(5)道路遺構でないもの、(6)不明、の六つのタイプに分類した。このうち、道路に関係する前三者は、凸凹の底面や側面が硬化していること、埋土が大量に詰められたり硬化していることが分類の条件となっている。S X 33009は、埋土や底面・側面が硬化しておらず、近江氏の分類に従うと、道路に関連した遺構ではないこととなる。しかし、検出した地形からみて、自然的なものとも考えがたい。確実に路面上に位置していることを重視したい。特に、長岡京の条坊路の路面上で同様の遺構が検出されるかどうか、今後の課題である。

(岩松 保)

(4) 長岡京跡左京第337次 PA工区B-5地区
(7ANVKN-5)

1. はじめに

この調査区は、左京南一条四坊五町にあたり、東四坊第一小路が想定される地点である。当初、名神上り線側で予定された調査地点を工事の工程に合わせて変更したものである。

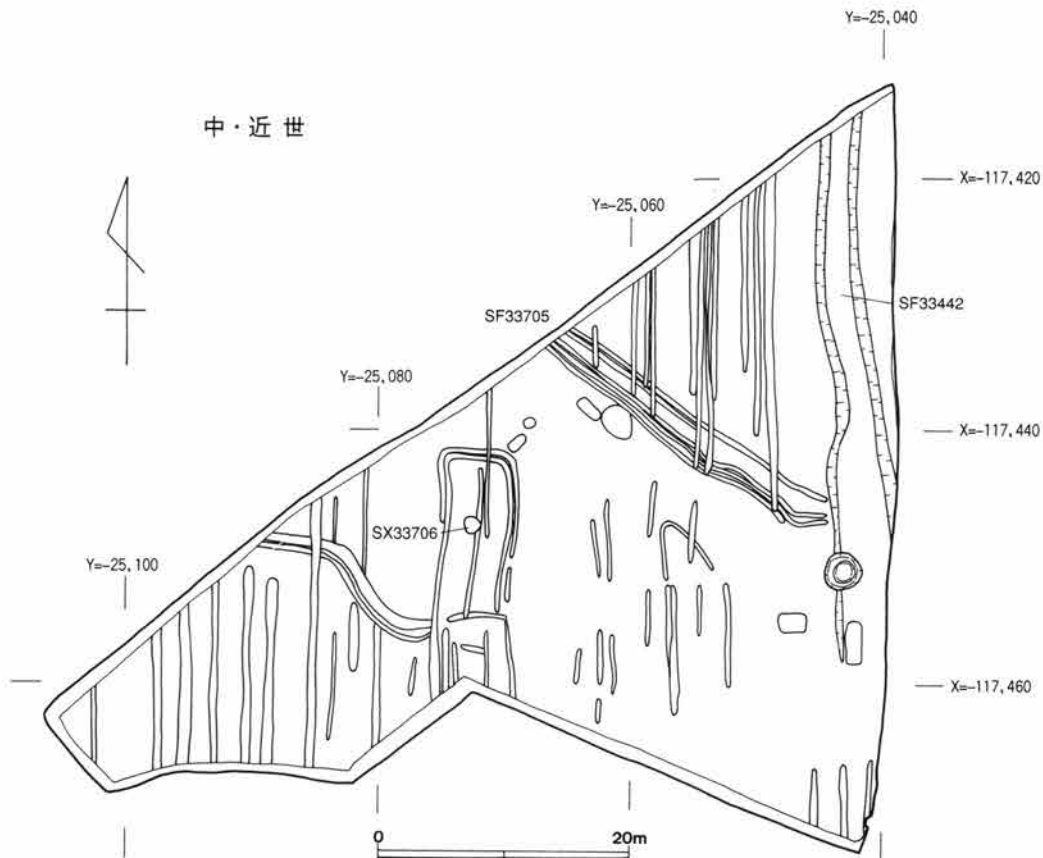
2. 調査の概要

①中世(第47図、図版第36)

南北溝群 幅0.2~0.4mの素掘り溝は、3~5本が重複して一群をなす。溝群の間隔は約5.3mを測り、水田一枚の単位がわかる。瓦器碗や土師器の細片が出土した。

道SF33442 幅1~1.8mを測るやや弓なりの南北方向の道路で、SF33705付近で極端に広がる。道の両側に幅0.3~0.5m・深さ約0.3mの溝を持ち、土師器・瓦器・瓦などが出土した。

道SF33705 道幅約1mを測り、斜行してSF33442に取り付く。道の両側に幅0.2mの溝が3条ずつ重複している。この道を境に、南側では水田面が低くなる。



第47図 PA工区B-5地区遺構平面図(1) 中・近世

S X 33706 トレンチ中央部の、南に開口する「コ」字状の2条の素掘り溝と、中央の土坑が組み合わされた遺構である。溝幅0.2m・東西6m・南北12mを測る。中央に、径約1m・深さ0.6mの不整円形で、断面甕腹状の土坑が掘られている。配水施設を持つ溜め井戸の機能が考えられる。出土遺物には13世紀の瓦器椀(第50図1)がある。他に、平城宮式軒丸瓦(第50図2)がある。

②平安時代(第48図)

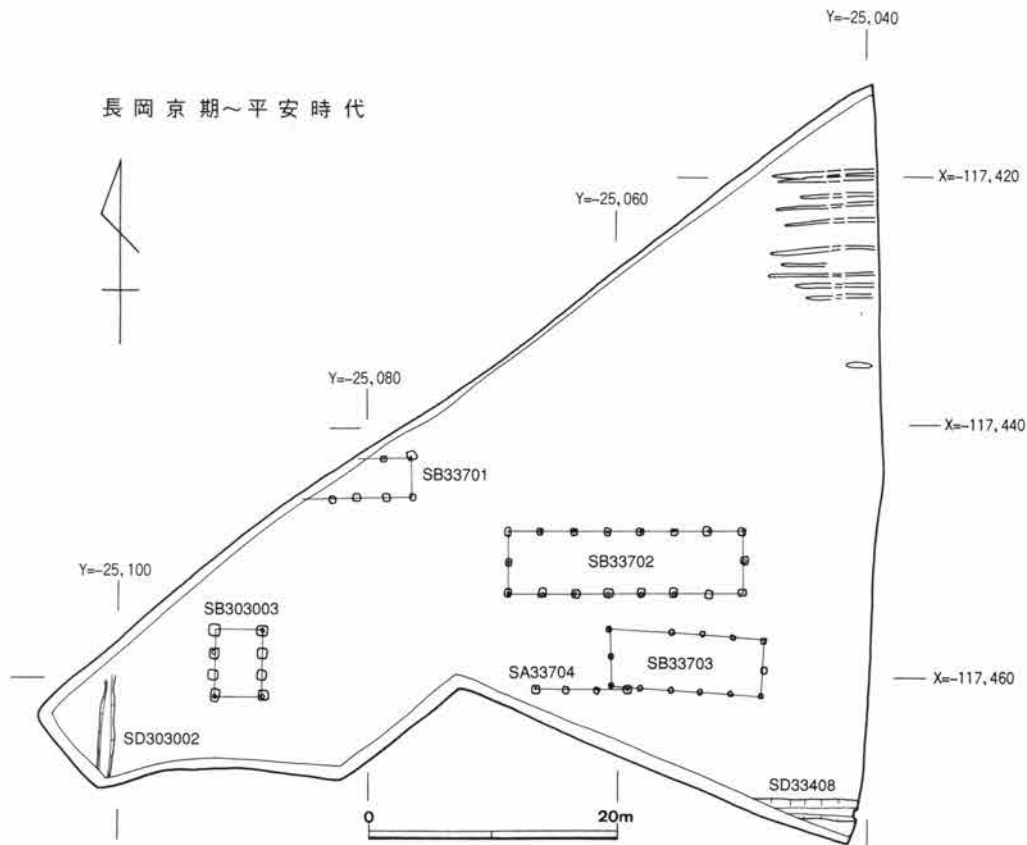
東西溝群 調査地の北東寄り、S F 33442の下層から検出された。溝幅0.2~0.3m・深さ0.1mを測る素掘り溝である。溝の間隔は約1.3mで、畑地の畝と考えられる。

③長岡京期(第48図、図版第37)

掘立柱建物跡 S B 33702 2間×7間の東西棟の建物跡である。柱間寸法は、梁間2.52m(8.5尺)・桁行2.67m(9尺)等間である。方位はほぼ真北を向く。柱掘形は、一辺0.6~0.7mの方形で、柱痕跡径は約20cmである。掘形の底に礎板を据えた柱穴がある。

掘立柱建物跡 S B 33703 2間×5間の東西棟建物跡である。柱間寸法は、ほぼ、梁間2.33m(8尺)・桁行2.52m(8.5尺)。方位は、N3°Eで、やや東に振る。柱掘形は、一辺0.4~0.5mの方形を呈し、1か所で直径18cmの柱根が出土した。

掘立柱建物跡 S B 303003 1間×3間の南北棟の建物跡である。柱間寸法は、梁間3.85m(13尺)・桁行1.8m(6尺)の等間である。方位は、ほぼ真北を向く。柱掘形は、一辺1mの方形を呈し、柱痕跡径は、20cmを超える。多くの柱穴には、柱の抜き取り穴があり、北西隅では拳大の小



第48図 P A工区B-5地区遺構平面図(2) 長岡京期~平安時代

石が投げ入れられていた。

掘立柱建物跡 S B 33701 南北1間分・東西3間分を検出した。柱間寸法は、南北3.2m、東西は2.1~2.4mと不ぞろいである。おそらく、東西棟であろう。方位は、ほぼ真北を向く。柱掘形は一辺0.4~0.5mの方形を呈している。

柵列 S A 33704 東西3間の柵列である。柱間寸法は、2.4m(8尺)の等間である。柱穴の掘形は、一辺0.6~0.7mの方形で、柱痕は直径0.2mを測る。

溝 S D 33408 左京第334次調査(B-3地区)に続く。幅1.5~1.7m・深さ0.7m・断面「U」字形を呈する。方位は、ほぼ真東西を向く。溝の中心の座標は、X=-117,471.00である。遺物は、上層から土師器が出土した。

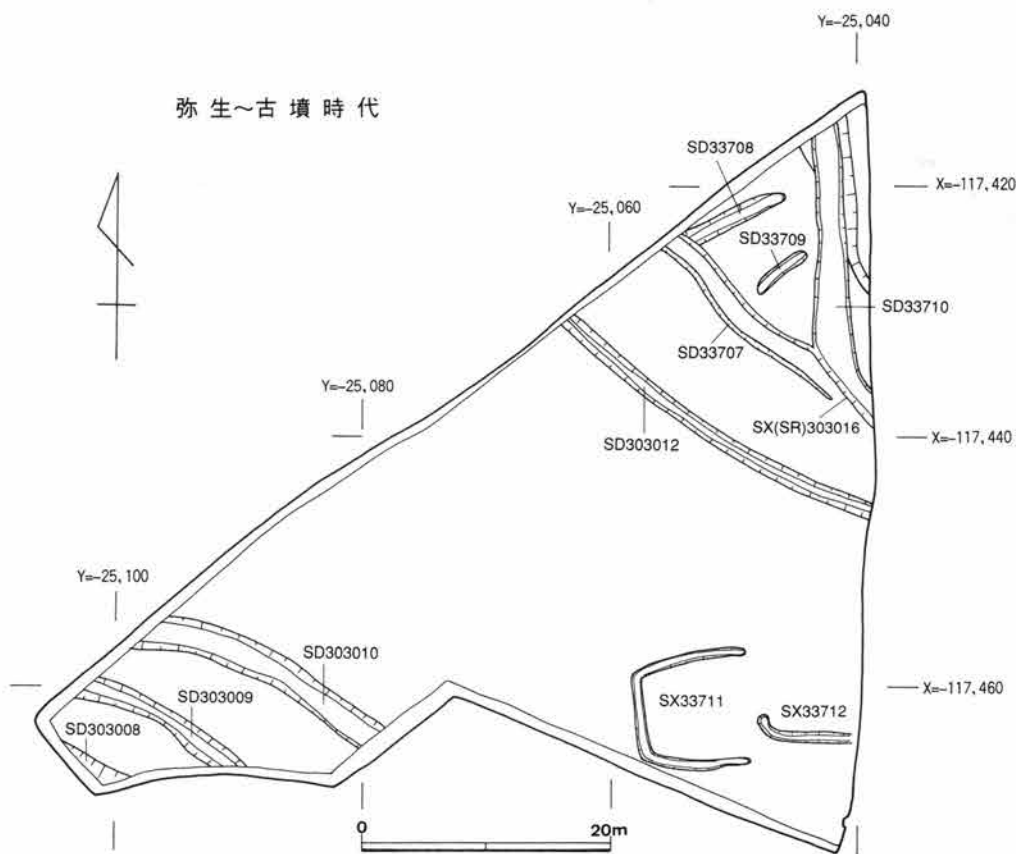
溝 S D 303002 ほぼ真南北方向の素掘り溝で、東四坊第一小路の東側溝にあたる。幅は、約1m・深さ0.3m、断面は皿状を呈する。遺物は、土師器細片が出土している。

④古墳時代(第49図)

溝 S D 303008 西北西から南東方向の流路で、東肩部のみを検出した。これは、昨年度行った左京第303次調査の延長部にあたる。流路内には、灰色砂が急激な流れで厚く堆積している。庄内・布留期の土師器が出土した。

⑤弥生時代(第49図、図版第37)

溝 S D 303009 北西から南東へ「S」字状に流れる、左京第303次調査の延長部分である。幅



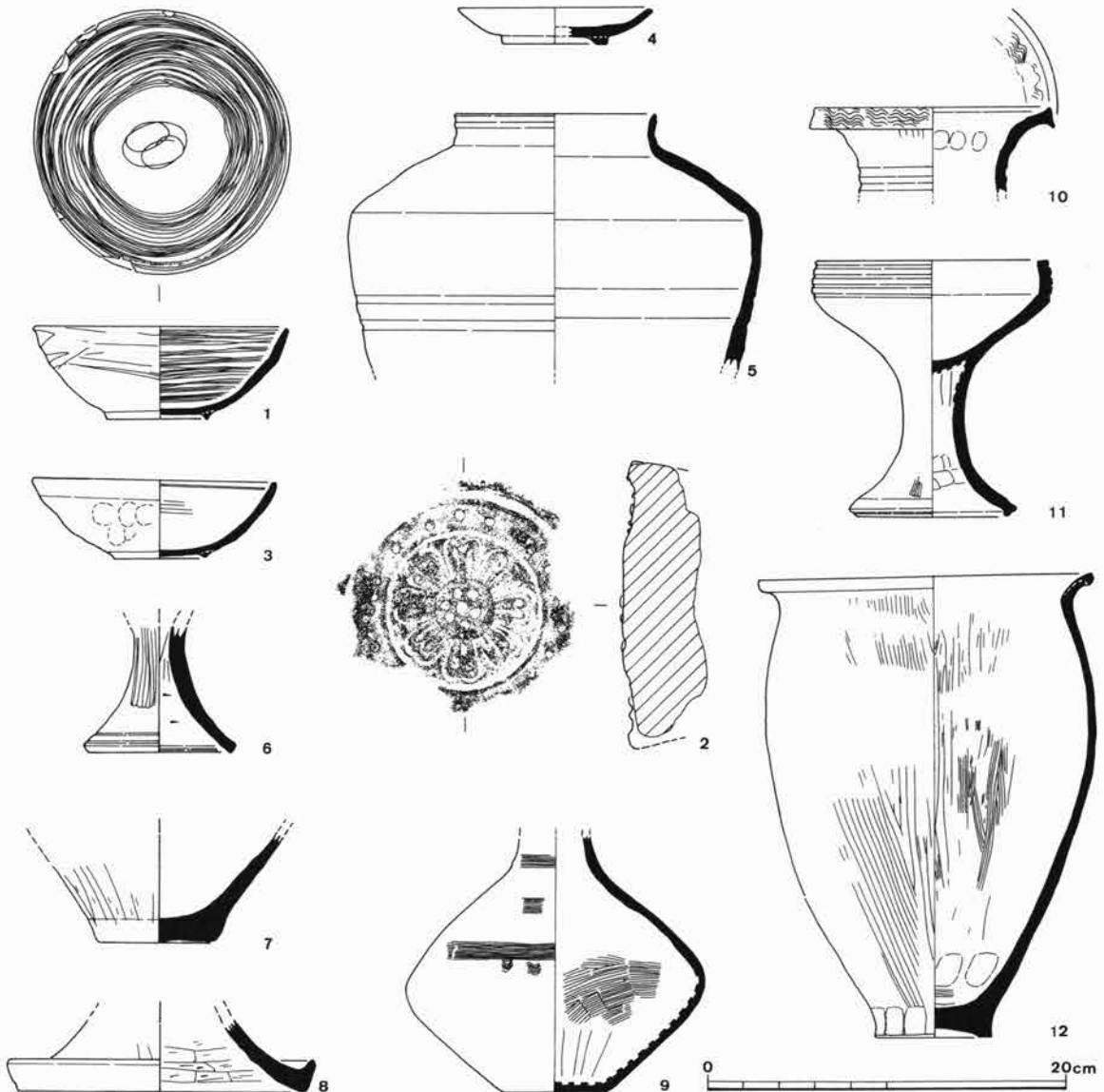
第49図 P A工区B-5地区遺構平面図(3) 弥生~古墳時代

1.0～1.4m・深さ0.2～0.3mを測る。堆積土には、砂層がラミナ状を呈する部分が認められる。

溝S D 303010 S D 303009に並行し、北西方向から南東方向の流路で、昨年度行った左京第303次調査の延長部分である。幅3m・深さ0.5～0.6mで、断面逆台形を呈する。堆積土は、上層では黄色土、中層は暗褐色腐植土、下層は青灰色粘質土・砂層である。

溝S D 33710 北から南へ流れ、左京第334次調査(B-3地区)で東に屈曲する。幅3～4m、深さは北辺で一段深くなり0.5m以上、南半で0.3～0.4mを測る。堆積土は、2層に分かれ、上層が腐植土混じりの暗黒灰色粘質土、下層が淡灰色砂層である。底には杭があり、護岸の施設と見られる。上層から弥生時代後期の土器が出土している。

溝S D 303012 北西から南東方向の弓なり状の溝で、調査地北端から約30m分を検出し、左京第334次調査地区で途切れる。溝は、幅1.5m・深さ0.6mを測り、断面は「U」字状を呈する。遺物としては、弥生時代中期の壺が出土した。この溝とS R 303016は、約7～8m離れた位置にある。方向・時期が似ており、両者の間には、土手、あるいは道路の空間が考えられる。



第50図 P A工区B-5地区出土遺物実測図・拓影

溝 S D 33707 流路 S R 303016の肩に並行する幅0.3m・深さ0.2mの素掘り溝である。この溝と S R 303016は、約2m離れた位置にあり、S D 303012と同様 S R 303016に関連する。堆積土は、暗青灰色粘質土である。

流路 S R 303016 北西から南東方向に流れ、左京第334次調査に続く。流路の幅約10m・深さ0.5~1.2mを測り、20m分を検出した。堆積土は、大きく3層に分けられる。上層は暗灰色粘質土、中層は灰色粗砂、下層は暗褐色腐植土である。

溝 S D 33708・09 S R 303016の河床から肩部へと直交する溝状遺構である。いずれも、幅約1m・深さ0.4mを測り、断面逆台形を呈する。堆積土は、暗灰色粘土の単一層である。S R 303016に関連する遺構である。

方形周溝墓 S X 33711 一辺8mの方形を呈する。周溝の深さは0.1~0.2mと浅く、南辺で弥生土器片が少量出土した。

3. 出土遺物(第50・51図、図版第38・39)

1・2は、S X 33706から出土した。瓦器碗(1)は、13世紀にあたる。2は、平城宮式6303型式である。3は、中世素掘り溝群から出土した。4・5は、S F 33442出土である。4は、見込みに螺旋文、高台内面に沈線があり、釉調は濃緑色と近江系緑釉陶器の特徴を示す。6・7は、S R 30316の出土である。8・9は、S D 303012の出土で、8は高杯脚部、9はⅢ様式の壺である。10~12は、流路 S R 303016出土で、10は口縁端面に櫛描きの波状文、頸部に凹線文を持つ壺である。11は、杯部外面に凹線文を施す高杯で、12は内外面ともにハケ調整を施す甕である。

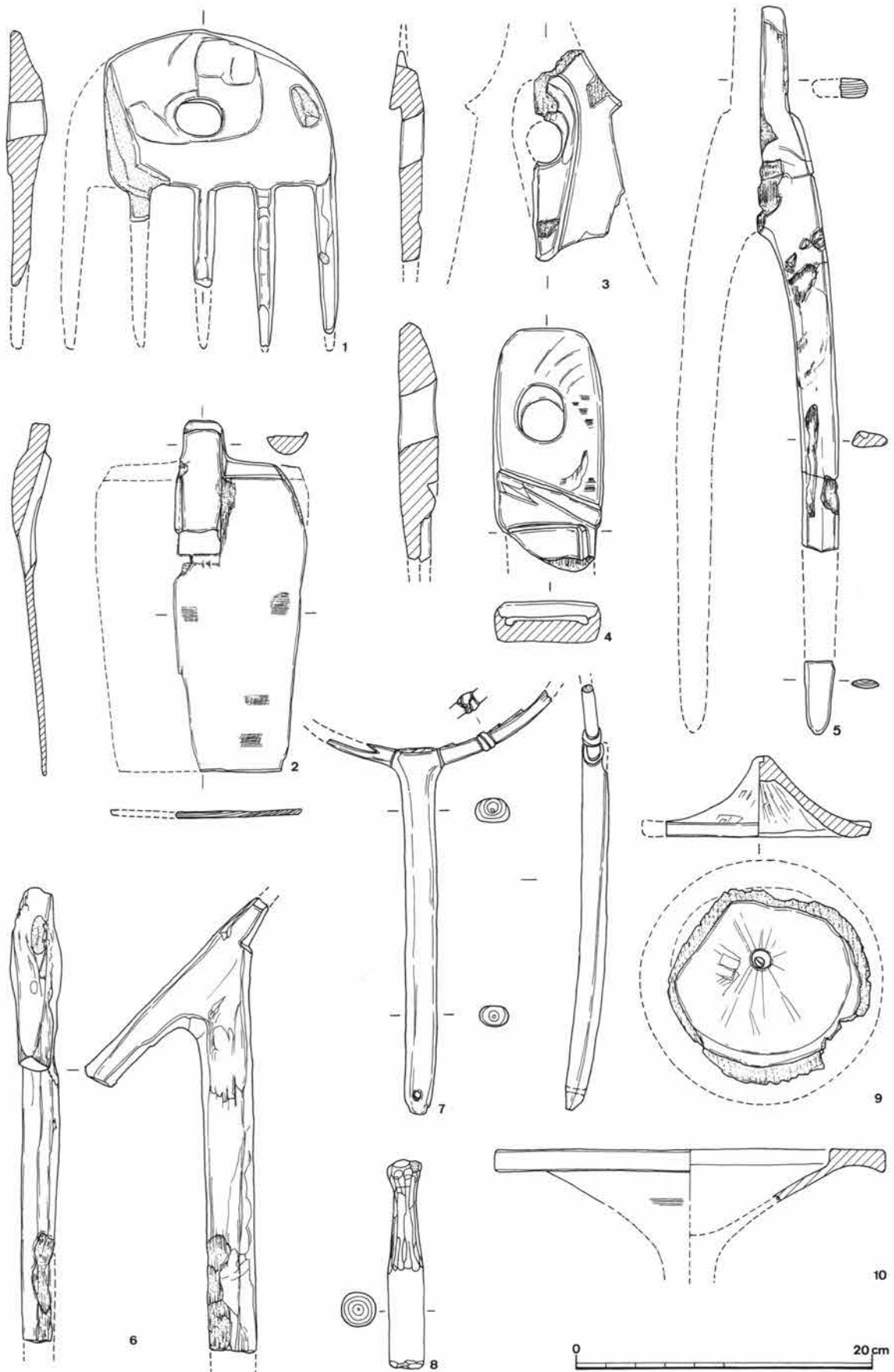
S R 303016からは、土器以外に多種多様な木製品が出土した。種類としては、農具・漁労具・食事具がある。農具では、1が五叉鍬、2が着柄式の平鋤、3がナスビ形鍬、4が鉄または石製の刃部着装式の鍬、6が鍬または鋤の柄などである。漁労具では、7には柄尻に紐の通し穴を持つタモがある。製品は一木造りで、幹部を柄とし、枝部を二本利用して輪を造り、接合部は桜の皮で留める。食事具では、8が手臼用の杵、9が削り物の蓋、10が同じく削り物の高杯杯部である。

4. 小結

道 S F 33442は、わずかに位置をずらして現在の里道が走り、中世の坪境の道と考えられる。左京南一条四坊五町では、昨年度の左京第303次調査とあわせ5棟の掘立柱建物跡を検出した。弥生時代には、流路 S R 303016を境として南側は微高地の縁辺部にあたり、北側は湿地状の地形である。S R 303016から S D 303009・303010の間には方形周溝墓や土壙墓が営まれており、墓域としての土地利用がうかがえる。

出土した弥生時代の木製品には、叉鍬・鋤・鍬・鍬または鋤の柄・タモ・手臼用の杵・蓋・高杯がある。左京第334次調査(B-3地区)出土品の臼も合わせて、臼・杵がセットで確認されるなど、質的にも量的にも良好な資料と考えられる。

(戸原和人・竹井治雄)



第51図 PA工区B-5地区出土遺物実測図 木製品(すべてSR303016出土)

(5) 長岡京跡左京第334次 PA工区B-3地区
(7ANVKN-2)

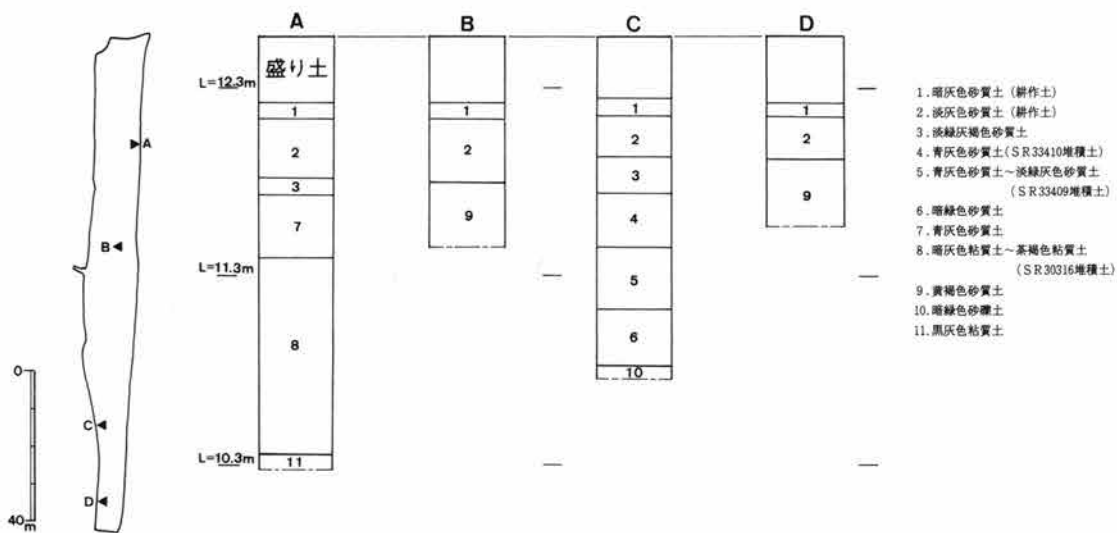
1. はじめに

この調査地は、長岡京跡左京南一条四坊五町(新呼称;左京二条四坊七町)及び南一条大路(新呼称;二条条間大路)にあたり、調査地区の北端部は、東土川遺跡にも重なる。主な検出遺構として、中～近世では井戸・素掘り溝群、長岡京期から平安時代では南一条大路・井戸・溝・流路・素掘り溝群など、弥生時代から奈良時代では流路及びそれに関わる水利施設(堰・護岸遺構・地盤改良遺構)などを検出した。そのうち、弥生時代中期の流路からは、多数の木製品(工具類・農具類・武器類・食器具・容器など)が出土した。

2. 基本層序

調査区は南北に長く、土層は下層遺構の存在も加わり、変化に富む。そのため、これらの土層すべてを提示すると煩雑になるため、第1層～第11層を基本層序として認識し、北(第52図A地点)、中央(第52図B地点)、南(第52図C地点)、南端(第52図D地点)の4か所の柱状模式図を作成し、調査区全体の遺構の状況を以下に説明する。

第1層と第2層は、近世以降の耕作土で、調査地全面に広がる。中世～近世にかけての遺構群や古墳時代～平安時代の遺構の一部(井戸SE33407・溝SD33408・南一条大路路面SF33443・二条条間大路南北両側溝SD315001・SD315002・流路SR33415)は、この層を除去した段階で検出した。第3層は、北(層厚約10cm)と南(層厚約20cm)に広がる平安時代の遺物を含む包含層である。小溝群SD33451～SD33466や流路SR33410は、この層を除去した段階で検出した。



第52図 PA工区B-3地区土層断面柱状図

第4層は、流路S R33410の堆積土(層厚約30cm)である。平安時代の遺物を含む。流路S R33418、溝S D33409・33417及び不明遺構S X33422・S X33425、地盤改良遺構S X33423は、この層を除去した段階で検出した。第5層は、溝S D33409の堆積土である。長岡京期の遺物を含む。この層を除去した段階で杭列S X33438、不明遺構S X33441、溝状遺構S X33439、土坑S K33440、地盤改良遺構S X33431を検出した。第6層は、落ち込み状遺構S X33430、流路跡S X33418・33419の堆積土である。古墳時代～奈良時代の遺物を含む。この層中で、溝S D33416、溝状遺構S X33433、土坑S K33420・33421、護岸遺構S X33424・S X33426・33427・33429、堰S X33428を検出した。

第7層は、弥生時代の遺物を含む流路S R30316の堆積土(上層)である。この層を除去した段階で、落ち込み状遺構S X33434～33436、溝S D33411・S D33414を検出した。第8層は、北にある流路S R30316堆積土(中・下層)である。弥生時代の遺物を含む。この層中から溝状遺構S X33412を検出した。縄文時代晩期や弥生時代中期の遺物を含む。

3. 検出遺構

①中世～近世(第53図、図版第40)

井戸3基、溝及び小溝群、土坑を多数検出した。

井戸S E33401 径約2.3m・深さ0.5mの円形掘形の井戸である。底に径1.8m・深さ0.3mの井戸枠を残す。底に有機質の集積層がみられた。

井戸S E33402 径1.8m・深さ0.5mの円形状の掘形の井戸である。径1.4m・深さ0.5mの井戸枠を残す。底に有機質の集積層を確認した。

溝S D33413 左京第337次調査(B-5地区)から続く蛇行する溝である。幅約0.65m・深さ約0.25mで、断面台形を呈する。

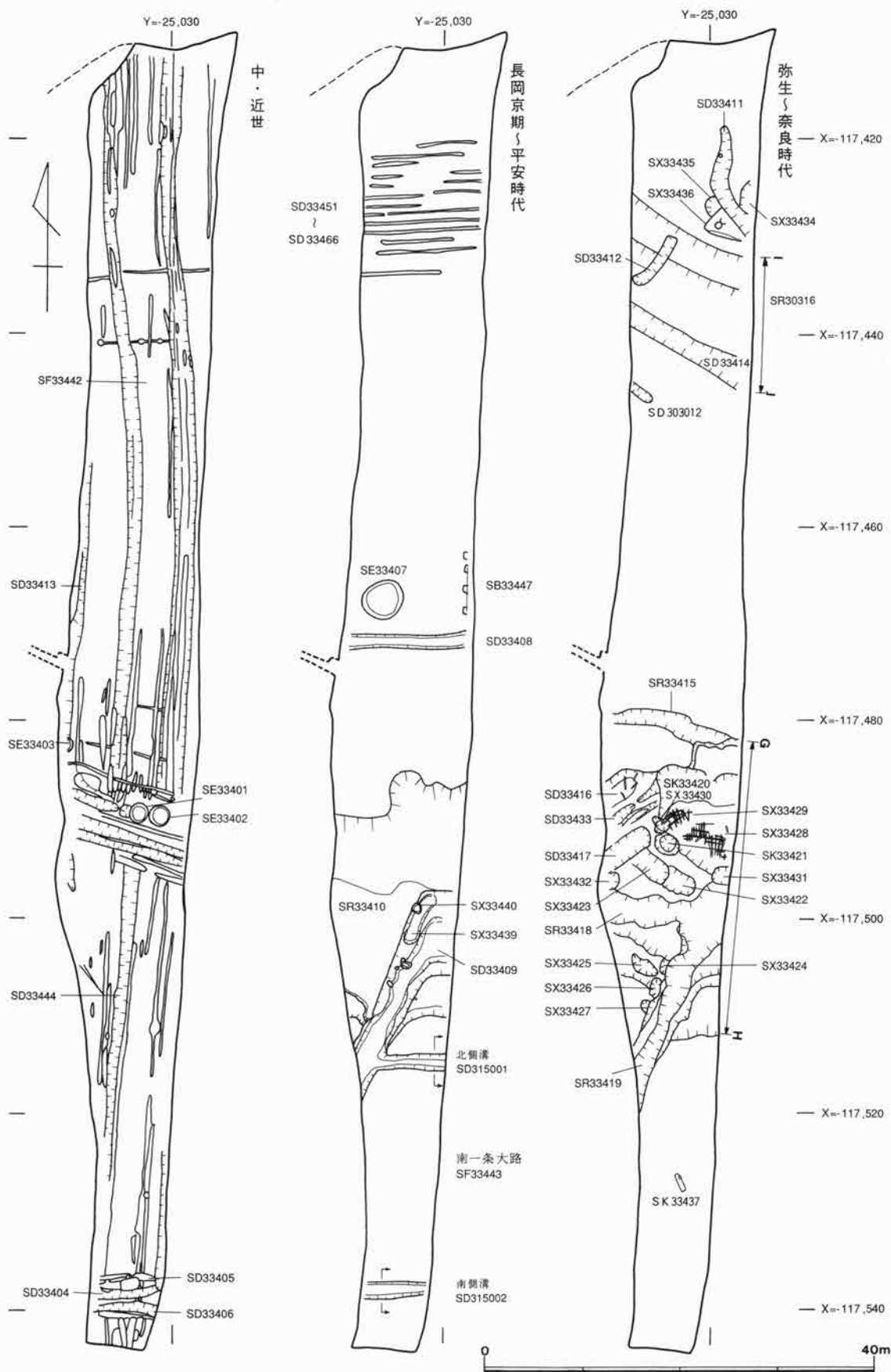
溝S D33444 直線的にのびる溝で、幅1.5m・深さ0.25mを測る。断面は、ゆるやかな台形を呈する。

溝S D33404～33406 ともに幅約0.7m・深さ0.2～0.3mで、断面台形を呈する。これらの溝は、ほぼ現代の坪境下に位置する。

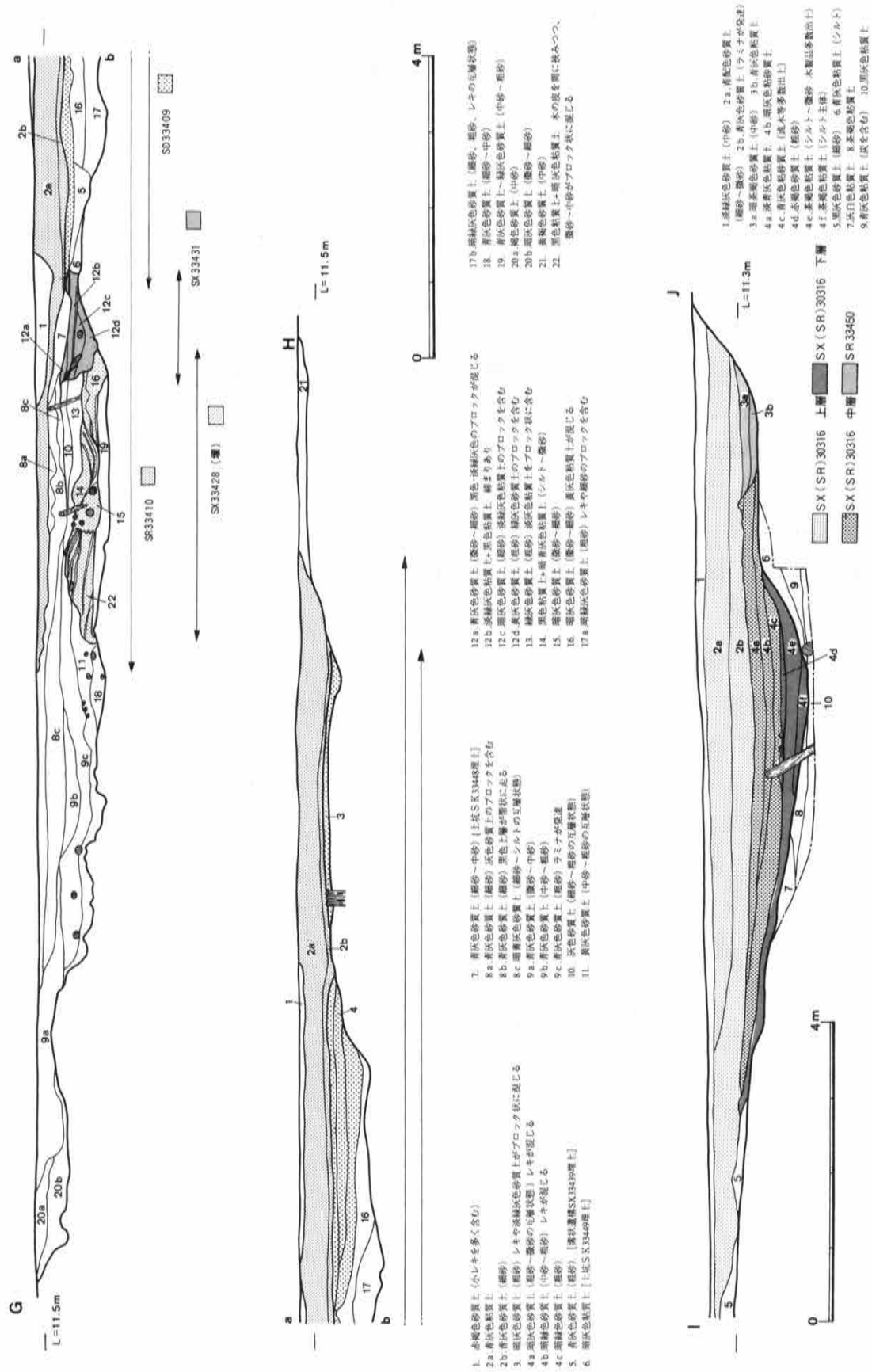
小溝群 わずかに痕跡を残すものから、深さ0.2m前後を測るものまでさまざまな状況を呈する。調査地の中央を南北方向に蛇行しながら走り、同一走向で3回以上掘られるものと、南北方向に直線状に走り調査地内で途切れるものがあり、埋土はいずれも青灰色の色相を呈する。また、調査地の中央にある東西から15°前後南に斜行するもののみは、埋土が淡緑灰色の色相を呈する。これらの遺構は、詳細な時期を決める遺物はないが、遺構の切り合い関係などから、ほぼ13・14世紀以降のものといえることができる。

②長岡京期～平安時代(第53・55～58図、図版第40～42)

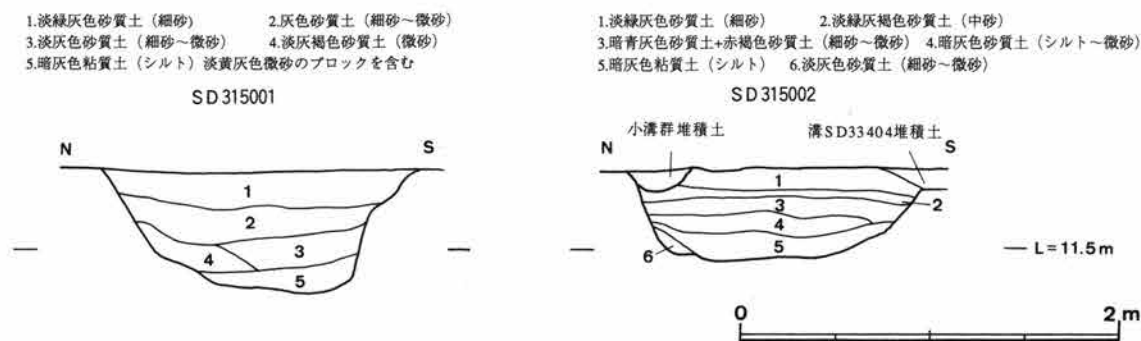
南一条大路路面S F33443 並行して走る溝S D315001とS D315002を側溝とする道路で、両側溝の心々距離は24.2mを測る。



第53図 PA工区B-3地区遺構平面図



第54図 PA工区B-3地区遺構断面図(1)



第55図 PA工区B-3地区遺構断面図(2) 南一条大路南北側溝

南一条大路北側溝SD315001 検出長約4.5m・幅約1.5~1.7m・深さ約0.6mを測る。埋土は5層に大別できる(第55図)。第2層から銅銭が、第5層から獣骨・須恵器・土師器が出土した。溝心の国土座標は、Y=-25,032.00でX=-117,513.30である。

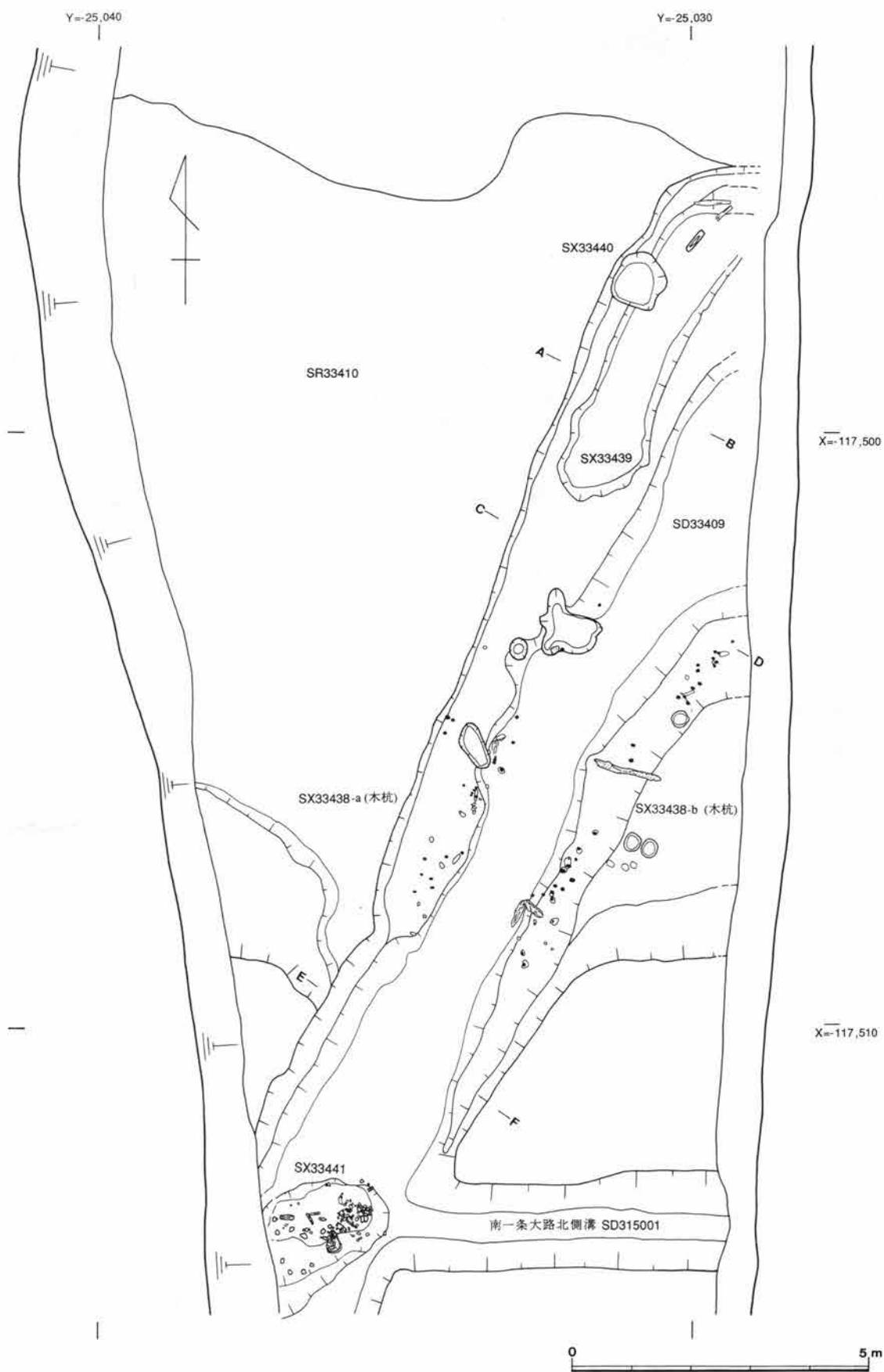
南一条大路南側溝SD315002 検出長約4.5m・幅約1.3~1.6m・深さ約0.5mを測る。埋土は6層に大別できる(第55図)。下層から須恵器・土師器片が出土した。溝心の国土座標は、Y=-25,032.00でX=-117,537.50である。

溝SD33409 調査地南側で約16m検出した。北東から南西方向に流れる素掘り溝である。溝SD33409北半部については、流路跡SR33410の底面で検出した。南一条大路北側溝SD315001とは、切り合い関係を持たず合流する。断面は二段掘り状を呈する。南半部(断面E-F)はほぼ垂直に近い肩部から、一度ほぼ平坦な面をもち、さらに台形状の落ち込みをもつ。幅3.0~4.0m・深さ0.3mを測る。北半部(C-D)は、ゆるやかな肩部から起伏をなす平坦面を持ち、さらに皿状に近い落ち込みを持つ。幅は3.0~4.0m・深さ約0.3mを測る。埋土は、大別して3層に分かれる。上層は淡褐色~緑灰色の砂質土、中層は暗灰色~黒灰色の砂質土(シルト~極細砂のブロックを多く含む)、杭列SX33438-a及びbを覆う層である。下層は、暗灰色~淡緑灰色の砂質土、底面には礫や砂が多く混じる。ただし、溝SD33409北半部に上層はなく、流路SR33410の堆積土が覆う(第57図)。

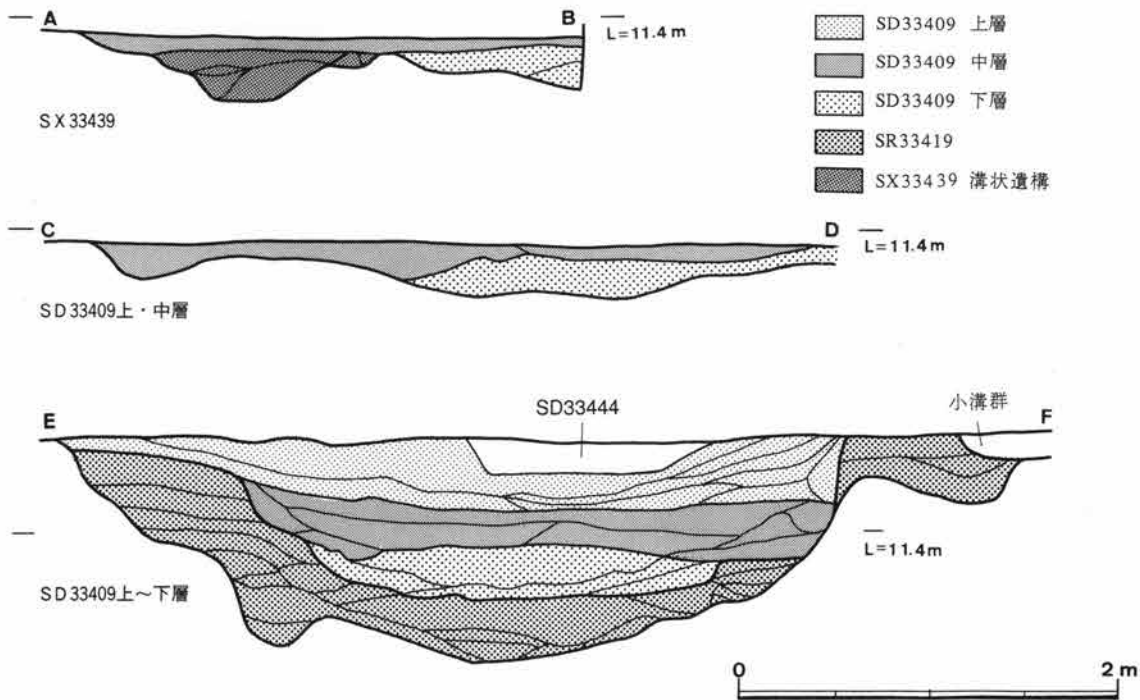
遺物としては、上層から須恵器・緑釉陶器などが、中層から木製品(木簡、曲物)・祭祀関係遺物(土馬、人形)・獣骨・須恵器・土師器など、下層から獣骨・須恵器・土師器などが出土した。

杭列SX33438-a 溝SD33409下段の西肩のほぼ中央で、長さ5.6mにわたり検出した北東から南西方向28本の杭列である。ほぼ4mほどの範囲に2~3列に密に打ち込まれており、他は少ない。杭材は、樹皮を剥がず先端のみ加工したものと、蜜柑割りした角材の先端を加工したものが使用されている。前者は直径0.53m、後者は幅0.53mで、平均すると、検出面(杭の頂部)は標高11.26mを測り、杭の打ち込みの深さは標高10.65mを測る(第56図)。

杭列SX33438-b 溝SD33409下段の東肩の中央~北側で、長さ6.6mにわたり検出した北東から南西方向の34本の杭列である。中央部分2.4mほどと北側部分1mほどの範囲に集中し、2~3列に密に打ち込まれている。杭材の状態は、SX33438-aと同様である。検出面(杭の頂部)は標高11.31m、杭の打ち込みの深さは標高10.80mを測る。



第56図 PA工区B-3地区中央主要遺構平面図 長岡京期~平安時代



第57図 PA工区B-3地区遺構断面図(3)

杭列SX33438は、溝SD33409の護岸施設と考えられるが、杭の位置に規則性が見られず、横材を伴わず、しがらみ状のものであったと考えられる。

溝状遺構SX33439 溝SD33409下段の西肩の北半で溝SD33409にほぼ平行して検出した溝状遺構である。幅1.2m・長さ2.7m以上・深さ0.3mを測る。埋土の観察から、人工的に埋められた可能性がある。底面で建築部材が出土した以外、遺物はない。

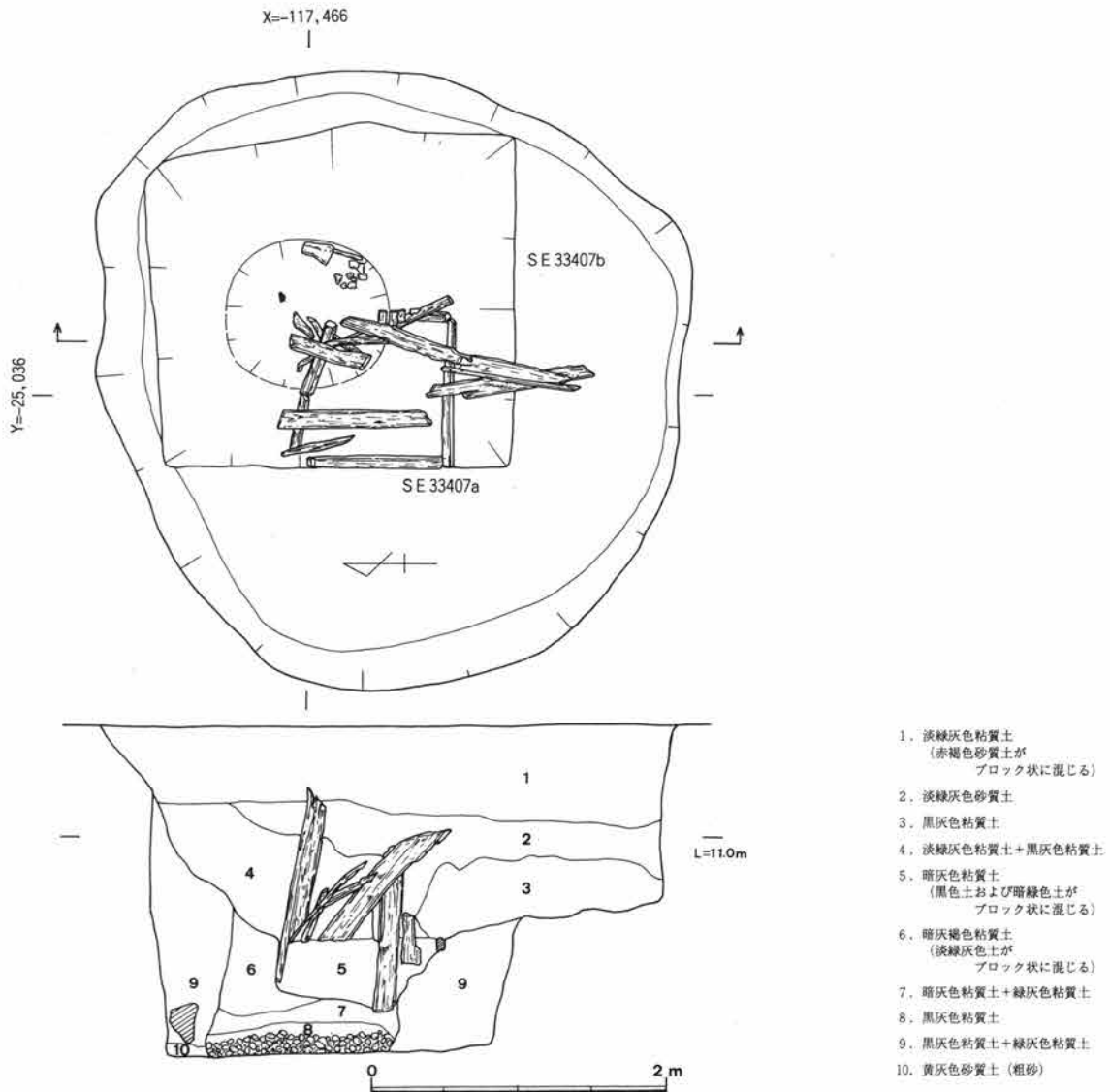
土坑SX33440 溝状遺構SX33439に隣接して検出した不整形土坑である。東西0.6m・南北0.8m・深さ0.3mを測る。埋土は黒灰色粘質土で、遺物はない。

不明遺構SX33441 溝SD33409が南一条大路北側溝と合流する地点の底面で検出した不整形な落ち込みである。東西1.6m以上・南北2~2.3m・深さ約0.1~0.2mを測る。底面には玉石が散在し、その上面から獣骨(馬の頭骨)・須恵器片・土師器片が出土した。埋土は、溝SD33409の下層に対応する。

溝SD33408 調査地中央で約10m検出した東西方向の素掘り溝である。幅約1.5m・深さ約0.3mで、断面が「U」字形を呈する。埋土は3層あり、下層が中砂~粗砂で、比較的均質なところから、流水による堆積であろう。上層から無釉陶器片が出土した。溝心の国土座標は、Y=-25,032.00・X=-117,470.70である。

掘立柱建物跡SB33447 溝SD33408の北側で南北2間分を検出した。柱間寸法は約2.4m(8尺)である。方位は真北を指す(第53図)。

井戸SE33407a 直径約4m・深さ約2mの掘形の井戸である。井戸枠は、一辺約0.9mの縦板横棧止め、正方位に一致する。埋土最上層からは、須恵器(甕体部、甕)、土師器皿に混じって鏡片が1点出土している。



第58図 井戸 S E 33407実測図

井戸 S E 33407 b 調査地中央部にある方形掘形の井戸で、同じ位置で造り替えられた S E 33407 a に大きく破壊されている。掘形は、現状では2段掘り状をなす。上段は不整形、下段は東西2.2m・南北2.4mの方形、方位に合う。深さ約2.2mを測る。井戸枠は遺存しないが、痕跡の一辺1m、底に玉石を敷く。玉石上面で横櫛・黒色土器が出土した(第58図)。

流路 S R 33410 調査地南部にある。西から東に流れる流路で、幅20m以上・深さ約0.3~0.4mを測る。埋土は2層で、上層が青灰色砂質土、下層が青灰色砂質土(粗砂が混じる)である。出土遺物には、獣骨、須恵器、土師器などがあり、平安時代に埋没したと考えられる(第53図)。

小溝群 S D 33451~S D 33466 調査地の北端で検出した素掘りの溝群である。平安時代の包含層である第3層を除去した後に検出した。13条の小溝が断続的に続く。すべて東西方向で、幅0.3~0.4m・深さ0.05~0.1mを測る。断面は台形かレンズ状、埋土は淡灰色砂質土である。溝間の距離は、幅約1m前後を測る。

②弥生時代～奈良時代(第53・54図、図版第41・42)

落ち込み状遺構 S X 33430 調査地の中央より南で検出した。南北約14m・東西約7m・深さ0.4～0.9mの沼状の不整形な落ち込みである。北から南に二段に落ち込み、西から東に向かい、ゆるやかに深くなる。各時代に水利関係施設を造営している。

堰 S X 33428 落ち込み状遺構 S X 33430内で検出したいわゆる木組み構造の堰である。長さ5m・幅3.9m・高さ0.4mを測る。S X 33430の底に10cmほど土砂が堆積した段階で構築している。構築状況から南側が前面で北側が背面になると考えられる。まず、堰の背面は木の皮を間に挟みながら砂混じりの粘質土をもりあげ、その上に横材と木の皮をかませつつ斜め材を約10～30°の角度で打ち込む。さらに、横材と横材の間に約70～90°の角度で縦杭を打ち込む。木組みの前面には木の皮を重ねて粘土を盛ることで水流をせき止めていたと考えられる。堰は、さらに東側のび、流路跡 S R 33419に直交していたと思われる。

護岸遺構 S X 33429 落ち込み状遺構 S X 33430内にある木組み遺構で、S X 33428の北側にやや角度をもって位置する。長さ2.5m・高さ約0.2mを測る。約70°の角度で縦杭を打ち込み、横木をかませて約10°の斜め杭を打ち込んで押さえる。隙間には小枝を詰め込んでいる。

土坑 S K 33420・33421 ともに不整形円形を呈し、二段に落ち込む土坑である。前者は砂粒を多く含む粘砂質土で、後者は砂礫と粘砂質土の互層となって埋まっていた。

地盤改良遺構 S X 33423 S X 33430と S R 33418の間にある。この地点は、軟弱なシルト質土が厚さ0.2～0.5mで、その下に拳大の礫層が厚く堆積する。シルト層を4m×2mの範囲で取り除き、約25°の角度で斜め材を打ち込み、横木をかませた後約80°の角度で縦杭を打ち込む。さらに、木の皮を敷き詰め、粘質土を充填する。

地盤改良遺構 S X 33431 S X 33430と S R 33419の間にあり、S X 33430がほぼ埋まった段階でつくられる。東西1.8m・南北1.4mの楕円形の範囲を、深さ0.6mゆるやかに掘り込み、横木をかませながら約20°の角度で斜め材を打ち込み、さらにほぼ垂直に縦杭を打ち込む。格子状に組み合わされた横木と斜め材の上面には、木の皮と締まった粘質土を交互に積み上げて充填している。

不明遺構 S X 33422 S X 33430と S R 33418の間に位置する。長軸2.8m・短軸2.2m・深さ0.1～0.5mを浅く掘り込んだ後、粘砂質土を充填している。

不明遺構 S X 33425 流路跡 S R 33418と流路跡 S R 33417の間にある。3.0m×1.4m・深さ0.2mの浅い不整形の土坑である。粘砂質土を充填する。

不明遺構 S X 33432 流路跡 S R 33418の北側の肩部にある。浅く不整形な土坑で、粘砂質土を充填している。

土坑 S K 33448 落ち込み状遺構 S X 33430と流路 S R 33419の合流点の東側壁面にある。長さ0.7m・深さ0.2mを測る。地盤改良遺構 S X 33431を切る。

土坑 S K 33449 S X 33430と S R 33419の合流点の東側にある。長さ0.4m・深さ0.1mを測る土坑である。地盤改良遺構 S X 33431を切り、溝状遺構 S X 33439に切られる。

溝 S D 33416 落ち込み状遺構 S X 33430の西側にある。断面は舟底状を呈し、幅1.3m・深さ

0.2mの溝である。北側は二段に落ち、南側には杭列を伴う。

溝S D33417 落ち込み状遺構S X33430の西側にある。幅1.6m・深さ0.4mを測る。地盤改良遺構S X33423を上面から切り込む。断面は、なだらかな台形状を呈し、礫層と砂質土層の互層で埋没している。

溝状遺構S X33433 落ち込み状遺構S X33430の西側にある。溝S D33416と溝S D33417に並行する2条の溝の痕跡である。断面形は浅い皿状を呈する。

流路S R33415 落ち込み状遺構S X33430にそそぐ幅1.0m・深さ0.2mの東西方向の流路である。埋土は2層に分かれ、上層から多数の土器(土師器、韓式系土器)が出土した。

流路S R33418 流路S R33419にそそぐ幅1.7m・深さ0.3mの東西方向の流路。

流路S R33419 北東から南西方向に流れる幅3.5m・深さ0.3~0.5mの流路である。

護岸遺構S X33424 流路S R33419の西肩で検出した。幅0.7m・深さ0.6mを測り、断面は2段に落ちる。肩を不整形に掘り込み、約0.2mほど粘質土を貼り、肩部を保護している。

護岸遺構S X33426 流路S R33419の西肩で検出した。幅1.2m・深さ0.6mを測り、断面はなだらかに落ちる。肩を不整形に掘り込み、約0.2mほど粘質土を貼り、肩部を保護している。

護岸遺構S X33427 流路S R33419の西肩で検出した。肩部を円形に掘り込み、粘土を充填している。

土坑S K33437 調査地の南側にある長さ1.92m・幅0.5m・深さ2.2mの長方形の土坑である。底は舟底状を呈し、両短辺に木棺の木口板が入る大きさの落ち込みをもつ。

溝S X33411 やや蛇行しつつ南北に走る幅1.5~2.0m・深さ0.4mの溝で、弥生土器片が出土している。

溝S D33412 流路跡S R30316が多少埋没した段階で掘り込まれ、幅1.0m・深さ0.2~0.1mを測る。堆積土中から、弥生時代後期の土器片が出土している。

溝S X33414 流路S R30316の堆積土の下層(木製品が多数出土した層)の上面から掘り込まれる幅2.0~3.0m・深さ0.3mの溝である。

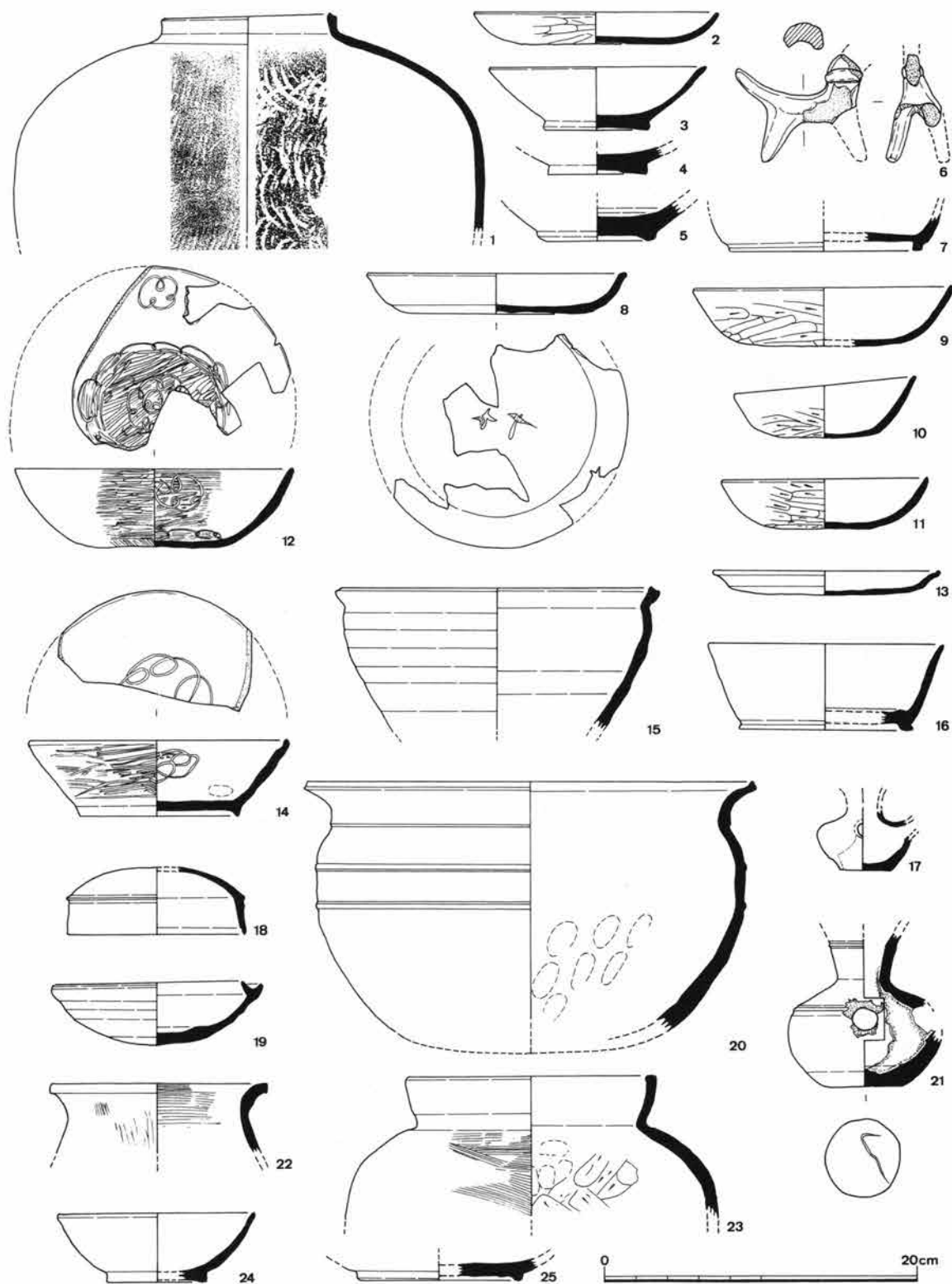
溝S D3303012 調査地北部で検出した幅1mの溝で、左京第337次調査地(B-5地区)にのびる。

流路S R30316 調査地の北部で検出した西から東の方向に流れる幅10m・深さ1.2mの流路跡で、左京第337次調査地(B-5地区)にのびる。堆積土は3層に分かれる。下層からは、多数の木製品や流木、弥生時代中期土器片が数点出土している。ほかにドングリ・クルミ・クリ・トチなどが出土している。

落ち込みS X33434 流路S R30316の北側にある南北3.0m・東西1.0m・深さ0.1mの落ち込みで、弥生土器片が出土している。

落ち込みS X33435 流路S R30316の北側にある南北1.5m・東西1.5m・深さ0.1mの落ち込みである。

落ち込みS X33436 流路S R30316の北側にある南北3.0m・東西4.0m・深さ0.1mの落ち込みで、堆積土中から焼土塊と弥生土器片が出土した。



第59図 P A工区B-3地区出土遺物実測図(1)

- | | | |
|--------------------|---------------------|-----------------------|
| 1~7. S R 33410出土 | 8. S D 33409中層出土 | 9・10. S D 33409下層出土 |
| 11. S X 33441出土 | 12. S E 33407 b底面出土 | 13~17. S E 33407a埋土上層 |
| 18・20. S X 33430出土 | 19. S R 33418出土 | 21. S R 33419出土 |
| 22. S R 30316出土 | 23. S R 33415出土 | 24・25. 第52図A地点第3層出土 |

4. 出土遺物

土器・土製品(第59図、図版第43)

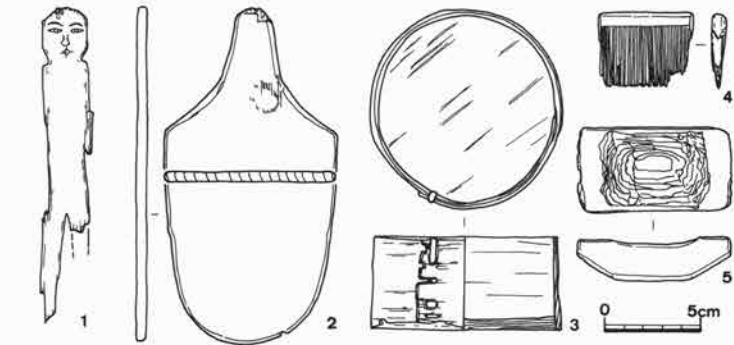
縄文時代晩期から中世及び近世の遺物が出土した。主に、無釉陶器(4)、白磁(5)、緑釉陶器(3・24)、黒色土器(12)、須恵器(1・7・15~19・21・25)、土師器(2・8~11・13・14・23)、陶質土器(20)、韓式系土器、弥生土器(22)などがある。他に墨書土器(8)や土馬(6)などがある。量的には長岡京期~平安時代前期のものと古墳時代のものが多い。

(戸原和人・岸岡貴英)

銅製品(第61図、図版第44)

鏡片 井戸S E 33407 a から出土した2 cm×7 cm程度の鏡縁部の破片で、遺存状態はよい。復原径は11.2cmである。割れ口は鋭利で、研磨の跡はなく、穿孔などの加工はされていない。内区

の主文は欠損しているが、銘帯の部分はずかに残り、「糸」を表す文字の一部と推定できる。外区は鋸歯文帯と複波文帯で、内区は櫛目文帯を施す。縁は高さ0.7cmの斜縁である。以上のことから、半肉彫獣帯鏡のうち、四獣鏡



第60図 P A工区B-3 地区出土遺物実測図(2)

1・2・5. S D33409中層 3. S D33409下層 4. S E 33407 b 底面出土

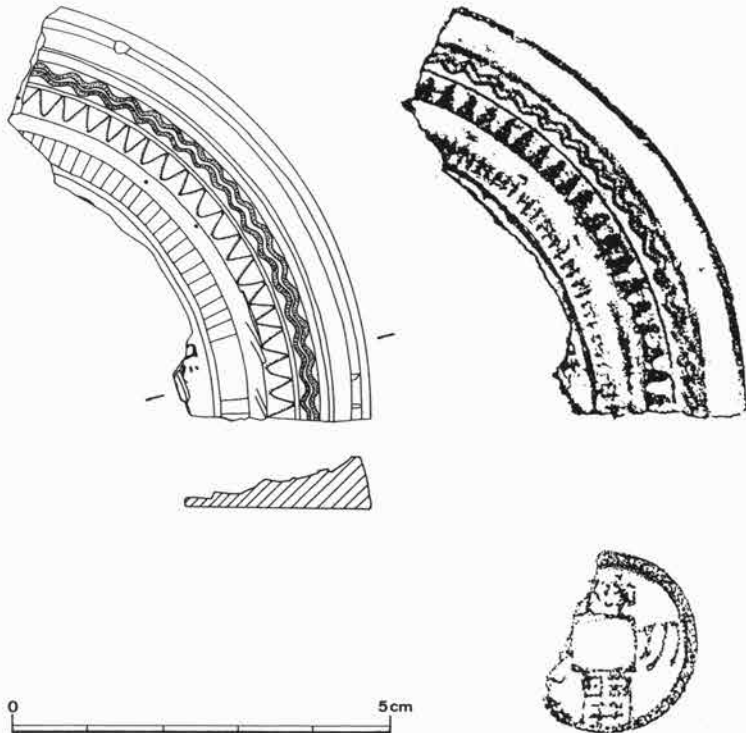
(大同江面出土楽浪郡(下)1321)か、一仙五獣式獣帯鏡(石切神社蔵鏡、神戸西求女塚出土鏡)などになるが、径が小さいので、四獣鏡の方に近いと思われる。^(注18)

銅銭 南一条大路北側溝 S D315001から出土した「神功開寶」である。遺存状態は悪い。

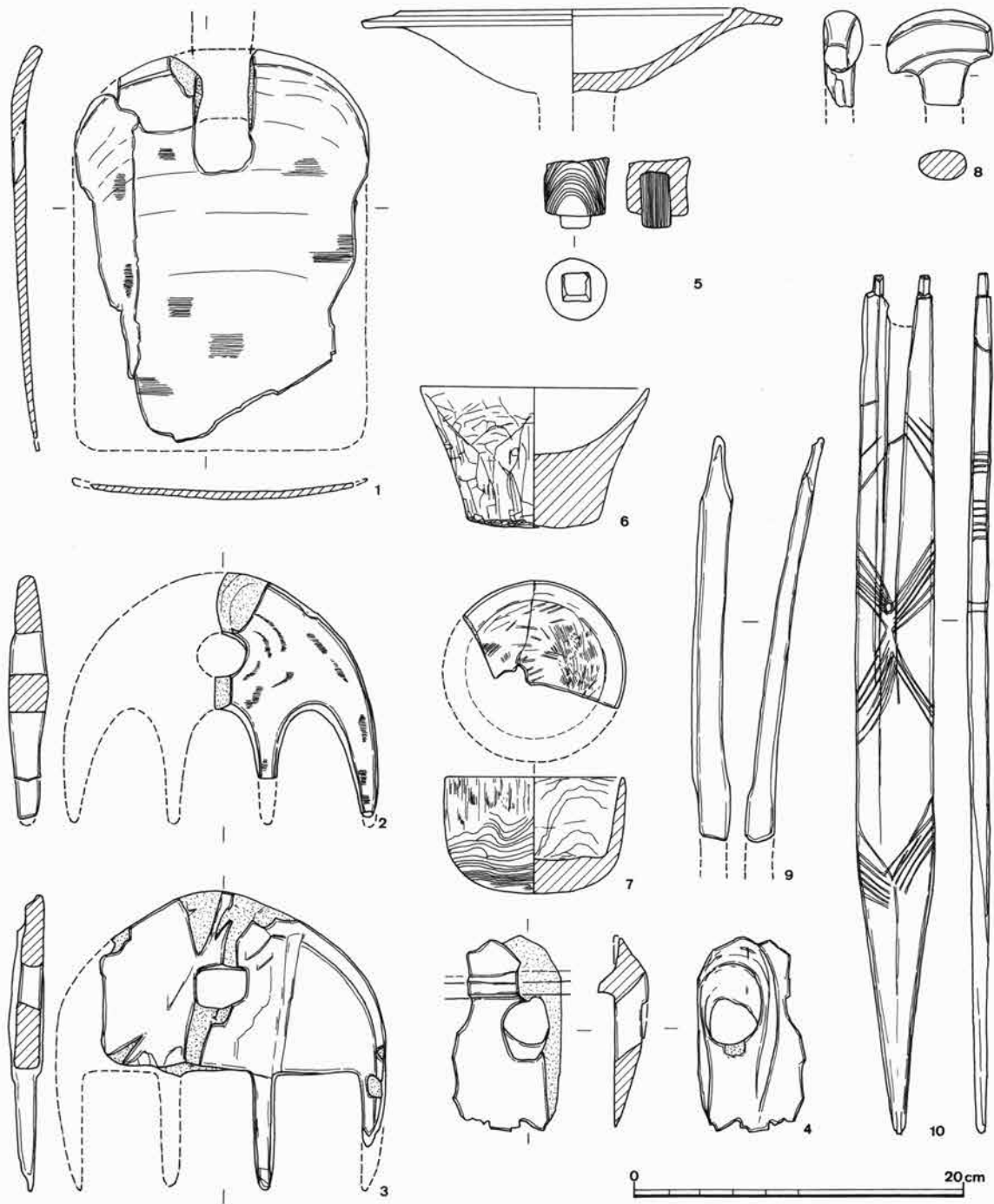
(深堀 茜)

木製品(第60・62図、図版第44・45)

弥生時代から平安時代にかけての多種多様な木製品が出土している。長岡京期~平安時代のものには、木簡、豎櫛、



第61図 P A工区B-3 地区出土遺物実測図(3)



第62図 P A工区B-3 地区出土遺物実測図(4) 流路S X30316下層出土木製品

祭祀具(人形)、容器類(曲物・槽)、食器具(杓子)、井戸杵、杭などがあり、また古墳時代から奈良時代のものには、多くの建築部材や杭などがある。弥生時代中期のものには、多種多様な生活用具(農具・工具・容器・食器具・楽器など)がある。量的には、杭や建築部材とともに弥生時代中期の生活用具がめだつ。以下、主な製品のみ図化した。

(戸原和人・杉本厚典)

木簡(第63図、図版第44)

S D33409の東肩部で、ほぼ完全な形で出土した。木簡は、一例のみであり、他の木製品や獣

骨片とともに、南方から流れ出たものであろう。長さ300mm×幅25mm×厚さ3mmを測る短冊形のもので、011型式、いわゆる文書様木簡である。その釈文は、「九月九日□米□二升里米三升『四日出米事』』と読める。その内容は九月九日に必要な米を四日に出したことが書かれている。この木簡にある「里米」は黒米、すなわち玄米のことと推定される。さらに、「四日出米事」は別筆で書かれており、何らかの出納帳簿の原資料になった可能性が高い。

(岸岡貴英・土橋 誠)

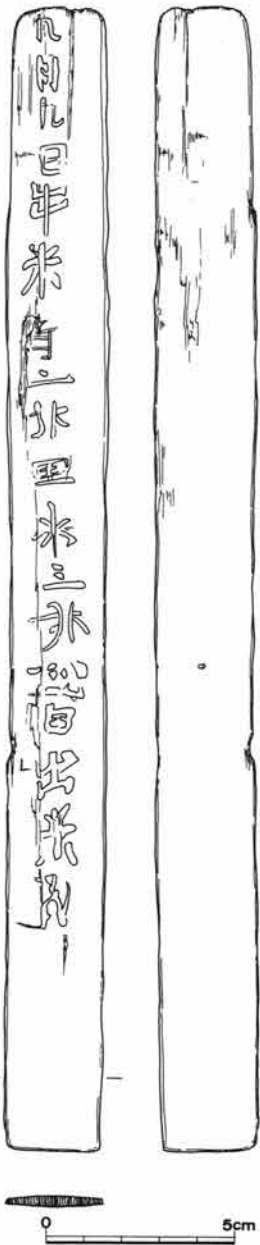
獣骨 主に馬の頭蓋骨が2例と獣骨片などが出土している。

5. 小結

今回の調査成果としては、長岡京期の条坊側溝の水利関係施設の状況とその後の土地利用の状況が明らかになったことである。特に南一条大路北側溝と溝S D 33409の交点で検出したS X 33441から、獣骨などが多数出土しており、祭祀遺構の可能性が考えられる。

また、溝群S D 33451～S D 33466は、ほぼ真東西方向で検出され中・近世以降の素掘り溝群とはその形態及び溝の間隔が異なる。それを覆う包含層は、長岡京期から平安時代のもと考えられるため、その時期に下限が求められる。また、注目すべき成果として、長岡京期以前の水利関係施設と流路S R 30316から出土した弥生時代中期の多数の木製品がある。水利関係施設として、堰や護岸遺構などがあり、堰の規模から比較的大きな流路固定の作業が行われた可能性がある。また、同地点で検出された土坑や地盤改良遺構なども、何らかの形で流路固定に関係する施設と思われる。

木製品は、多量の流木とともに堆積土の下層から発見された。この流路に切り込む溝S D 33412の存在から、中期末に下限を設定することができる木器群である。共伴する土器には、少量で縄文時代晩期の土器片やⅡ～Ⅲ様式の弥生土器片が含まれていた。出土した木製品は、板材や杭材などを含めると約130点ほどになる。主な製品には、高杯・広鋏・鋤・琴・杓子・狭鋏・叉鋏・柄頭・えぶり・臼・田下駄・曲物・縦杓子などがある。左京第303次調査(B-5地区)からの出土品も合わせて、質的にも量的にも比較的良好な資料と考えられる。



第63図 P A工区B-3
地区出土遺物実測図(5)

(戸原和人・岸岡貴英)

(6) 長岡京跡左京第333次 PA工区B-4地区
(7ANVST-5)

1. はじめに

この調査区は、長岡京の条坊復原プランでは、長岡京跡左京二条四坊一町・八町にあたっており、東三坊大路東側溝及び東四坊第一小路(東四坊坊間西小路)が通る地点と想定されるところである。

2. 調査の概要

調査区は、既存の水路によって東西2つに分けられ、西側をa地区、東をb地区とした。

上層では、中世から近世の遺構、下層では、弥生時代・長岡京期～平安時代の遺構や遺物を検出したが、想定されていた東四坊第一小路は確認できなかった。

①中・近世(第64図、図版第46)

素掘り溝群 中世から近世にかけて掘削された耕作に伴うと考えられる溝群である。近世のものは深さが0.03～0.05mで砂混じりの埋土であるが、中世のものは検出面からの深さが0.2～0.3mあり、埋土は淡灰色の粘質土である。

近世土坑群 中世の溝群に切られる方形の土坑群である。軸が真東西及び真南北を向いており、方位を意識して造られていることからみて、条里制地割りに規制された遺構と考えられる。土坑の壁は直に立ち上がっており、底は平らになっている。出土した遺物が少ないため、詳細な時期は不明である。

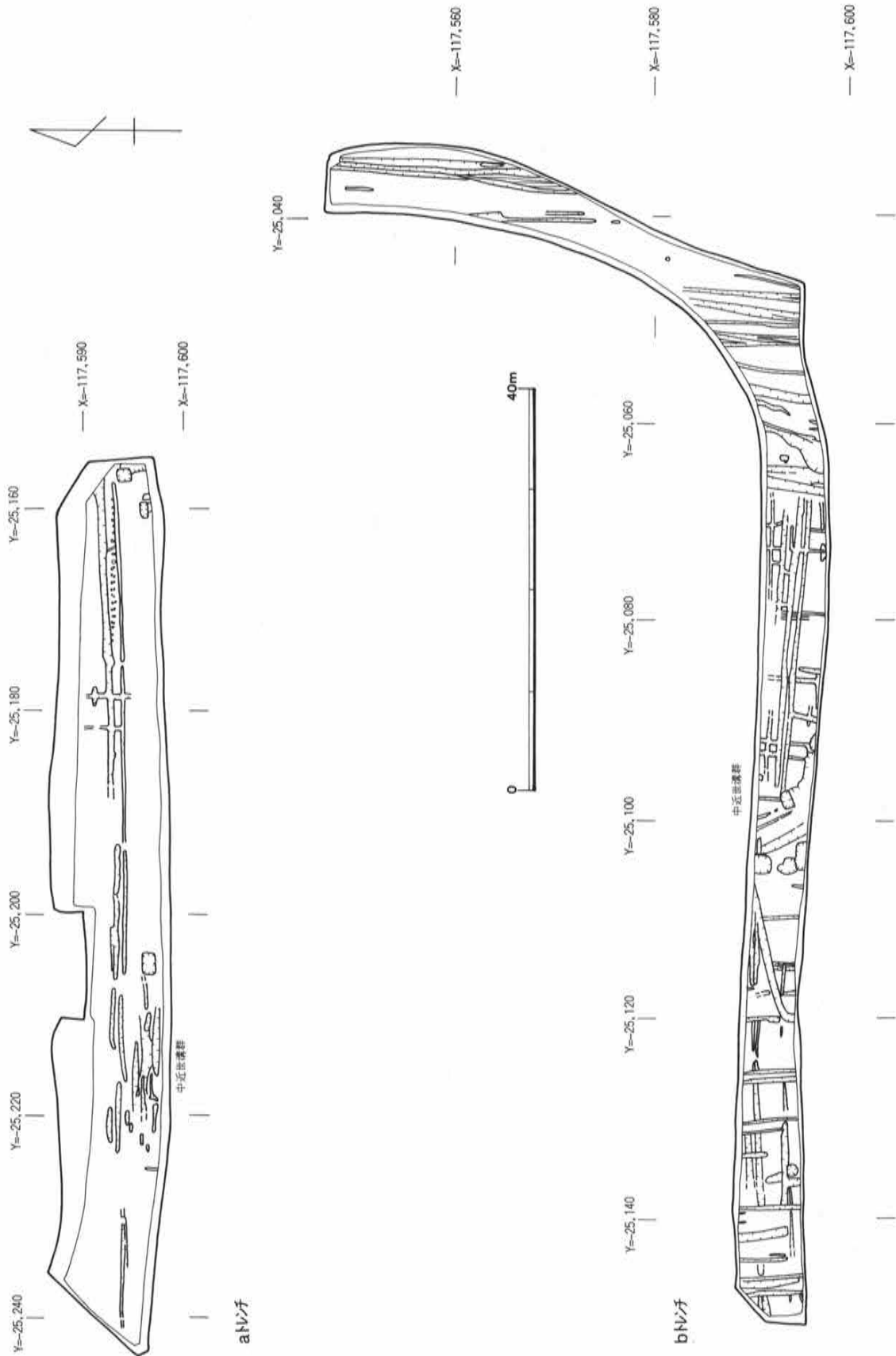
②長岡京期・平安時代(第65図、図版第47・48)

東三坊大路東側溝 S D 315003 溝の断面形が浅い「U」字形を呈している。溝の南側は削平されており、深さが約0.05mほどしか残存していなかった。出土遺物としては、溝内からは、須恵器、土師器が出土している。

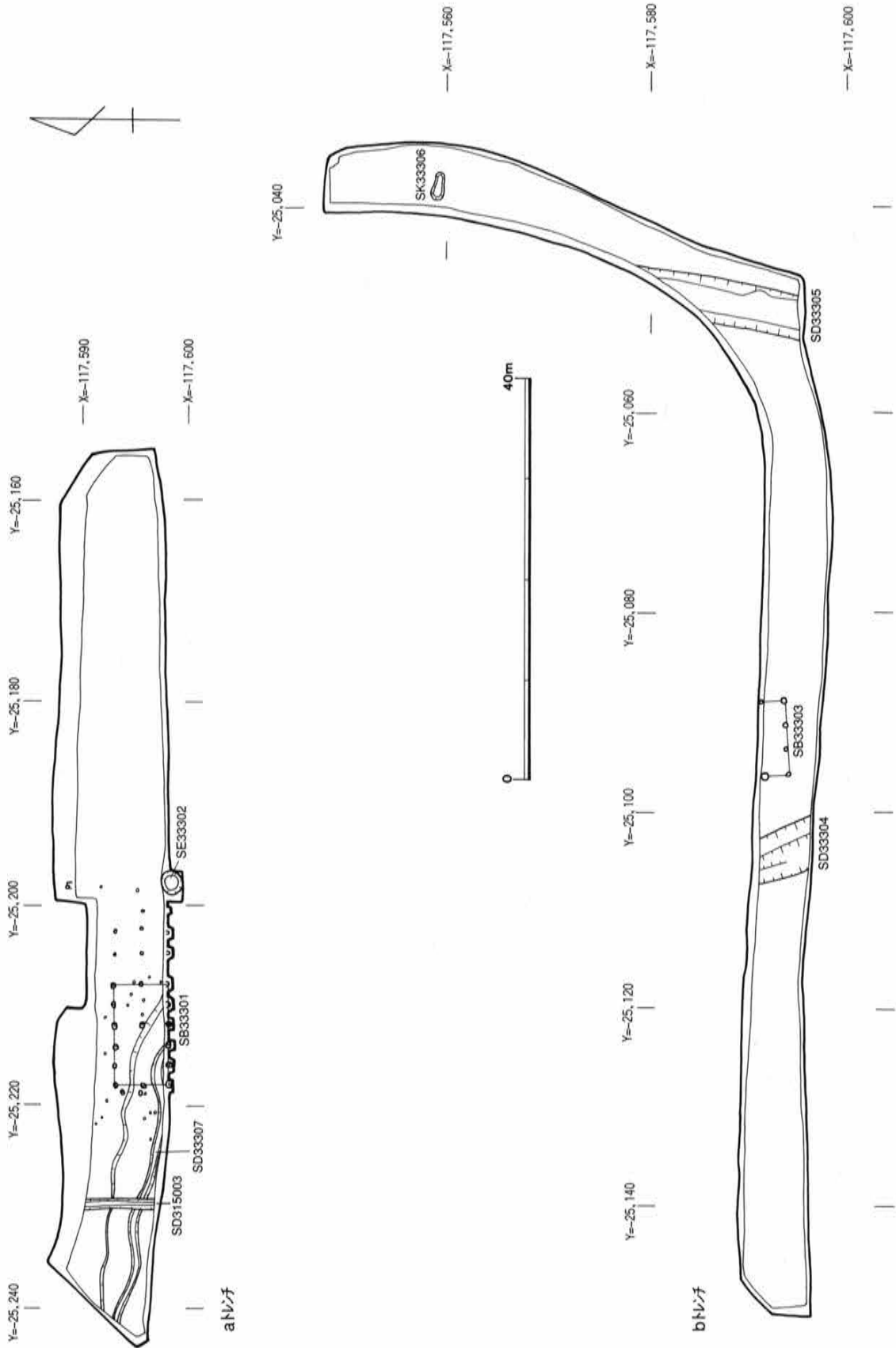
掘立柱建物跡 S B 33301 東西5間・南北2間の東西棟建物跡と考えられる。東西に長く、真北を向く。柱間寸法は、桁行2.1m・梁間2.7mを測る。柱掘形内の出土遺物が少なく、正確な遺構の時期は確定できないが、長岡京期～平安時代と考えられる。

井戸 S E 33302 円形掘形の井戸で、上部の井戸枠は抜き取られていたものの、底部に水溜め用の曲物が残っていた。井戸の中からは、須恵器の杯身と土師器皿、小形の曲物、桃の種が出土した。

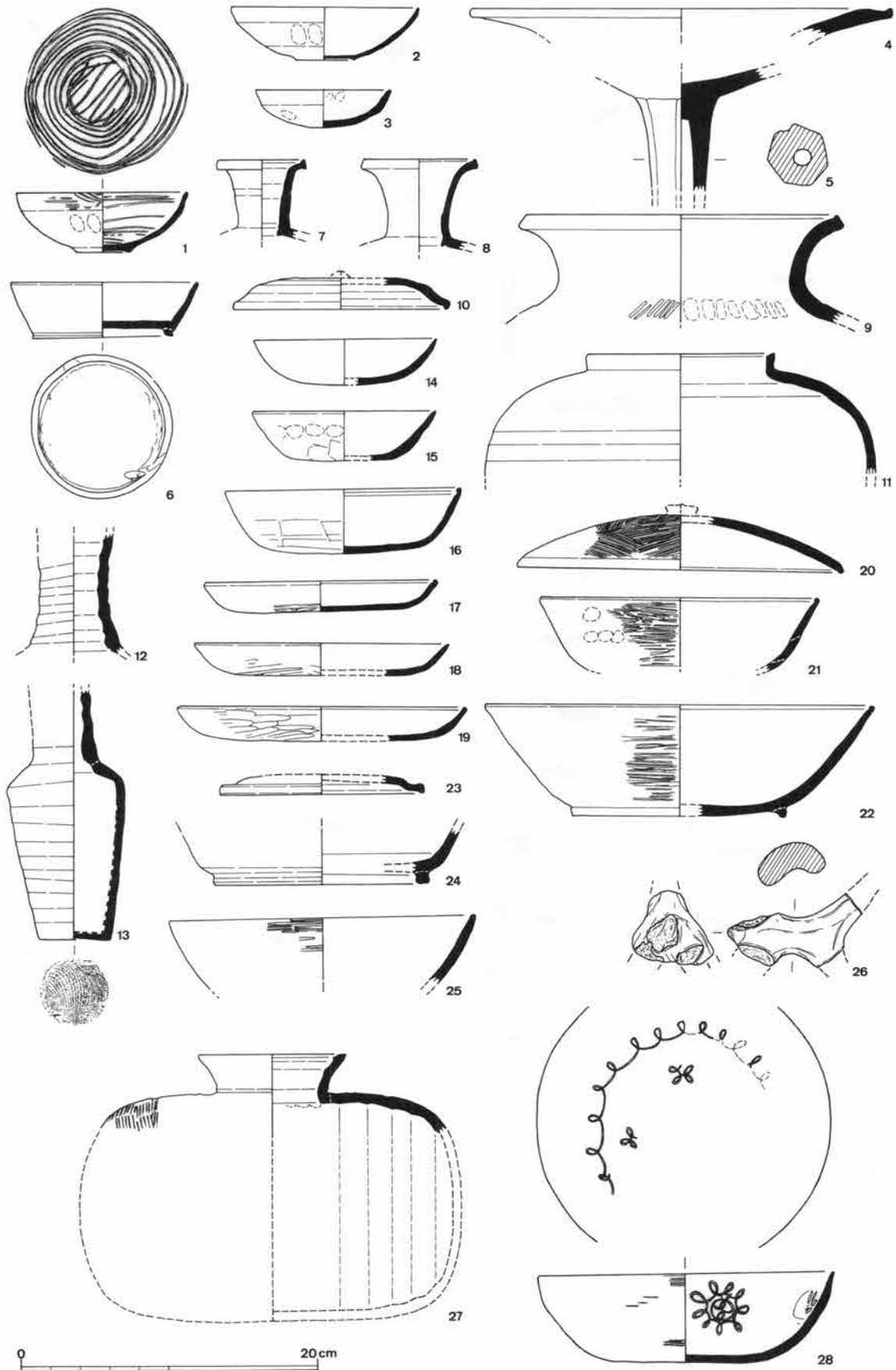
掘立柱建物跡 S B 33303 東西3間・南北2間の方形の柱掘形を持つ、東西棟建物跡である。柱間寸法は、桁行2.4m・梁間2.4mを測る。建物跡の軸は、北で西に振れ、平安時代の可能性が強い。



第64図 PA工区B-4地区遺構平面図(1) 中・近世

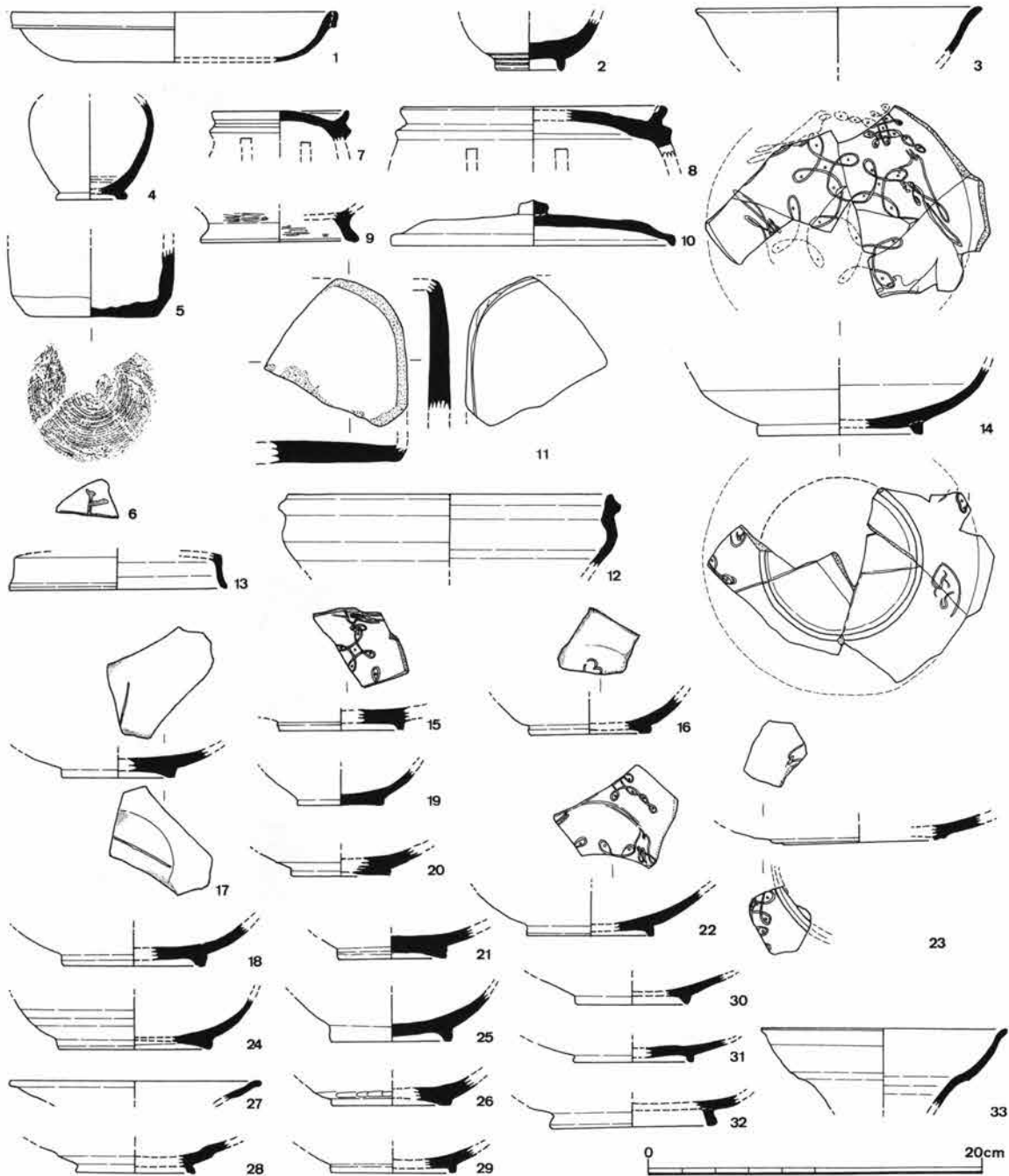


第65図 PA工区B-4地区遺構平面図(2) 弥生~平安時代



第66図 PA工区B-4地区出土遺物実測図(1)

1・2. 中世素掘り溝出土 3~11. S E33302 12・13. 建物跡以外の柱穴 14~28. S D33305



第67図 PA工区B-4地区出土遺物実測図(2)

1. 土師質 2. 染付 3. 青磁碗 4~12・33. 須恵器 13~23. 緑釉陶器
24~26. 緑釉の素地 27~32. 灰釉陶器

溝S D 33304 推定東四坊第一小路の位置にあたり、北西から南東へ流れる溝である。底の中央が一段凹む。幅2.8m・深さ0.2mを測る。

溝S D 33305 調査区東辺の屈曲部で検出した、北から南に流れる流路である。深さ約1.2m・幅約4.7mを測る。遺物には、長岡京期から平安時代の須恵器、土師器、黒色土器、斎串、桃の種、堅果類の皮などがある。また、葦類と考えられる根や、淡水性の貝が検出され、水つきの状態であったことが想定できる。

包含層からは、難波宮式の軒平瓦、平城宮式・長岡宮式の軒丸瓦、瓦塼や内外面に陰刻華文を

施す緑釉陶器などの遺物が出土している。

③弥生時代(第65図、図版第49)

土坑S K 33306 弥生時代中期の不定形の土坑である。深さ0.3mを測る。遺構内から、弥生時代中期の壺と浅鉢、木片が出土している。

溝S D 33307 平安時代、長岡京期の遺構面を掘り下げて検出した蛇行する溝で、出土遺物がなく、時期は不明である。

3. 小結

左京二条四坊一町・八町を画する推定東四坊第一小路の位置には、流路S R 33304が流れており、第一小路は確認できなかった。

左京二条四坊一町の西よりの包含層から出土した陰刻華文を施す緑釉陶器など、一般集落で出土しないものが多かった。何らかの公の施設の存在が推定できよう。

(中川和哉)

(7) 長岡京跡左京第331次 PA工区B-2b・D-2b地区
(7ANVST-4)

1. はじめに

この調査区は、左京二条三坊十二町にあたり、東三坊大路西側溝と、二条第一小路が想定される地点である。調査地は、水路や民地の進入路などで、B-2b・D-2bの2地区に分かれるが合わせて報告する。

2. 調査の概要

a. B-2b地区(第68図、図版第51)

①中世

東西溝群 トレンチ北側で検出した。これを境に、北側と南側で比高差0.4mが認められる。出土遺物には、瓦器・土師器がある。

南北溝群 溝幅0.3~0.4m、溝心々間は5.1~5.2mを測り、6列の区画を検出した。水田の区画とみられる。出土遺物には、瓦器・土師器がある。

②長岡京期

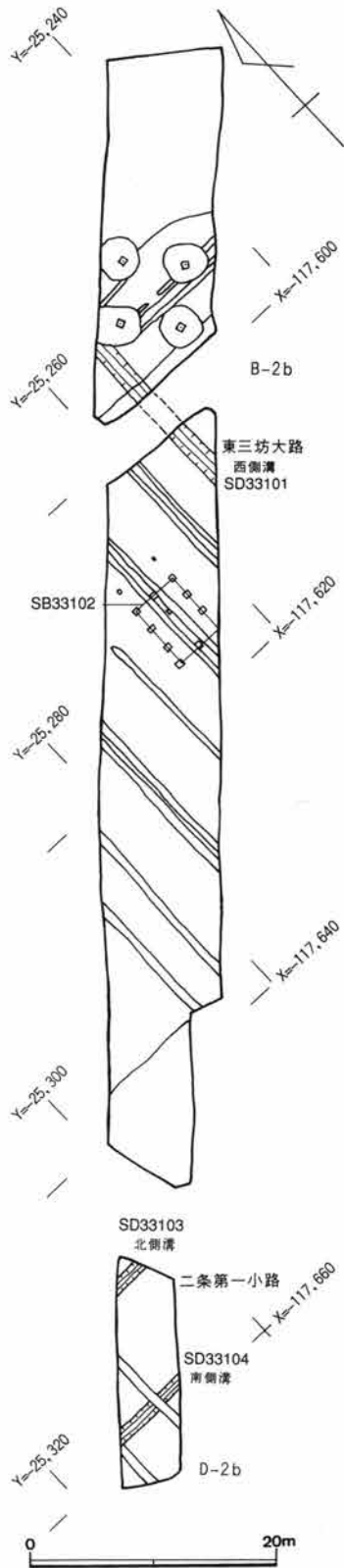
長岡京期の遺構面は、平安時代の河川の氾濫による砂礫によって覆われている。砂礫層からは、軒丸瓦・土師器・須恵器・釘・凝灰岩がある。

東三坊大路西側溝 S D 33101 溝幅1.2~1.5m・深さ0.4mを測る。溝内には前述の砂礫が堆積し、溝底には青灰色泥土と砂が溜まっており、水が流れていたことを示す。遺物には、土師器・

須恵器・獣骨・木片などがある。

溝の中心座標は、 $Y = -25,255.00$ 、前年度の左京第315次調査で検出された東側溝との距離は、約24m(80尺)である。

掘立柱建物跡 S B 33102 東西2間・南北3間の南北棟建物跡で、柱間寸法は、桁行1.8m(6尺)・梁間2.1m(7尺)の等間である。方位は、ほぼ真北を指す。柱掘形は、一辺0.4mの方形を呈し、南側の棟持柱には直径0.15mの柱根が残っていた。柱掘形からは、須恵器杯身が出土した。



b. D-2b地区(第68図、図版第51)

①中世

水田 南北方向の2本の畔と、これに伴う素掘り溝を検出した。畔の幅は0.4~0.5m・高さ0.1mを測る。2本の畔の間隔は5.5mである。両者の国土座標は、西側 $Y = -25,314.70$ 、東側 $Y = -25,309.20$ である。

素掘り溝は、畔の両脇に伴う。

②長岡京期

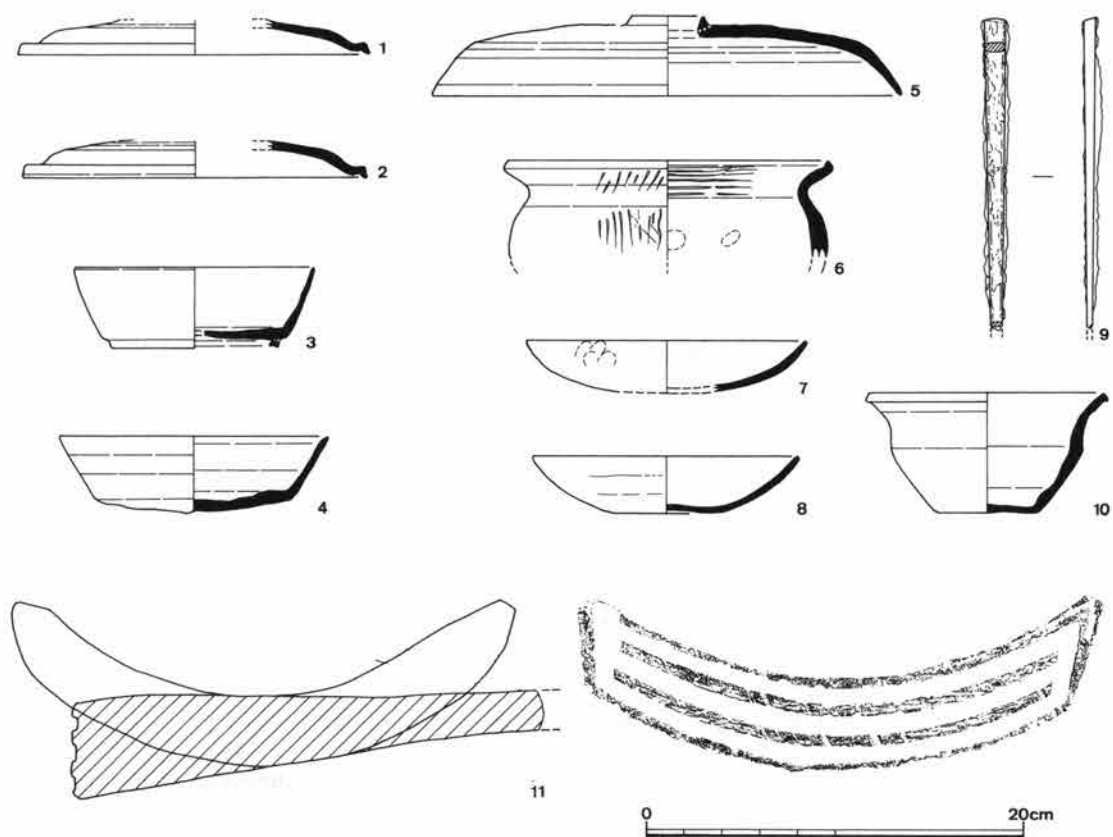
二条第一小路 並行して走る東西溝 S D 33103と S D 33104とを側溝とする道路。両側溝の心々距離は、9.3m(31尺)を測る。

二条第一小路北側溝 S D 33103・同南側溝 S D 33104 幅1.0m・深さ0.3~0.4mを測る。断面逆台形を呈し、堆積土層は青灰色粘質土、底に薄く砂層があり、水が流れていたことを示す。土師器・須恵器の小片が出土した。北側溝の溝心の国土座標は、 $X = -117,649.00$ 、南側溝の溝心の国土座標は、 $X = -117,658.30$ である。左京第267次調査の結果と同じである。

3. 出土遺物(第69図、図版第52)

B-2b地区の平安時代の河川の氾濫による砂礫層から、軒丸瓦・土師器(6~8)・須恵器(1~5)・釘(9)・凝灰岩が出土した。11は、難波宮式の軒平瓦である。

第68図 PA工区B-2b・D-2b地区遺構平面図



第69図 PA工区B-2b地区出土遺物実測図

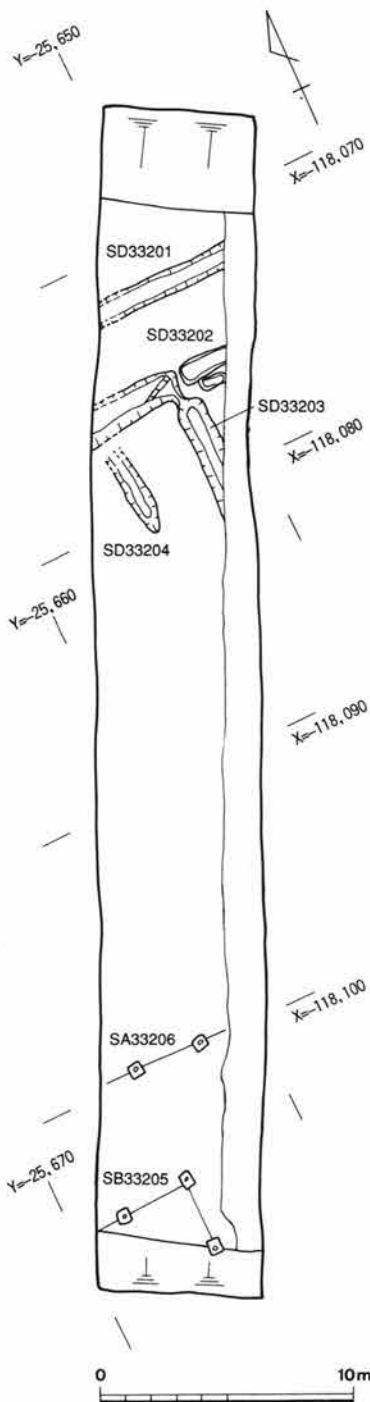
4. 小結

上層遺構では、B-2b地区のトレンチ北側で検出した東西溝群が、乙訓郡条里の坪境にあたり、地形的にも傾斜変換線を構成している。

長岡京の遺構としては、二条三坊十二町で初の建物遺構の検出となった。

(竹井治雄)

(8) 長岡京跡左京第332次 向日工区B-1a地区
(7ANEKZ-8地区)



第70図 向日工区B-1a地区遺構平面図

1. はじめに

調査対象地は、京都府向日市鶏冠井町清水に所在し、長岡京の条坊復原によると左京三条三坊十一町(新呼称；左京三条三坊十三町)と二条大路(新呼称；三条条間小路)南側溝の推定地にあたる。また、縄文時代晩期から中世までの遺跡として知られる、鶏冠井清水遺跡にも含まれる。近接するトレンチには、長岡京跡左京第151次調査があり、その際には、二条大路(新呼称；三条条間小路)北側溝が検出されている。

2. 調査の概要(第70・71図、図版第53)

調査区は、道路の拡張幅に合わせて、細長く設定した。遺構を検出した検出面は、大きく分けて2面認められた。上層から東西方向を基調とする中世の素掘り溝群を検出した。溝の埋土からは、瓦器碗片・瓦器羽釜片・土師器片が出土している。

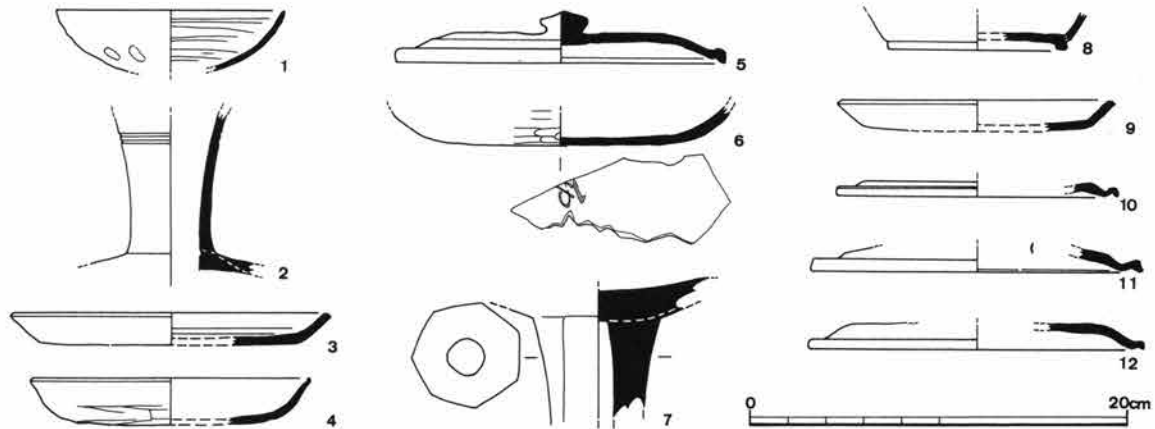
下層は、長岡京期の遺構面で、建物跡1か所と溝を4条検出することができた。

掘立柱建物跡SB33205 南側に廂を持つと考えられる東西棟の方形掘形を持つ掘立柱建物跡である。柱間は、桁行・梁間とも2.7m等間である。柱穴からは直径約0.25mの柱痕を1本検出した。

二条大路(新呼称；三条条間北小路)南側溝SD33201 東西方向の溝である。検出面からの深さは約0.25mで、溝心における座標は、Y=-25,650.00で、X=-118,072.00である。溝からの出土遺物には土師器の碗・甕、須恵器の壺、平瓦片がある。

溝SD33202 SD33201に並行する溝で、同溝との心々間距離は、3.6m(12尺)である。検出部中央は浅くなり、溝は途切れているが、東三坊坊間第1小路を横切る。築地の溝の可能性はある。土師器の杯、須恵器の杯B底部、皿が出土している。

東三坊坊間第1小路(新呼称；東三坊坊間西小路)西側溝SD33203 SD33202に直交する南北溝で、溝の北側で浅くなるも



第71図 向日工区B-1a地区出土遺物実測図

2・3. S D 33201 5~7. S D 33203 8. S D 33204 9. S B 33205 他は包含層出土

の、S D 33202と連結する。また、宅地内(築地)溝が小路を横断しており、二町以上の宅地であった可能性もある。溝心の座標はX=-118,078.00でY=-25,651.50である。出土遺物には、須恵器杯蓋、底部に墨書の認められる土師器杯、土師器高杯がある。

溝S D 33204 S D 33203に並行する溝で、S D 33202との関係は攪乱のため不明である。宅地内の溝で築地に伴う可能性が指摘できる。出土遺物には須恵器杯B、甕体部片、平瓦片がある。

3. 小結

旧来の平城京型で復原すると、二条大路の推定地にあたるが、長岡京跡左京第151次調査地で検出した二条大路北側溝データとあわせて考えると、溝の心々間距離が約9m幅の小路に復原できる。これまでの調査結果から言われているように、二条大路が平城京形の計画線上にはなく、二町分北にずれるとする新説を追認することになった。

(中川和哉)

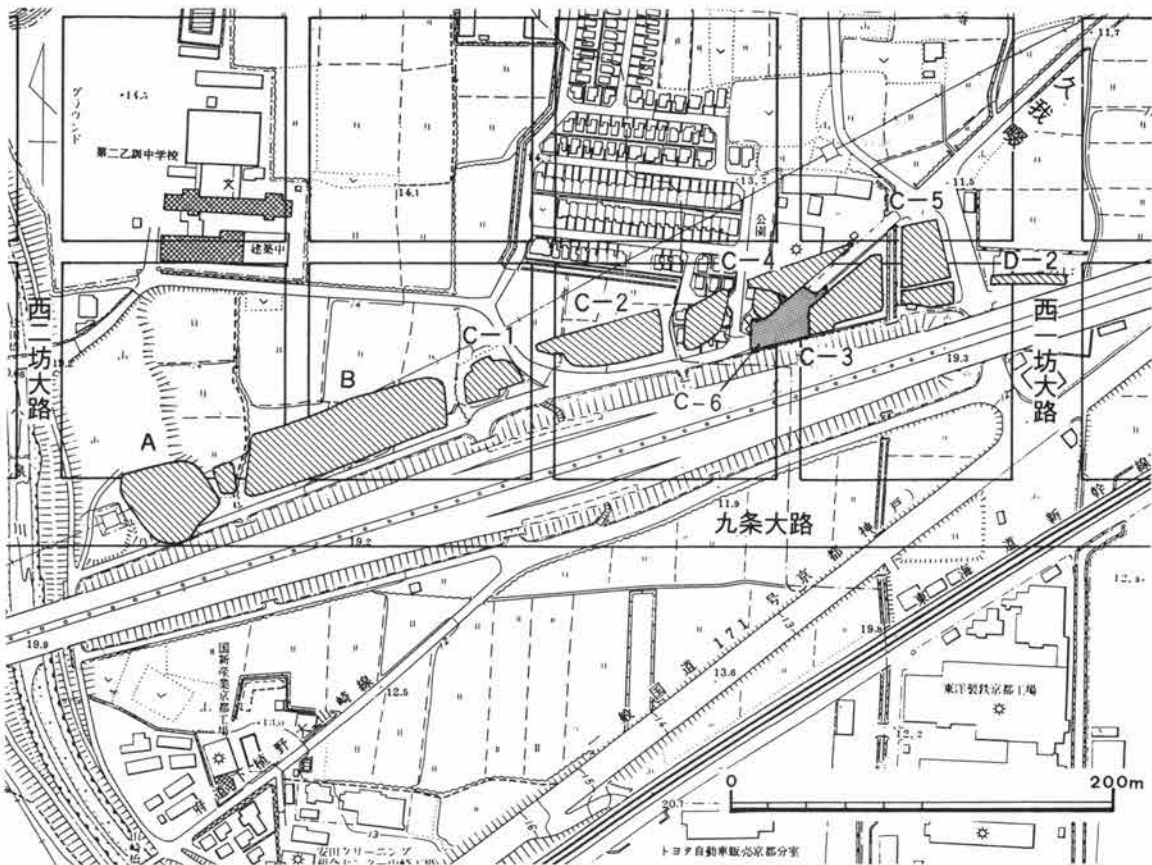
(9) 長岡京跡右京第466次 下植野工区C-6地区
(7ANTTD-5)

1. はじめに

下植野工区は、乙訓郡大山崎町の小泉川から長岡京市の小畑川にかけての名神拡幅予定地にあたる。調査は平成2年度から着手し、今年度で5年目を迎えている。昨年度までの調査で、下植野工区の発掘調査対象地の大部分の調査が終了し、C6地区を残すのみである(第72図)。

この地区は、従来の長岡京の復原案では右京九条二坊三・四町に当たる。また、「下植野南遺跡」の範囲に含まれる。

これまでの発掘調査では、縄文時代から中・近世までの遺構・遺物を検出している。中でも、特筆できる遺構としては、縄文時代晩期の深鉢を埋めた埋葬遺構と考えられる土壌、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落と祭祀遺構、小型方形古墳、長岡京期から平安時代前期の掘立柱建物跡群など、顕著なものがある。



第72図 下植野工区調査トレンチ配置図

2. 検出遺構(第73図、図版第54・55)

①近世

久我畷西側溝 S D 44603 現府道下植野大山崎線(久我畷)の下で検出した。幅約0.5mを測り、路肩保護のための松杭と板材がこれに並行する。

②中世・平安

土坑 S K 46602 長軸1.2m×短軸1.0mの不定形土坑である。S D 46601を掘り込んでいる。土坑内からは、瓦器片、土師器片が出土した。

土坑 S K 46605 調査地の南東寄りで検出した長辺2.3m・短辺1.3mを測り、断面が皿状を呈する隅丸方形の土坑である。攪乱によって大半が失われているが、底に藁灰が入り、灰の上層から土師器皿(16世紀後半)・羽釜が出土した。

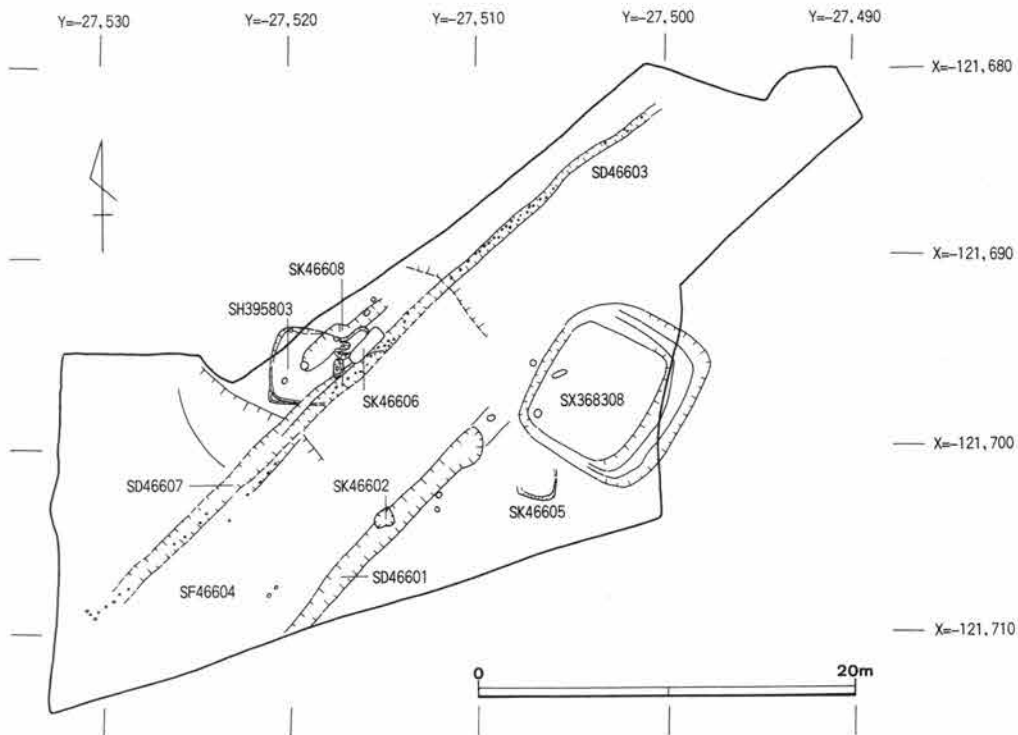
土坑 S K 46606 幅0.8m×長さ2.2m・深さ0.4mを測る長方形の土坑で、S D 46607を切る。

久我畷路面 S F 46604 溝 S D 46601と溝 S D 46607の並行する溝によって区画される路面である。S D 46601と溝 S D 46607の内側の肩部で、路面幅約6mを測る。

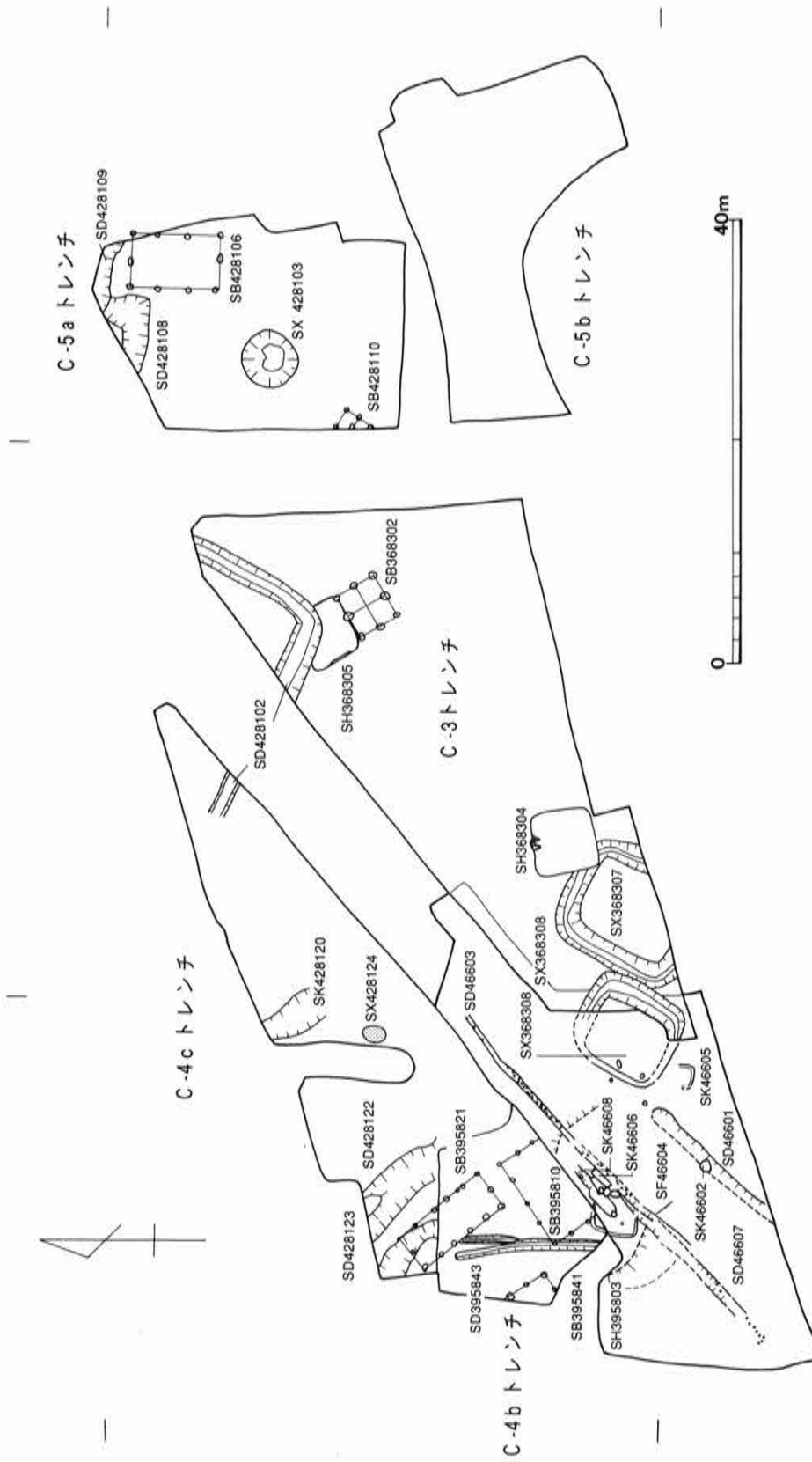
久我畷東側溝 S D 46601 幅約1.0m・深さ約0.05mで、14m分を検出した。西肩が削平されている。北東の延長部は、後世の削平により失われている。

久我畷西側溝 S D 46607 幅約1.0m・深さ0.3mの溝である。S D 46603の西半部下層で検出した。

土坑 S K 46608 S D 46607の約0.7m西で並行する土坑であり、幅約1.0mで、5m分を検出した。久我畷西側溝の一部か。S K 46608を久我畷西側溝と考えた場合、この土坑と S D 46601は、



第73図 下植野工区C-6地区遺構平面図



第74図 下植野工区C-3～6地区主要遺構図

内側の肩部で約8mを測る。

③古墳時代

古墳周溝 S X 368308 右京第368次調査で検出した周溝の続きを検出した。幅約0.3m・深さ0.3mの溝で、南端で東に曲がる。溝内の埋土は、久我畷路面下層に堆積する汎濫性の礫粘土と酷似しており、この堆積層上面から、6世紀後半の須恵器杯が出土しているため、古墳の造営時期はそれ以前と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 395803 右京第395次調査で一部を検出している。東西約3.6m・南北約4.0mを測る。南西の角で、上下2段のプランを持ち、2つの住居跡が重なっていると考えられる。上層の住居跡には、北東の角に竈があり、竈内のピットからは、須恵器杯身・蓋を重ねた状態で出土した。下層の住居跡では、埋土の中から布留式甕などが出土した。

3. まとめ

今年度のC地区の調査を最後に、すべての発掘調査が終了した。平成2年度から今年度まで発掘調査を実施し、総調査面積17,680㎡に及んだ。延べ5年間にわたり行った調査では、縄文時代から中・近世にいたる各時代の遺構・遺物を検出した。縄文時代の遺構では、晩期の船橋式の深鉢を使用した土器棺墓を検出し、弥生時代中期から後期の竪穴式住居跡を中心とした集落の確認、古墳時代の集落及び古墳の検出、長岡京期から平安時代にかけては掘立柱建物跡群などを検出した。推定長岡京跡右京九条に位置しているが、条坊関係の遺構は確認できなかった。

現在の「久我畷」下層で検出した2条の溝と1条の土坑状遺構は、古代山陽道の検討を行う上で貴重な資料と考えられる。

(戸原和人)

おわりに

平成7年度の名神関係遺跡の調査は、PA工区では、A-1～3地区、B-2b地区、B-3～5地区の7調査地で、向日工区ではB-1a地区、下植野工区ではC-6地区の各調査地で発掘調査を実施した。以下、各工区ごとのまとめを行っておきたい。

PA工区では、今年度の調査で東三坊大路と東四坊第一小路、南一条大路を確認した。さらに、左京南一条四坊四・五町では、A-1・B-5地区で多数の掘立柱建物跡や井戸を検出した。また、昨年度に調査を行ったB-2a地区とともに、B-4a地区でも建物跡や井戸が検出され、左京南一条四坊四・五町の様相が判明しつつある。

弥生時代の遺構としては、全域で遺物が出土したが、検出した遺構は流路跡を中心としたものがほとんどで、わずかに土坑や方形周溝墓の残欠が認められるのみである。しかし、B-3・5地区で検出した弥生時代中期の流路内からは、木製農具や高杯などの什器類が出土しており、この時期の木製遺物の不足を補う貴重な発見となった。この流路を境として、南側は微高地の縁辺部にあたり、方形周溝墓や土壙墓が営まれている。集落の周辺部での墓域としての土地利用が

うかがえる。方形周溝墓は、A-1・2地区とB-5地区の2か所で検出しており、おそらくこれらは一連の墓域となるであろう。西羽束師川改修工事に伴う調査でも方形周溝墓が確認されており、この周辺には2か所以上の墓域が存在するようである。

下植野工区では、今年度のC地区の調査を最後にして、すべての発掘調査が終了した。この工区では、平成2年度から今年度まで5年間にわたって発掘調査を実施し、総発掘調査面積は17,680㎡に及んだ。下植野工区は、推定長岡京跡九条に位置しているが、長岡京の条坊関係の遺構は確認できなかった。しかし、下植野南遺跡に関連して、縄文時代遺構の検出、弥生時代中期から後期の遺構の確認、古墳時代集落及び古墳の検出、長岡京期から平安時代にかけての掘立柱建物跡群を検出するなどの成果をおさめた。

このうち、掘立柱建物跡群は、今回調査したC-6地区の久我畷(古山陽道)との関連で考えられる。

今後調査を行うPA工区は、対象面積が56,000㎡あまりと広大であり、今後の調査では長岡京の上記の町とともに、その周辺の宅地の利用状況が判明することが期待される。さらに、長岡京の下層には、弥生～古墳時代の遺構が包蔵されており、今後の調査で遺構の性格やその規模などを明らかにしなければならないと考える。

(戸原和人)

- 注1 戸原和人・三好博喜「長岡京跡左京第200次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注2 戸原和人・三好博喜ほか「長岡京跡左京第216・右京第343次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注3 戸原和人・竹井治雄ほか「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注4 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注5 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注6 戸原和人ほか「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注7 新条坊の呼称については、山中氏の説による(山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号 1992)。
- 注8 現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである(敬称略)。
赤坂 希・阿部達雄・安部利恵子・石井祐子・一藁知美・井上 綾・今井利彦・岩崎香織・上田 勉・上田正彦・上野由香・岡崎有紀・尾田洋子・川端佐和子・北川勝巳・木戸久美子・小島孝修・小谷加奈子・坂本真弓・狭川和美・佐藤あゆち・重松康希・島田豊彰・清水美和・白河豊基・杉本厚典・高橋宏樹・手島美香・飛田浩一・内藤晃子・中瀬古友佳・長友朋子・羽生夕紀子・廣瀬仁美・廣田紀子・藤木俊樹・深堀 茜・淵井孝泰・穂積優子・細見祐介・堀 躍子・松本健一郎・三阪優子・水谷美智代・宮本純二・森岡かおり・森上由美子・森下恵美子・安井園絵・八津谷 都・山崎 誠・吉田泰士・吉田るみ・脇村有美・渡邊順子・明日礼子・荒川仁佳子・小澤和子・小原正

美・倉辻万里子・佐藤卓子・高山英美・竹内千賀子・竹内友美・田村重野・内藤チエ・長尾美恵子・那須春美・西村敏子・長谷川マチ子・村上優美子・米澤裕子。

注9 久世康博・上村和直「長岡京左京一条三坊・二条三坊」(『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988)、長宗繁一「長岡京条坊制についての私案」(長岡京連絡協議会資料No.90-11) 1990

注10 注9による

注11 注6による

注12 注9による

注13 計算に用いた長岡京の造営尺は、従来言われているように一尺=29.6cmとしている(山中1992)。

注14 秋山浩三「長岡京跡左京第120次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会 1986)。

注15 注9に同じ

注16 注14に同じ

注17 近江俊秀「道路遺構の構造」(『古代文化』第47巻第4号 (財)古代学協会) 1995.4

注18 鏡式の判定については、当センター理事長樋口隆康の指導を得た。

4. 長岡京跡右京第511次発掘調査概要 (7ANGKN地区)

1. はじめに

今回の発掘調査は、長岡京市今里及び井ノ内地区で、京都府が進めている都市計画街路(外環状線)改良工事に伴って実施した。外環状線の道路建設に伴う発掘調査は、昭和53年度の京都府教育委員会による実施^(注1)以後、当調査研究センターが断続的に行っており、今回、府道善峰向日線より北側の区間で用地買収の完了したところについて、工事の原因者である京都府乙訓土木事務所と京都府教育庁文化財保護課及び当調査研究センターの協議の結果、工事に先行して発掘調査を実施することになった。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長辻本和美・同主任調査員引原茂治・同主査調査員石尾政信が担当し、平成7年10月20日～平成8年2月28日まで実施した。調査面積は、約1,000m²である。

調査に当たり、長岡京市教育委員会及び(財)長岡京市埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関のご指導やご協力があった。また、調査期間中、学生諸氏や地元有志の方々には、調査補助員及び整理員^(注2)として調査全般について多大なご協力をいただいた。感謝の意を表したい。

基準点測量は、株式会社マエダ、空中写真撮影は、株式会社アイシーにそれぞれ委託した。調査に係わる費用は、京都府乙訓土木事務所が負担した。

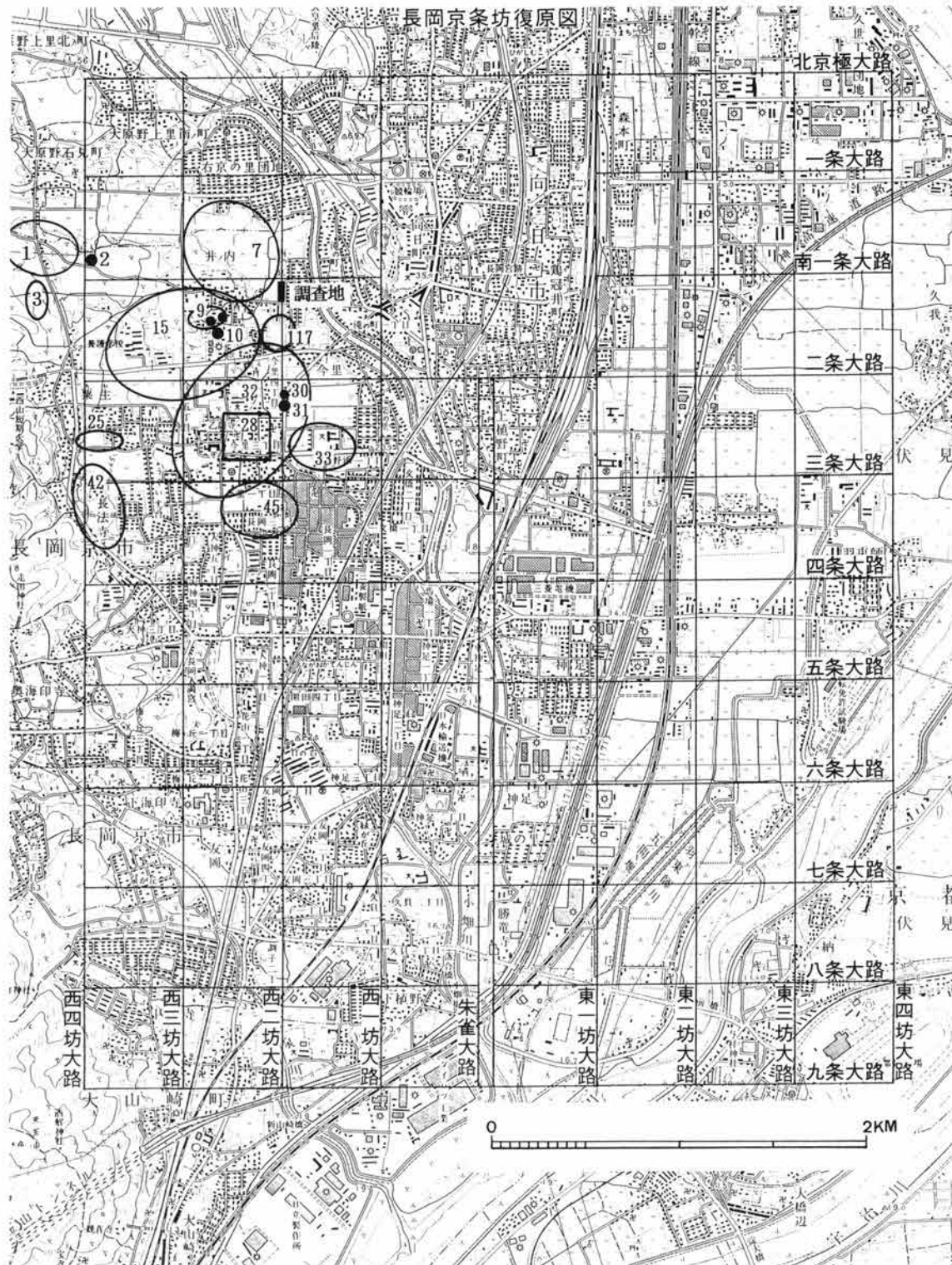
なお、調査期間の関係上、今回は、検出遺構の概要報告にとどめ、出土遺物などの詳細については、次年度に実施予定の北側地区の調査成果と合わせて報告する。

2. 遺跡の環境と周辺の調査(第75図)

調査地は、長岡京市井ノ内地区内に所在する。長岡京市地形分類^(注3)図によると小畑川右岸の氾濫原にあたり、標高30～31mの水田地帯である。北西方向にゆるやかに高くなる地形を呈し、現況は、東西に住宅地が迫っている。西方には、低位段丘が東西方向にのび、井ノ内集落が立地する。この低位段丘の北側は、小畑川に合流する善峰川の浸食で崖面が形成され、その北方には、緩扇状地形がみられる。

今回の調査地は、平城京型による長岡京跡復原図(第76図)によれば、右京二条三坊一町にあたり、西二坊大路の通過点に位置する。いわゆる、二条大路を二町北に引き上げる新条坊復原案によれば、右京二条三坊三町に相当する。また、調査地の西方には、縄文時代～平安時代の集落跡である上里遺跡があり、その南方には、縄文時代～鎌倉・室町時代にかけての広範囲な集落跡である井ノ内遺跡や今里遺跡が所在する。

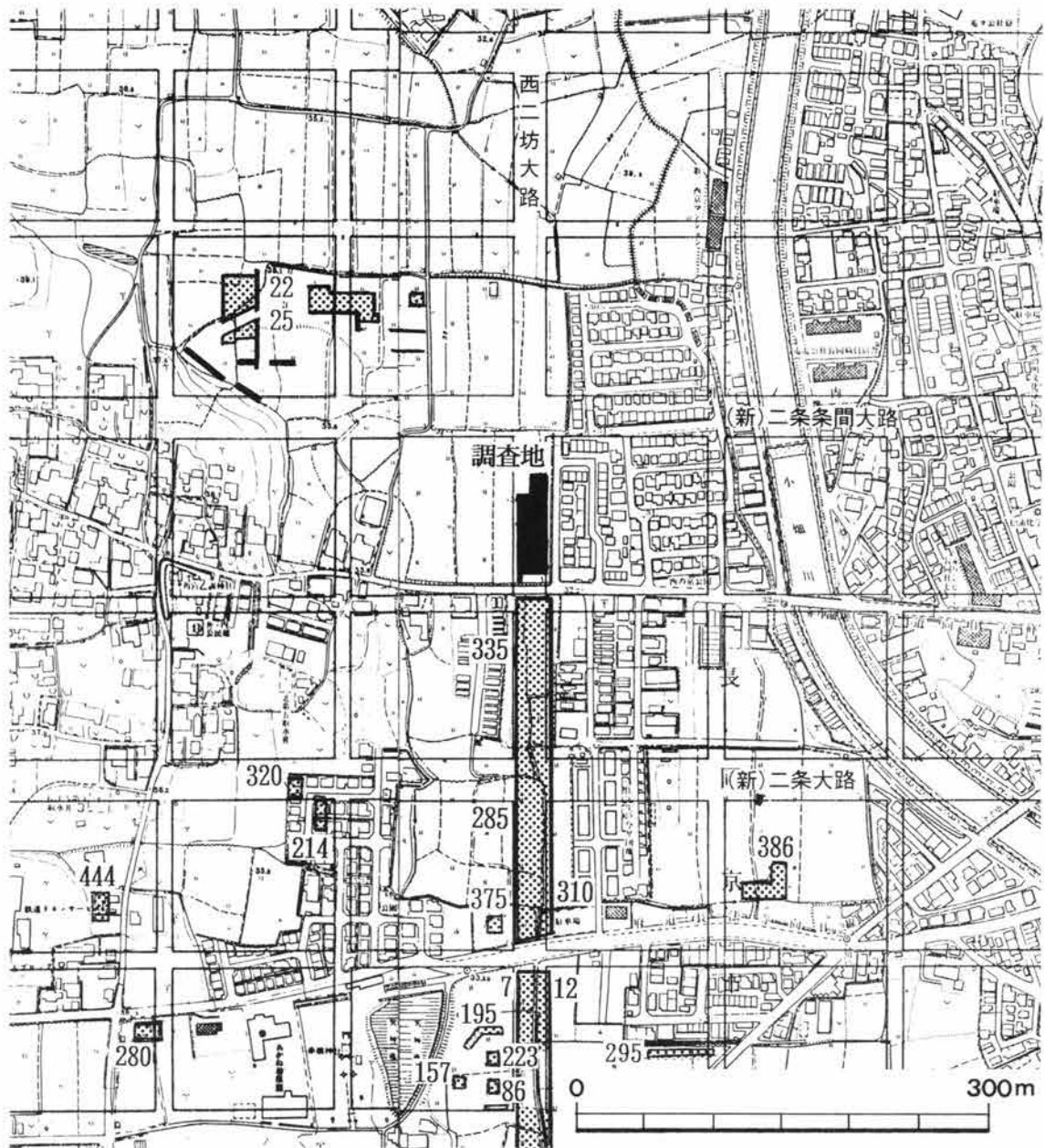
今回の調査地の北西約200mにある市立長岡第十小学校建設に伴う長岡京跡右京第22・25次調



第75図 調査地及び周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|---------------|-----------|-------------|
| 1. 芝古墳群 | 2. 井ノ内車塚古墳 | 3. 北平尾古墳群 | 7. 上里遺跡 | 9. 小西古墳群 |
| 10. 稻荷塚古墳 | 15. 井ノ内遺跡 | 25. 長法寺七ツ塚古墳群 | 28. 乙訓寺 | 30. 今里庄ノ瀨古墳 |
| 31. 今里車塚 | 32. 今里遺跡 | 33. 今里北ノ町遺跡 | 42. 長法寺遺跡 | 45. 陶器町遺跡 |
| 117. 更ノ町遺跡 | | | | |

査では、段丘崖に沿って北西から南東方向に流下する幅約100m前後の自然流路が確認されており、善峰川の旧河道と推定されている。この旧河道は、古墳時代後期には、川幅がかなり狭くなる。7～8世紀になるとほぼ埋没し、河道内に杭で護岸された幅約1m前後の溝が縦横に造られ、溝によって区画された不規則な平坦地がみられる。この旧河道の北側の氾濫原では、縄文時代から弥生時代の土坑や、長岡京期の建物跡群が検出されている。また、旧河道内の窪地や杭列の伴う溝の埋土中からは、飛鳥～奈良時代の遺物が出土しており、特に、須恵器杯Bの底部外面に「弟国」と書かれた墨書土器が出土して注目される。同じく、長岡第十小学校敷地の東端からは、南北に廂が付く大規模な掘立柱建物跡が検出されている。この建物跡の柱掘形には、直径0.4mを測る柱根が残り、中には、別の部材で柱を補修したものもあり、平城京から移築された建物と



第76図 調査地位置図(1/5,000)

推定されている。建物規模で比較すれば、礎石を持つ大型建物に匹敵する。また、推定一町の宅地の中心に配置されている状況や、宮域に比較的近いという立地環境から、この建物跡の性格については、高級貴族の邸宅跡または官衙的施設の政庁が推定されている。

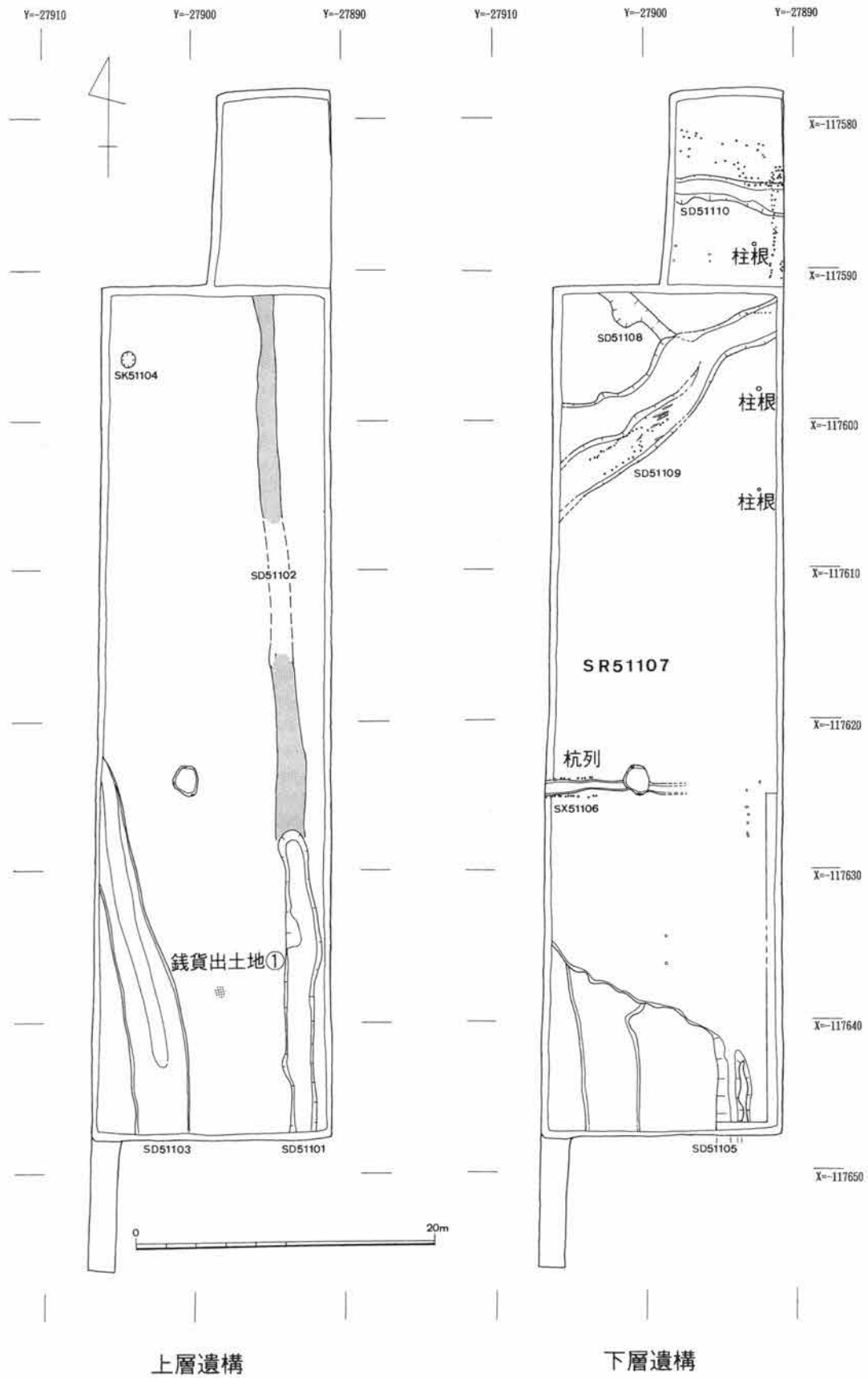
今回の調査地の南側にあたる、同じく外環状線に伴う右京第285・310・335次調査では、西二坊大路東側溝や平安時代の自然流路跡などの遺構群が検出されている。このうち、第285次の更ノ町遺跡の調査では、長岡京造営にあたって埋め立てられた自然流路の下層から、大量の土器類や木製品に混じって、墨書土器や文字を記した檜扇・木簡などが出土した。これらの遺物は、奈良時代のものが中心で、長岡京期のものも一部含まれる。「園宅」・「園司」の墨書土器や「御司」の木簡などから、奈良時代には、周辺に宮内省の園池司に属する施設が存在した可能性が推定されている。また、二坊大路の路面にあたる位置で検出した石敷きの排水施設をもつ井戸跡や、その南方約40mのところ検出した掘立柱建物跡は、自然流路の堆積状況からみて、長岡京造営にあたって埋め立て廃棄されたようで、前記の「園」に関する施設の一部と思われ注目される。ここから西約100mの、同じ段丘面上に立地する右京第214次調査でも奈良時代の建物跡が検出されており、この遺跡がさらに西へ広がる可能性がある。ここからは、弥生時代中期の方形周溝墓のほか、古墳時代後期の竪穴式住居跡や同時期の集落を区画する溝なども検出されている。

3. 調査概要

現地調査は、道路建設予定地内に東西約16m・南北約55mのトレンチを設定し、耕作土などの重機掘削からはじめた。その後、人力により掘削及び精査を繰り返し、遺構検出に努めた。今回の調査地では、耕作土・床土の下に中世の遺物包含層が東側にやや厚く堆積する。これに対し、北西部分では、このような包含層はみられなかった。この遺物包含層を除去すると、南北方向の溝(S D51101)1条と自然流路(S D51103)が検出された。トレンチの西端で、長さ35mにわたって自然流路(S R51107)が検出された。この自然流路の上面から、皇朝十二銭の神功開寶と寛平大寶がまとまって出土した。自然流路内は、粗砂～礫層や粘質土層が堆積し、幾度か流れを変えているようすがうかがえる。また、流路北側では、暗灰～暗灰褐色粘質土が堆積し、埋め立てられたような状況がみられた。なお、暗灰～暗灰褐色粘質土を挟み込んだ砂層堆積が溝状に南北方向にのびていたため、これを溝(S D51102)とした。溝の東側で約6.6m間隔で柱根が2か所検出されたが、明確な掘形などはみつからなかった。さらに、流路南部の砂礫堆積層を掘削している途中で杭列(S X51106)を検出した。また、流路北側の下層では、杭列を伴う溝(S X51109)を検出した。南東部では、自然流路によって一部が壊された溝(S D51105)を検出した。トレンチ北端部に設定した拡張区では、東西方向の溝を検出した。ここでは、トレンチ東端や溝の北側に多数の杭が打ち込まれていた。

4. 検出遺構(第77・78図)

溝S D51101 トレンチ南端で検出した。幅約1.6m・深さ0.2m前後を測る南北方向の素掘り



第77図 遺構平面図

溝で、約20mにわたって検出した。最大幅は、約2.3mあり、溝の北端は砂の堆積する溝S D 51102に覆いかぶさる形で不明瞭になる。茶褐色～暗茶褐色の埋土から瓦器片などの中世土器が出土した。

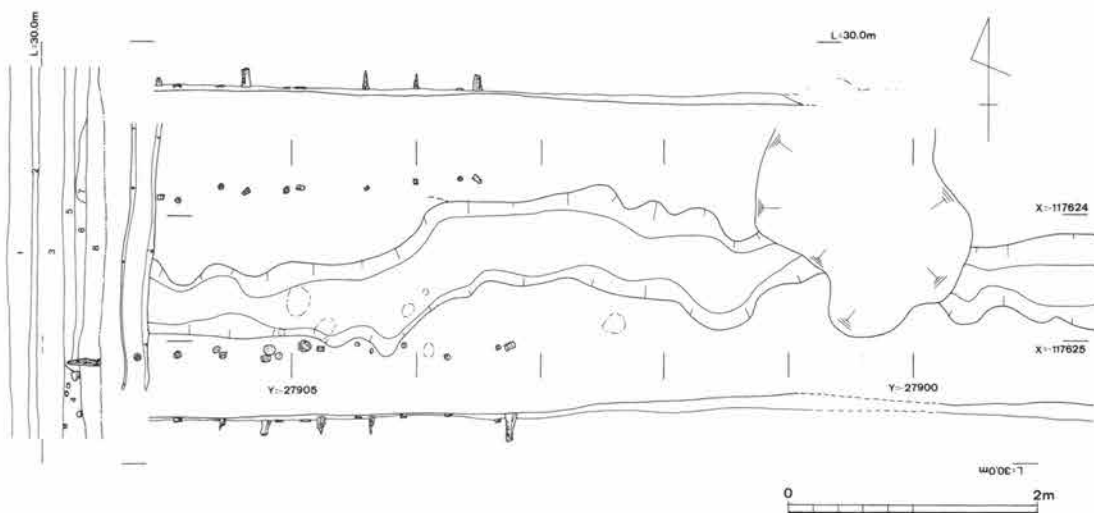
溝S D51102 溝S D51101の北端付近から北にのびる砂の堆積する溝で、約36mにわたって検出した。溝の中央部は、中世の土器を含む土層堆積で攪乱を受けていた。この溝は、北方が西に振れており、北端で幅約1.4m・深さ約0.05m前後を測る。砂堆積層から土師器、須恵器、土馬、獣骨などの長岡京期～平安時代前期の遺物が出土した。溝周囲の埋土と思われる暗灰～暗灰褐色粘質土からも土馬などが出土した。

自然流路S D51103 地山面の青褐色～暗灰色粘砂土を抉り込んだ、最大幅3.9m・深さ0.1～0.2mを測り、中央部が窪んだ溝である。溝内には、砂礫土が堆積し、わずかに土器の小片が出土した。平安時代以降の自然流路と推定される。

土坑S K51104 トレンチの西北部で検出した砂礫層を掘り込んだ浅い円形土坑である。直径1m前後・深さ0.05～0.1mを測り、暗褐色の埋土には、遺物などを含まない。

溝S D51105 自然流路S R51107によって抉られた南北方向の素掘り溝で、約6m分検出した。溝の西肩だけが明瞭で、東側は、底部から肩部の一部が残るのみで、それ以上は流路によって削られている。溝の南壁では、幅1.2m以上・深さ0.5m前後を測る。溝の堆積層は、上層が灰褐色または暗茶褐色砂礫層で炭化物を含む。下層は、灰～暗緑灰色砂層で、須恵器、土師器などの長岡京期～平安時代前期の遺物を含む。溝の中心点は、底部で、国土座標は、X=-117,645.00・Y=-27,894.40を測る。

杭列S X51106 東西方向にのびる杭列で、約3mにわたって検出した。杭は、中央のわずかな窪みに堆積した砂層を挟んで南北両側に並び、南北杭の間隔は、1.2～1.3mを測る。杭には、丸杭と面取りを施す方形のものがあり、東西方向の各々の杭間は、一定していない。窪みに堆積



第78図 杭列S X51106実測図

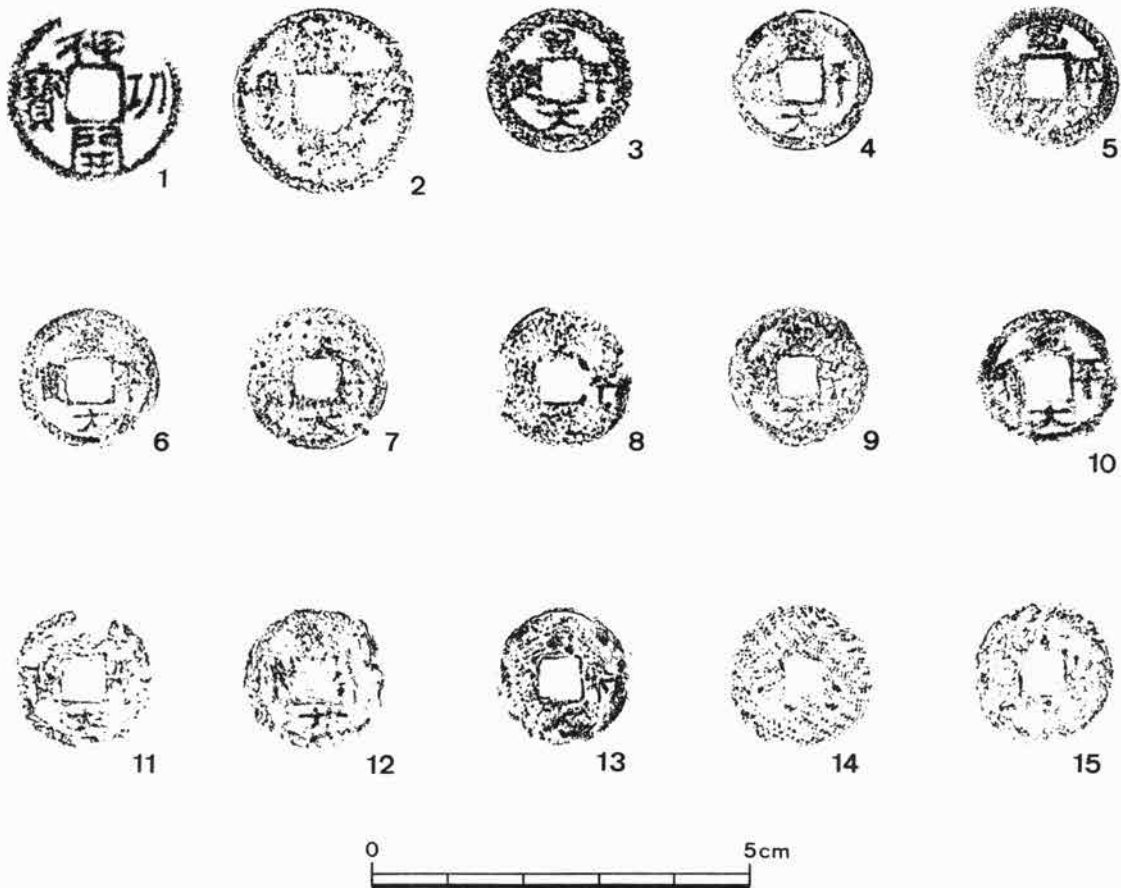
- | | | | |
|----------|---------------|---------------|-----------------|
| 1. 耕作土 | 2. 灰色土(耕作土下層) | 3. 淡茶褐色土(床土) | 4. 灰褐色砂礫土層 |
| 5. 灰褐色粗砂 | 6. 灰色粗砂 | 7. 灰色粘砂土(シルト) | 8. 青灰色粘砂土(礫混じり) |

した砂層は、杭がみられない東側に広がっており、そこから少量の土器が出土した。土器の特徴は、長岡京期～平安時代前期を示すものが多い。また、北側から流れ込んだと思われる砂層が、杭列のところではほぼ止まっていた。

自然流路 S R 51107 トレンチ西端で36m、東端は、ほぼ全域が砂礫などの堆積層となる自然流路である。北部では、砂礫層や粘質土が錯綜し幾度かの流路の変更がうかがえる。礫層上層には、暗灰または暗灰褐色粘質土が堆積し、埋め立てられた様相が認められた。下層から、杭列を伴う溝が検出された。南部の礫層の間から、少量ながら須恵器や瓦片が出土した。先に述べたように、この自然流路の上面から、直径約1mの範囲で、皇朝十二銭の神功開寶2枚(初鑄765年)と寛平大寶13枚(同890年)がまとまって出土したが、明確な掘形や土色の変化は認められなかった(第79図)。

溝 S D 51108 S R 51107に切られる、幅1m前後・深さ0.1m前後を測る、斜行する溝である。一部が南方に広がっている。黒色粘質土の埋土には、有機物をわずかに含むが、土器などはみられない。

溝 S D 51109 S R 51107の下層で検出した南西～北東方向の杭列を伴う溝で、幅2～3mを測る。西壁で深さ0.4m前後を測り、砂礫や粘質土が相互に堆積する。杭は、大小があり、約6m



第79図 出土銭貨拓影
1・2. 神功開寶 3～15. 寛平大寶

範囲で南北両側に密に打ち込まれていた。杭に接して、木製品の槽や丸太材などが検出され、加工木や古墳時代後期(6世紀後半)の須恵器などが出土した。

溝S D51110 調査地の北端部で検出した幅2 m前後・深さ0.3~0.4mを測る東西方向の溝である。溝内は、砂層が堆積し、木片が混じる程度で遺物はほとんどみられない。

4. おわりに

今回の調査地では、平安時代以前の遺構の大半が自然流路などによって削られていた。このため、長岡京に関する遺構は、ほとんど残っていなかった。しかし、今回の調査地の北側では、地形が若干高くなるため、長岡京に関する遺構の検出が期待される。以下、今回の調査成果を簡単に記す。

①自然流路の一部には、暗灰~暗灰褐色粘質土が堆積し、人為的に埋め立てられた様相を呈していた。埋土中には、長岡京期の土馬などが含まれており、これらの仕事は、長岡京の造営に伴う可能性が高い。

②自然流路で削られた溝S D51105は、今回の調査地の南側で行った右京第335次調査で検出した西二坊大路東側溝S D3301と溝の規模や堆積状況が類似する。また、溝の中心座標が、Y=27,894.40を示すことから、西二坊大路東側溝の可能性が高い。

③同じく自然流路S R51107は、右京第22・25次調査で検出された自然流路に連続する可能性が高く、善峰川の旧河道と推測される。今回の調査で出土した資料や、これまでの周辺地の調査状況からみて、周辺部に長岡京期以前にさかのぼる遺構が存在する可能性もある。

(辻本和美・引原茂治・石尾政信)

注1 高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』 京都府教育委員会) 1979、高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』 京都府教育委員会) 1980

注2 岡 浩正、可児直典、国重佐夜子、杉本厚典、西川悦子、牧 淳子、松原一哉、丸谷はま子、森脇一雄、山田一郎、山田恵子

注3 『長岡京市史』資料編 長岡京市役所 1991

注4 石尾政信・戸原和人・土橋 誠「長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第45冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

圖 版



(1) 調査地遠景（南西から）



(2) 作業風景（西から）

図版第2 竹野遺跡第9次



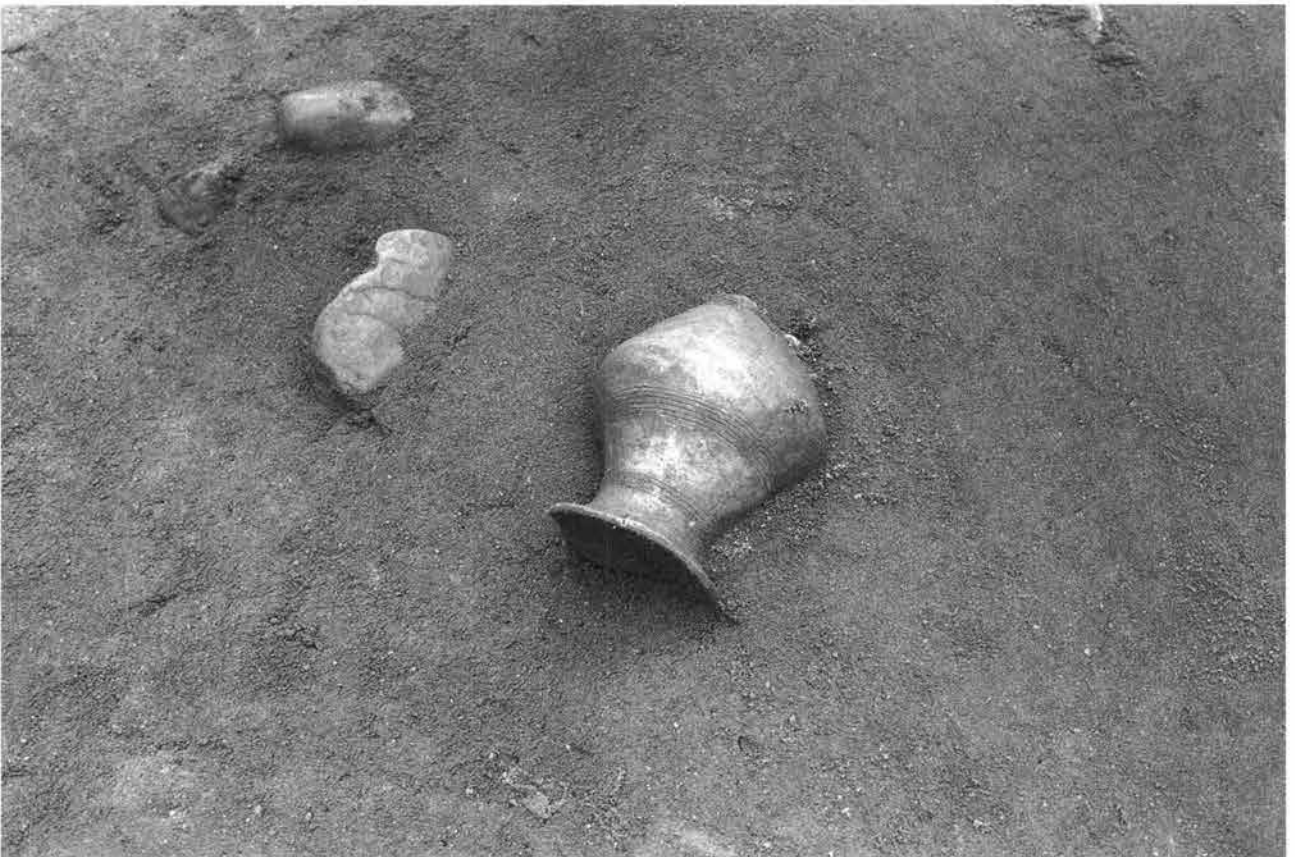
(1) 第1トレンチ完掘状況 (西から)



(2) 第2トレンチ完掘状況 (西から)



(1) 第5トレンチ完掘状況(西から)



(2) 遺物出土状況(西から)

図版第4 竹野遺跡第9次





(1) 調査前風景 (南西から)



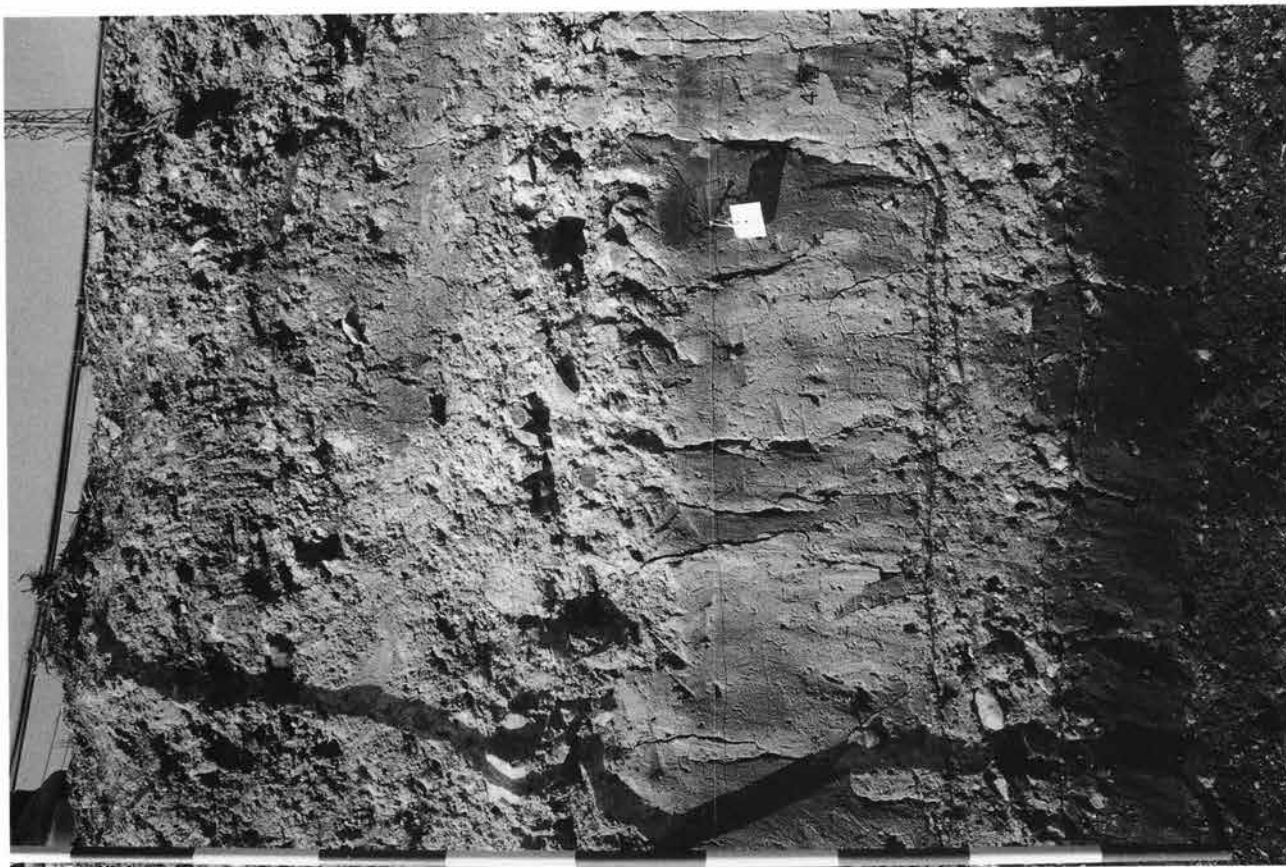
(2) トレンチ空中写真 (下方が北)



(1) 池沼 S X 35306 完掘状況 (南西から)



(2) X = -118, 625 ~ -118, 635 m 間の自然堤防状地形 (北東から)



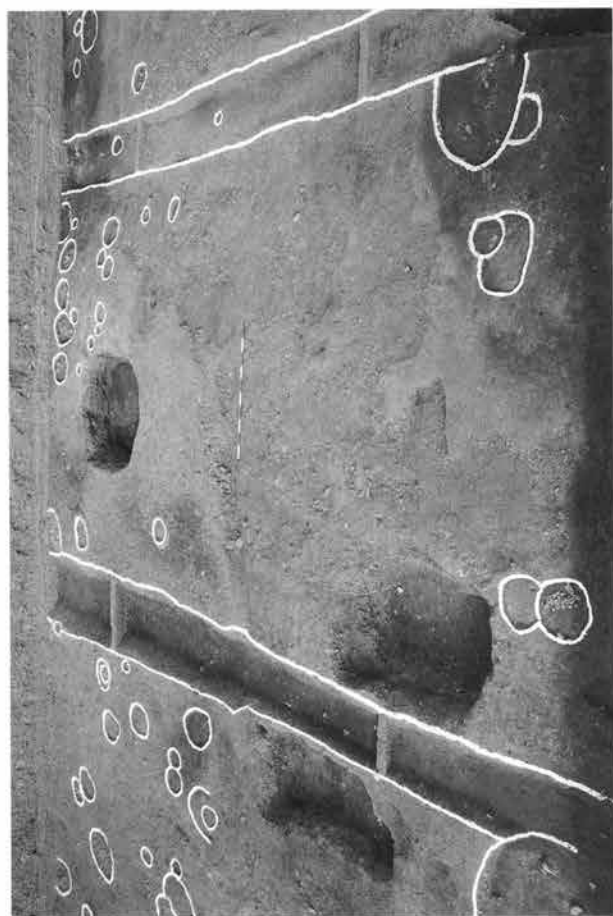
(3) 池沼 S X 35306 最深部土層推積状況 (南東から)



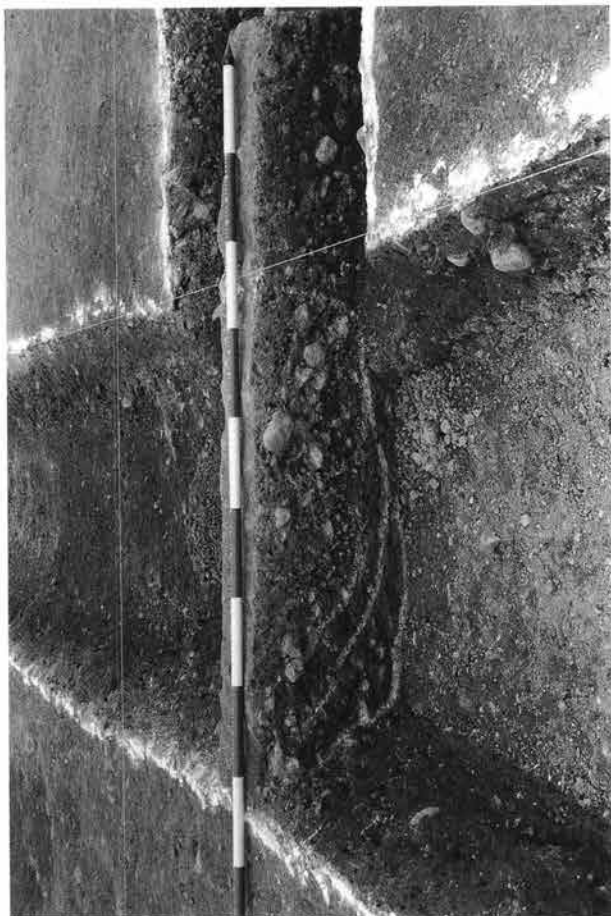
(1) 東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝検出状況（南から）



(2) 東一坊坊間東小路・四条条間小路側溝完掘状況（南から）



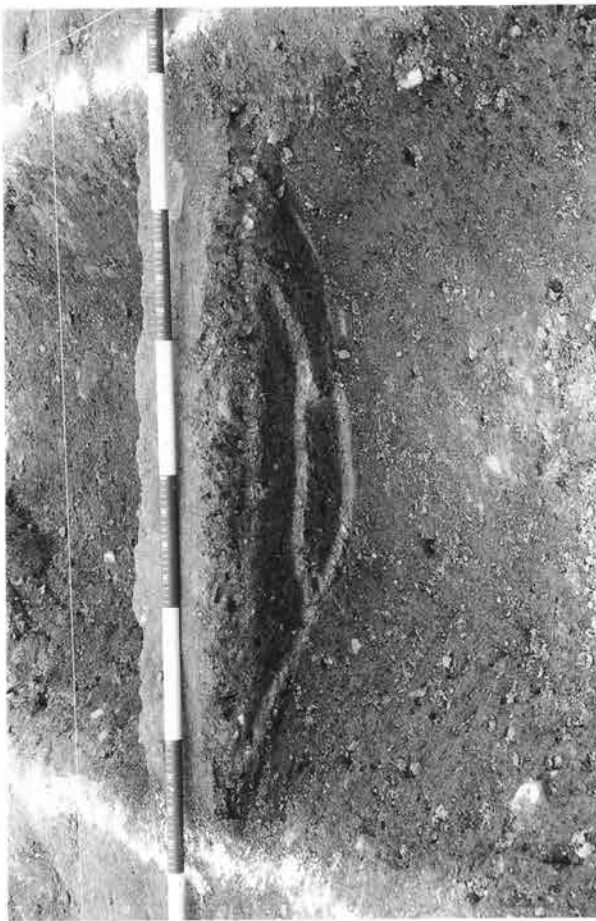
(1) 東一坊坊間東小路両側溝完掘状況 (南から)



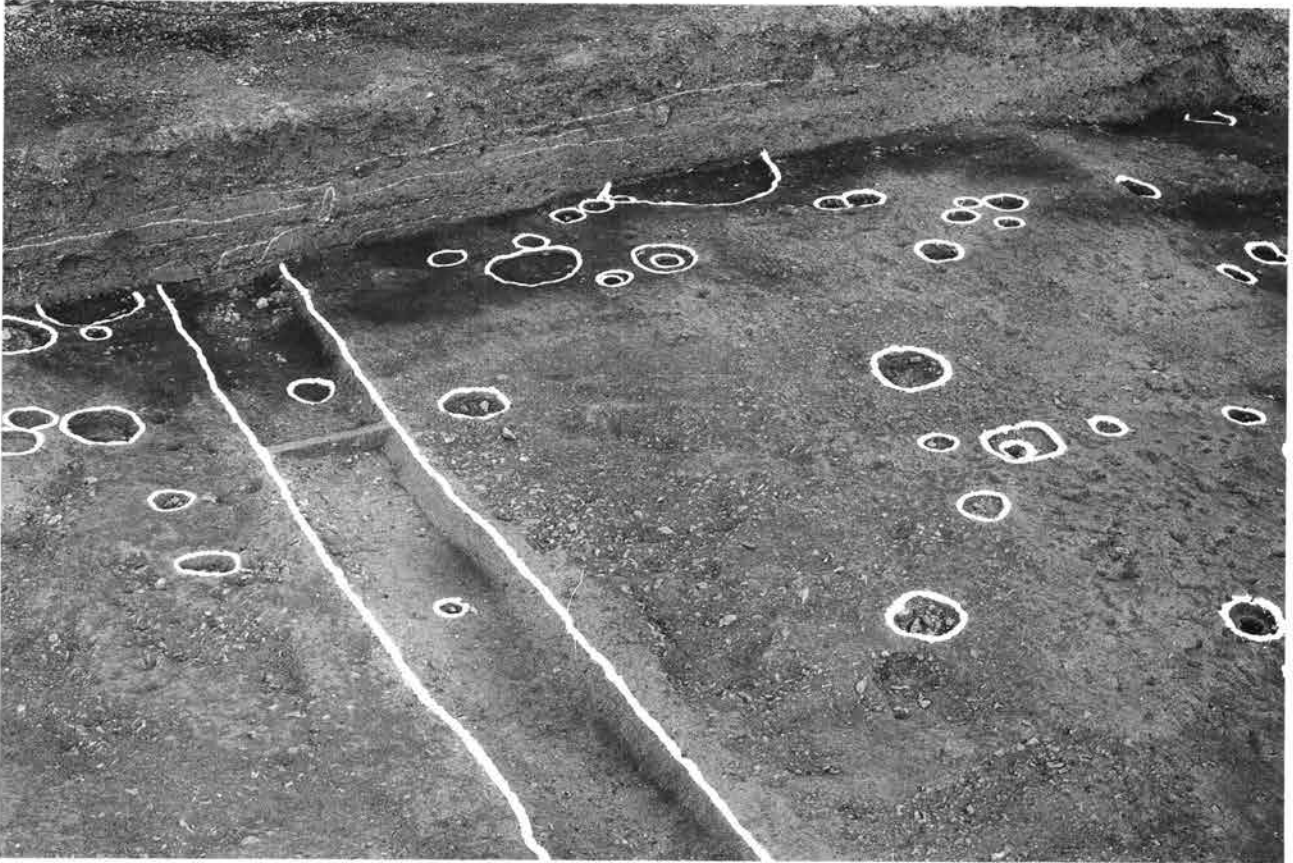
(3) S D35313・S D35318交差部分断面 (南から)



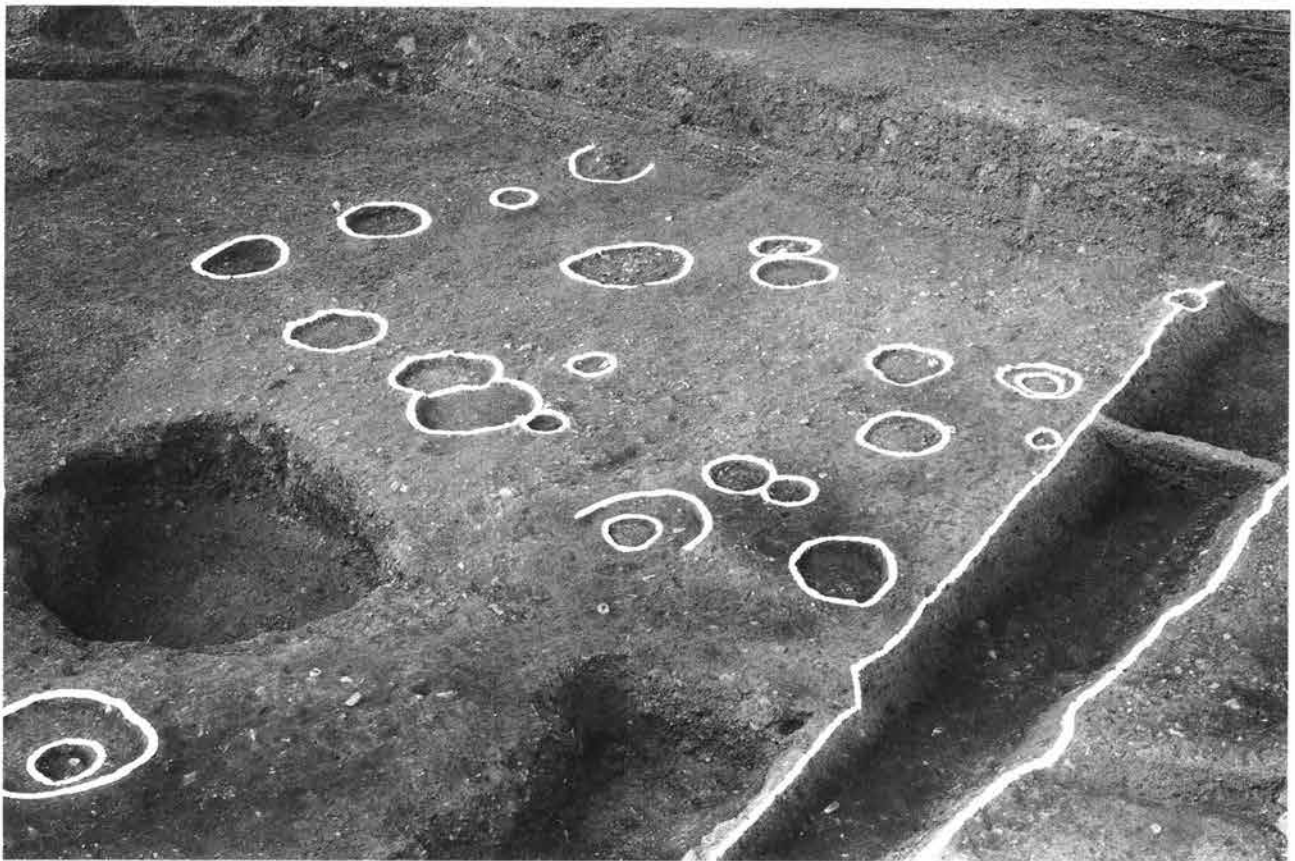
(2) 東一坊坊間東小路西側溝S D35313、C地点断面 (南から)



(4) 四条条間小路南側溝S D35318、H地点断面 (西から)



(1) SD35314及びピット群検出状況（南西から）



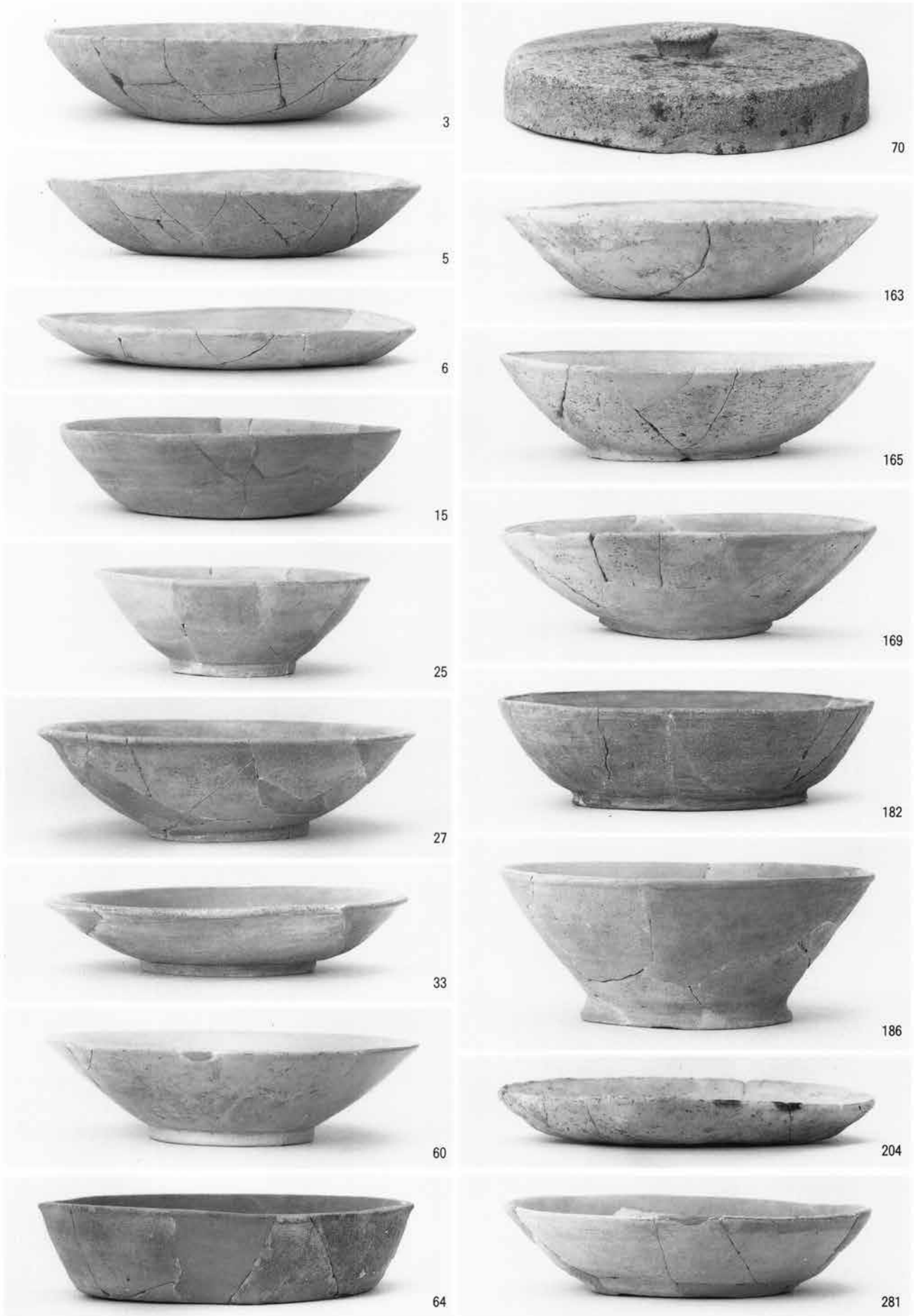
(2) 掘立柱建物跡1検出状況（南東から）



(1) 土坑SK35312検出状況（北から）



(2) 落ち込みS X35317杭検出状況（南から）



出土遺物(1)



229



319



356



229
脚内面



360



364



273



409



278



414



291



429

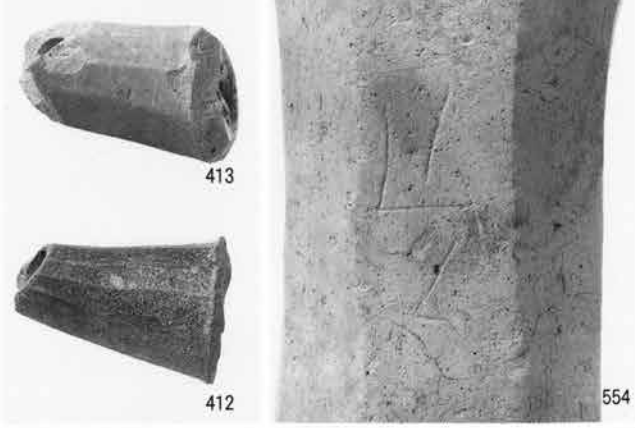


323



442







52



432



708



661

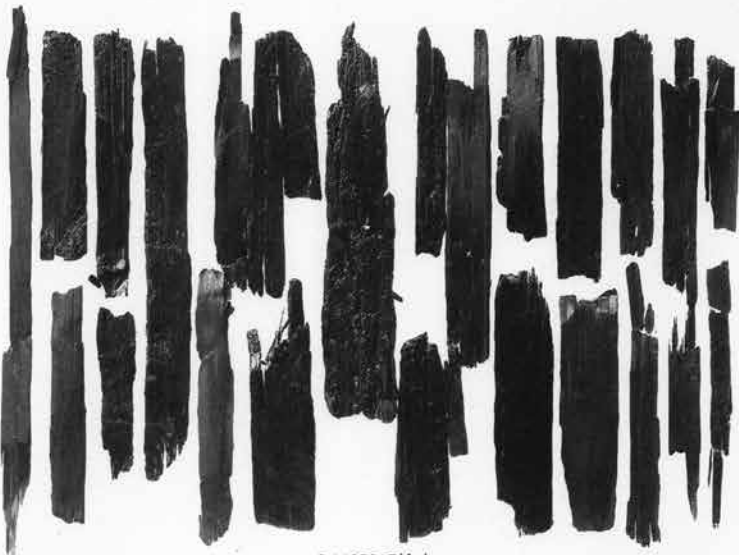


438



55

439



S X 35317 檜皮

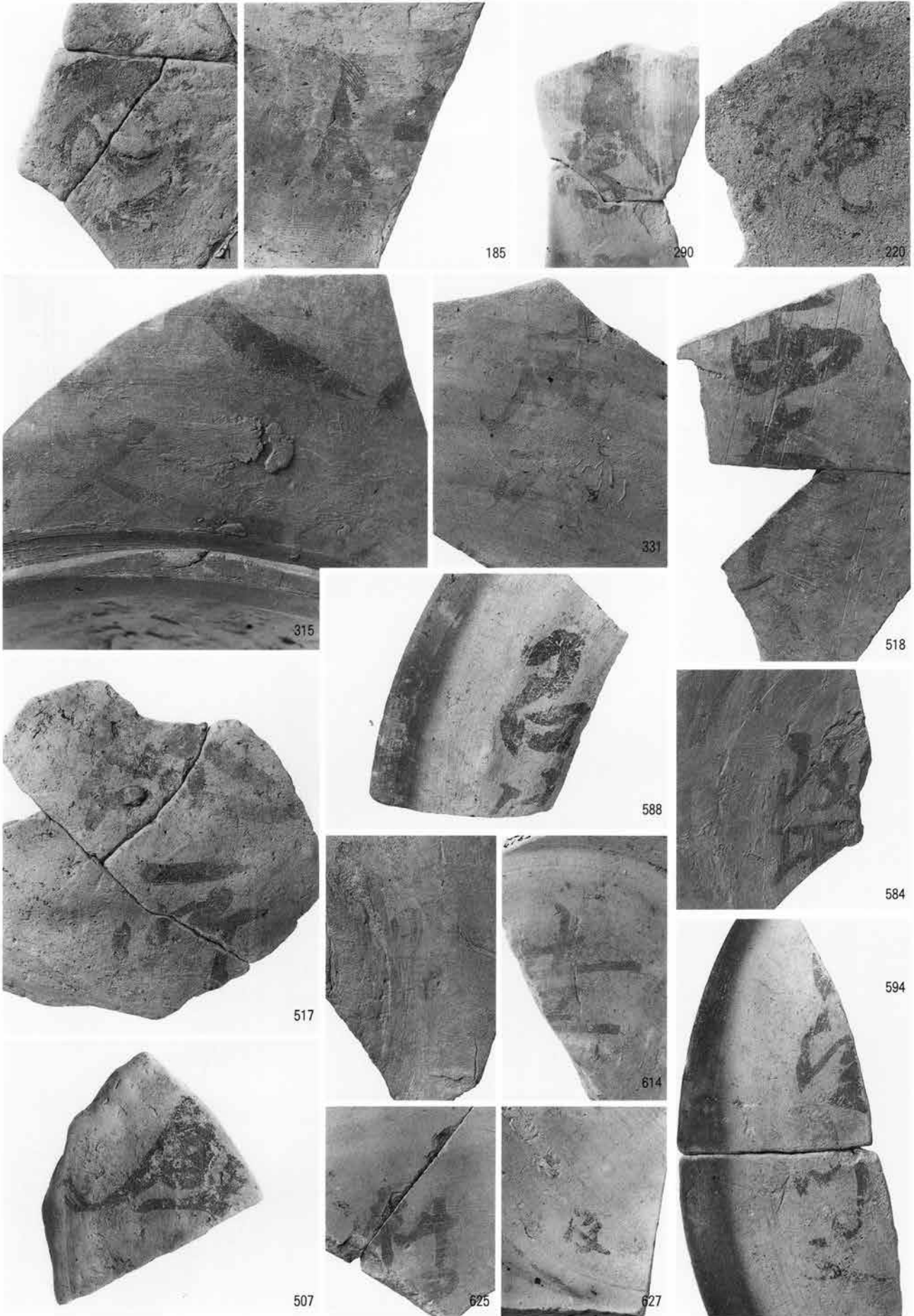


53

54



725



出土遺物(6)



731



733



741



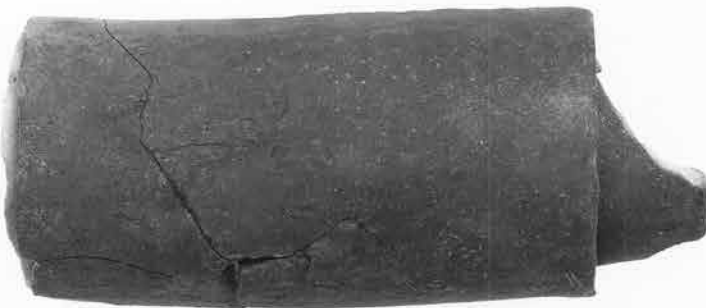
742



743



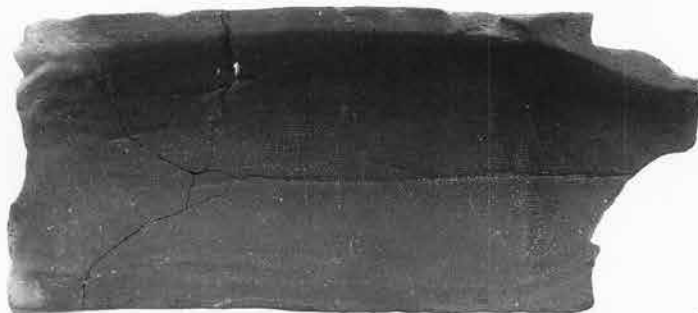
742



749



747



724



716



720



729



721



730



726



734

736



735



727



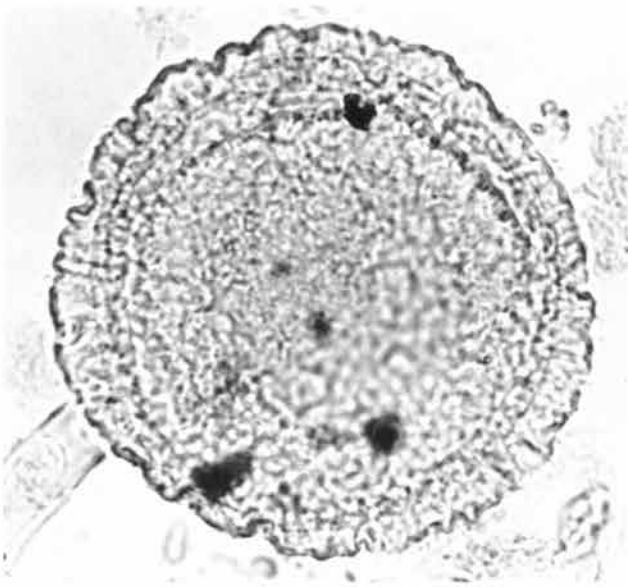
719



717



718



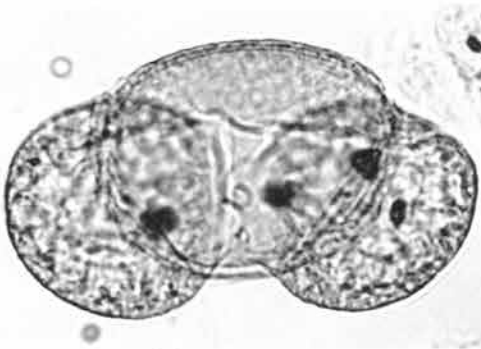
1 ツガ属



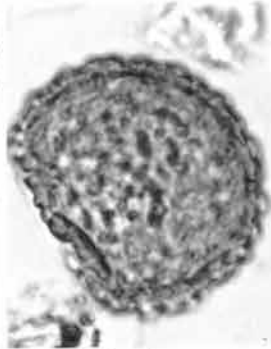
2 カキ



3 ミズキ属



4 マツ属複維管束亜属



5 コウヤマキ



6 スギ



7 クリーシイ属



8 カバノキ属



9 クマシデ属—アサダ



10 コナラ属コナラ亜属



11 コナラ属アカガシ亜属



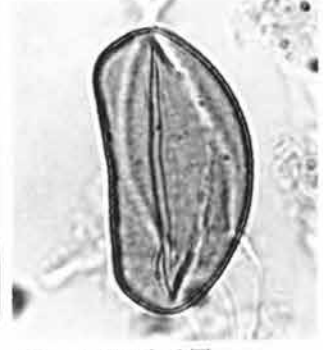
12 エノキ属—ムクノキ



13 イネ科



14 イネ属型



15 ミズアオイ属

検出花粉・寄生虫卵・孢子遺体 I



1 タデ属



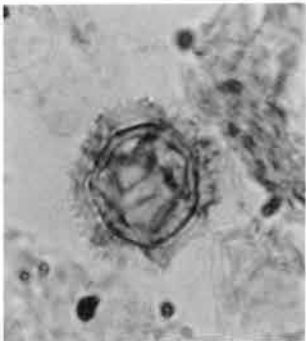
2 タデ属サナエタデ節



3 ソバ属



4 アカザ科-ヒユ科



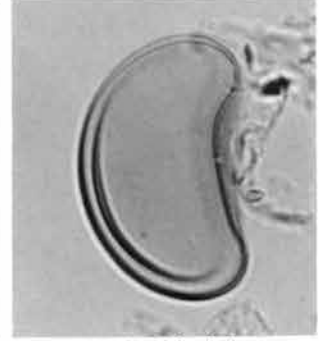
5 タンポポ亜科



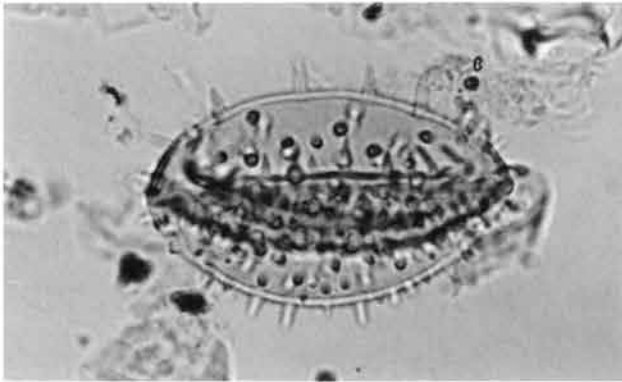
6 ナス科



7 ヨモギ属



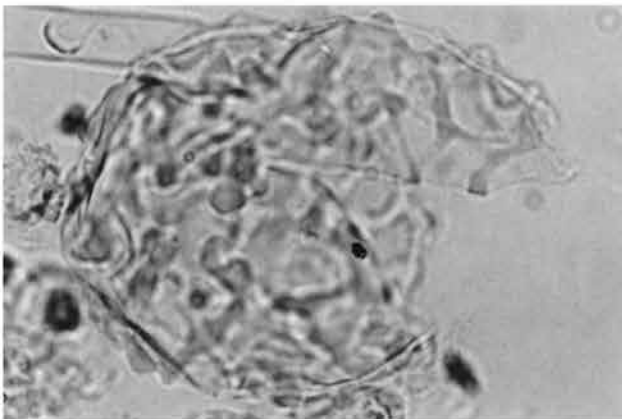
8 シダ植物単条溝孢子



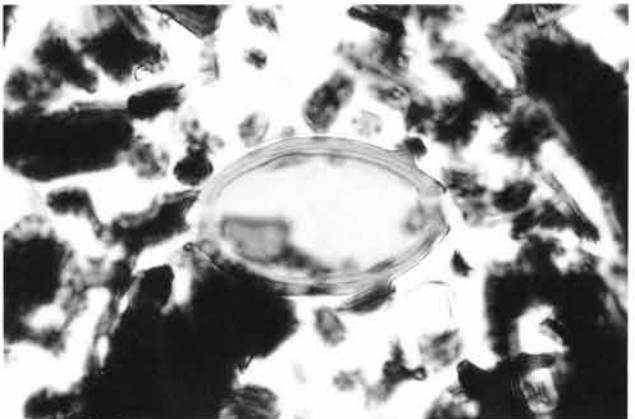
9 コウホネ属



10 ヒシ属



11 回虫卵



12 鞭虫卵

検出花粉・寄生虫卵・孢子遺体II



(1) A-1地区調査地全景(西から)



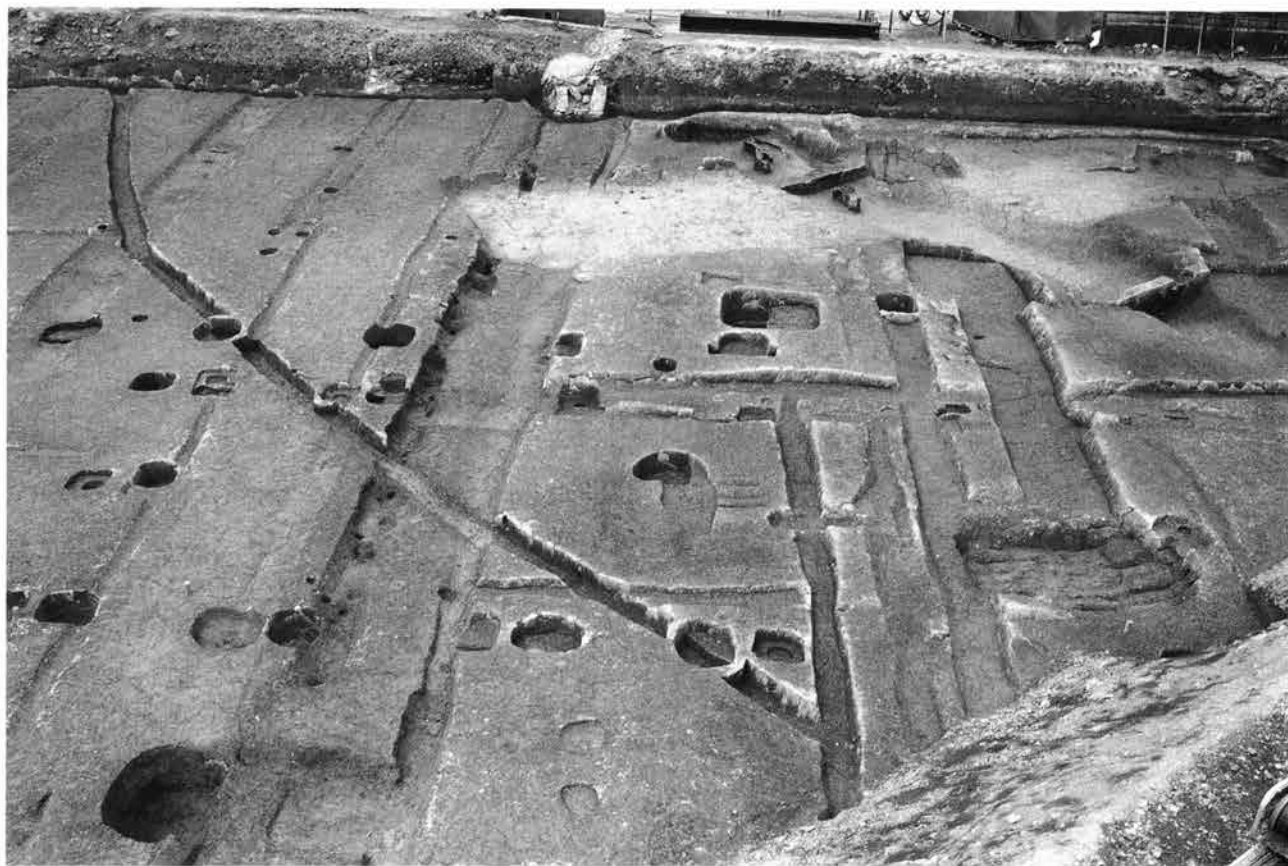
(2) A-1地区調査地全景(上が北)



(1) A-1地区建物跡SB33605 (北から)



(2) A-1地区建物跡SB33603・33604・32905 (北から)



(1) A-1地区東半部 (南から)



(2) A-1地区東半部 (南西から)



(1) A-1地区調査地全景 (下層遺構面、南西から)



(2) A-1地区溝SD32909 (北西から)



(1) A-1地区土坑SK33611・溝SD33612 (西から)



(2) A-1地区方形周溝墓SX33614 (南東から)



38-1



38-8



38-2



38-3



第39図



38-4



38-5



38-6





9



41-6



6



41-10



41-2

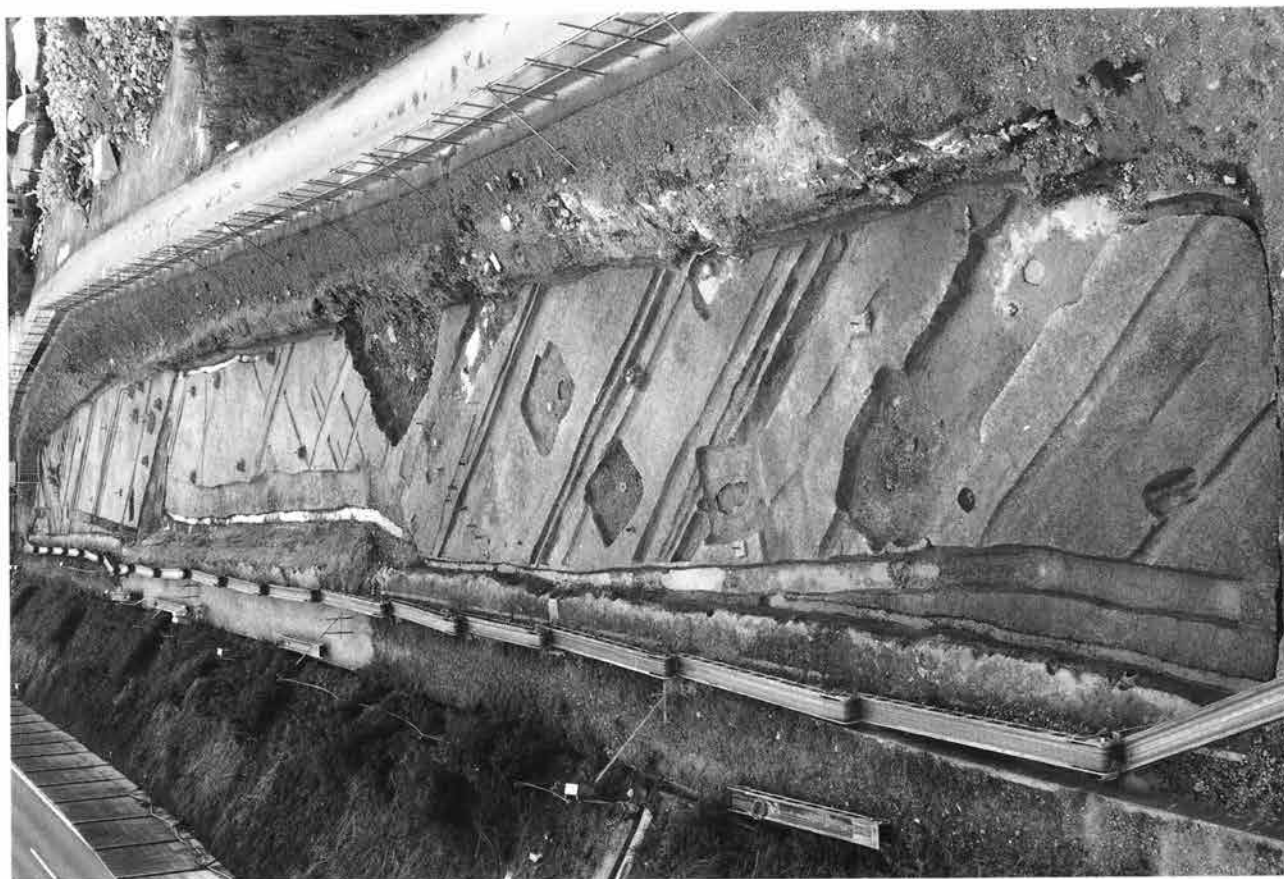


41-8





(2) A-2地区調査地全景 (南西から)



(1) A-2地区調査地全景 (北東から)



(1) A-2地区東三坊大路東側溝SD32901 (北から)



(2) A-2地区掘立柱建物跡SB32902 (北から)



(1) A-2地区掘立柱建物跡SB32904・32905 (南から)



(2) A-2地区流路跡SD32909 (南西から)



(1) A-2地区流路跡SD32908 (北から)



(2) A-2地区流路跡SD32910 (北から)



(1) A-3地区調査地全景（北東から）



(2) A-3地区調査地全景（南西から）



(1) A-3地区東三坊大路西侧溝SD33005 (南から)



(2) A-3地区町内溝SD33010 (北から)



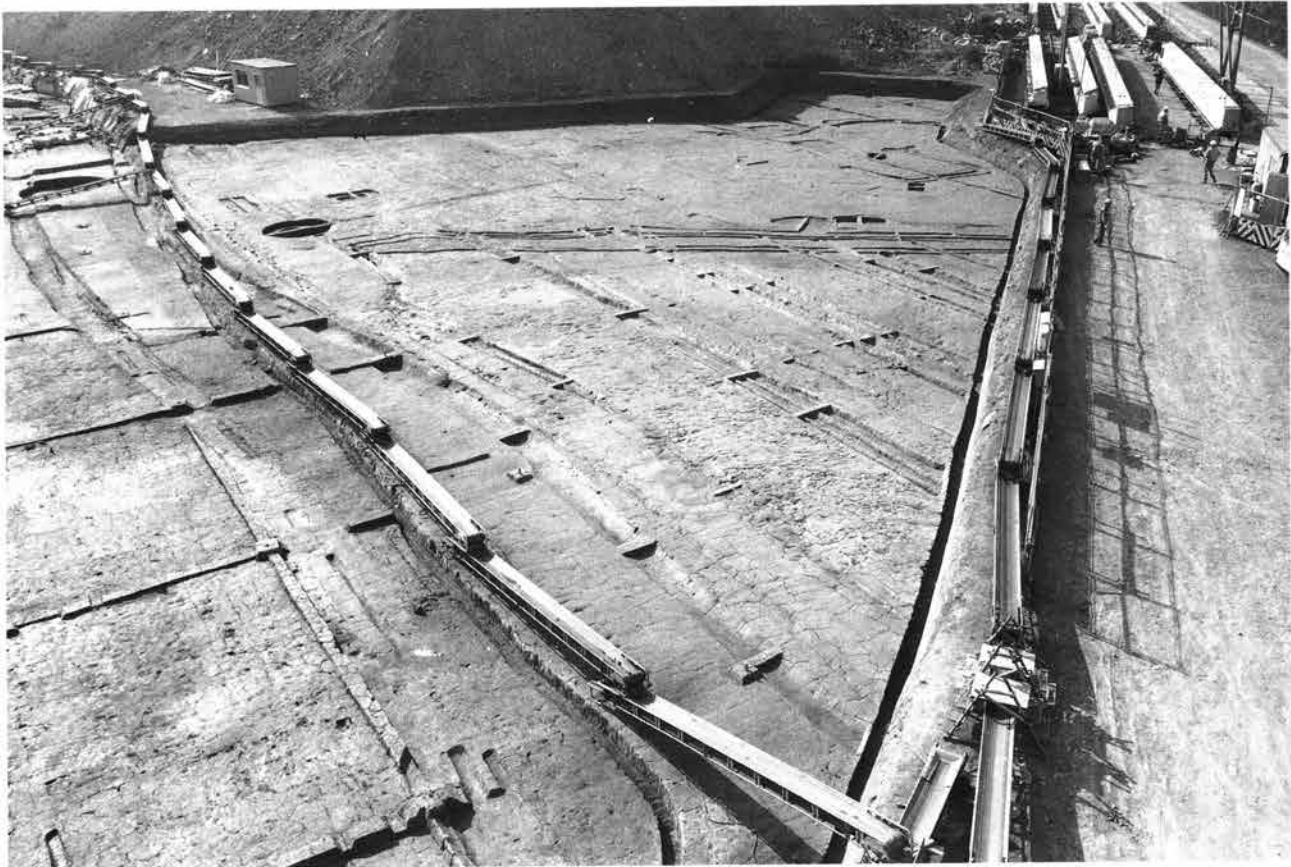
(1) A-3地区畝状遺溝SX33009 (南から)



(2) A-3地区土坑SK33018土器出土状況 (北西から)



A-3地区出土遺物(番号は第45・46図に対応) a・b. 土師器杯 SX33010、 c. 須恵器円面硯 SX33020



(1) B-5地区調査地全景 (北東から)



(2) B-5地区中央部 (中・近世遺構面、北西から)



(1) B-5地区建物跡SB33702 (北東から)



(2) B-5地区木製品出土状況、流路303016 (上が東)

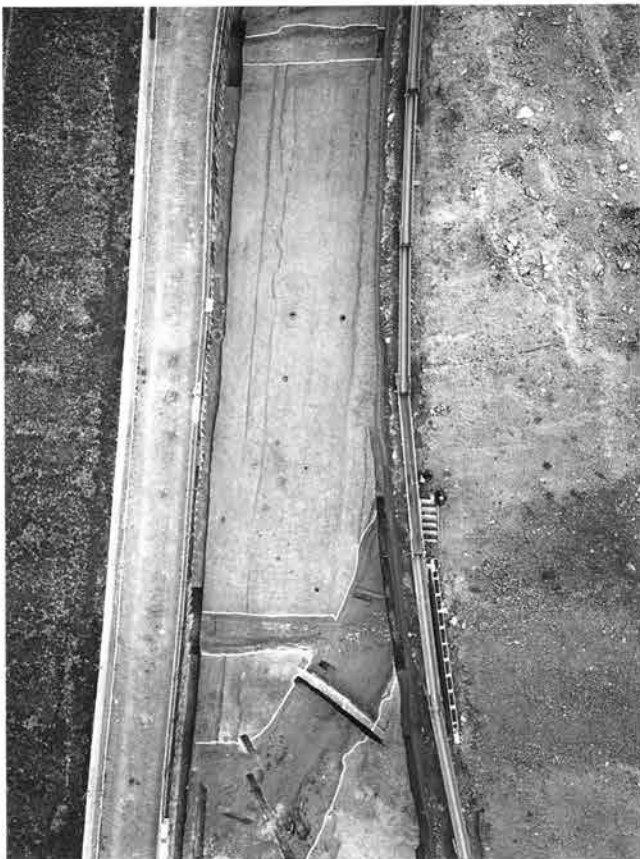




B-5地区流路SR303016出土遺物 (番号は第51図に対応)



(1) B-3地区調査地全景 (北から)



(2) B-3地区南一条大路 (北から)



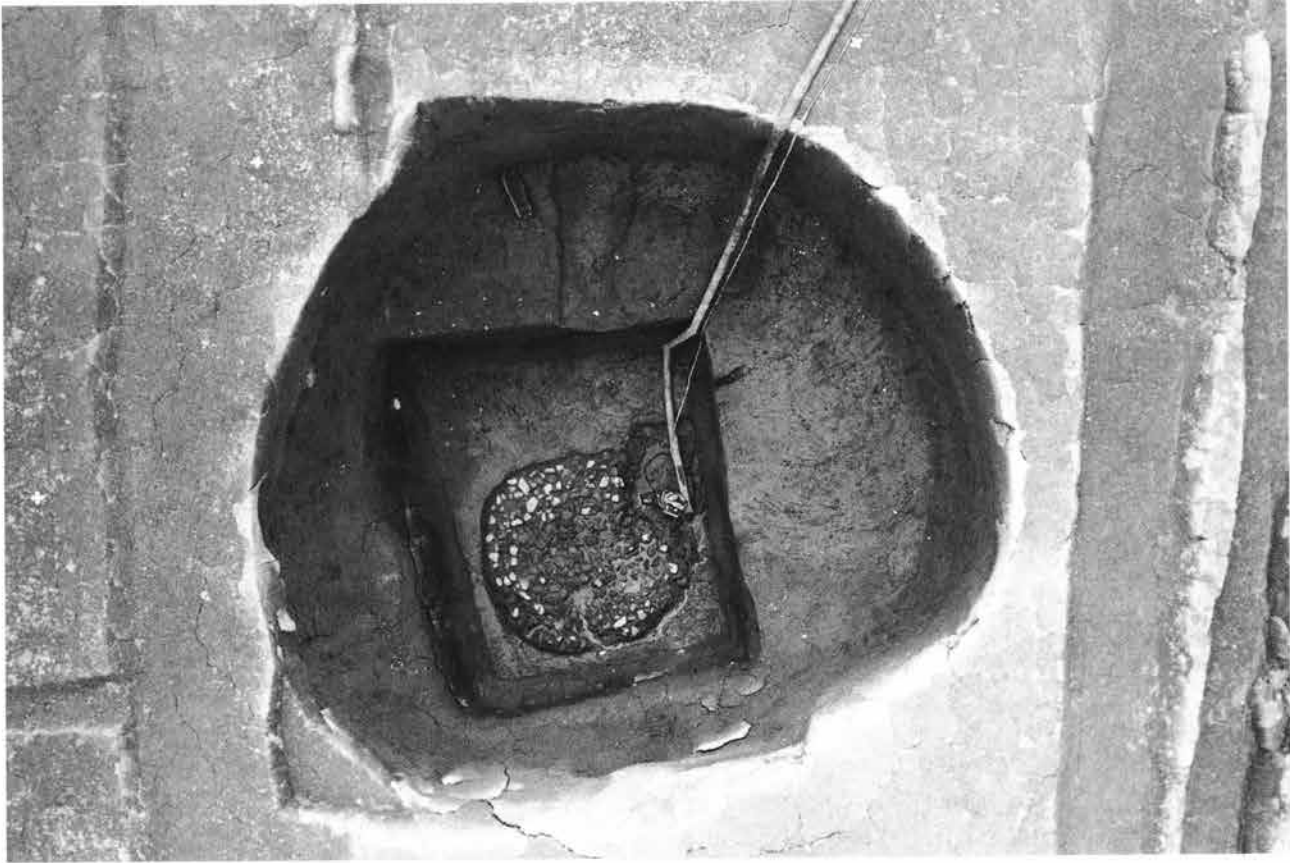
(3) B-3地区流路SR33419 (南西から)



(1) B-3地区壕SX33428 (南から)



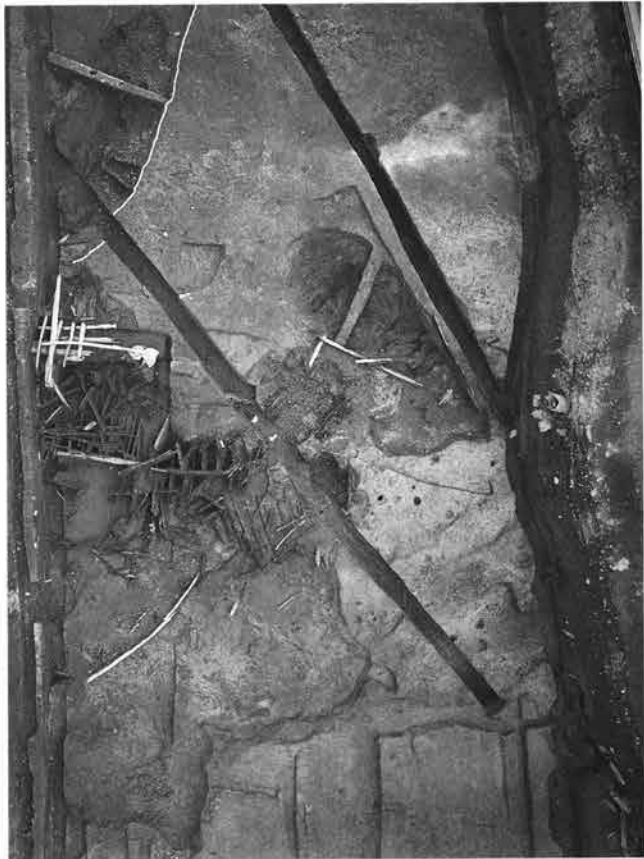
(2) B-3地区不明遺構SX33441 (東から)



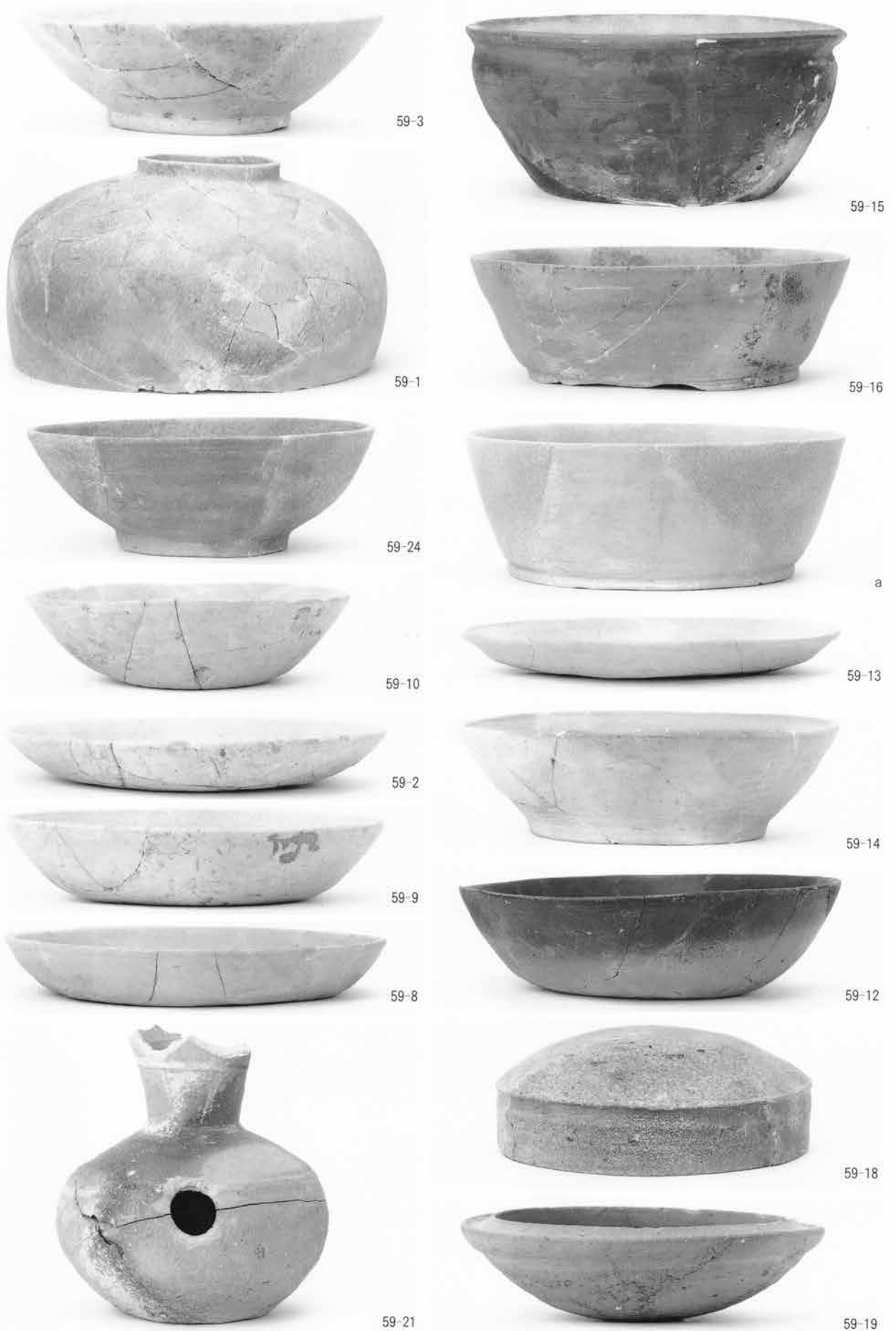
(1) B-3地区井戸SE33407 (上が南)



(2) B-3地区下層遺構 (北から)



(3) B-3地区調査地中央部下層遺構 (上が南)



B-3地区出土遺物(1) (番号は第59図に対応) a. 須恵器杯B 包含層出土

第61図



60-2



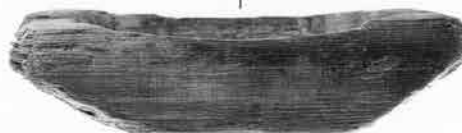
60-3



60-1



60-4



60-5



第63図



62-4



62-3



62-1



62-2



62-9



62-10



62-8



62-6



62-5

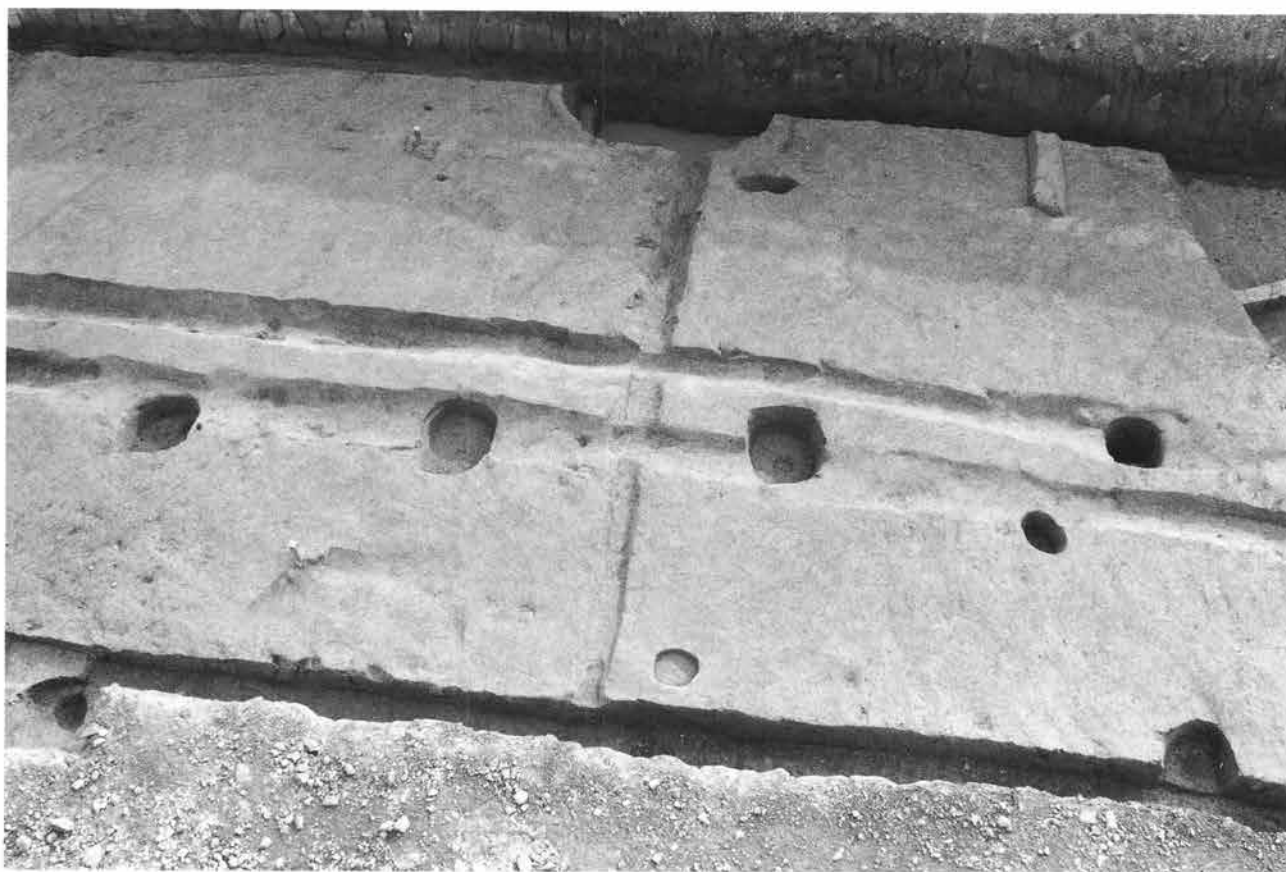




(1) B-4地区調査地東部 (上が東)



(2) B-4地区調査地東部 (東から)



(1) B-4地区建物跡SB33303 (北から)



(2) B-4地区溝SD33305 (西から)



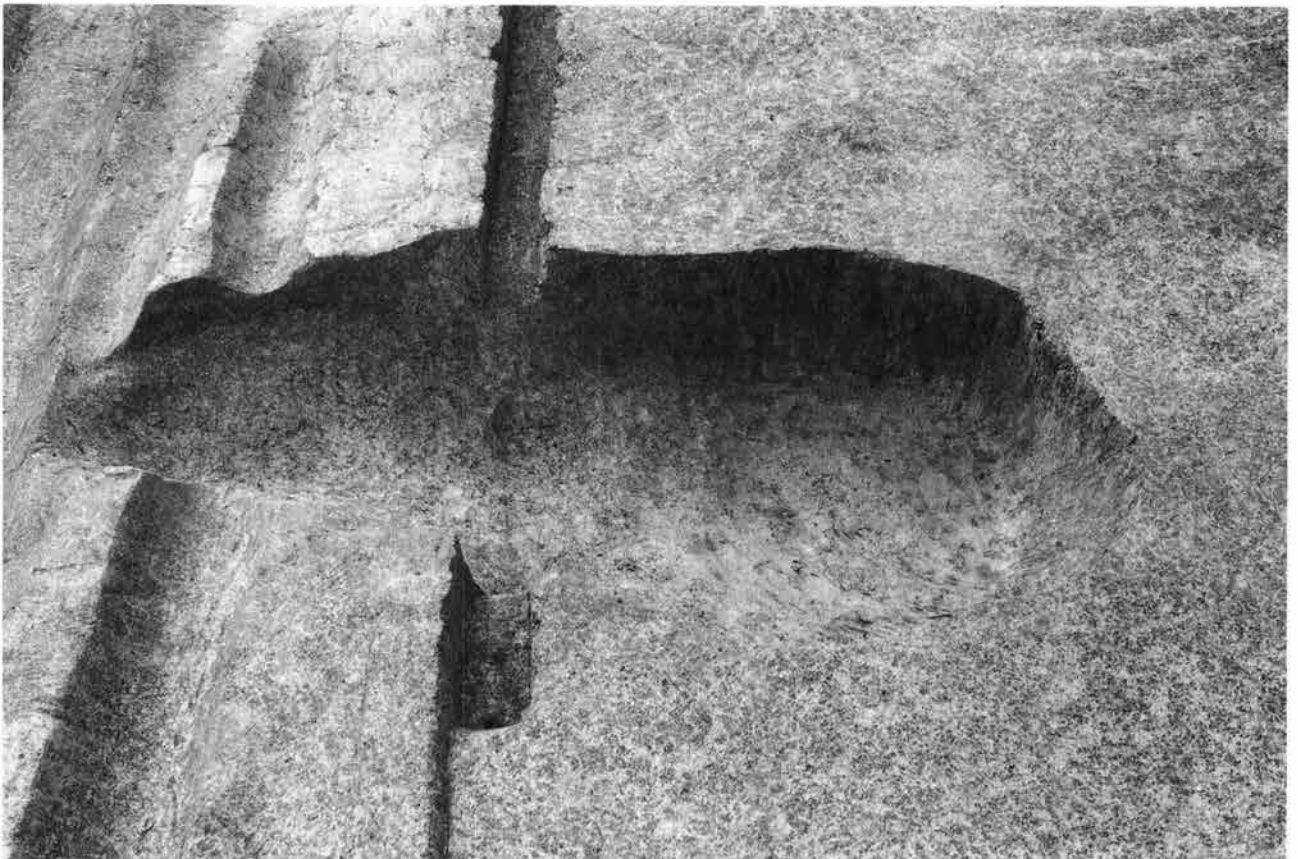
(1) B-4地区溝SD315003・建物跡SB33301 (西から)



(2) B-4地区井戸SE33302 (北から)



(1) B-4地区溝SD33307 (西から)



(2) B-4地区土坑SK33306 (北から)



66-1



66-27



66-2



66-14



66-3



66-16



66-6



66-13



a



b



c



(1) B-2b地区調査地全景 (北東から)



(2) D-2b地区調査地全景 (南西から)



(3) D-2b地区二条第一小路北側溝SD33103(南から)



B-2b地区出土遺物 (番号は第69図に対応) a~d. 包含層出土



(1) B-1a地区全景（西北から）



(2) B-1a地区溝SD33201・33202・33203・33204（南から）



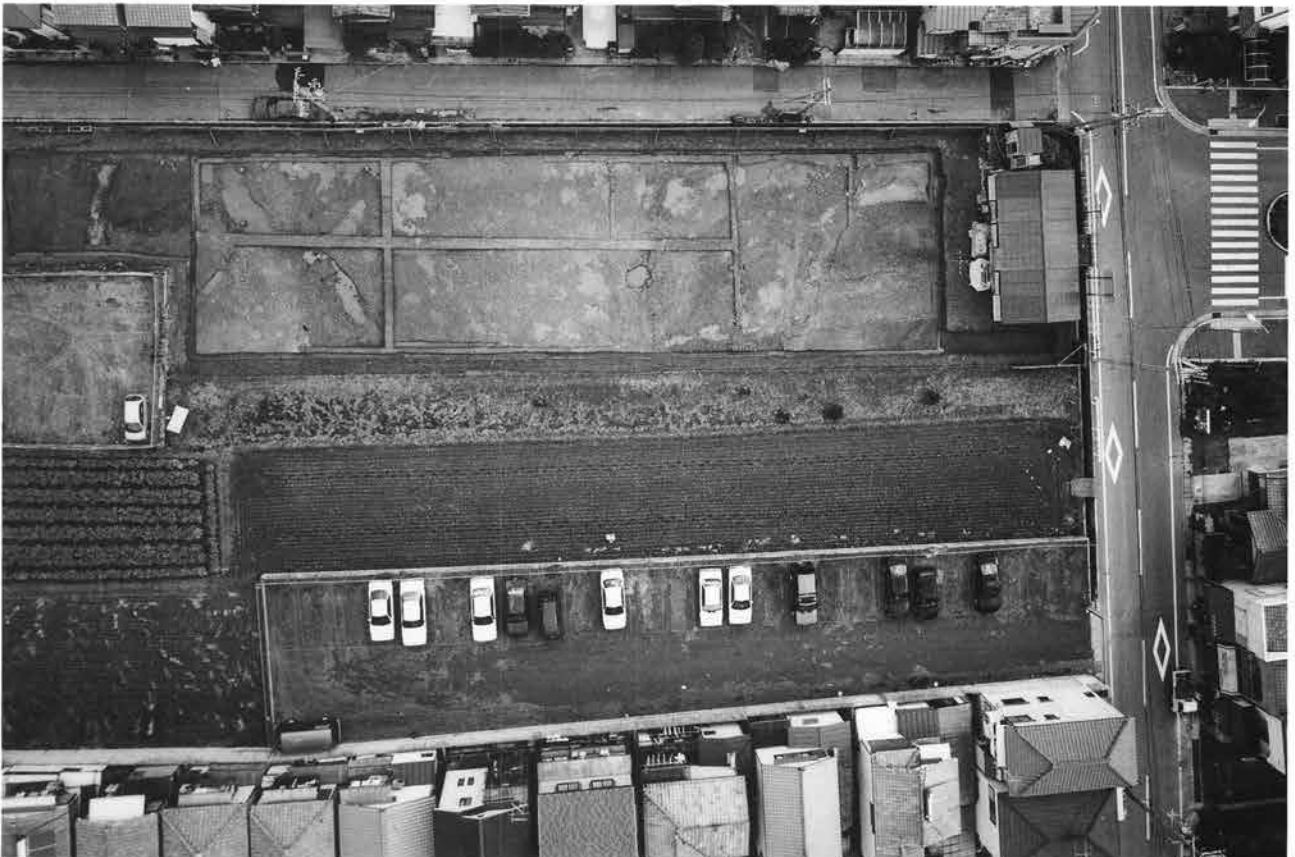
(1) C-6地区調査地全景（南西から）



(2) C-6地区調査地全景（北東から）



(1) 調査前全景 (南から)



(2) 調査地全景 (左が北)



(2)溝跡SD 51103 (南から)



(1)溝跡SD 51102 (北から)



(1) 溝跡SD51105 (南から)



(2) 溝跡SD51105南壁断面



(1) 杭列SX51106 (北から)



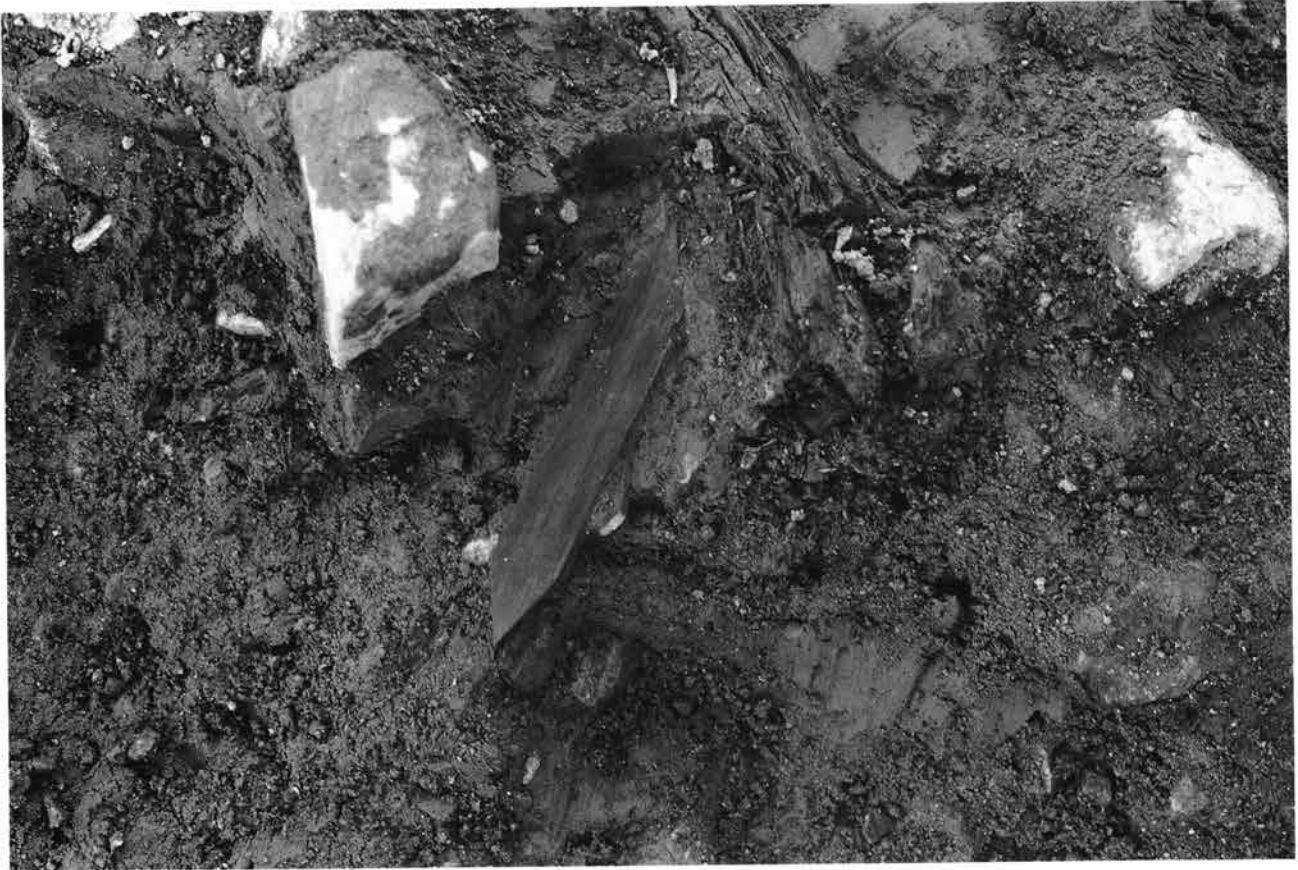
(2) 溝跡SD51110 (西方から)



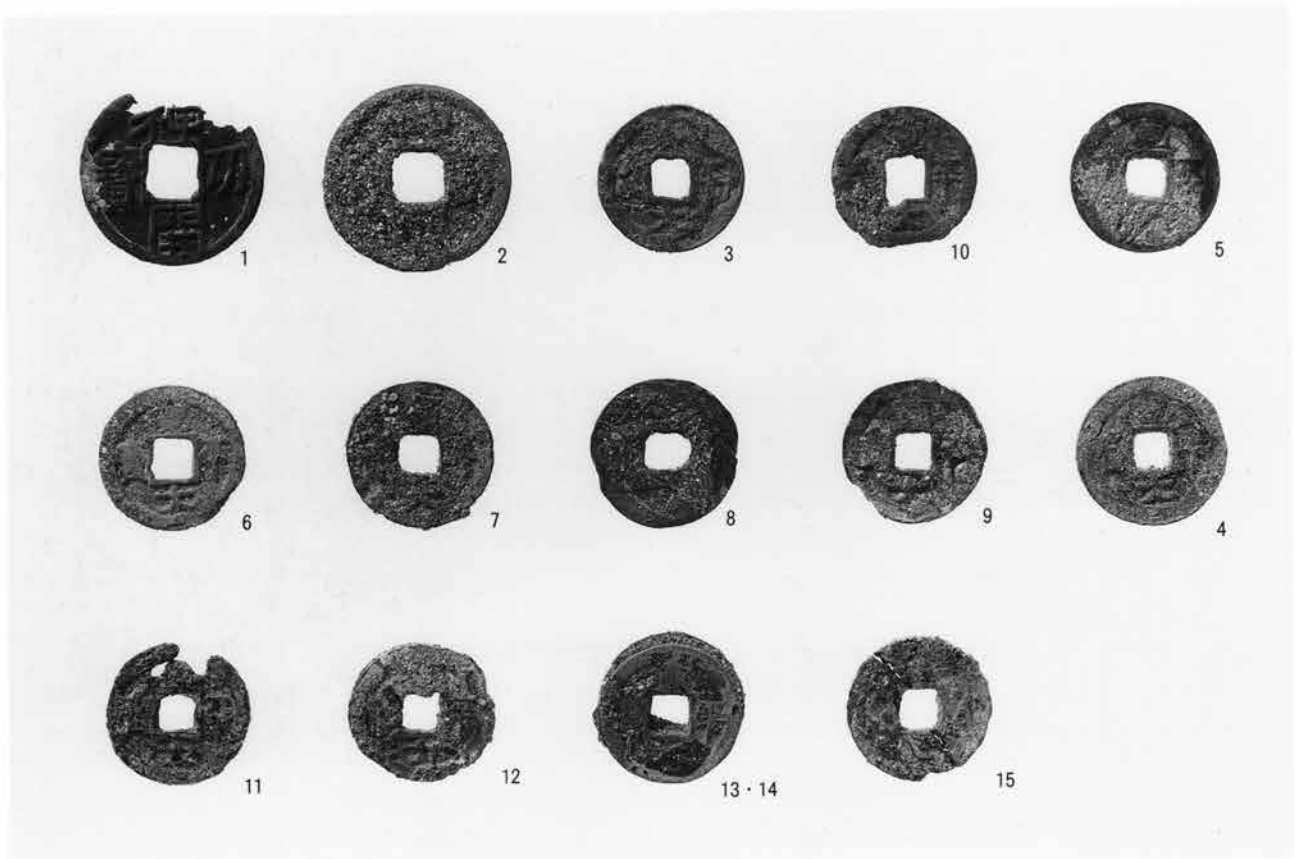
(1) 溝跡SD51109 (西方から)



(2) 溝跡SD51109木製品・槽出土状況



(1) 自然流路SD51107斎串出土状況



(2) 出土遺物 (錢貨)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第69冊							
編著者名	村田和弘・小池 寛・戸原和人・竹井治雄・岩松 保・森島康雄・中川和哉・岸岡貴英・野島 永							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				TEL	075(933)3877		
発行年月日	西暦 1996 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかのいせき 竹野遺跡	たけのぐんたんご ちょうたかの 竹野郡丹後町竹野 他	502	8	35° 44' 10"	135° 6' 30"	19950717 ～ 19951013	530	道路改良
ながおかきよ うあとさきよ うだい353じ 長岡京跡左京 第353次	むこうしかみうえ のちょういけのじ り・だいもん 向日市上植野町池 ノ尻・大門	208		34° 55' 55"	135° 42' 36"	19941107 ～ 19950227 19950424 ～ 19950519	1,980	住宅建設
ながおかきよ うあとさきよ うだい329・ 330・331・ 333・334・ 336・337じ、 ひがしつちか わいせき 長岡京跡左京 第329・330・ 331・333・ 334・336・ 337次、東土 川遺跡	きょうとしみなみ くくぜひがしつち かわちょうかない だ・まさのぼり 京都市南区久世東 土川町金井田・正 登	107		34° 23' 60"	135° 43' 30"	19940411 ～ 19950227	11,250	道路建設
ながおかきよ うあとさきよ うだい332じ 長岡京跡左京 第332次	むこうしかいで ちょうしみず 向日市鶏冠井町清 水	208		34° 56' 6"	135° 43' 9"	19940411 ～ 19940616	300	道路建設
ながおかきよ うあとうきよ うだい466 じ、しもうえ のみなみいせ き 長岡京跡右京 第466次、下 植野南遺跡	おとくにぐんおお やまざきちょうし もうえのてらかど 乙訓郡大山崎町下 植野寺門	303		34° 54' 9"	135° 41' 56"	19940704 ～ 19941005	690	道路建設

ながおかきょう あとうきょう うだい511じ 長岡京跡右京 第511次	ながおかきょうし いのうち 長岡京市井ノ内	209	34° 56' 21"	135° 41' 40"	19951020 ～ 19960228	1,000	道路建設
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な 遺構		主な 遺物	特記事項	
竹野遺跡	集落	弥生、古墳	土坑、小穴、溝		弥生土器、須恵器 土師器、石器、石製品		
長岡京跡左京 第353次	都城	長岡京期、平安、 中世	掘立柱建物、条坊側溝、土 坑、溝、池沼		土師器、須恵器、黒 色土器、緑釉陶器、 灰釉陶器、中国製磁 器、瓦、漆、木製品		
長岡京跡左京 第329・330・ 331・333・ 334・336・ 337次、東土 川遺跡	集落、都城	弥生、古墳、長岡 京期、平安	旧河道、方形周溝墓、条坊 側溝、掘立柱建物、土坑、 井戸		弥生土器、須恵器、 土師器、軒平瓦、鉄 器、緑釉陶器、円面 硯、軒瓦、木製農工 具、祭祀具、武具、 漁具、食事具、木簡 鏡、銭貨		
長岡京跡左京 第332次	都城	長岡京期	条坊側溝、掘立柱建物、柵 列		須恵器、土師器		
長岡京跡右京 第466次、下 植野遺跡	集落、古墳、古道	古墳、平安	竪穴住居、古墳、古道		須恵器、土師器、瓦		
長岡京跡右京 第511次	都城	古墳、平安、鎌倉 室町	西二坊大路東側溝、溝、自 然流路、杭列、土坑		須恵器、土師器、銭 貨、土馬、木製品		

京都府遺跡調査概報 第69冊

平成8年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)